

平成14年度 浪岡町文化財紀要 Ⅲ

- I 平成14年度 羽黒平（1）遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書
- II 平成14年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書 X Ⅲ
- III 平成14年度 中屋敷遺跡発掘調査報告書
- IV 平成14年度 野尻（4）遺跡発掘調査関係報告
- V 平成14年浪岡町文化財日誌・他

2003. 3. 31

浪岡町教育委員会

平成14年度 浪岡町文化財紀要 Ⅲ

- I 平成14年度 羽黒平（1）遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書
- II 平成14年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書 X Ⅲ
- Ⅲ 平成14年度 中屋敷遺跡発掘調査報告書
- IV 平成14年度 野尻（4）遺跡発掘調査関係報告
- V 平成14年浪岡町文化財日誌・他

2003. 3. 31

浪岡町教育委員会



中屋敷遺跡出土土器

発刊にあたって

本年度の町内における発掘調査箇所は、当教育委員会が羽黒平（１）遺跡、浪岡城跡新館を国庫補助事業による緊急発掘調査、そして農道整備に伴い急ぎよ実施した中屋敷遺跡の３ヶ所、大釈迦工業団地調査会が野尻（４）遺跡、県埋蔵文化財調査センターが野尻（１）遺跡・野尻（２）遺跡・野尻（３）遺跡（史跡高屋敷館遺跡西側）・山元（１）遺跡と、総計８ヶ所の遺跡が対象となりました。

本紀要では、町教育委員会関係の遺跡報告・概報等を掲載し、さらに平成14年における文化財行政の動向などを付け加えて、年度内の成果として公表いたします。

当町は「中世の里」をまちづくりの根幹としている通り、歴史的文化遺産がたくさん残り、それらの保護に対応しながら、活用を進めていかなければなりません。その意味も含めて、本年度は文化庁主唱の「歩き・み・ふれる歴史の道事業」東北ブロック大会を９月に、東北中世考古学会大会を10月に開催したところであり、このような各種事業を展開することで地域の文化財を見直すきっかけになったと思います。

平成13年1月29日に国史跡指定となった古代環壕集落である高屋敷館遺跡は、文化庁や県教育委員会の援助を受けながら公有化事業を実施しており、今後は発掘調査・環境整備を経て史跡公園化の道を歩むことになるはずです。全国に誇る中世城館である浪岡城跡とともに、我が町の貴重な文化財として後世まで保存措置を講じながら、活用の方向性を模索してみたいと思います。

関係各位の旧に倍してのご指導・ご協力をお願い申し上げます。

平成15年3月31日

浪岡町教育委員会

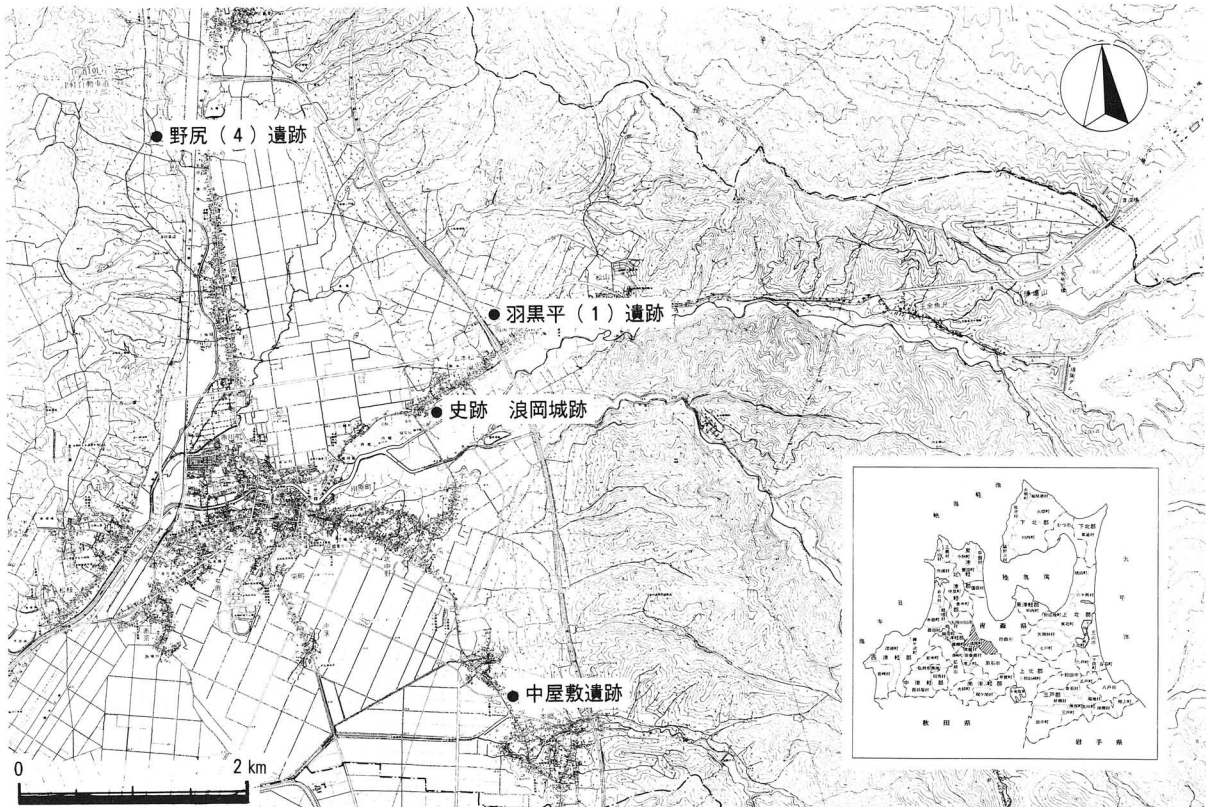
教育長 成 田 清 一

例 言

- 1 本書は、平成14年度に浪岡町教育委員会及び関係機関が実施した文化財関係事業の報告である。
- 2 羽黒平（1）遺跡、浪岡城跡新館の報告は、補助事業である「町内遺跡発掘調査事業」の成果報告である。また、中屋敷遺跡の報告は、農道整備事業に伴う緊急発掘調査の報告である。
- 3 本書の構成は以下の通りであり、それぞれの編集及び主な執筆担当を（ ）内に記した。
 - 1）平成14年度 羽黒平（1）遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書（木村浩一）
 - 2）平成14年度 浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書ⅩⅢ（木村浩一）
 - 3）平成14年度 中屋敷遺跡発掘調査報告書（工藤清泰・竹ヶ原亜希）
 - 4）平成14年度 野尻（4）遺跡発掘調査関係報告
平成14年度 野尻（4）遺跡発掘調査概報（村上章久）
野尻（4）遺跡出土焼失家屋第117号建物跡について（工藤 司）
野尻（4）遺跡出土鉄製品および鉄滓について（高橋 均）
野尻（4）遺跡で検出された土坑（SK1092）について（高杉博章）
 - 5）平成14年文化財日誌・他（工藤清泰）
- 4 図版・写真・表などの番号は、各報告で独立しているため、全体としての統一は図らなかった。
- 5 本紀要発刊にあたってご指導・ご協力いただいた方々は以下の通りであり、ご芳名を記して感謝申し上げます。

村越潔（青森大学）・藤沼邦彦（弘前大学）・関根達人（弘前大学）・山口義伸（青森県史編さん室）

本紀要対象遺跡の位置図



目 次

発刊にあたって

例言・目次

I	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第8集 羽黒平(1)遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書	
	第1章 調査に至る経緯	2
	第2章 調査経過	5
	第3章 検出遺構	7
	第4章 出土遺物	18
	第5章 まとめ(発掘抄録)	21
II	平成14年度 浪岡城跡(新館地区)発掘調査報告書XIII	
	第1章 調査に至る経緯	28
	第2章 調査経過	30
	第3章 検出遺構	32
	第4章 出土遺物	44
	第5章 まとめ(発掘抄録)	48
III	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第9集 中屋敷遺跡発掘調査報告書	
	第1章 調査に至る経緯	56
	第2章 調査経過	59
	第3章 検出遺構と主な出土遺物	62
	第4章 出土遺物	86
	第5章 まとめ(発掘抄録)	112
IV	平成14年度 野尻(4)遺跡発掘調査関係報告	
	第1章 平成14年度野尻(4)遺跡調査概報	128
	第2章 野尻(4)遺跡出土焼失家屋第117号建物跡について	138
	第3章 野尻(4)遺跡出土鉄製品および鉄滓について	145
	第4章 野尻(4)遺跡で検出された土坑(SK1092)について	151
V	平成14年浪岡町文化財状況	
	1 平成14年文化財日誌	156
	2 平成13・14年度寄贈図書一覧	158

浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第8集

羽黒平 (1) 遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書

第1章 調査に至る経緯

羽黒平（1）遺跡は、青森空港アクセス道路の建設に伴い、平成6年度に青森県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行われている。

今回、道路の隣接地で住宅建設計画届が出されたが、農地転用・建築確認申請と相前後しての連絡であったため、十分な調査を行う時間的余裕がなかった。住宅建設は盛土と、盛土のための土留めを行うことになっていたため、遺構を壊す部分のみ発掘調査を行うことで地権者に同意いただいた。（調査A区とする）

また、道路北側の果樹園も、平畑にするために果樹を伐採、客土してあったが、将来農地転用を行い、建物を建設する計画があるとの口頭での申し出により、緊急に試掘調査を行うこととした（調査B区とする。なお、B区については4ヶ所の試掘調査を行ったため南東から時計回りにB-a区・B-b区・B-c区・B-d区とした）。

なお、調査中、遺跡範囲内で放置農園のリンゴ樹抜根作業が行われたため、立会いを行っている（青森空港アクセス道路をはさんで南側をC区、北側をD区とした）。

図I-1 羽黒平（1）遺跡 調査区配置図



平成14年度羽黒平（1）遺跡 発掘調査要項

A 地区調査要項

調査の目的及び経緯

羽黒平（1）遺跡は、平成5・6年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った発掘調査により平安時代の集落が確認されている。今回の調査は、地権者が遺跡内に住宅を建設するため、事前に町教育委員会に開発協議したことから緊急に調査を行うこととなった。

計画では、敷地境界にコンクリート製の擁壁を設置し、盛土したうえで住宅を建設する計画のため、遺構が破壊されると思われる部分について記録保存に努める。

調査地及び所有者

調査地番等 南津軽郡浪岡町大字五本松字平野54-12

所有者 山田光義

調査面積

対象面積751㎡のうち擁壁設置個所にあたる170㎡を対象とする。

対象地及び調査個所については別添図参照。

調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準備作業 平成14年4月1日から平成14年4月15日

調査作業 平成14年4月16日から平成14年5月26日

整理作業 平成14年11月1日から平成14年11月30日

報告書作成作業 平成15年2月1日から平成15年2月10日

調査体制

発掘調査指導員 村越 潔（弘前大学名誉教授）

浪岡町教育委員会 生涯学習課 文化班

課長 常田典昭

課長補佐 鎌田 廣

文化班長 工藤清泰（発掘調査副担当）

文化班主任主査 木村浩一（発掘調査主担当）

文化班主査 小田桐勝昭（発掘調査事務担当）

調査補助員 斎藤とも子、竹ヶ原亜希

調査協力員 高橋昌也

調査作業員 乗田キヨエ、藤本範子、吉川瑠枝、長谷川輝子、成田真佐子、田村広江、
斎藤エリカ

調査協力者

浪岡町大字五本松字平野54-7

山田光義

調 査 方 法

トレンチ方式により調査区を設定し、遺構・遺物の確認に努める。

遺構は、確認後、平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物は、原位置を確認しながら取り上げる。

調査報告書の作成

調査報告は「浪岡町文化財紀要Ⅲ」に掲載し、成果を公表する。

B地区試掘調査要項

調査の目的及び経緯

羽黒平（1）遺跡は、平成5・6年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った発掘調査により平安時代の集落が確認されている。今回の調査は、果樹園の現状を変更し、将来、開発行為を行おうとする計画に対し、試掘を行うものである。

調査対象地が広範囲にわたるため、試掘箇所を数箇所設定し、遺構の保存状態把握を行い、遺跡の開発・記録保存・保護の方策を探るものである。

調査地及び所有者

調査地地番等 南津軽郡浪岡町大字五本松字平野50-1、50-3、51-3

所 有 者 山田合成

調 査 面 積

対象面積10,747㎡のうち約5%に当たる500㎡を対象とする。

対象地及び試掘調査箇所については別添図参照。

調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準 備 作 業 平成14年5月27日から平成14年5月31日

調 査 作 業 平成14年6月1日から平成14年7月15日

整 理 作 業 平成14年12月1日から平成14年12月28日

報告書作成作業 平成15年2月11日から平成15年2月20日

調 査 体 制

発掘調査指導員 村越 潔（弘前大学名誉教授）

浪岡町教育委員会 生涯学習課 文化班

課 長 常田典昭

課 長 補 佐 鎌田 廣

文 化 班 長 工藤清泰（発掘調査副担当）

文化班主任主査 木村浩一（発掘調査主担当）

文 化 班 主 査 小田桐勝昭（発掘調査事務担当）

調査補助員 斎藤とも子、竹ヶ原亜希

調査協力員 高橋昌也

調査作業員 乗田キヨエ、藤本範子、吉川瑠枝、長谷川輝子、成田真佐子、田村広江、
斎藤エリカ

調査協力者

浪岡町大字五本松字羽黒平22

山田合成

調査方法

テストピット方式により試掘区を設定し、重機によって表土及び攪乱層を除去した後、遺構・遺物の確認に努める。

遺構は、確認後、平板実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。遺物は、原位置を確認しながら取り上げる。

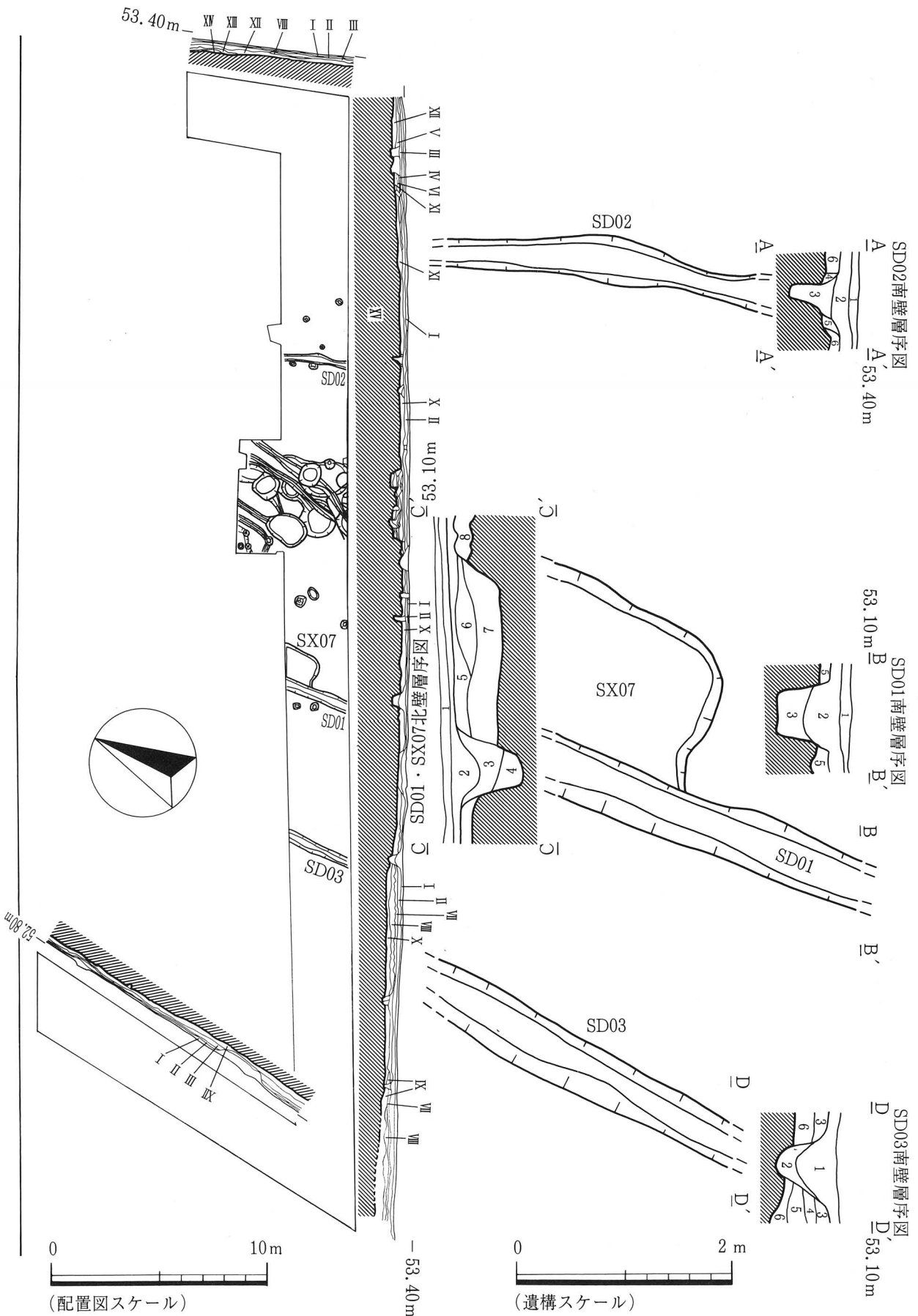
調査報告書の作成

調査報告は「浪岡町文化財紀要Ⅲ」に掲載し、成果を公表する。

第2章 調査経過（調査日誌より抜粋）

- 4月16日 調査現場にてテント設営。グリッド（任意）杭設定。浪岡城跡から水準移動、仮BM（53.176m）を設定する。表土除去作業開始。
- 4月17日 南北にA～B区、東西に11～16区を設定。BM1 = 53.20m、BM2 = 53.10mを設置。
- 4月23日 1・2層除去。B13区北東隅に試掘箇所をあける。
- 4月25日 B11～16区表土除去終了。遺構確認作業に移るが判別できない。黒色土層下に褐色土層。表土から50cm前後でロームの地山が検出される。
- 4月26日 確認した遺構に仮ナンバーをふる。SD01、02、03。SX01、02、03を設定。
- 5月1日 B11東南隅・B16西南すみを地山まで深掘り
- 5月9日 SD01、SD02完掘。B13区平板実測、遺物取上げ。SX01～05検出・写真撮影。SXの切り合いは不明。B13北側1.5×東西幅3mで拡張。
- 5月16日 東壁・西壁セクション図作成。掘り下げ。東側柱穴確認のため、北側に50m×（東西）1m拡張。
- 5月22日 B13区以降上端平板実測。溝掘り下げ、柱穴完掘。セクション終了。
- 5月25日 B13遺構密集区において、やり方実測・前日残したB14以西レベル計測。
- 5月28日 A区終了。B区着手。A区からB区へとBM2 = 55.10mよりレベル移動。仮BM =

図 I - 2 A区遺構全体配置図及び溝跡等平面図



55.90m設定。テント・トイレ移設。重機搬入。調査区方向軸の設定。

5月29日 重機にて4地点を掘削。西側の残りが悪い。

5月30日 調査地区番号付与（南東から時計回りにB-a～B-d区）。B-a・b・c区写真撮影。B-b・c区調査終了。B-a区で土壙1基、B-d区で溝1条、柱穴6箇所確認。

6月4日 BM2=54.80m・BM3=54.60m設定。B-d区精査。溝をベルト残しで掘り下げ。

6月13日 B-d区ベルト外し、精査、写真撮影。B-a区SK02平板実測。

6月14日 B-a区平板・レベル実測。B-b・c・d区レベル測量。羽黒平（1）遺跡調査の現場終了整理作業。リング樹抜根作業立会いに伴い、南西側をC区、北西側をD区とする。

6月17日 B地区埋め戻し。

第3章 検出遺構

遺構は、A区から竪穴建物跡、溝跡、土坑、性格不明遺構を検出した。B区からは掘立柱建物跡、溝跡、性格不明遺構を検出した。C区では、抜根跡からカマドと思われる焼土を検出したが、現状で保存できることから作図・遺物取上げ等は行っていない。D区から遺構検出はなかった。

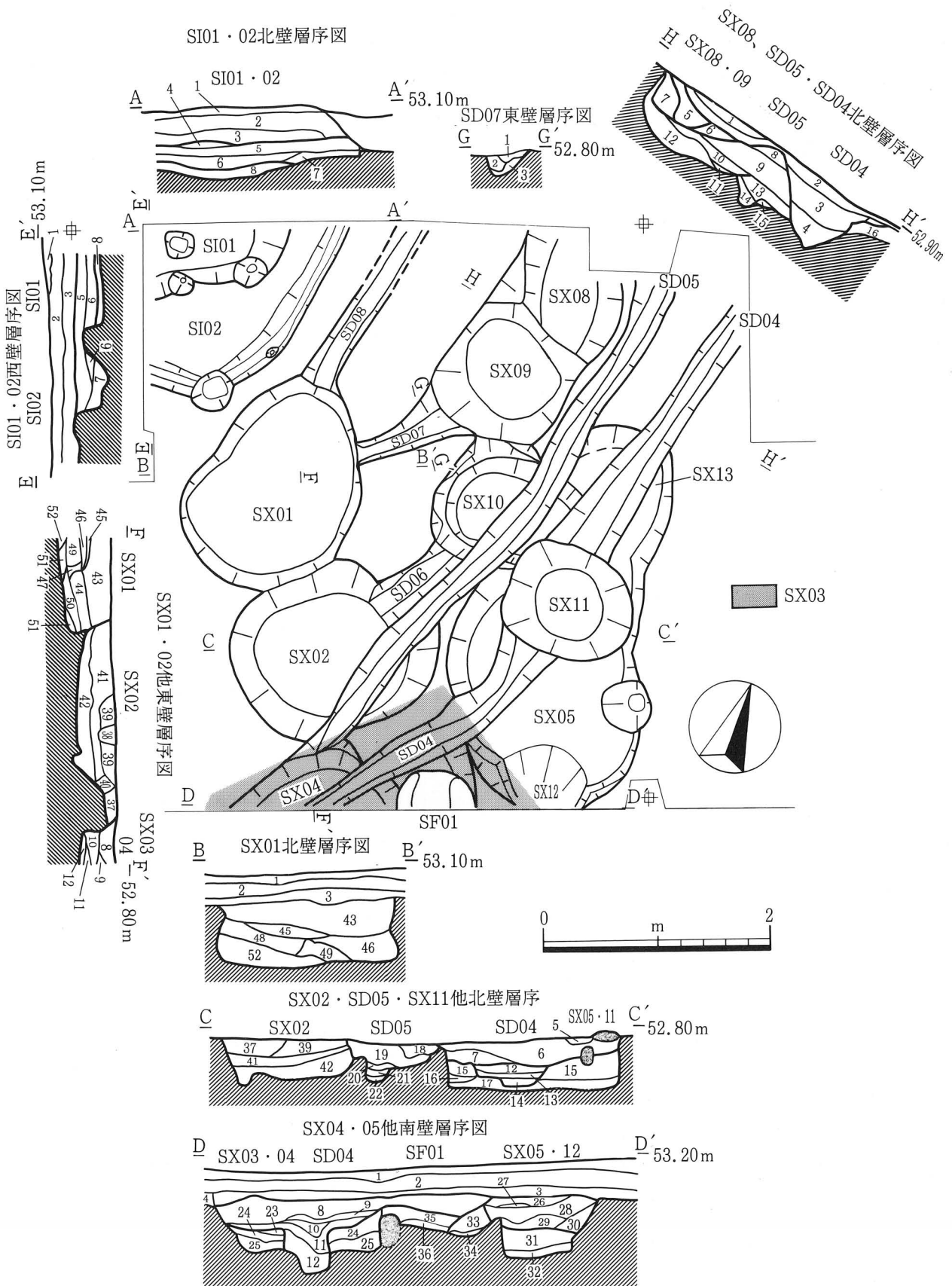
A区（写真I-1） A区は竪穴住居跡2棟、土坑10基、溝跡8条、焼土遺構1基、性格不明遺構1基を検出した。耕作により、表土とともに地山層も削平された痕跡がある。このため、遺構全体の深さについては現在確認できる数値を用いている。

竪穴住居跡 竪穴住居跡としたものは、性格不明遺構の中で貼床状の層を有するものである。しかし、調査面積が狭く、遺構の一部しか検出できなかったため確証に欠ける。なお、当該地域で特徴的な、C字状の溝を竪穴住居跡の周囲にめぐらし、溝の末端に土坑を有する遺構の可能性もある。

SI01（図I-3、表I-6） SI02の床面下から検出した遺構で、建替え前の遺構であるかもしれない。前述の様式の遺構であるとすれば、SX01とSD08が対応する可能性も考えられる。表の8層が残された貼床部分と思われる。

SI02（図I-3、表I-6） SI01の建替えと思われる遺構で、前述同様に溝と土坑のセット関係があるとすれば、SX02・SD06が該当すると思われる。しかし、農地の耕作により遺構覆

图 I-3 A区遺構集中地区平面图



土も失われているため、全容を把握できない。表の5・6・7層が遺構覆土と思われる。

土坑 楕円形の土坑を9基確認した。ほとんどの土坑が重複し遺構確認平面からは、新旧関係のつかみきれない状態であった。このため、調査を進める段階で、土色の変化と土層観察を行い、可能な限り遺構の重複関係を判断した。

SX01 (図I-3、表I-7) 長径190cm×短径140cm×深さ46cmを測る。SX02(新)と重複する。SI01・SD08とは同時期の可能性がある。

SX02 (図I-3、表I-7) 長径150cm×短径140cm×深さ37cmを測る。SX01(旧)、SD05(新)、SX03(新)と重複する。SI02・SD06と同時期の可能性がある。

SX04 (図I-3、表I-7) 調査区範囲に一部がかかったものであり、全形及び規模は不明である。SD04(新)と重複する。表の23・24・25層が対応する。

SX05 (図I-3、表I-7) 長径200cm×短径160cm×深さ40cmを測る。当初最も広範囲な遺構として確認したが、精査してゆく段階で複数の遺構の重複であることが確認された。重複する遺構にはSX03(新)、SX11(新)、SX12(旧)、SD04(新)がある、隣接するSX10・13も当初は同一遺構としていたが、精査してゆく過程で別遺構と判断した。両者との新旧関係は不明である。

SX07 (図I-3、表I-4) 短径(200)cm×深さ45cmを測る。東側の遺構形状は直線となり、南辺は東辺にはほぼ直角を呈するため、あたかも竪穴住居跡状である。西側と北側は遺構の線が不明であるため、全形はつかめないが、形態は細い長方形と推定される。形態が不明で床の存在も確認できないことなど、性格が不明であるため土坑に分類しておく。なお、建物と考慮する場合は中世竪穴建物跡の可能性も残される。

SX08 (図I-3、表I-9) 短径(90)cm×深さ48cmを測る。長径がSX09と重複し立ち上がりがかめられないことと、調査区外に遺構が伸びていることから、規模はつかめない。表の5・6・7層が対応する覆土である。SX09(旧)と重複する。

SX09 (図I-3、表I-9) 長径120cm×短径100cm×深さ53cmを測る。SX08(新)と重複するが、SX10・SD07との新旧関係は不明である。

SX10 (図I-3) 長径150cm×短径100cm×深さ26cmを測る。当初はSX05と同一遺構であると解していたため、土層層序は確認していない。SX11(新)、SD05(新)と重複するが、隣接するSX13、SD04、SD06との新旧関係は不明である。

SX11 (図I-3、表I-7) 長径(160)cm×深さ48cmを測る。SX05、SX13およびSD04を切っている最も新しい遺構である。表の5・6・7層が遺構に対応する覆土となる。

SX12 (図I-3、表I-7) 調査区に遺構の一部がかっただけのため、全形及び規模は不明である。SX05(新)、SX03(新)と重複するもので、表の31・32層が遺構覆土となる。

SX13 (図I-3) 規模、範囲ともに不明である。平面実測時に確認したものであり、SD04

(新)以外の隣接する遺構とは、新旧関係がつかめない。

溝跡 溝跡は8条検出した。うち、5条は遺構集中地域を横断し、他の遺構と重複するが、新旧関係が把握できない溝も存在している。

SD01 (図I-2、表I-3、4) SX07と重複する(SX07旧、SD01新)。上幅50cm、底部幅25cm、深さ50cmを測り、南北に走る溝である。底部のレベルからは南から北へと流れたことが考慮される。旧地形では北側に水路があったことから水路へ向う排水溝の可能性もある。時代は不明であるが、層序からは近現代の溝と思われる。

SD02 (図I-2、表I-2) 上幅30cm、底部幅15cm、深さ40cmを測り、南北に走る溝である。SD01よりも規模が小さく、時代も上ると思われる。しかし、方向からはSD01と同様の用途が考えられる。

SD03 (図I-2、表I-5) 上幅50cm、底部幅30cm、深さ50cmを測り、南北に走る溝である。表土層直下からの掘り込みであり、現代の溝の可能性はある。層序からは、(旧)SD02→SD01→SD03(新)と思われる。

SD04 (図I-3、表I-7、9) 幅、深さとも一定しない。北側で南北方向に走り南側で西に曲がる溝となる。SX04(旧)、SX05(旧)、SX10(旧)、SX13(旧)、SX11(新)、と重複し、土層注記表中の表I-9の3、4層及び表I-7の10、11、12・13・14層が覆土に相当する。

SD05 (図I-3、表I-7、9) 上幅30cm、底部幅10cm、深さ15cmを測り、SX02(旧)、SX10(旧)、SX11(新)と重複するが、SD06、SX05との新旧関係は不明である。表I-9の12・13・14層、表I-7の18~22層が覆土となる。

SD06 (図I-3) 上幅30cm、底部幅15cm、深さ19cmを測る。溝は北方向にさらに伸びると思われる。SX02・10、SD05との新旧関係はつかめない。

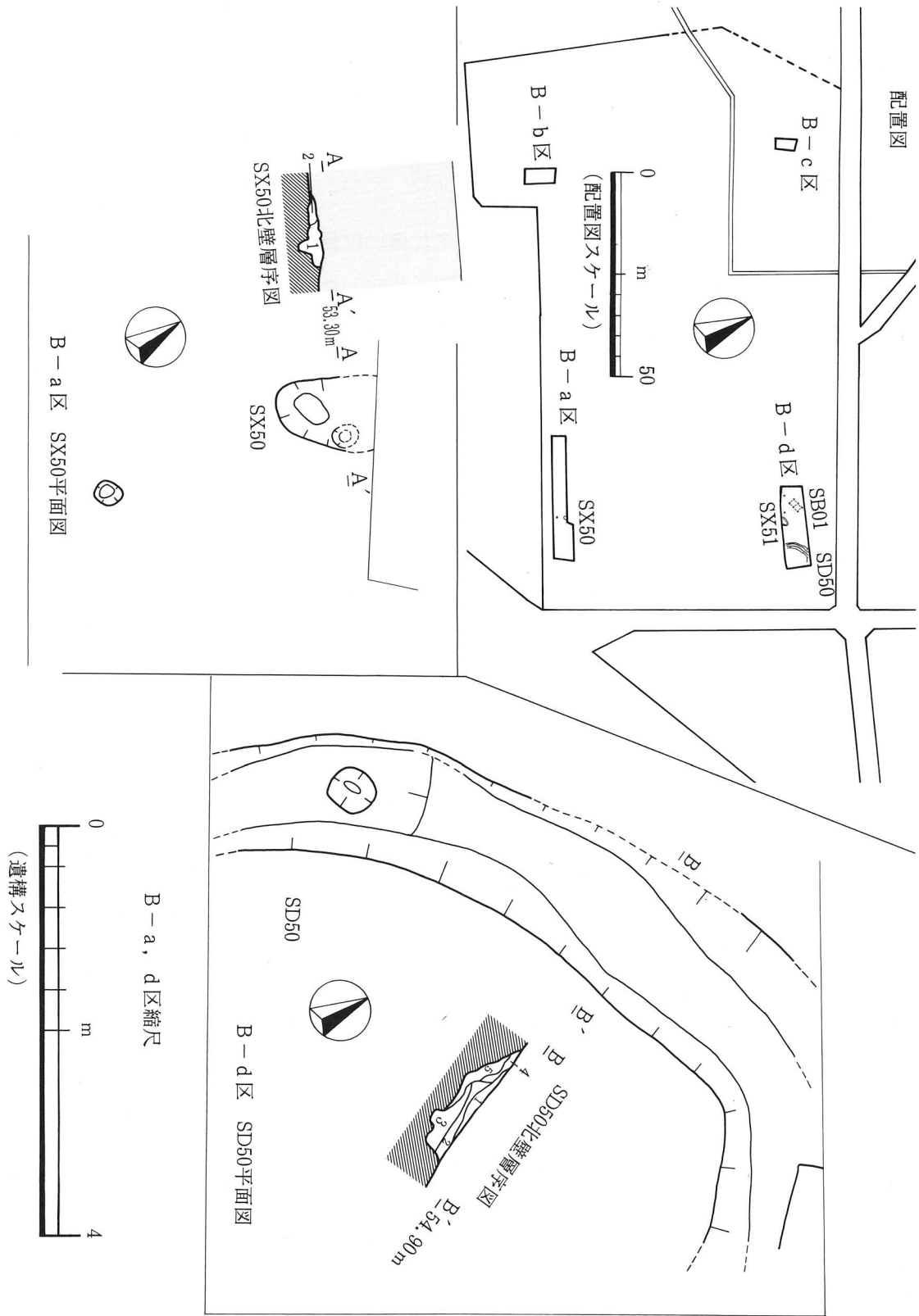
SD07 (図I-3、表I-8) 上幅25cm、底部幅11cm、深さ21cmを測りSX01とSX09を結ぶ箇所のみ検出。新旧関係は不明である。表I-9の5層がSD06または07の覆土となる可能性もある。

SD08 (図I-3) 上幅25cm、底部幅13cm、深さ30cmを測り、SX01から伸びている溝である。SX01と同時期と思われるが確認できなかった。

焼土遺構 焼土遺構は1基のみ確認したが、全形は不明である。

SF01 (図I-3、表I-7) 調査区の南側で幅70cmの焼土範囲が確認できた。東西両端に弱い立ち上がりを持つカマド状の形態を呈すと思われる。表の36層が焼土範囲となる。SX03(新)の他、遺構との新旧関係は不明である。

図 I - 4 B区試掘調査区配置図及び検出遺構平面図



性格不明遺構 竪穴住居跡や土坑、溝等に入らない遺構を性格不明遺構として報告する。

SX03 (図 I-3、表 I-7) 調査区の南側で表土除去後に遺構範囲を確認した。ほぼ方形と思われる平面形状が見られたが、一層掘り下げた段階で遺構範囲が不明となった。表の8・9層が遺構覆土となる。重複する遺構の中で最も新しいものである。近代以前と思われるが、時代等の詳細は不明である。

B区 A区とは、青森空港アクセス道路をはさんで北側に位置する農地である。今回対象地が1万㎡を超えるため、東西南北の4箇所を試掘箇所を設定した。(南東から時計回りにB-a区・B-b区・B-c区・B-d区とした)。調査の結果、表土の黒色土のみならず地山までをすでに掘削し客土を行っていることが判明した。掘削及び盛土は、西側で特に著しくなり、現在高から2mの盛土を除去すると黄褐色土及び地山層直下の灰白色粘土層までもが掘削されていた。このため、B-b区及びB-c区では遺構が確認できる状態ではなかった(写真I-2)。東側も掘削は行われていたが、かろうじてB-a区でSX50を、B-d区でもSB01、SD50、SX51を検出した。また、出土遺物である土師器片のほとんどが盛土・攪乱層からの出土である。

SB01 (図 I-5、写真 I-3、表 I-12) B-d区で検出した掘立柱建物跡で1間×2間の小規模なものである。周囲の柱穴はいずれも当該遺構の延長上にないことから、小規模な遺構で完結するものと考えられる。短辺(梁間)の間尺はほぼ150cm(5尺弱)であるが、長辺(桁行)は130~160cm(4尺3寸から5尺3寸)程度と一定しない。また、柱穴の深さも10~20cmと遺構の保存状態はよくない。時代は不明である。

SD50 (図 I-3、写真 I-3、表 I-11) B-d区で検出した溝で、幅120cm×深さ35cmのC字状に確認した。遺構は一部攪乱を受け、現代磁器が出土している。時代は不明である。

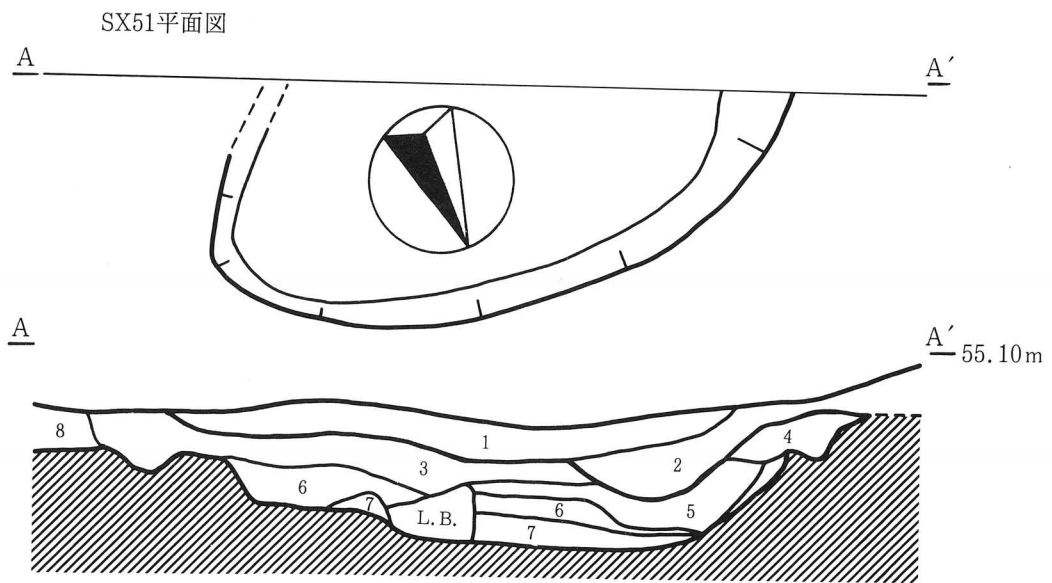
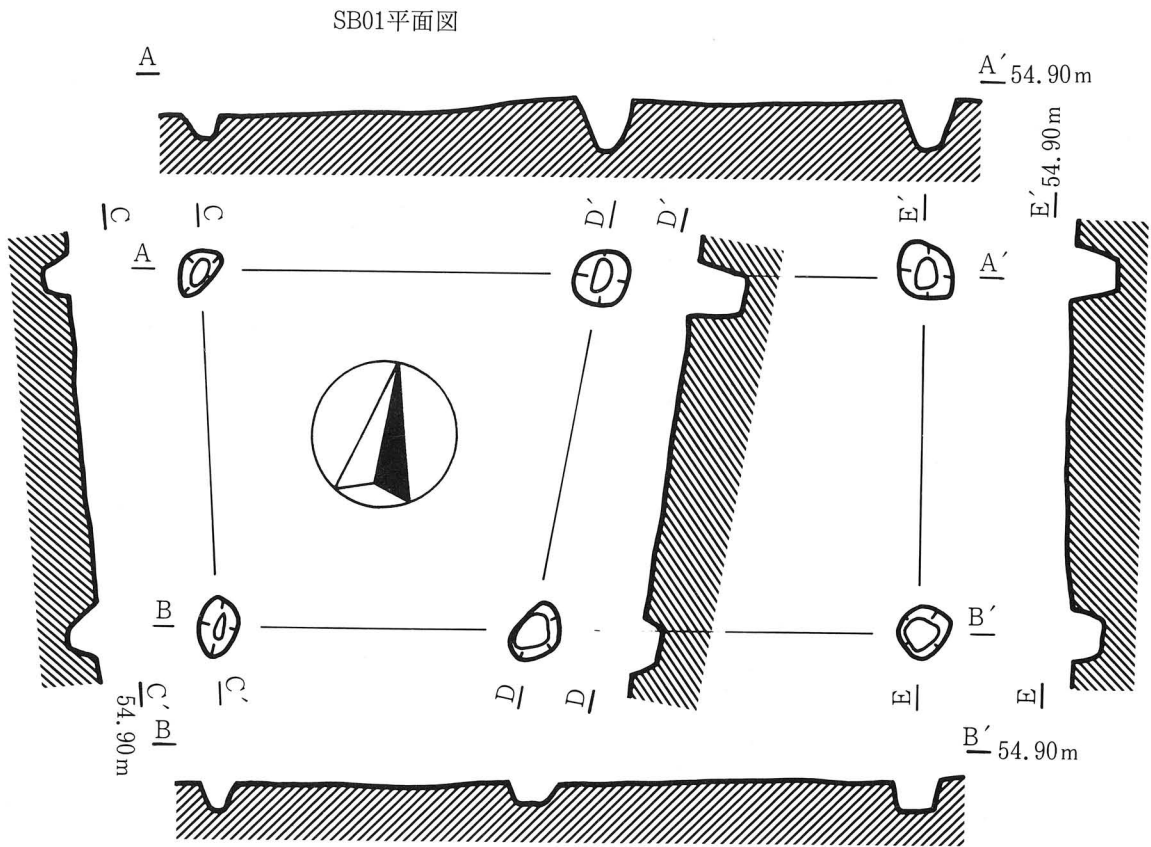
SX50 (図 I-3、写真 I-2、表 I-10) B-a区で検出した、短径70cmの不定形の遺構である。出土遺物なく時代も不明。

SX51 (図 I-5、写真 I-3、表 I-13) B-d区で検出した楕円形の土坑で、南側が調査設定区外に延びているため全形・規模は不明である。上層(表の1~3層)にはビニール等が混入していたため、攪乱を受けている可能性が高い。時代は特定できない。

C区 (写真 I-3) 抜根に伴い遺物の表採を行い、一ヶ所で焼土を確認した。しかし、果樹の抜根穴(直径1m程度)の確認であり、遺構として確認できなかった。

D区 (写真 I-3) 遺構の確認はできなかった。

图 I - 5 B - d 区遺構平面図



SX51南壁層序図

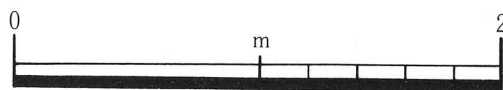
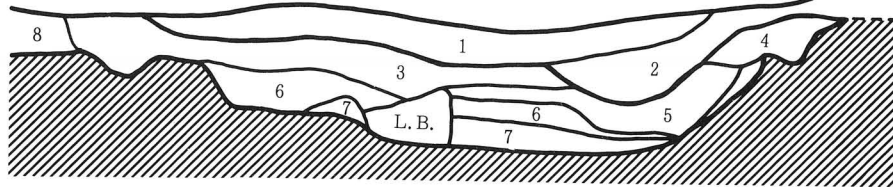


表 I-1 (図 I-2 A区遺構全体配置図及び溝跡等平面図・基本層序注記)

- I層 黒色土 (7.5YR2/1)。粘性・湿性なし。
- II層 黒色土 (7.5YR1.7/1)。粘性・湿性なし。しまり中。
- III層 黒色土 (10YR2/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり強。
- IV層 黒褐色土 (5YR2/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり弱い。
- V層 黒色土 (1.7/1) の極めて均質な層。粘性・湿性なし。しまり極めて強い。
- VI層 黒褐色土 (5YR3/1)。粘性・湿性・しまりなし。
- VII層 黒褐色土 (5YR2/1) に、褐色粘質土 (7.5YR4/4) を極小粒～小粒状に5%含む。しまり、粘性、湿性なし。
- VIII層 赤褐色ローム (2.5YR4/6)。しまり中。
- IX層 灰褐色土 (7.5YR4/2) に、にぶい褐色土 (7.5YR5/4) を小粒状に40%含む混層。粘性・湿性あり。しまり中。
- X層 黒褐色土 (7.5YR2/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を5%小塊状に含む。粘性・湿性・しまりなし。
- XI層 黒褐色土 (7.5YR3/2) に、褐色粘土質土 (7.5YR4/4) を20%小塊状に含む混層。粘性・しまりなし。湿性あり。
- XII層 黒色土 (10YR1.7/1)。粘性・湿性なし。しまり強い。
- XIII層 黒褐色土 (10YR3/1) と褐色粘土層 (10YR3/3) の6:4の互層をなす混層。砂粒を小粒状に10%含む。粘性弱い。湿性あり。しまり弱い。
- XIV層 黒褐色土 (10YR3/1) に、砂粒を小粒状に40%含む混層。小塊状の礫を7%含む。鉄分の付着した砂粒・小石が見られ(5cm大程度まで発達したものも見られ)る。粘性なし。湿性あり。しまり中。
- XV層 黄褐色粘性土 (10YR5/6) に、黒褐色粘性土 (10YR3/2) を10%含む混層に、直径8~10mm程度の礫、灰白色軽石 (10YR8/1) を中粒状に5%含む。粘性・湿性あり。しまり弱い。地山層。

表 I-2 (図 I-2 SD02南壁土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1) の単層。草根を多量に含む。耕作土(表土)
- 2層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土。
- 3層 黒色土 (7.5YR2/1) に、黒褐色土 (7.5YR3/1) を小粒状に5%含む。粘性・湿性・しまりなし。
- 4層 黒褐色土 (7.5YR2/2) の単層。粘性・湿性・しまりなし。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、にぶい橙色土 (7.5YR7/4) を中粒状に5%含む。粘性・湿性・しまりなし。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR3/2) に、褐色粘性土 (7.5YR4/4) を大塊状に20%含む。湿性あり。粘性・しまりなし。

表 I-3 (図 I-2 SD01南壁土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。草根を多量に含む。耕作土(表土)
- 2層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の均質な層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土。
- 3層 黒色土 (10YR1.7/1) に、にぶい橙色土 (10YR7/4) を小～中粒状に3%含む。粘性・湿性・しまりなし。
- 5層 黒色土 (7.5YR2/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を小塊状に5%含む。粘性・湿性・しまりなし。

表 I-4 (図 I-2 SD01・SX07北壁土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。草根を多量に含む。耕作土(表土)
- 2層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土。
- 3層 黒色土 (10YR2/1) に、橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に1%含む。しまり弱。
- 4層 黒色土 (10YR2/1) に、橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に1%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～極大粒状に3%含む。しまり弱。
- 5層 黒色土 (10YR2/1) に、明赤褐色砂質土 (2.5YR5/8) を極小粒状に2%、橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に1%含む。2層よりしまり弱、3層よりしまり強。
- 6層 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～大塊状に10%、橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に3%含む。
- 7層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～大塊状に15~20%含む。橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に3%、にぶい黄褐色粘土 (10YR7/2) を大塊状に1%含む。しまり弱
- 8層 黒色土 (10YR1.7/1) に、橙色砂質土 (7.5YR6/6) を極小粒状に1%含む。黒褐色粘性土 (7.5YR3/2) を極小粒～大粒状に3%含む。

表 I-5 (図 I-2 SD03南壁土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。草根を多量に含む。耕作土(表土)(C-C'ライン1層対応)。
- 2層 黒色土 (10YR1.7/1) に、小石を中粒状に3%含む。粘性・湿性・しまりなし。

- 3層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土 (C-C' ライン2層対応)。
- 4層 黒褐色土 (5 YR2/1) に、褐色粘性土 (7.5YR4/4) を小粒状に5%含む。しまり・粘性・湿性なし。
- 5層 赤褐色ローム (2.5YR4/6) の単層。粘性・しまり中。
- 6層 黒色土 (7.5YR2/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を小塊状に5%含む。粘性・湿性・しまりなし (B-B' ライン5層対応)。

表I-6 (図I-3 SI01・02北壁・西壁土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。草根を多量に含む。耕作土 (表土) (基本層序I層: C-C' ライン1層対応)。
- 2層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土 (基本層序のII層: C-C' ライン2層対応)。
- 3層 黒色土 (10YR2/1) の単層。しまり強い (基本層序のIII層対応)。
- 4層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色土 (10YR5/6)・炭化物・焼土をそれぞれ極小粒状に1%含む。しまりなし。
- 5層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色土 (10YR5/6) を極小粒～極大粒状に5%、黒褐色土 (10YR2/2) を塊状に3%、炭化物・焼土を極小粒状に1%含む。しまりややあり。
- 6層 黒色土 (10YR2/1) に、褐色土 (10YR4/4) を小粒～極大粒状に30%、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を極小粒～大粒状に10%、焼土粒を極小粒～大粒状に2%含む。しまりあり。
- 7層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色土 (10YR4/4) を極小粒～極大粒状に20%含む。しまりややあり。
- 8層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色土 (10YR5/6) を小粒～極大粒状に30%、褐色土 (10YR4/4) を中粒状に10%含む。しまりややあり。

表I-7 (SX01・02・03・04・05、SD04・05他 土層注記)

- 1層 黒色土 (7.5YR2/1)。草根を多量に含む。耕作土 (表土) (基本層序I層: C-C' ライン1層対応)。
- 2層 黒色土 (7.5YR1.7/1) の単層。粘性・湿性なし。しまり中。耕作土 (基本層序のII層: C-C' ライン2層対応)。
- 3層 黒色土 (10YR2/1) 単層。しまり強い。(基本層序のIII層対応)
- 4層 黒褐色シルト質土 (7.5YR3/2) に、褐色粘土質土 (7.5YR4/4) をブロック状に20%含む。
- 5層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状～中塊状に20%含む。
- 6層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状に1%含む混層。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を中粒～大粒状に10%、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒～小粒状に3%、灰白色パミス (10YR8/2) を極小粒状に1%、赤褐色焼土 (2.5YR4/6) を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に3%含む混層。
- 8層 (注記A/Bの2種類あり)
A: 黒色土 (7.5YR2/1) に明褐色土 (7.5YR5/6) を極小粒状に2%、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状に1%含む混層。
B: [B13南壁] 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、にぶい黄褐色土 (10YR5/4) を極小粒～極大粒状に7%、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒～小粒状に1%含む。
- 9層 (注記A/Bの2種類あり)
A: 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状に5%含む混層。
B: [B13南壁] 黒褐色土 (10YR2/2) に、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒～小粒状に5%含む。しまりなし。
- 10層 黒色土 (10YR2/1) と、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) の5:5の混層。
- 11層 黒色土 (10YR1.7/1)。しまり強い。
- 12層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状～大粒状に5%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～大塊状に3%、赤褐色焼土 (2.5YR4/6) を小粒状に2%含む混層。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒状に2%、炭化物を極小粒～極大粒状に3%含む混層。
- 14層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒～小粒状に7%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～大塊状に7%、炭化物を極小粒状に1%含む混層。
- 15層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～極大粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒～大粒状に2%含む混層。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) を中塊状に5%含む混層。
- 17層 にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒～中粒状に10%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒～中粒状に5%、赤褐色焼土 (2.5YR4/6) を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む混層。しまり強。
- 18層 黒色土 (7.5YR2/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) を極小～中粒状に10%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小塊状に5%、炭化物を極小粒に1%含む混層。

- 19層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～極大粒状に5%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～小粒状に2%、炭化物を極小粒～中粒状に3%含む混層。
- 20層 にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小～大粒状に3%含む混層。
- 21層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に3%含む混層。
- 22層 黒色土(10YR2/1)とにぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)の5:5の混層に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を小粒状に5%含む。しまり強い。
- 23層 [B13南壁] 黒褐色土(10YR2/2)に、暗褐色粘性土(10YR3/4)を極小粒～中塊状に15%含む。
- 24層 [B13南壁] 黒色土(10YR1.7/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～小粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に2%、明赤褐色焼土(5YR5/8)を極小粒状に1%含む。
- 25層 [B13南壁] 黒色土(7.5YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)を極小粒～大粒状に10%、暗褐色土(10YR3/4)を極小粒～中塊状に10%含む。明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む。しまりあり。
- 26層 [B13南壁]
黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄褐色土(10YR5/4)を極小粒～大塊状に7%、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒～大塊状に5%含む。しまり弱い。
- 27層 [B13南壁]
黒褐色土(10YR3/2)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/3)を極小粒～中塊状に10%、黒色土(10YR2/1)を小塊状に5%含む。
- 28層 [B13南壁]
黒色土(10YR1.7/1)に、明褐色砂質土(7.5YR5/6)を極小粒状に5%含む。明赤褐色焼土(5YR5/6)を極小粒～小粒状に2%、炭化物を極小粒～小粒状に1%含む。
- 29層 [B13南壁]
黒色土(7.5YR1.7/1)に、黄橙色土(7.5YR7/8)を極小粒～小粒状に2%、明赤褐色焼土(5YR5/6)を極小粒状に1%含む。
- 30層 [B13南壁]
明赤褐色焼土(5YR5/6)を極小粒から小粒状に2%、炭化物を極小粒～小粒状に1%含む。
- 31層 黒褐色土(7.5YR3/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～極大粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～大粒状に2%含む混層(SX05 15層対応)。
- 32層 にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中粒状に10%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～中粒状に5%、赤褐色焼土(2.5YR4/6)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む混層。しまり強い。
- 33層 黒褐色土(7.5YR2/2)に、明褐色砂質土(7.5YR2/6)を極小粒～小塊状に15%、にぶい黄褐色土(10YR5/4)を極小粒～中塊状に5%、明赤褐色焼土(5YR5/6)を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に1%含む。
- 34層 明赤褐色焼土(5YR5/6)。焼土ブロック。
- 35層 暗褐色土(10YR2/2)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR4/3)を極小粒状に5%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に3%、炭化物を極小粒状に2%含む。
- 36層 黒色土(10YR1.7/1)に、褐色土(10YR4/4)を極小粒～大粒状に7%、暗赤褐色焼土(*かなり焼けしまりが認められる)(5YR3/4)を極小粒状に2%、層下部に炭化物の層がある。
- 37層 (注記A/Bの2種類あり)
A: 黒褐色土(7.5YR3/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に3%含む混層。
B: 黒褐色土(7.5YR3/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に10%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～小塊状に3%含む混層。
- 38層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に1%含む混層。
- 39層 黒色土(10YR1.7/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大粒状に15%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を小粒状に2%含む混層。
- 40層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を小塊～大塊状に15%含む混層。
- 41層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に2%含む混層。
- 42層 黒色土(7.5YR2/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～極大粒状に25%含む混層。しまり強い。
- 43層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中粒状に3%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む混層。
- 44層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中塊状に20%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に3%含む混層。しまりあり。
- 45層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中粒状に7%含む混層。
- 46層 黒色土(10YR1.7/1)の単層。
- 47層 黒色土(7.5YR1.7/1)の単層。
- 48層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色土(10YR4/3)を小粒～大粒状に5%、黄橙色土(10YR8/6)

を小粒状に2%含む混層。粘性あり。しまりなし。

49層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中塊状に20%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に3%含む混層。しまりあり。

50層 黒色土(10YR1.7/1)の単層。

51層 黒色土(10YR2/1)とにぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)の5:5の混層。

52層 黒褐色土(10YR3/2)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を小塊状に7%含む混層。しまり強い。

表I-8(図I-3 SD07東壁土層注記)

1層 黒色土(10YR2/1)に、黒褐色土(10YR3/2)を小粒状に5%含む。しまりなし。

2層 黒色土(10YR2/1)に、黄褐色土(10YR5/6)を極小粒状に2%含む。しまりあり。

3層 暗褐色土(10YR3/3)に、黄褐色土(10YR5/6)を極大粒状に40%含む。しまりあり。

表I-9(図I-3 SX08、SD05・04北壁土層注記)

1層 黒色土(10YR2/1)に、黄褐色砂質土(10YR5/6)を、極小粒～小粒状に3%含む混層。

2層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～大粒状に2%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む混層。

3層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に5%、暗褐色土(10YR3/4)を極小粒状に1%含む混層。

4層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～小粒状に3%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大粒状に3%、炭化物を極小粒～大粒状に2%含む混層。

5層 黒色土(10YR2/1)に、赤褐色焼土(5YR4/6)を極小粒～大粒状に3%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～中粒状に2%含む混層。

6層 黒色土(7.5YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を、極小粒～小粒状に5%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む混層。

7層 黒色土(7.5YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を、極小粒～小粒状に5%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む混層。

8層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～大粒状に3%、赤褐色焼土(2.5YR4/6)を極小粒状に1%含む混層。

9層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)極小粒～極大粒状に10%、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～極大粒状に3%、暗褐色土(10YR3/4)を極小粒～極大粒状に5%含む混層。

10層 黒色土(10YR1.7/1)に、暗褐色土(10YR3/4)を極小粒状に1%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%含む混層。

11層 黒色土(10YR1.7/1)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒状に15%、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に1%、灰白色パミス(10YR8/2)を極小粒状に1%含む混層。しまり強。

12層 にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状～中塊状に10%含む混層。しまり強。

13層 黒色土(10YR1.7/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～中塊状に10%、暗褐色土(10YR3/4)を極小粒状に3%含む混層。

14層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒～極大粒状に10%含む混層。

15層 黒褐色土(10YR3/2)に、にぶい黄褐色粘性土(10YR5/4)を極小粒～小粒状に2%含む混層。

16層 注記なし。

表I-10(図I-4 SX50北壁土層注記)

1層 黒色土(10YR2/1)に、暗赤色土(5YR3/2)を小粒状に3%含む。粘性・しまり・湿性中。

2層 黒褐色土(10YR3/1)に、暗赤色土(5YR3/2)を小塊状に20%含む。しまり強。粘性・湿性中。

表I-11(図I-4 SD50北壁土層注記)

1層 黒褐色土(10YR3/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を小塊状に7%含む。層下部に中粒状の灰黄褐色土(10YR4/2)が薄い皿状に堆積する。しまり中。粘性弱。

2層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を小塊状に3%含む。

3層 黒色土(10YR2/1)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)を小粒状に40%、灰黄褐色土(10YR4/2)を小塊状に7%、白色粒を3%含む。

4層 黒色土(10YR2/1)とにぶい黄橙色土(10YR7/4)を小粒状に40%、灰黄褐色土(10YR4/2)を小塊状に7%、白色粒を3%含む。

5層 にぶい黄橙色土(10YR7/4)に、黒褐色土(10YR3/1)を小塊状に10%含む。しまり中。粘性なし。

表I-12(図I-5 SB01柱穴土色注記)

黒褐色土(10YR3/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を小粒状～大塊状に10%含むが、下層につれて、次

第に粒径が増える。直径2～5mm程度の小礫を3%含む。粘性中・湿性中・しまりなし。

表I-13 (図I-5 SX51南壁土層注記)

- 1層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小粒状に50%、にぶい黄褐色土(10YR5/4)を局所的に大塊状に含む。しまりなし。
- 2層 黒褐色土(10YR3/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小粒～大粒状に20%含む。焼土粒・炭化物をレンズ状に含む。しまりなし。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小～小粒状に5%含む。しまりなし。
- 4層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小粒状に1%含む。しまりなし。
- 5層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小粒～小粒状に5%含む。しまりなし。
- 6層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を大粒～極大粒状に50%含む。しまりあり。
- 7層 にぶい黄橙色土(10YR7/4)に、黒褐色土(10YR3/1)を小塊状に10%含む。しまり非常にあり。
- 8層 黒色土(10YR2/1)に、にぶい黄橙色土(10YR7/4)を極小粒状に50%、にぶい黄褐色土(10YR5/4)を局所的に大塊状に含む。しまりなし。

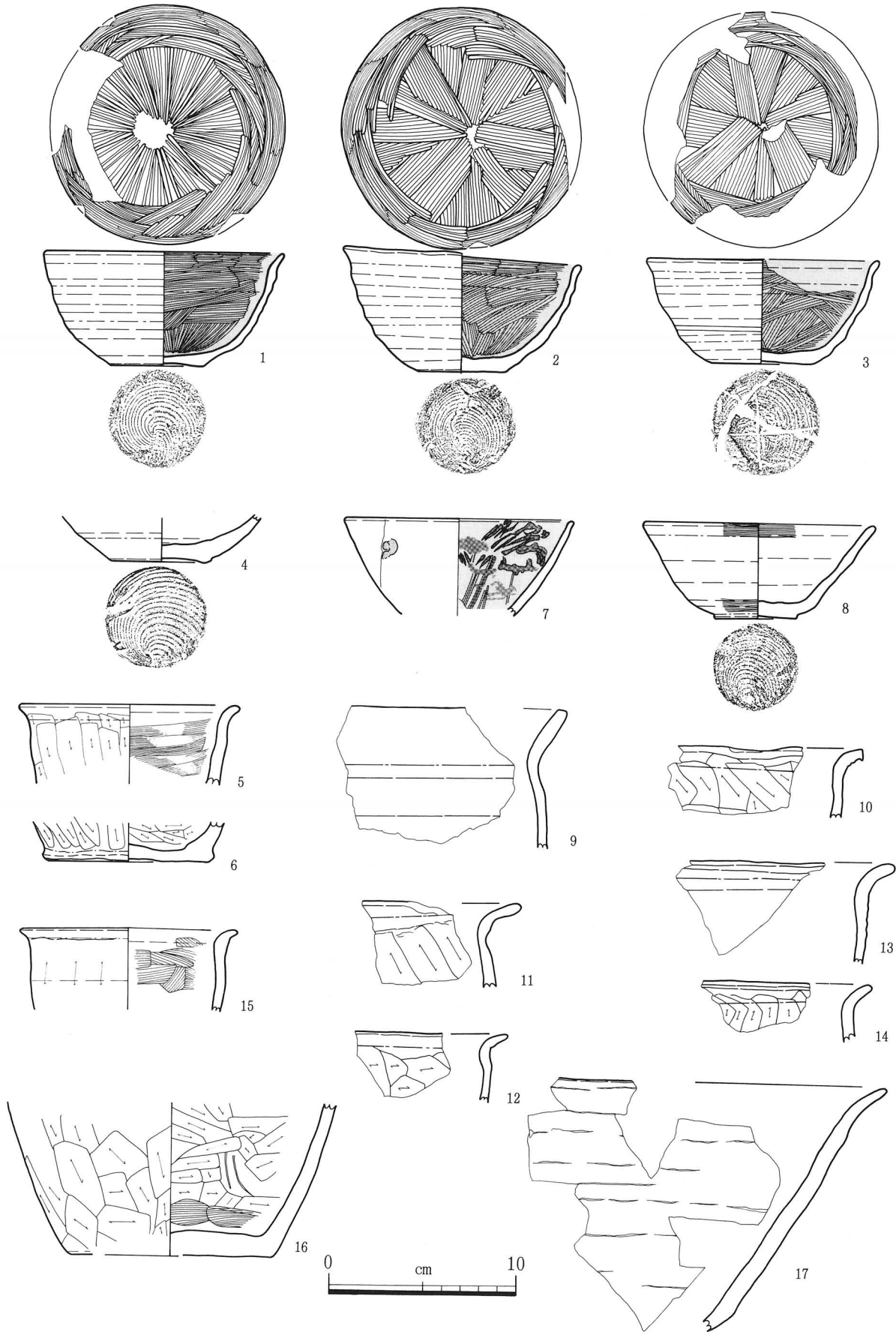
第4章 出土遺物(写真I-4)

A区

土師器(図I-6) 甕、坏、鍋、ミニチュア土器が出土している。甕は小形甕と長胴甕がある。口径が12cm程度の小型の一群(5、15)は、口縁部が急角度に短く外反する。外面は、外反する口縁の基部から上下方向に、内面は横位方向にヘラ調整が入るが、内外面とも調整はおおまかである。口縁径が20cmを超える長胴甕(9、10、11、13)は、口縁部が短く外反するもの(10)と口縁部が比較的長く、外反するもの(11、13)、口縁部が直線的に外反し、内外面の調整が良好なもの(9)がある。坏は、内黒土師器が5点出土した。うち3点は全形がわかるもので、1点は樹脂状の残存物が付着するものである。全形のわかるものは、SX05から出土し内面には磨きの暗紋が顕著に見られる。暗紋は、内面底中央部から縦位に磨き上げ、胴部から口縁部にかけて横位に磨きをかけている。底部の縦位方向の磨きは放射状に磨いたもの(1)と、数回の磨きごとに方向を変え、調整を行っているもの(2、3)がある。また(3)は、糸切底に十字の刻線を入れたものである。樹脂状の残存物が付着した内黒土師器(7)は、幅2mmの筆かへら状の痕跡が残るもので、器面で余分な樹脂を落としたものであろうか。水溶液質のもの利用に用いた痕跡が見られる。鍋(13)は、法量が不明であるが、内面の調整は荒いながらも全面に横位のなでを施すが、外面は、輪積み痕が明瞭に残り縦横になでが施されている。

ミニチュア土器(図I-7) 直径5cm×高さ2.8cmの坏形状のもの(19)、直径4.5cm×高さ4.3cmの甕状のもの(20)の2点については、内外面とも調整はほとんど行われておらず、技法も稚拙である。器形不明の底部(18)については、外面の調整が良好なのに対して内面の調整が行われておらず、壺のミニチュアや土鈴の可能性もある。

图 I - 6 出土遗物实测图



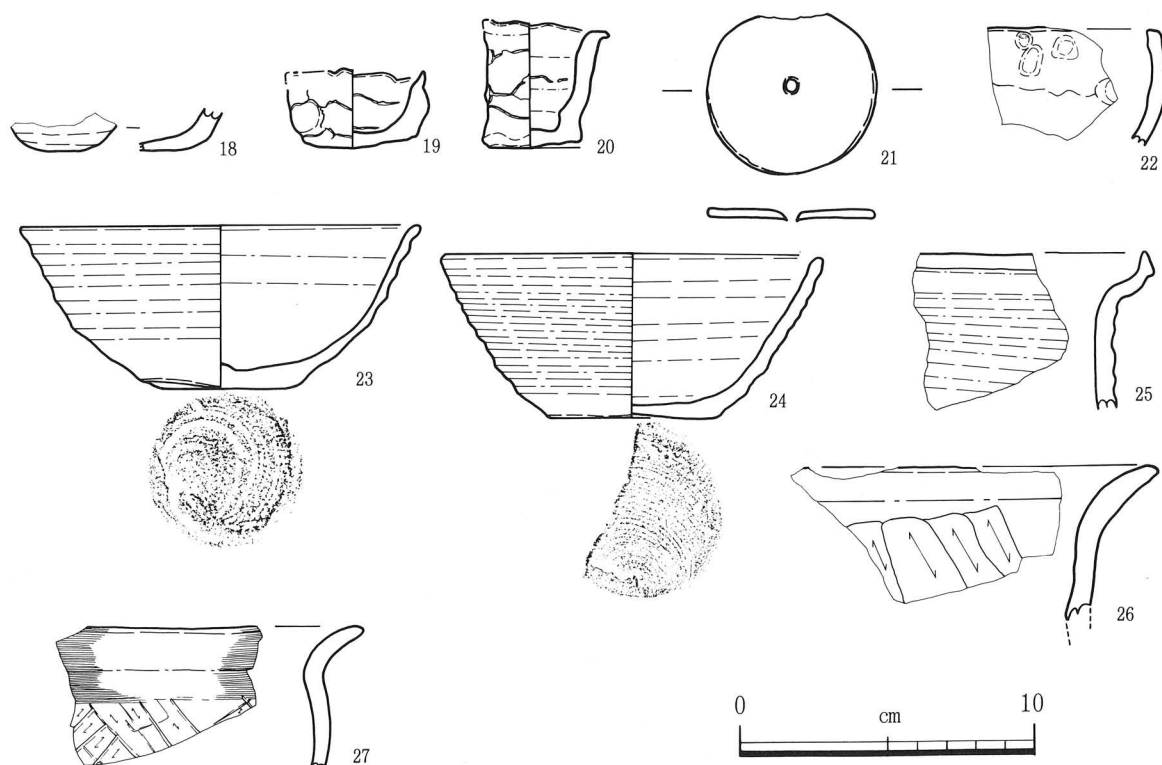
鉄製品（図I-7） 鉄製品は、遺構からの出土は皆無、現代の腐食した鉄製品が数点出土しているのみである。唯一、時代不明な遺物として紡錘車と思われる鉄製品（21）がある。重量41.25gで直径5.7cm、厚さ3mmの円形を呈する。Ⅱ層からの出土である。製品ではないが、SX02からは鉄滓が2点出土している。

その他 SD04から、施釉陶器（写真I-4, 28・29）が出土している。外面に灰釉を施したと思われる陶器片で、砂粒を多く含む荒めの褐灰色（10YR6/1）胎土である。内外面ともに釉掛りのない部分は表面に細かいヒビが入る。産地、時代ともに不詳である。

B区（図I-7） 遺構の床面を形成する地山層自体が残存しない箇所もあり、遺物の出土もほとんどない。SX51から、手捏ねの土師器杯（22）が1点出土している。

C区（図I-7） 抜根に伴う果樹鉢穴から杯・甕の破片が出土している。杯は、薄手で、直径13.6cm×高さ5.5cm、口縁部がやや外反し外面に間隔の広いロクロ痕が明瞭に残るもの（23）と、直径13cm×高さ5.6cmで内外面ともにロクロ痕が残り、底部から口縁部まで直行する立ち上がりを呈するもの（24）がある。甕は、口縁部破片であり、法量は推定できないが、調整が荒く、輪積み痕と外面に二次焼成の痕跡が残るもの（26）と、調整が内外面ともに良好で、ロクロ目を残し、須恵器を模倣した口唇部形態を呈するもの（25）がある。

図I-7 出土遺物実測図



D区(図I-7) 甕口縁部が1点表採できた。(27)は内面及び口縁部の調整が良好で、胴部の調整を交差させるような調整痕が残る。

第5章 ま と め

本調査では、C・D区が立会い調査区であり、B区が削平されてしまった箇所であること、A区がトレンチ調査であったことから、昭和52年度・平成5年度に青森県で行った調査との整合性を得るまでにいたっていない。以下、本年度調査区の中で、多くの遺構・遺物を検出したA区についてまとめる。A区中、遺構が集中した箇所では、一部確認時に新旧関係がつかめた遺構もあるが、土坑・溝が複数重複したことから全体として遺構の新旧関係がつかみにくかった。したがって、遺物についても遺構とのセット関係もつかみにくい。しかし、遺物全体からは、調査区は概ね10世紀代におさまると思われる。

また、溝が建物の廃絶後も用いられていたことから土地の継続した使用が考えられる。また、内黒土師器については、内面底部の磨きを放射状に密に行うもの(1)がSI01・SX05(※接合)から出土しており、その上層遺構であるSX11からは、底部径がやや広くなり、磨きの痕跡が数条のブロック状にまとまり、荒く磨き残した状態の坏が出土している。器形と調整から時期差を考えられるかもしれないが、固体数が不足しているため、今後、類例を検討したい。

A区が遺跡中央部に近い部分となるが、遺跡南西部のC区からは、ロクロ痕を明瞭に残し、須恵器口縁を写した小型甕の出土もあり、羽黒平(1)遺跡内で場所により9世紀後半からの利用が考えられる。

発掘調査抄録

ふりがな	はぐろたいかっこいちせきはくつ・しくつ・たちあいちょうさほうこくしよ							
書名	羽黒平(1)遺跡発掘・試掘・立会い調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号	第8集							
執筆者名	木村浩一							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 TEL 0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2003年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
羽黒平(1)遺跡 A地区	浪岡町大字五本松 字平野	29	29017	40° 43' 30"	140° 36' 57"	約200m ²	4月16日 ～ 5月28日	宅地開発
B地区				40° 43' 40"	140° 36' 58"	約250m ²	5月29日 ～ 6月20日	農地改良予定
C地区				40° 43' 29"	140° 36' 52"		6月14日	果樹抜根
D地区				40° 43' 31"	140° 36' 51"		6月14日	果樹抜根
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
羽黒平(1)遺跡 A地区	集落	平安時代	竪穴建物跡2棟、土 坑10基、溝跡8条		土師器・須恵器等 テンバコ約5箱			
B地区			掘立柱建物跡、溝跡		♪ 約10点			
C地区			焼土遺構(カマド?)		♪ 約10点			

写真 I - 1



羽黒平（1）遺跡 A区全景東から



同上、西から



A区遺構集中検出箇所
（南から）



A区 SD01. SX07完掘状況
（北から）

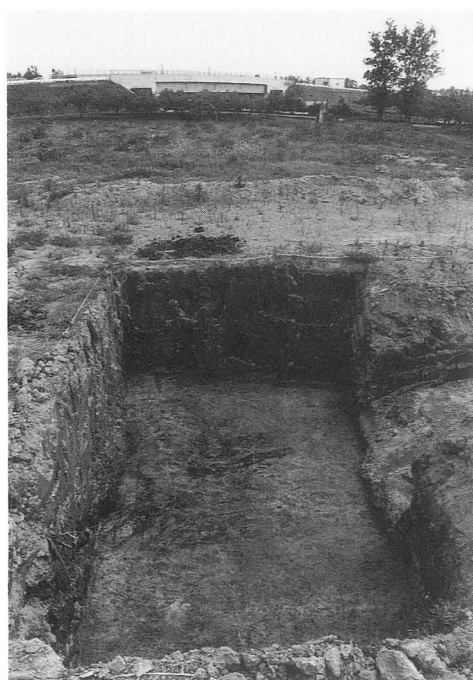
写真 I - 2



左 ; 羽黒平 (1) 遺跡 B 区全景
(東から)

左下 ; B - a 区完掘状況 (東から)

下 ; B - a 区盛土 (客土) 状況
(南から)



左 ; B - b 区完掘状況 (北から)

左 ; B - b 区完掘状況 (北から)

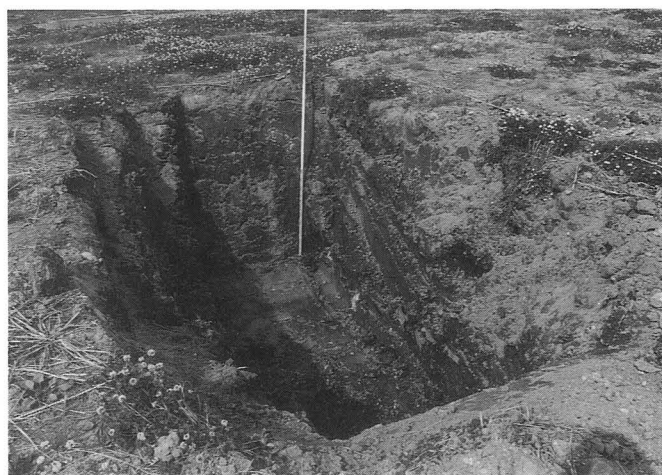
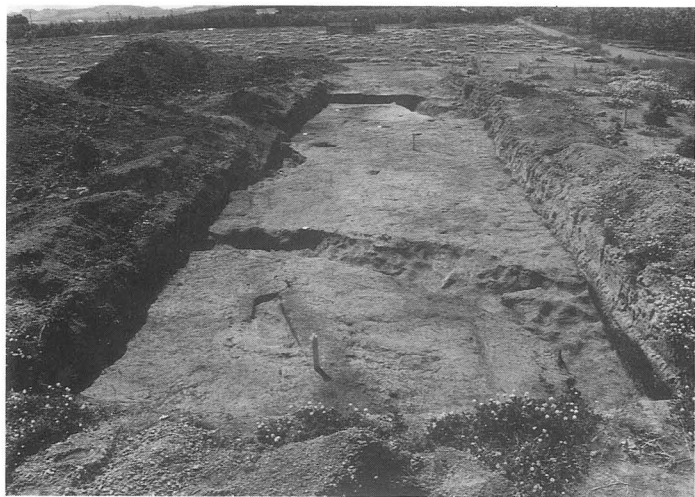


写真 I - 3



羽黒平(1)遺跡 B-d区完掘状況
(東から)



B-d区検出 SB01 (北東から)

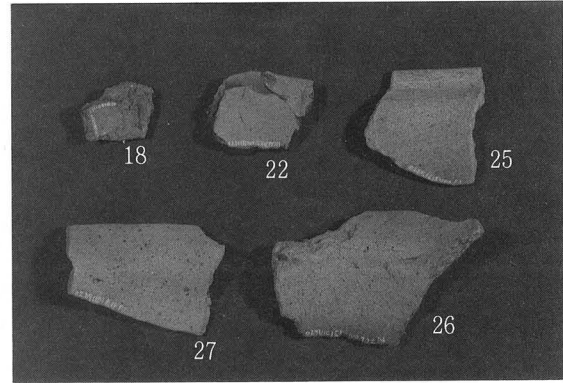
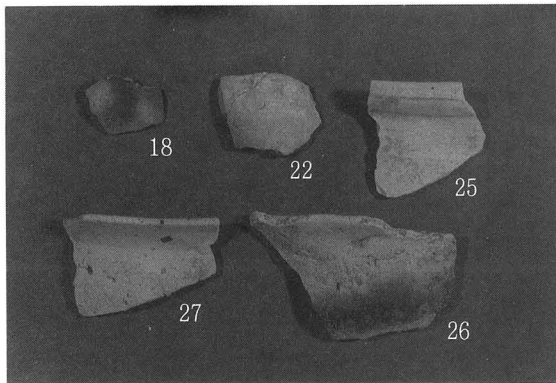
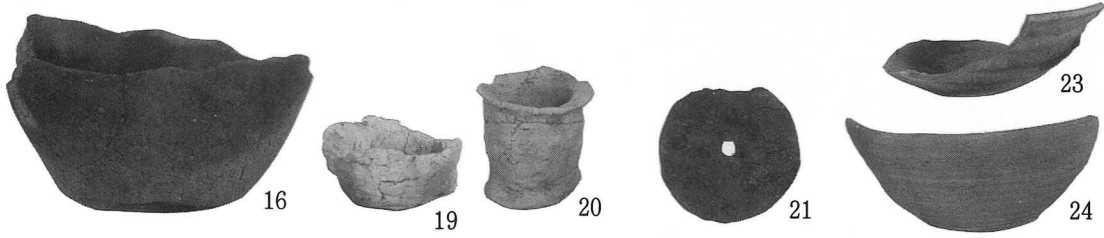
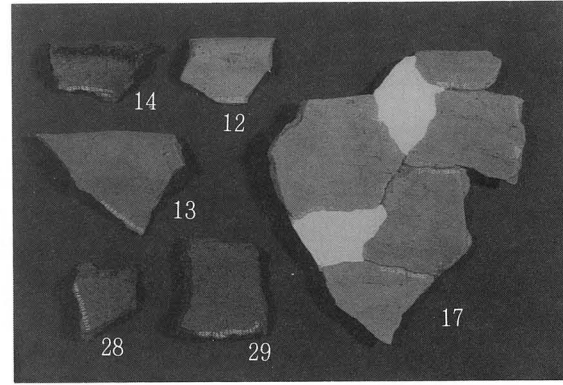
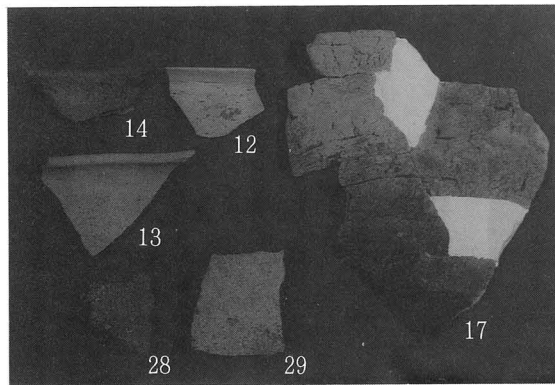
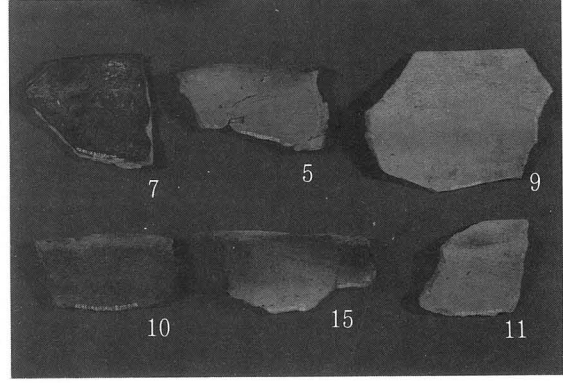
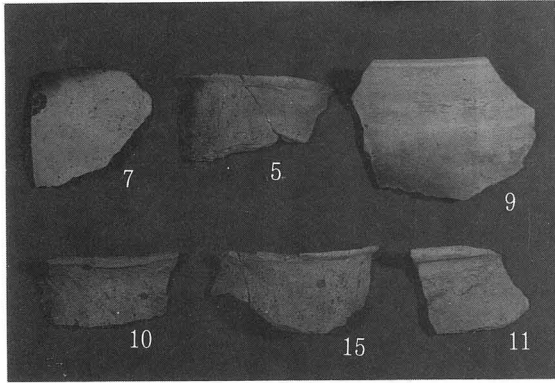
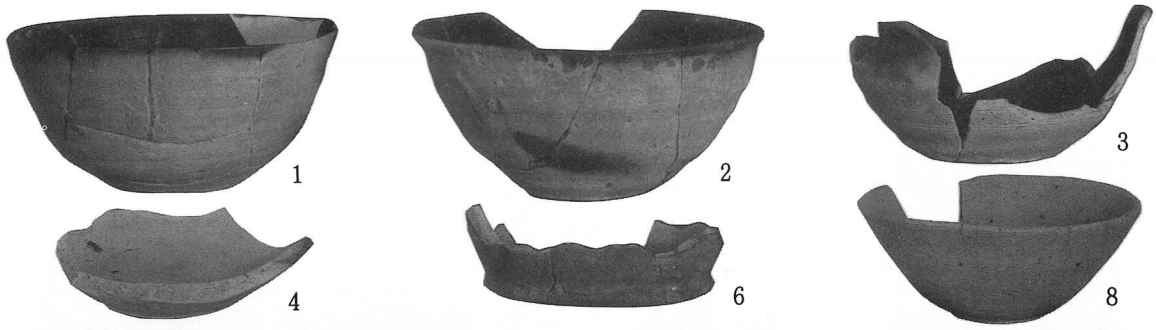


羽黒平(1)遺跡C区
リンゴ樹抜根立合い状況
(南から)



羽黒平(1)遺跡D区
リンゴ樹抜根立合い状況
(南東から)

写真 I - 4 羽黒平 (1) 遺跡出土遺物



平成14年度

浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書

XIII

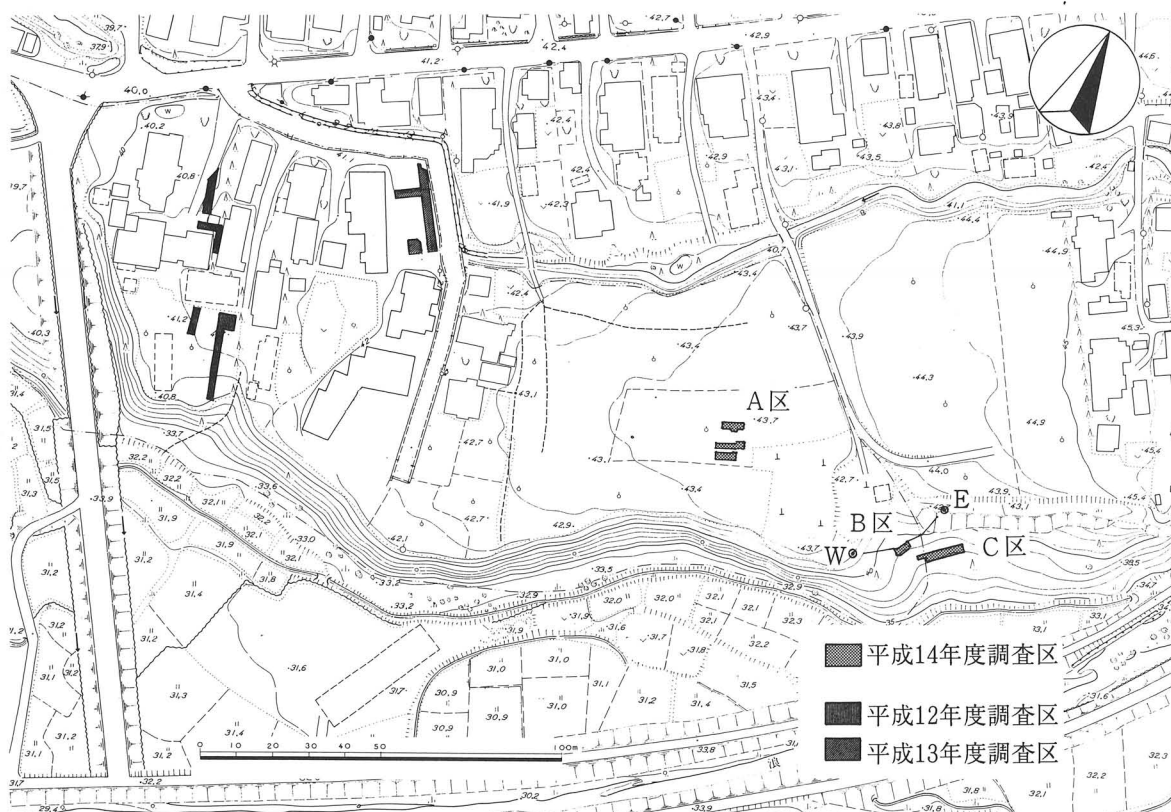
第1章 調査に至る経緯

浪岡城跡の史跡指定地内である新館地区において、野菜畑を果樹園にしたいとの希望が所有者から口頭で伝えられた。植樹に際しては、掘削及び客土を行わなければならないため、事前に埋蔵文化財の有無を確認し、記録保存を目的として発掘調査を実施した。

調査結果、中世の遺構とともに平安時代の遺構が検出され。今後、果樹園化にともなう掘削、果樹の根による遺構保存への影響が考慮されることから、地権者と協議を行い、果樹園への変更を行わないことで同意していただいた。

また、調査中、隣接する史跡指定地内でも空堀跡と推定される部分の杉（倒木）を抜根したいとの希望が地権者からあったため、追加して遺構の確認を行った。堀跡と推定された部分は、恒常的に材木林として利用していたことから埋土も少なく遺構の保存状態は必ずしも良好とはいえなかった。しかし、材木林の抜根等は遺構のみならず地形・史跡全景への影響も多大であることから、伐採した材の運び出しのみに留めて抜根は行わないことで地権者の同意を得、調査を終了した。

図Ⅱ-1 新館地区年度別調査区



平成14年度発掘調査要項

調査の目的及び経緯

浪岡城跡の史跡指定地内である新館地区において、野菜畑を果樹園にしたいとの希望が所有者から口頭で伝えられた。植樹に際しては、掘削を行わなければならないため、事前に埋蔵文化財の有無を確認し、記録保存を目的として発掘調査を実施するものである。

調査地及び所有者

調査地地番等 青森県南津軽郡浪岡町大字五本松字松本27-1 他
所 有 者 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字松本11-4
有馬ミサオ

調査面積

約100㎡（対象地及び調査個所については別添図参照）。

調査期間等予定（期間中に所定の日数を行う）

準備作業 平成14年7月16日から平成14年7月20日
調査作業 平成14年7月21日から平成14年8月31日
整理作業 平成15年1月4日から平成15年1月31日
報告書作成作業 平成15年2月21日から平成14年2月28日

調査体制

発掘調査指導員 村越 潔（弘前大学名誉教授）
浪岡町教育委員会 生涯学習課 文化班
課 長 常田典昭
課長補佐 鎌田 廣
文化班長 工藤清泰（発掘調査副担当）
文化班主任主査 木村浩一（発掘調査主担当）
文化班主査 小田桐勝昭（発掘調査事務担当）
調査補助員 斎藤とも子、竹ヶ原亜希
調査作業員 乗田キヨエ、藤本範子、吉川瑠枝、長谷川輝子、成田真佐子、田村広江、
斎藤エリカ

調査方法

- 1) トレンチ方式により調査区を設定し、遺構や遺物が検出され次第グリッド方式に変更する。
- 2) 調査箇所が私有地であり、畑地として利用されてきたため耕作による攪乱が予想される。このため、中世遺構面の確認を最優先する。
- 3) 測量（実測）は、遣り方と平板測量を併用する。

4) 遺構略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、国立奈良文化財研究所方式をとる。

例 掘建柱建物跡 SB
溝跡 SD

5) 遺物略称は、従来までの調査と整合性を持たせるため、浪岡城跡発掘調査方式をとる。

例 陶磁器 P
鉄製品 F

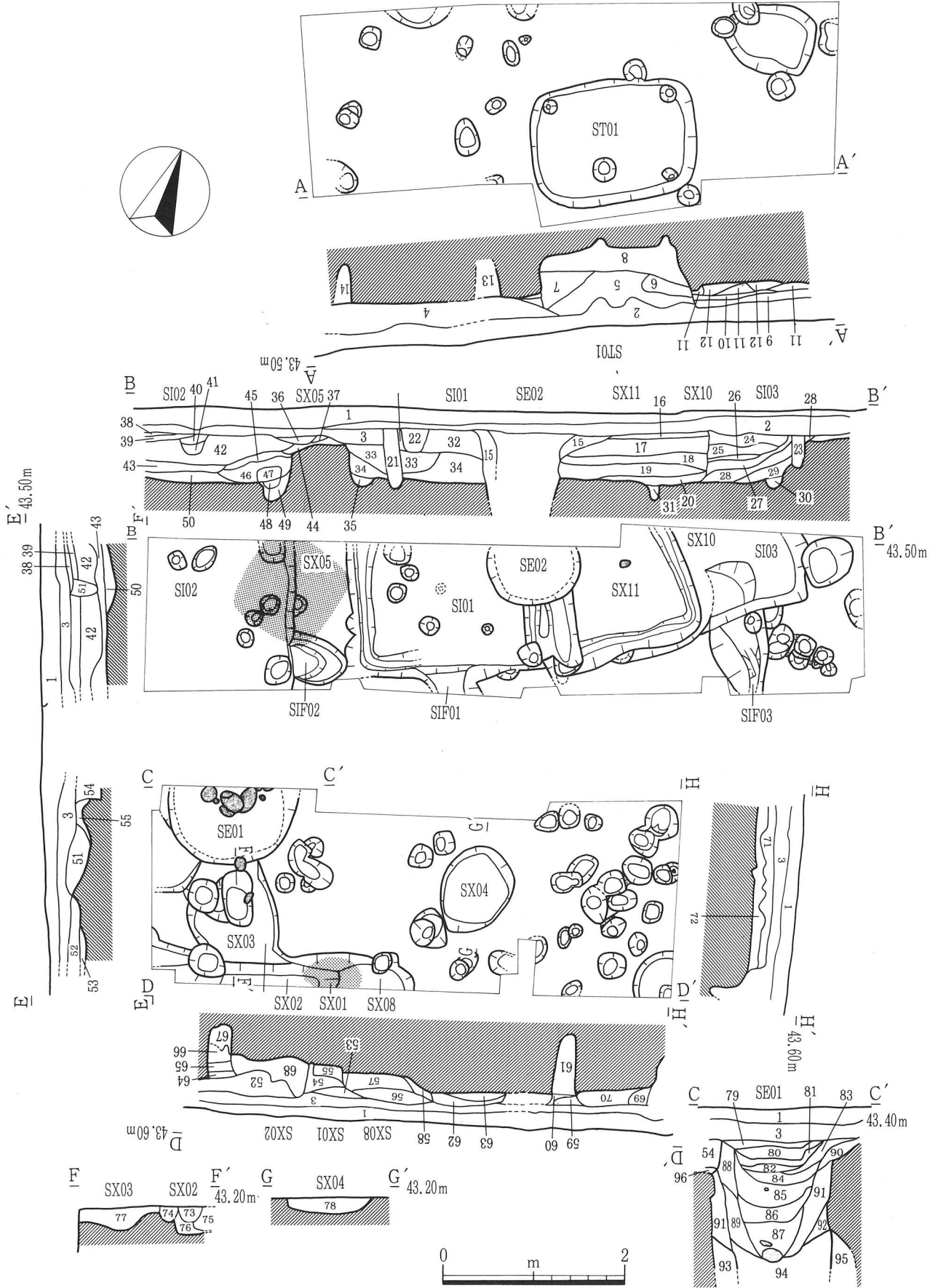
調査報告書の作成

調査報告書は「浪岡町文化財紀要Ⅲ」に掲載し、成果を公表する。

第2章 調査経過（調査日誌から抜粋）

- 6月25日 新館調査箇所にてテント設営。調査区の設定。
- 6月26日 A区の表土除去作業。地表から20cmほど掘り下げた時点で白磁端反皿、美濃瀬戸灰釉皿、石鉢、銅製皿が出土した。浪岡城跡北館から水準移動。BM1 = 42.50m。
- 6月27日 2層下で井戸（SE01、02）性格不明遺構（SX）、柱穴等の遺構を確認。
- 7月3日 SE01土層層序図を作成。B区の表土除去作業。
- 7月4日 A区遺構掘り下げ。B区へ基準標高を移動（BM2 = 39.20m）。C区雑草木除去。
- 7月5日 SE01から美濃瀬戸灰釉皿、同鉄釉皿、角釘、炭化米等出土。中世の遺構と推定される。
- 7月17日 A区南部分精査後、完掘写真撮影。SXのうち2基はカマドを有し、SI番号に切り替えた。C区表土除去。
- 7月24日 A区拡張し掘り下げ開始する。柱穴から鑿銭（リング状銭貨）8枚や美濃瀬戸灰釉皿破片等出土。中世と平安時代の遺構が重なって存することが判明した。
- 7月26日 A区掘り下げ、B区表土除去作業。斜面については、表土下約10cm程度で地山に到達する。C区西側に拡張。第2次大戦前まで道路として用いていたSR01を確認。
- 7月31日 A区一部埋め戻し開始。平安の住居址カマドを精査、実測。B、C区掘り下げ。
- 8月1日 カマド精査。確認時に除去した焼土塊はカマド天井部分であった可能性が高い。発掘調査指導員の村越先生指導のため来訪。
- 8月6日 A区、SE02掘り下げ。平安時代のSI01、SI03と中世のST（SX）が重複し、さらに近代（？）のSE02がそれらの中心に造られているため、遺構の規模、新旧関係をとらえることが難しくなっている。C区掘り下げを続ける。
- 8月7日 朝からの強い雨。作業を強行しようとしたが、増水被害が出るほどの雨のため、出

图 II-2 浪岡城跡新館地区 A 区遺構平面圖



土した遺物の洗浄・注記・実測図整理を行う。

- 8月9日 A区SX群には、中世の遺構がさらに1棟切り合う可能性が出てきた。さらに精査を進める。
- 8月23日 C区層序図作成。B区精査。
- 8月28日 C区埋め戻し完了。
- 8月30日 A区SI03カマド全景写真、平面実測、セクション図作成。
- 9月3日 A区埋め戻し終了。
- 9月11日 B区埋め戻し終了。今年度の浪岡城跡発掘調査は終了。

第3章 検出遺構

調査区は、浪岡城跡新館地区の東端にあたる墓地の北西にあたる畑部分をA区（40㎡）、史跡指定地の境界線内側にあたる沢（堀跡）をB区（10㎡）、B区に接した雑木林箇所をC区（20㎡）とした。以下、調査区ごとに概要と検出遺構について報告する。

A区（図Ⅱ-2、表Ⅱ-1） 今年度は、畑地の改変予定等に伴う狭小な調査ではあるが、遺構の保存状態を把握することを目標とした。これは昨年度までの調査で、新館地区西側において中世の遺構・遺物の保存状態が良好であることが確認できていたため、東側での中世城館に係わる遺構確認及び遺物の出土状況確認を主眼としたものである。しかし、A区の調査進捗に伴い、中世の遺構とともに平安時代の遺構群を確認した。なお、調査区の狭小さから柱穴列は特定できなかったため、特に報告を行わない。

竪穴建物跡

ST01（写真Ⅱ-3） 長軸180cm×短軸135cm×深さ75cmを測る竪穴建物で、南西端以外の床面隅角部に柱穴を持つ。床面からは、鎌と鉞が十字状に重ねられて出土している。中世の遺構と思われる。

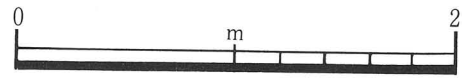
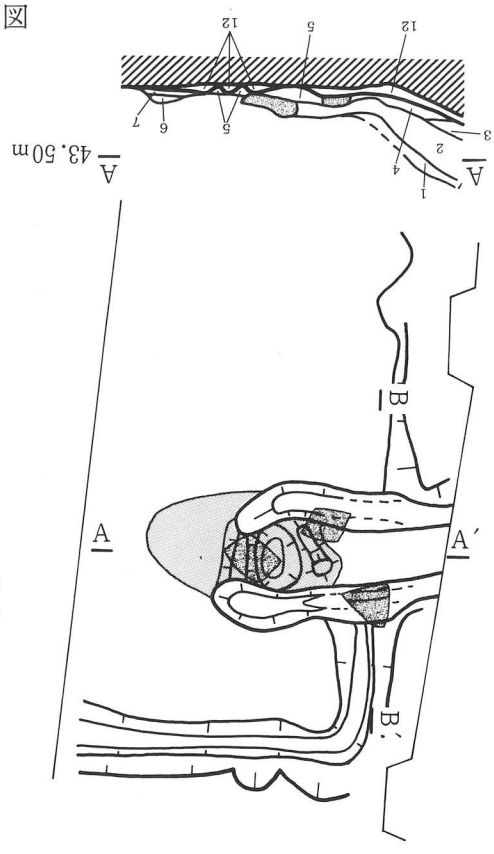
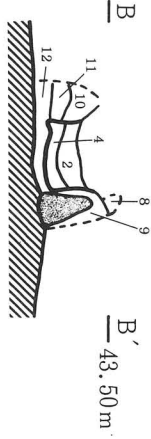
井戸跡

SE01（写真Ⅱ-1） 直径130cmで深さは200cmで終了した。美濃瀬戸灰釉菊花皿・鉄釉碗、染付皿、小札、角釘等中世の遺物が出土している。土層の堆積状態からは井戸木枠を有する可能性も考えられる。

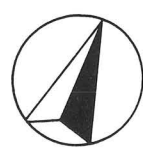
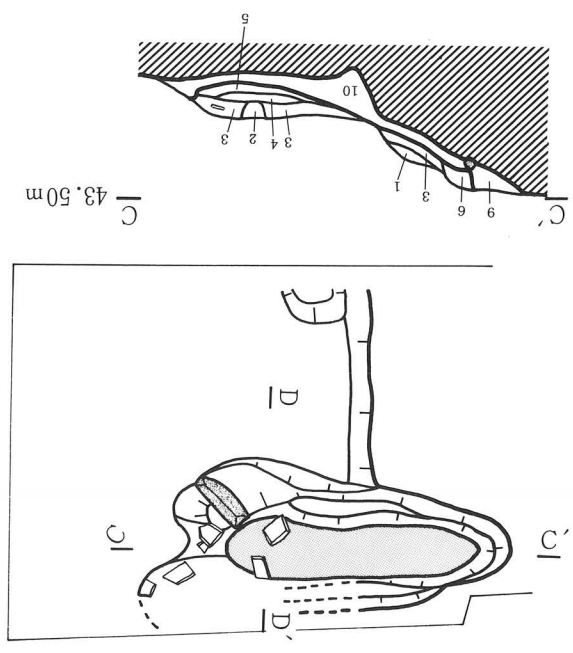
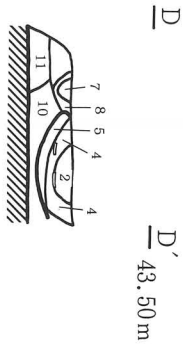
SE02（写真Ⅱ-2） 直径100cmで深さは100cmで終了した。8月上旬の豪雨により、土層が崩落し堆積状態はつかめていない。調査中の観察からは、遺構上層にビニール等の混入があり

図Ⅱ-3 カマド平面図

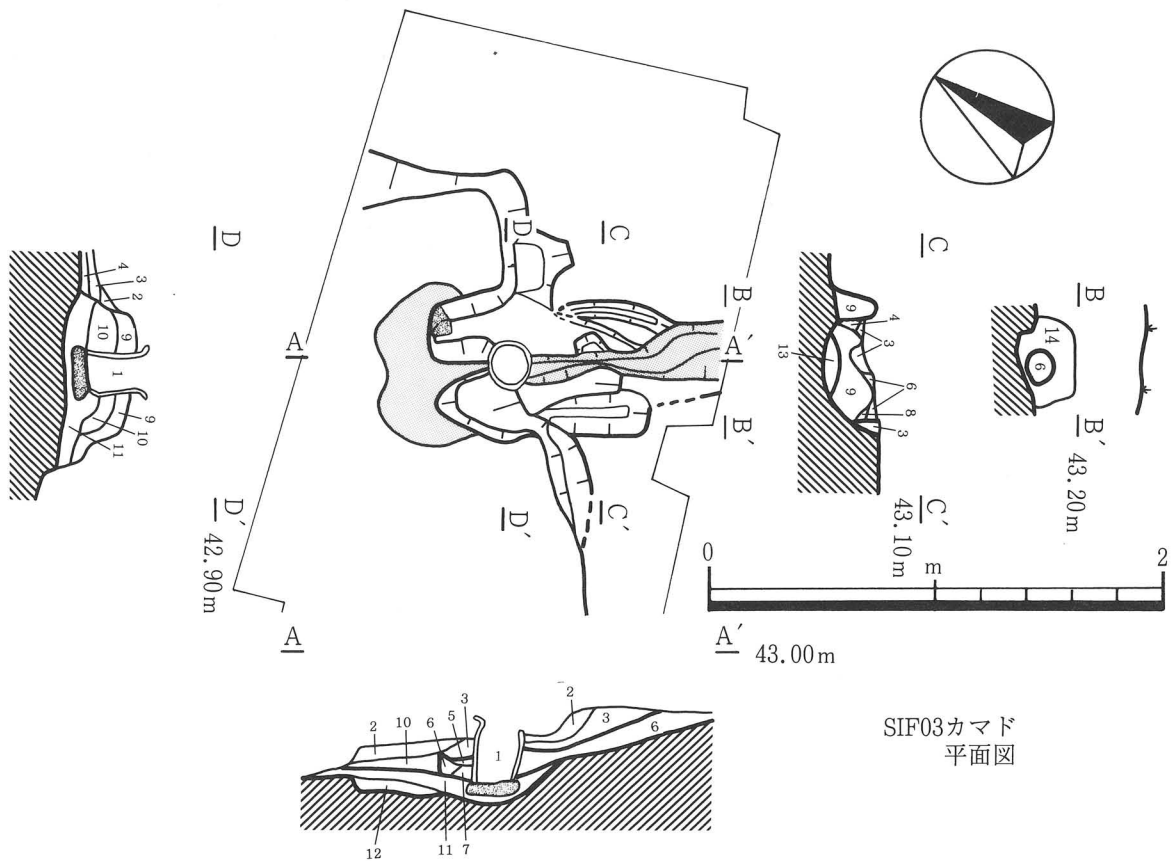
SIF01
カマド平面図



SIF02
カマド平面図



図Ⅱ－４ カマド平面図



SIF03カマド
平面図

近・現代の遺構である可能性が高い。1 m掘り下げた部分で礫が多数廃棄された状態を呈していた。なおSI01・03及びSX10・11を切っているため、各遺構の規模が明確に把握できなくなっている。これらは将来の調査時に判断することとする。

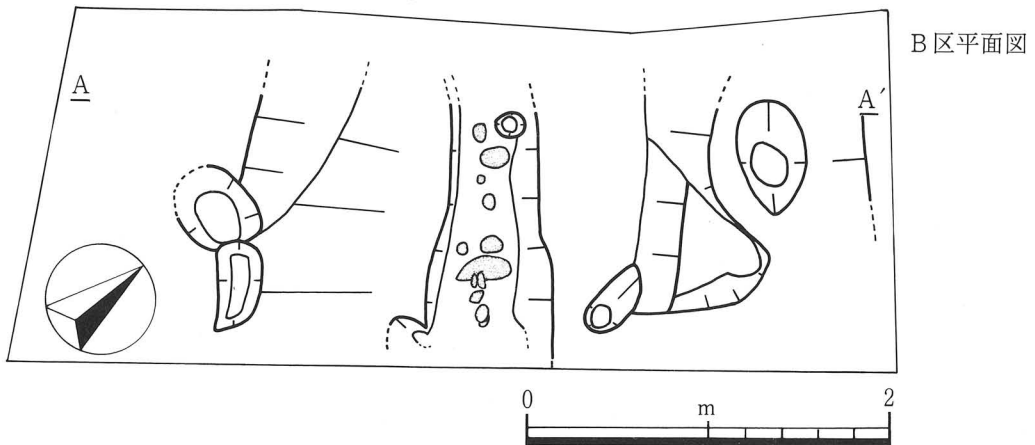
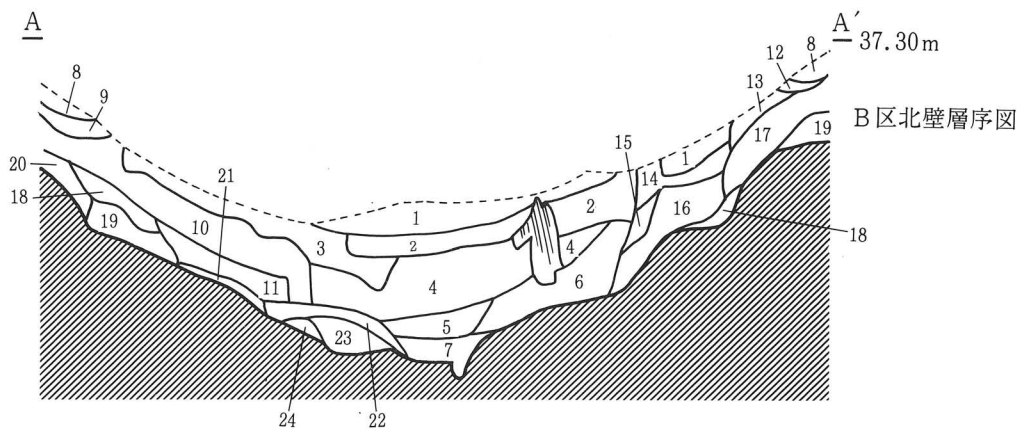
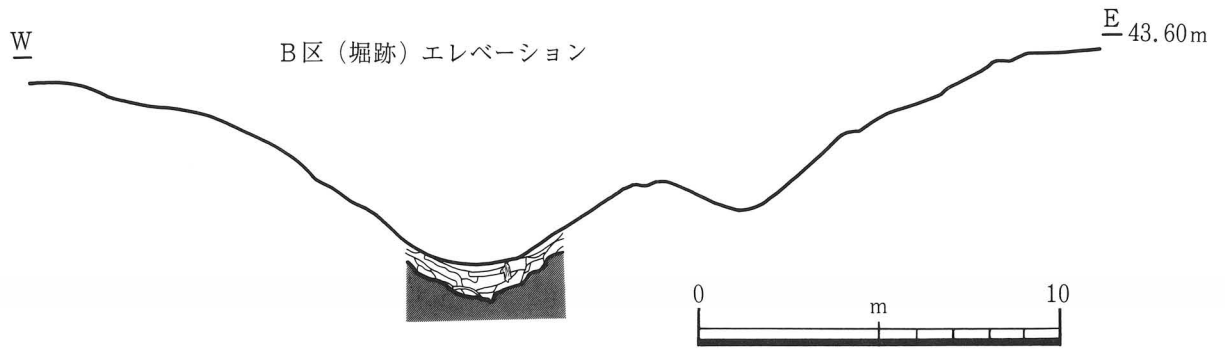
竪穴住居跡

SI01（写真Ⅱ－２） 幅（230cm）で南側にカマド（図Ⅱ－３）を有する。遺構範囲は、巡らされた壁周溝をたどって推定した範囲である。カマドはソデ及び天井の芯材に石を用い、遺構壁に沿って煙道を急角度で立ち上げる形態となる。土層観察からはSI02（旧）、SE02（新）となる。

SI02（写真Ⅱ－２） 規模は不明である。カマド（図Ⅱ－３）を東側に設置したもので、カマドのソデ芯材として用いた石が一部残存している。遺構からは、土師器甕・坏等が出土している。また、木質部の残る鉄製品が出土しているが、断面の形状からは錐状の製品であったことが推測される。

SI03（写真Ⅱ－２） 規模不明。カマド（図Ⅱ－４）は南東方向に設けられている。粘性土の煙道は長く延び、立ち上がりは調査区外に位置するようである。カマドには石を支脚替わりに、

図II-5 浪岡城跡新館地区B区実測図



土師器甕が掛けられたままであり、煙道の一部も保存されていた。煙道内には、造作の際に型枠状に用いたものと思われる炭化した木材が残されていた。カマドのソデ及び天井はつぶれており原形は留めていない。SX10・11に切られているため、遺構の形態についても不明である。

性格不明遺構

SX01 (写真Ⅱ-1) 遺構確認面で検出した直径60cm程度の灰の集積層である。表の53層が対応し、一層のみの遺構となった。

SX02 (写真Ⅱ-1) A区南側の調査区際から検出した遺構で、形態・規模及び時代は判別できない。

SX03 (写真Ⅱ-1) SX02とSE01を結ぶ不定形の遺構で、柱穴とも重複しているため全体の形態もよくわからない。

SX04 (写真Ⅱ-1) 長径100cm、短径75cm、深さ20cmを測る楕円形の土坑で、時代不明。

SX05 遺構確認時に1辺110cmの方形プランを検出したが、掘り方及び床面は確認できなかった。図では、確認時の位置のみ表示している。表の36層が遺構に対応する。

SX08 (写真Ⅱ-1) A区南側の調査区際から検出した遺構で、形態・規模及び時代は判別できない。SX01・02(新)と重複する。

SX10 (写真Ⅱ-2) 土層観察の結果から設定した遺構である。南側の立ち上がりに遺構の壁の一部が残る。表の16～20層が遺構に対応すると思われる。SX11(旧)とSI03(旧)と重複している。中世の遺構と考えられる。

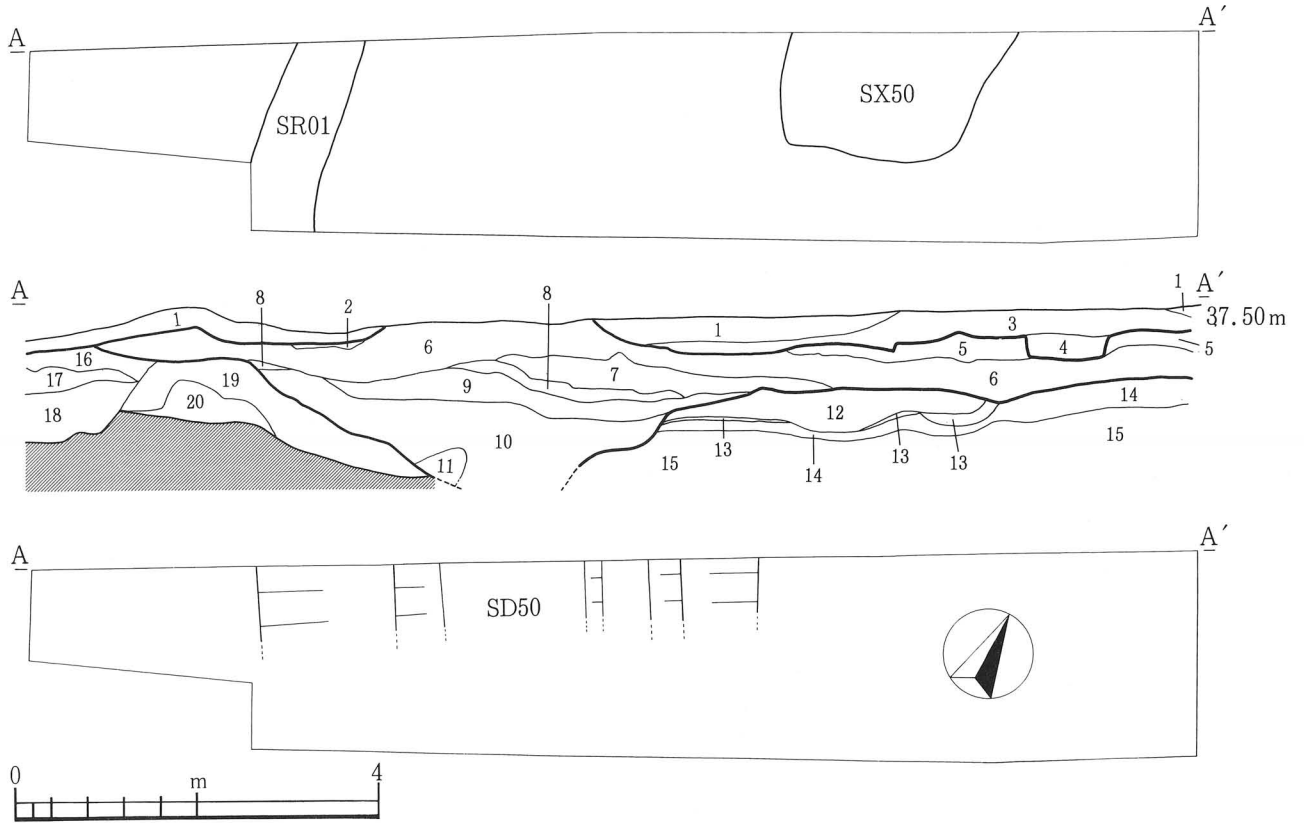
SX11 (写真Ⅱ-2) 壁周溝により確認した遺構で、東西に180cmほどを測る(推定)。土層層序からは31層が唯一この遺構の覆土となる。遺構は、SX10により床面まで切られていると思われる。このため、深さも明確ではない。

B区(図Ⅱ-5、写真Ⅱ-3、表Ⅱ-5) 新館地区(史跡指定地)東端の堀跡を調査した結果、覆土は表土から底面まで深さ80cm程度しかないことが判明した。表の22層は硬化した粘性土であり、幅50cmの沢状遺構が用いられていた時期があることも確認できたが、出土遺物が皆無に等しいため、遺構の存続年代を比定することはできない。ただし、表の3層からは現代のガラス瓶破片が出土しており、すべてが中世まで遡る遺構としては考えにくい。

C区(図Ⅱ-6、写真Ⅱ-3、表Ⅱ-6) 新館平場の東斜面下にあたる部分で、水性堆積様の層が厚く見られるが、浪岡川の氾濫原としては、近接の水田面よりも5mほど標高が高いこと、河岸段丘上から流れる沢も見当たらないことから、水性堆積とは認めにくい。全体としては人為的な埋め戻しと考えるのが妥当であろう。

SR01 表の2層にあたるもので、前述の道路表層である。近・現代磁器とともに二次焼成を

図Ⅱ-6 浪岡城跡新館地区C区平面図



受けた16世紀後半の染付皿（図Ⅱ-7の4）が出土している。しかし、遺構の形成及び利用は共に近代以降と思われる。

SD50 表の10層を底層とする遺構である。溝跡の扱いをしたが、トレンチ調査であるため、全形・規模共に不明である。出土遺物は数点の土師器のみであり、時代も不明である。

SX50 表の1層が遺構の覆土となる。現代のブリキ板や缶・ガラス等が出土する性格不明遺構で、第二次大戦後もC区部分を利用していたことがわかる。地権者からは、畑として利用していたことがあるとご教示いただいた。

表Ⅱ-1 (図Ⅱ-2 浪岡城跡新館地区A区土層注記)

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) に、小塊～大塊状の小石を3%含む。ビニールなどを含む耕作土層。しまり・湿性・粘性なし。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) に、小石を小粒～中粒状に10%含む。しまり中。粘性なし。湿性あり。
- 3層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を極小粒状に10%含む。中塊～大塊状の小石を5%、褐灰色砂 (10YR4/1) を7%含む。しまり・湿性・粘性中。1～2cmの材状の炭化物を2%含む。
- 4層 黒色土 (7.5YR2/1) に、黄褐色砂質土 (10YR5/8) を極小粒状に1%含む。にぶい黄橙色粘性土 (10YR6/3) を極小粒～大粒状に1%含む。明赤褐色砂質土 (5YR5/8) を極小粒状に1%含む。
- 5層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、明褐色砂質土 (7.5YR5/6) を極小粒～小粒状に2%、灰白色パミス (10YR7/1) を極小粒状に1%含む。炭化物を極小粒状に1%含む。
- 6層 黒色土 (10YR1.7/1) に、暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒～大塊状に10%含む。
- 7層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒状に7%、灰白色パミス (10YR7/1) を極小粒状に1%、炭化物を極小粒状に3%含む。
- 8層 黒色土 (10YR1.7/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒～大粒状に5%、黒褐色砂質土 (10YR2/2) を極小粒状に20%含む。炭化物を極小粒状に3%含む。

- 9層 黒色土 (10YR2/1) に、浅黄橙色砂質土 (7.5YR8/6) を極小粒状に1%、明赤褐色砂質土 (5YR5/8) を極小粒状に1%含む。
- 10層 硬化面 (三和土。平安時代の住居址床面か?) 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR5/8) を極小粒状に10%含む。層上部に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/3) をごく厚い板状に含む。しまり強い。
- 11層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR5/8) を極小粒状に1%、灰白色パミス (10YR7/1) を極小粒状に1%含む。
- 12層 暗褐色土 (10YR3/3) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%、灰白色パミス (10YR7/1) を極小粒状に1%含む。
- 13層 黒色土 (7.5YR2/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に10%含む。しまり弱。
- 14層 黒褐色土 (10YR2/2) に、黄褐色砂質土 (10YR5/8) を極小粒～中塊状に25%含む。しまり弱。
- 15層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～小粒状に20%、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%含む。
- 16層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～極大粒状に7%、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に3%、橙色焼土 (5YR6/8) を極小粒状に1%含む。
- 17層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～小粒状に2%、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%含む。
- 18層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～小粒状に3%、黒色灰 (N1.5/0) 及び炭化物を極小粒～大粒状に3%、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%含む。しまり弱。
- 19層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒状に2%、にぶい黄橙色粘性土 (10YR7/2) を小粒状に1%、褐色砂質土 (7.5YR4/6) を極小粒～小粒状に15%含む。
- 20層 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) を極小粒～小粒状に20%、炭化物を極小粒状に5%、褐色砂質土 (7.5YR4/6) を極小粒状に1%含む。しまり弱。
- 21層 黒褐色土 (10YR3/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～中粒状に30%、黒色粘性土 (10YR2/1) を中粒状に1%、小石を中粒状に5%含む。しまり中。粘性・湿性あり。
- 22層 黒色土 (10YR2/1) に、浅黄橙色粘土 (10YR8/4) を中粒状に3%含む。灰黄褐色軽石 (10YR6/2) を小塊状に1%、小石を小粒状に3%含む。しまり中。湿性・粘性あり。
- 23層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/4) を極小粒状に3%含む。
- 24層 黒色土 (7.5YR2/1) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒～小粒状に2%、褐色砂質土 (7.5YR4/6) を極小粒状に1%含む。
- 25層 黒色土 (N2/0) に、暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒～大粒状に10%含む。
- 26層 にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) と黒褐色土 (7.5YR3/1) との5:5の混層。
- 27層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、明褐色土 (7.5YR5/8) を極小粒状に1%、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) を極小粒状に1%含む。
- 28層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を極小粒～大塊状に10%、赤褐色焼土 (5YR4/8) を極小粒状に1%含む。
- 29層 黒色土 (10YR1.7/1) に、橙色砂質土 (7.5YR6/8) を極小粒状に1%、炭化物を極小粒～小粒状に1%含む。
- 30層 暗褐色土 (10YR3/3) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に3%含む。
- 31層 黒褐色土 (10Y3/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を小粒状に10%、赤褐色土 (5YR4/6) を小粒状に1%、炭化物を中粒状に1%含む。しまり強。粘性・湿性中。(SX11の壁溝の可能性あり)
- 32層 黒褐色土 (10YR2/2) に、直径5mm以下の小石を5%含む。1層よりもしまり弱い。
- 33層 黒色土 (10YR2/1) に、橙色土 (7.5YR6/8) を小粒状に1%、にぶい黄橙色粘土 (10YR6/4) を小粒状に10%、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に5%、小石を小粒～中粒状に10%、暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒状に10%含む。しまり中。粘性・湿性あり。
- 34層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を中粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。
- 35層 暗褐色土 (10YR3/3) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に50%、黄橙色粘性土 (10YR7/8) を中粒状に10%含む。しまり中。粘性弱。湿性あり。
- 36層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、小石が小粒状に3%、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に1%含む。粘性中～強。しまり・湿性中。
- 37層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に10%含む。しまり・粘性・湿性中。
- 38層 黒色土 (10YR2/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に10%、灰黄褐色粘土 (10YR6/2) を小粒状に5%、橙色粘土 (7.5YR7/6) を小粒状に5%、灰白色軽石 (7.5YR8/2) を中粒状に3%含む。粘性・湿性あり。しまり中。
- 39層 黒褐色土 (10YR2/3) に、橙色粘土 (7.5YR7/6) を極小粒状に5%、灰白色軽石 (7.5YR8/2) を極小粒～小粒状に5%、褐色砂質土 (10YR4/6) を中粒状に3%、黒色粘性土 (10YR2/1) を小塊状に10%、小石を中粒状に7%含む。粘性中。しまり極めて強。湿性あり。
- 40層 黒褐色土 (10YR3/1) に、黒褐色土 (7.5YR3/2) を極小粒状に20%、にぶい黄橙色粘土 (10YR6/3) を極小粒状に3%、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に3%、小石を中粒状に5%含む。しまり中。粘性・

湿性あり。

41層 黒褐色土 (10YR3/1) に、黒褐色砂質土 (10YR2/3) を極小粒状に20%、黒色土 (10YR2/1) を中塊状に10%、褐色砂質土 (10YR4/6) を小粒状に3%、小石を中粒状に5%含む。しまり中。粘性・湿性あり。

42層 黒褐色土 (5YR3/1) に、にぶい黄橙色粘土 (10YR6/3) を小塊状に10%、褐色砂質土 (10YR4/6) を小塊状に10%含む。褐色粘性土 (10YR4/4) が層の下部に薄く堆積する。

43層 黒褐色土 (10YR2/3) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) を中塊～大塊状に20%、褐色土 (10YR4/4) を中粒状に5%、暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒状に3%、小石を中粒状に5%、炭化物を細かい材状に1%含む。層下部に黒色土 (10YR2/1) が厚さ1cmの薄い板状に堆積する。貼り床構造。

44層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を小粒状に10%、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に20%含む。しまり中。粘性・湿性あり。

45層 黒褐色土 (10YR2/3) に、褐色粘性土 (10YR4/4) を小粒状に15%、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～小粒状に5%、褐色砂質土 (10YR4/1) を極小粒状に10%、黄橙色軽石 (10YR7/8) を小粒～中粒状に4%含む。粘性・湿性あり。しまり中。

46層 黒褐色土 (10YR3/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～中粒状に30%、黒色粘性土 (10YR2/1) を中粒状に1%、小石を中粒状に1%含む。しまり中。粘性・湿性あり。

47層 黒褐色土 (10YR3/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～中粒状に10%、炭化物を材状に1%含む。しまり・粘性弱。湿性あり。

48層 暗褐色土 (10YR3/3) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に40%、黄橙色軽石 (10YR7/8) を3%含む。しまり・粘性弱。湿性あり。

49層 暗褐色土 (10YR3/3) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に50%、黄橙色粘性土 (10YR7/8) を中粒状に10%含む。しまり中。粘性弱。湿性あり。

50層 褐色砂質土 (10YR4/6) に、黒色土 (10YR2/1) を中塊～大塊状に30%、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を薄い皿状に5%、炭化物を細かい材状に1%含む。しまり中～強。粘性なし。湿性あり。地山の積み返しに伴う層と考えられる。(カマド：SIF02袖最下層に対応する。灰の粒子が小粒状に1%含まれる)

51層 黒褐色土 (10YR2/2) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～中粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

52層 黒褐色土 (10YR2/2) に、暗褐色土 (10YR3/3) を小塊状に15%、橙色粘性土 (5YR7/8) を小塊状に3%、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に3%、小石を小粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

53層 黒褐色土 (10YR2/2) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒～中粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

54層 黒色土 (10YR1.7/1) に、小石を小粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

55層 黒褐色土 (10YR2/1) に、黒褐色砂質土 (10YR2/3) を中粒状に20%含む。しまり中～強。粘性中。湿性あり。

56層 黒褐色土 (10YR3/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒状に7%、明褐色パミス (7.5YR7/2) を極小粒状に1%、炭化物を小粒～中粒の材状に3%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

57層 黒色土 (10YR2/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒状に10%、薄い層状に、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を極小粒状に5%含む。暗灰色 (N3/0) を小塊状に10%、小石を小粒～中粒状に5%含む。また、層の下部2.0cmに板状に灰混層が堆積する。しまり・粘性中。湿性あり。

58層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (10YR3/2) を極小粒状に30%、小石を小粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

59層 極暗褐色土 (7.5YR2/3) に、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に5%、黒色土 (7.5YR2/1) を極小粒状に3%含む。しまり・粘性・湿性中。

60層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (10YR2/2) を極小粒状に10%、小石を小粒状に10%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

61層 黒色土 (7.5YR2/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に30%、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に3%含む。しまり・粘性・湿性中。

62層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (10YR2/2) を極小粒状に10%、小石を小粒状に10%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

63層 黒色土 (10YR2/1) に、暗褐色土 (10YR3/3) を極小粒状に30%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

64層 黒色土 (10YR2/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒～小粒状に15%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

65層 黒色土 (10YR2/1) に、灰黄褐色土 (10YR4/2) を極小粒状に10%、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒状に20%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

66層 灰黄褐色土 (10YR4/2) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒状に40%含む。しまり・粘性・湿性あり。

67層 黒褐色土 (10YR2/2) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒～小粒状に7%、灰黄褐色土 (10YR4/2) を極小粒状に5%含む。しまり・粘性中。湿性あり。

68層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小～小粒状に10%含む。しまり・粘性中。

- 69層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (7.5YR2/2) を極小粒状に7%、明緑灰色軽石 (10GY7/1) を小粒～中粒状に1%含む。しまりやや強。粘性・湿性中。
- 70層 黒褐色土 (7.5YR2/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に10%、暗褐色土 (10YR3/4) を極小粒状に5%、明緑灰軽石 (10GY7/1) を小粒状に1%、小石を中粒状に2%含む。しまり強。粘性・湿性中。
- 71層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (7.5YR2/2) を極小粒状に7%、明緑灰色軽石 (10GY7/1) を小粒～中粒状に7%含む。しまりやや強。粘性・湿性中。
- 72層 黒褐色土 (7.5YR2/1) に、褐色砂質土 (10YR4/6) を極小粒状に10%、明緑灰軽石 (10GY7/1) を小粒状に1%、小石を中粒状に2%含む。しまり強。粘性・湿性中。
- 73層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒～小粒状に30%、暗褐色土 (7.5YR3/3) を極小粒状に10%含む。しまりあり。粘性・湿性中。
- 74層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒～小粒状に10%含む。粘性なし。湿性・しまり中。
- 75層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/3) を極小粒～小粒状に10%含む。粘性なし。湿性・しまり中。
- 76層 褐色砂質土 (7.5YR4/3) の単層。
- 77層 黒色土 (7.5YR2/1) に、小石を極小粒～小粒状に5%、褐色砂 (7.5YR4/3) を極小粒状に5%、炭化物を長さ極小～2.0cm程度の材状に7%含む。しまりなし。湿性・粘性中。
- 78層 黒褐色土 (10YR2/2) に、小粒～中粒状の礫を下層に2%、小粒状の炭化物をも含む。湿性・粘性なし。
- 79層 黒色土 (7.5YR2/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/4) を極小粒～小粒状に1%含む。明褐灰色パミス (7.5YR7/2) を極小粒状に1%含む。
- 80層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を20%、中塊～大塊状の小石を10%含む。明褐灰色パミス (7.5YR7/2) を極小粒状に3%含む。
- 81層 褐灰色砂 (10YR4/1) を10%、炭化物を中～大の材状に2%含む。
- 82層 黒褐色土 (7.5YR3/1) に、明褐灰色パミス (7.5YR7/2) を15%、褐灰色砂 (10YR4/1) を30%薄い層状に含む。炭化物を小粒状に1%、小塊～中塊状の小石を15%含む。しまり中。粘性なし。湿性あり。
- 83層 黒色土 (7.5YR2/1) に、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を5%含む。褐灰色砂 (10YR4/1) を3%含む。小塊～中塊状の小石を3%含む。しまり・粘性・湿性中。
- 84層 黒色土 (7.5YR2/1) に、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を10%、明褐灰色パミス (7.5YR7/2) を小粒状に4%、褐灰色砂 (10YR4/1) を10%、小塊～中塊状の小石を7%、炭化物を長さ3～5mmの材状に3%含む。
- 85層 黒褐色土 (10YR3/1) に、灰 (5Y5/1) を3%薄い層状に含む。小石を小塊～中塊状に5%、明褐色砂 (7.5YR5/6) を1%極小粒状に含む。しまり・湿性・粘性中。
- 86層 黒色土 (7.5YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～小粒状に2%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に1%含む。直径2mm以下の砂粒を3%含む。しまり中。
- 87層 黒色土 (10YR1.7/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%含む。しまり中。
- 88層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒～小粒状に1%、直径4mm以下の砂粒を2%含む。
- 89層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%、直径3mm以下の砂粒を5%含む。しまり強。
- 90層 黒色土 (7.5YR2/1) に、明褐灰色パミス (7.5YR7/2) を小粒状に1%、にぶい赤褐色土 (5YR4/4) を小粒状に20%、灰 (5Y5/1) を薄い層状に5%、小粒～中粒状の小石を10%含む。しまり・湿性・粘性中。
- 91層 黒色土 (7.5YR2/1) に、灰 (5Y5/1) を小ブロック状に15%含む。褐灰色砂 (10YR4/1) を20%含む。中粒～大粒状の小石を10%、炭化物を材状に5%含む。しまり・湿性・粘性中。
- 92層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に1%含む。しまり弱。
- 93層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に15%含む。
- 94層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に4%、灰白色パミス (10YR8/2) を極小粒状に10%、炭化物を極小粒～大粒状に5%含む。しまり中。
- 95層 黒色土 (7.5YR2/1) と明黄褐色砂質土 (10YR6/6) との5:5の混層。しまりなし。
- 96層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～小粒状に2%、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) 極小粒状に1%含む。直径2mm以下の砂粒を3%含む。しまり中。

表Ⅱ-2 (図Ⅱ-3 SIF01カマド土層注記)

- 1層 黒褐色土 (10YR2/3) に、にぶい黄橙色パミス (10YR6/4) を極小粒～中粒状に6%含む。
- 2層 にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) に、にぶい黄橙色パミス (10YR6/4、もしくは10YR7/4) を極小粒～小粒状に15%、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒～中粒状に2%含む。炭化物を極小粒状に3%含む。
- 3層 黒褐色砂質土 (10YR3/2) (焼けているかも) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/3) を小粒～中粒状に30%含む。

- 4層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を小粒状に1%含む。
- 5層 暗褐色土 (10YR3/4) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) を極小粒状に5%、暗褐色灰 (10YR3/3) を極小粒状に5%含む。灰を含む。
- 6層 にぶい黄橙色粘性土 (10YR6/4) に、にぶい黄橙色パミス (10YR7/4) を極小粒～小粒状に10%含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を小粒状に1%含む。
- 8層 黒褐色砂質土 (10YR3/2) (焼けているかも) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/3) を小粒～中粒状に30%含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) を小粒状に1%含む。
- 10層 黒褐色砂質土 (10YR3/2) (焼けているかも) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/3) を小粒～中粒状に30%含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) を極小粒状に5%、にぶい褐色粘性土 (7.5YR5/4) を極小粒～中粒状に10%含む。
- 12層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4) の単層。

表Ⅱ-3 (図Ⅱ-3 SIF02カマド土層注記)

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) を極小粒～小粒状10%、暗赤褐色焼土 (2.5YR3/6) を極小粒状に1%含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) を極小粒～小粒状に10%、にぶい黄橙色パミス (10YR6/4) を小粒状に3%、暗赤褐色焼土 (2.5YR3/6) を極粒状に1%含む。
- 3層 褐色粘性土 (7.5YR4/4) に、赤褐色粘性土 (5YR4/6) を極小粒～小粒状に10%、にぶい黄橙色パミス (10YR6/4) を極小粒状に3%含む。
- 4層 暗褐色粘性土 (10YR3/3) に、にぶい黄橙色パミス (10YR6/4) を極小粒～大粒状に15%、暗赤褐色焼土 (2.5YR3/6) を極小粒状に5%含む。
- 5層 暗褐色砂質土 (10YR3/3) に、暗赤褐色焼土 (2.5YR3/6) を極小粒～中塊状に25%含む。炭化物を極小粒～大粒状に15%含む。
- 6層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) と暗赤褐色焼土 (2.5YR3/6) を極小粒状にそれぞれ1%含む。
- 7層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR4/3) とにぶい黄橙色パミス (10YR6/4) をそれぞれ極小粒状に1%含む。
- 8層 黒褐色粘性土 (10YR2/3) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に5%、炭化物を極小粒状に3%含む。
- 9層 暗褐色土 (10YR3/3) に、褐色粘性土 (7.5YR4/4) を極小粒状に3%含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/3) に、明褐色砂質土 (7.5YR5/6) を極小粒～小粒状に3%、炭化物を極小粒～小粒状に5%含む。しまり弱い。
- 11層 SI03の最下層と同一。褐色砂質土 (10YR4/6) ベースの層か？

表Ⅱ-4 (図Ⅱ-4 SIF03カマド土層注記)

- 1層 黒色土 (10YR1.7/1) に、褐色砂質土 (7.5YR4/4) を極小粒状に2%含む。灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) を小粒状に1%含む。小石を中粒状に5%含む。しまり弱。粘性・湿性中。
- 2層 黒色土 (10YR1.7/1) に、にぶい黄褐色粘性土 (10YR5/4) を極小粒～中粒状に3%、2mm以下の炭化物を1%含む。
- 3層 褐色砂質土 (7.5YR4/4) の単層 (カマド天井か?)。
- 4層 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) の単層。
- 5層 黒褐色砂質土 (10YR2/3) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒～大粒状に15%含む。
- 6層 黒褐色砂質土 (10YR2/3) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒状に1%含む。
- 7層 黒褐色土 (10YR2/2) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒～大塊状に35%含む。
- 8層 暗褐色土 (10YR3/4) の単層。カマド袖の一部か？
- 9層 暗褐色粘性土 (10YR3/3) に、赤褐色焼土 (5YR4/6) を小粒～中粒状に1%含む。炭化物を細かい材状に1%、3～4cm長の大きい材状に5%含む。粘性やや強い。湿性・しまり中。
- 10層 赤褐色焼土 (2.5YR4/6) に、炭化物を細かい材状に20%含む。しまり中。粘性強。湿性中。
- 11層 黒色土 (7.5YR1.7/1) に、炭化物を極小粒～中塊状に10%、赤褐色焼土 (5YR4/6) を極小粒～中粒状に2%含む (黒色灰の含有が多い)。
- 12層 赤褐色焼土 (2.5YR4/6) に、炭化物を細かい材状に20%含む。しまり・湿性中。粘性強。
- 13層 黒褐色土 (7.5YR3/2) に、暗赤褐色焼土 (5YR4/4) を極小粒～小粒状に7%、褐色砂質土 (7.5YR4/4) を小粒状に5%含む。しまり・湿性中。粘性中～強。

表Ⅱ-5 (図Ⅱ-5 浪岡城新館地区B区土層注記)

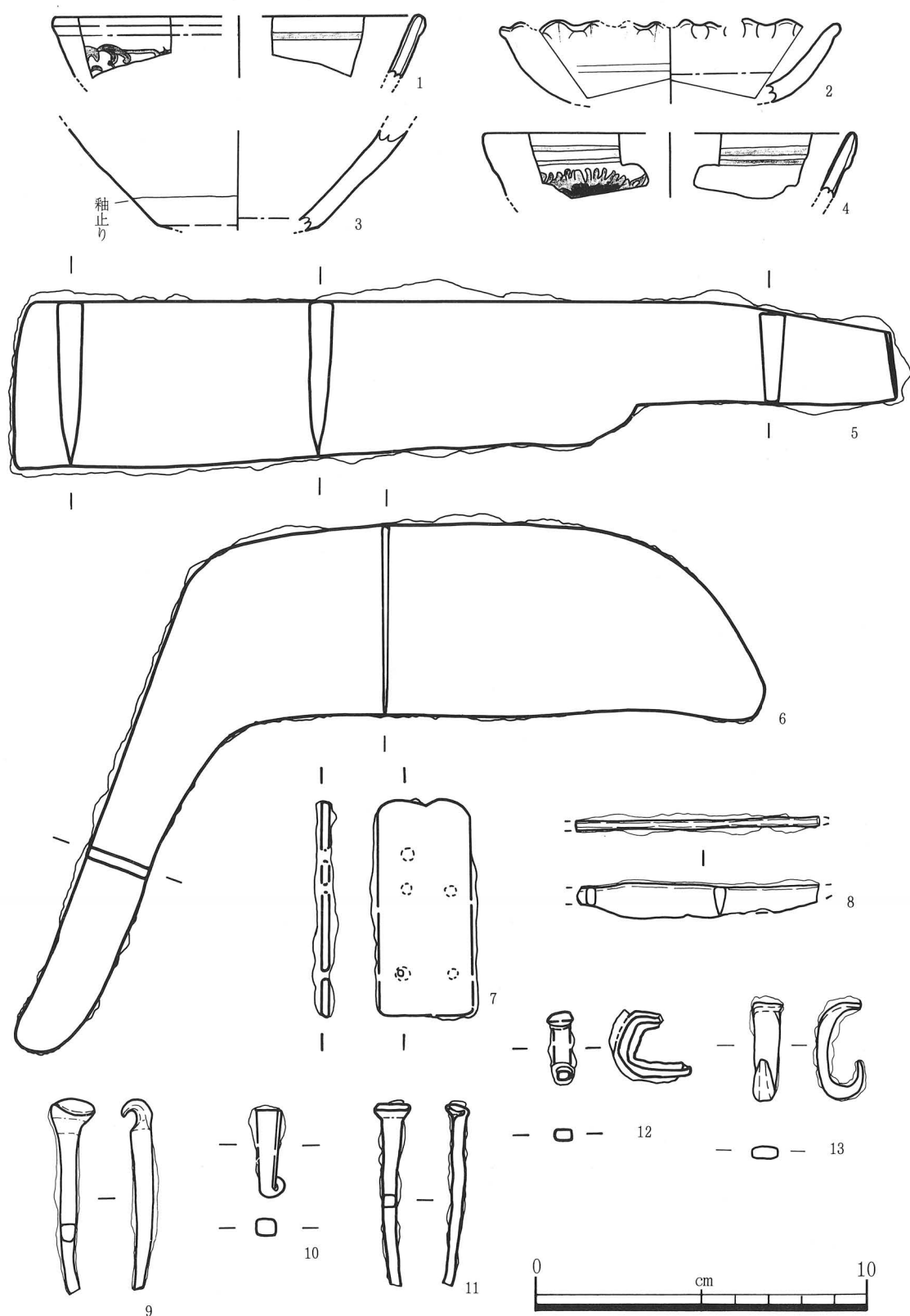
- 1層 黒褐色土 (10YR3/1) に、直径5mm以下の小石を5%含む。

- 2層 黒褐色土 (7.5YR2/2) の単層。直径5mm以下の小石を7%含む。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2) に、直径5mm以下の小石を5%含む。しまり弱。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2) に、直径15mm以下の小石を20%含む。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/2) に、直径5mm以下の小石を3%含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) の単層。
- 7層 黒褐色土 (10YR3/1) に、直径20mm以下の小石を30%含む。しまり強い。
- 8層 におい黄褐色砂質土 (10YR4/3) の単層。地山土の崩落か？
- 9層 黒褐色土 (10YR2/2) の単層。
- 10層 黒褐色土 (10YR3/2) に、におい黄橙色軽石 (10YR6/4) を小粒状に7%含む。
- 11層 黒褐色土 (10YR2/2) に、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒～極大粒状に7%含む。
- 12層 黒褐色土 (7.5YR2/2) の単層。
- 13層 暗褐色土 (10YR3/3) に、直径10mm以下の小石を5%含む。
- 14層 黒褐色土 (10YR3/2) に、直径5mm以下の小石を1%含む。
- 15層 暗褐色土 (10YR3/3) の単層。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/2) と、におい黄橙色砂質土 (10YR4/3) の5:5の混層。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/2) の単層。
- 18層 暗褐色砂質土 (10YR3/4) の単層。
- 19層 褐色砂質土 (10YR4/4) の単層。
- 20層 におい黄褐色砂質土 (10YR5/4) の単層。シラス。
- 21層 黒褐色土 (10YR3/2) と中粒状のにおい黄褐色土 (10YR5/4) の5:5の混層。
- 22層 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、直径5mm以下の小石を10%含む。しまり特に強。
- 23層 黒褐色土 (10YR3/2) に、直径20mm以下の小石を3%含む。しまり弱。
- 24層 暗褐色砂 (10YR2/3) の単層。

表Ⅱ-6 (図Ⅱ-6 浪岡城新館地区C区土層注記)

- 1層 黒褐色土 (7.5YR2/2) に、直径5mm以下の小石を15%含む。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) に、直径2.0cm以下の小石を40~50%含む。昭和初期に道路として用いていた層と思われる。しまり極めて強。
- 3層 黒褐色土 (10YR2/2) に、直径5mm以下の小石を5%含む。1層よりもしまり弱い。
- 4層 暗褐色砂質土 (10YR3/4) の単層。
- 5層 黒褐色砂質土 (10YR3/2) に、におい褐色粘性土 (7.5YR5/3) を極小粒～大塊状に10%、におい黄褐色シルト (10YR7/4) を極小粒～大粒状に5%、におい褐色シルト質粘土 (7.5YR5/4) を極小粒～小粒状に5%含む。
- 6層 黒褐色土 (10YR3/2) に、直径2.0cm以下の小石を2%含む。
- 7層 暗褐色土 (10YR3/3) に、におい褐色粘性土 (7.5YR5/3) を極小粒状に2%含む。直径5mm以下の小石を2%含む。
- 8層 におい黄褐色砂 (10YR4/3) に、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒～小粒状に5%含む。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2) に、におい黄褐色砂 (10YR4/3) を極小塊状に5%、直径5mm以下の小石を1%含む。
- 10層 黒褐色土 (10YR2/2) に、におい黄褐色砂 (10YR4/3) が極めて厚い板状に堆積している (互層状態になっている)。
- 11層 褐色砂 (10YR4/4) の単層。
- 12層 黒色土 (10YR2/1) に、におい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～極大粒状に2%、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒状に1%含む。
- 13層 黒褐色砂 (10YR3/2) の単層。
- 14層 黒色土 (10YR2/1) に、におい黄橙色パミス (10YR7/3) を極小粒～極大粒状に2%、黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒状に1%含む。
- 15層 黒色土 (10YR2/1) に、におい黄褐色シルト (10YR7/4) を極小粒～大塊状に10%、におい褐色粘性土 (7.5YR5/3) を極小粒～中塊状に5%、褐色砂 (10YR4/4) を小塊状に3%含む。シルトは一部で水成堆積状に互層となるが、明確な板状を形成していない。
- 16層 黒褐色土 (10YR3/2) に、暗褐色砂 (10YR3/3) を小塊状に3%、直径2.0cm以下の小石を1%含む。
- 17層 黒褐色土 (10YR3/2) に、暗褐色砂 (10YR3/3) をごく厚い板状に30%、直径5.0cm以下の小石を10%、におい褐色粘性土 (7.5YR5/3) を大塊状に2%、灰白色パミス (10YR8/2) を小粒状に1%含む。しまり強い。
- 18層 黒色砂 (10YR1.7/1) と褐色砂 (10YR4/4) がごく厚い板状に堆積する (互層状態である)。直径3.0cm以下の小石を30%、黄色砂質土 (10YR5/6) を小粒状に10%含む。しまり強い。
- 19層 黒褐色土 (10YR3/2) に、暗褐色砂 (10YR3/3) を小塊状に3%、直径2.0cm以下の小石を1%含む。
- 20層 黒褐色砂 (10YR4/4) の単層。

図II-7 出土陶磁器・鉄製品実測図



第4章 出土遺物（写真Ⅱ－4）

陶磁器（図Ⅱ－7） SE01から染付け皿口縁部（1）、美濃瀬戸菊皿口縁部（2）、美濃瀬戸褐釉碗胴部（3）が出土している。また、C区のSR01からは、染付皿口縁部（4）が出土している。染付皿は、内湾する小皿の口縁部であるが、小片であるため口径は推定できない。内外面に回線を巡らし、外面胴部に花卉文状の文様が描かれている。美濃瀬戸菊皿は、口縁部外反する灰釉小皿の口縁部を、外面からヘラ状の工具で内側に押し込み菊花状の口縁形態にしているものである。美濃瀬戸褐釉碗はいわゆる天目茶碗の胴部片である。釉掛りは薄く外面腰部までかかる。この他には美濃瀬戸灰釉皿の見込み（印花付）等も出土している。全体としては、16世紀後半の遺物が主となる。

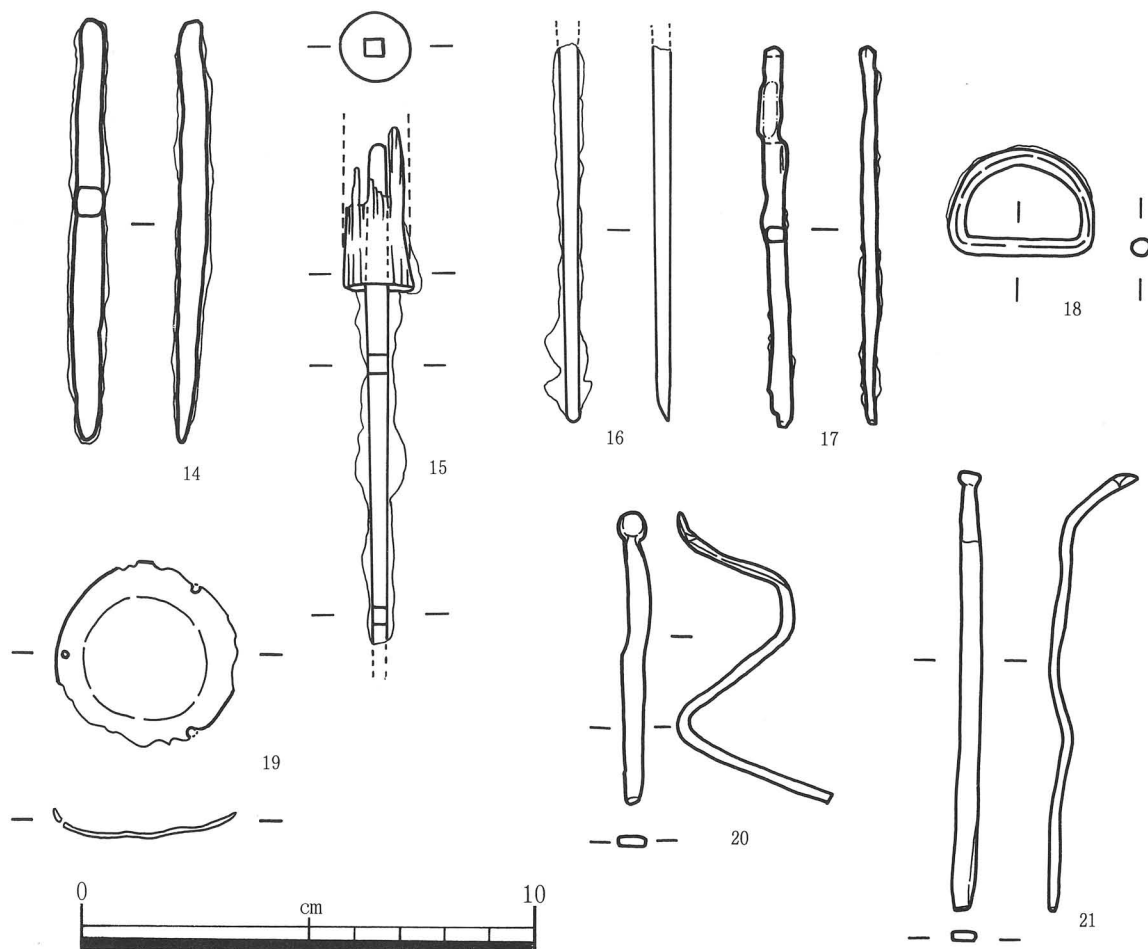
かわらけ（図Ⅱ－9） A区ST01から出土したもの（25）で、口径14cm×高さ4cmを測る。ロクロを用い成型・調整し、糸切底で厚手で内外面とも良好な調整を示している。12世紀後半のかわらけと思われる。

土師器（図Ⅱ－9） 甕、坏、内耳土器が出土している。甕は、SI03カマドに掛けていた長胴甕（22）で、口径21cm×高さ27cmを測る。外面は輪積み痕が明瞭に残り、口縁部がくの字状に外反する。外面の調整は部分的にヘラによる調整痕が残るが、内面は全面良好な調整が行われている。小型の甕（23）はSI02のカマドから出土したもので、口径15cm、残存高13cmを測る。薄手で内外面ともにロクロ目が残り、良好な調整を行っている。口縁部は、須恵器の口縁を模倣した形態を呈している。この甕と共伴する遺物が、内黒土師器（24）である。内黒土師器は口径12cm×高さ5.7cmを測り、内面の暗紋は、口縁から胴部まで横位の磨きを行い、その後に底部を数区画のブロックに分け中心から磨き上げている。内外面の口縁部付近に樹脂状の残存物が付着している。一部、筆や細い棒状のものを扱った様な痕跡にも見うけられる。羽黒平（1）遺跡出土の同様な遺物とともに内黒土師器の用途の一端が垣間見える。また、前述の甕（23）の器面に付着する状態で錐様の遺物も出土している。内耳土器（26）は耳部分のみの出土であり全形は不明である。なお、上部は土器の口唇部であることから口縁直下につけられた縦型の耳である。

土製品（図Ⅱ－9） 羽口（27）は端部破片のみの出土である。SX10からの出土と考えられ、中世の遺物の可能性がある。土玉状土製品（28）は長径3cm×短径2.5cm×厚さ1cmで中心に5mm径程度の穴を穿っている。SI03からの出土である。

鉄・銅製品（図Ⅱ－7・8） 中世の遺物と思われるものは、以下の遺物である。鉞（5）は、刃渡り17cm（全長27cm）、身幅5cm、厚さ8mmを測る。鎌（6）は、刃渡り15cm、身幅5.8cm、厚さ2mmを測る。鉞と鎌は共にST01から出土しており、出土時に交差させて安置したようにも見受けられることから、呪いを行ったことも考えられる。SE01から出土した小札（7）は伊予札と思われ、2列の穿孔と二山の頭部が見られる。刀子状の鉄製品（8）は切先と中心が

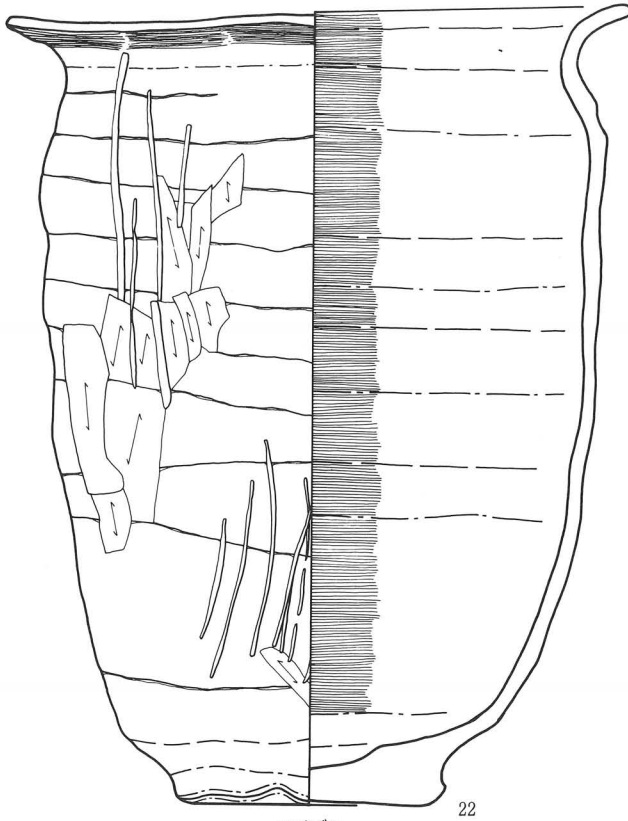
図Ⅱ-8 出土鉄・銅製品実測図



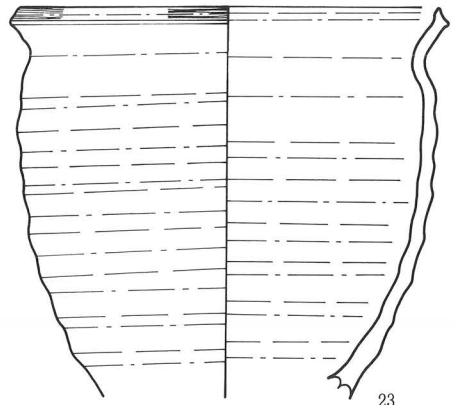
折れており刃部のみの出土となっている。釘（9～13）は、4.5～6 cm（1寸5分～2寸）の角釘でいずれも使用した痕跡が認められる。用途不明の鉄製品（14）はSE01からの出土で、長さ9.3cm太さ5 mmを測る。断面が四角形を呈するが、先端部が釘のように尖鋭になっておらず、やや扁平で鑿や鑿を思わせる遺物である。金具状のD字環は時期不明である。銅皿（19）は直径4 cmほどの皿で3箇所穴が穿たれている。浪岡城跡で過去に出土例があるものだが、今回は表土除去時に出土している。同様に、銅製の筭と思われる遺物（20・21）は表採及び表土除去時の出土である。9～10cmを測り、端部に耳搔きを持つもので、近世以降の筭かもしれない。古代の遺構に伴う出土遺物として、以下の遺物が出土した。錐状鉄製品（15）はSI02カマドから出土したもので、4 mm角の四角い断面に1.4cm程度の丸い柄のような木質部が残る。また、同遺構からは、不明鉄製品（16）も出土している。4 mm程度の四角形の断面を持ち、端部に片切刃状の刃部を有するもので、錐と同一固体ではなかった。鑿や鑿としては細いため用途を特定できない。SI03からも用途不明な棒状鉄製品（17）が出土している。

銭貨（写真Ⅱ-1、4） 銭貨は、A区の柱穴から8枚がまとまって出土したいずれもリング状の模鑄銭で、直径1.57～1.75cm、0.26～0.38 g程度のものである。SX10からの出土と思われる。また、SE01からは判読不能の銭貨破片が出土している（49）。

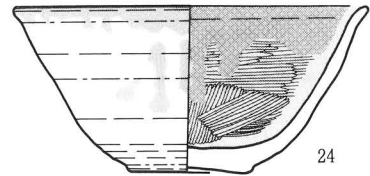
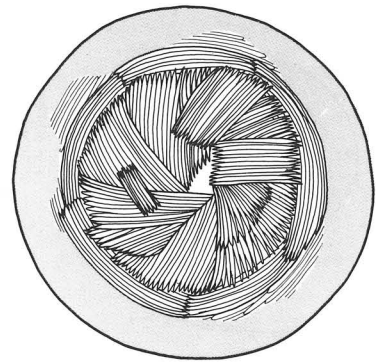
図Ⅱ-9 出土土師器等実測図



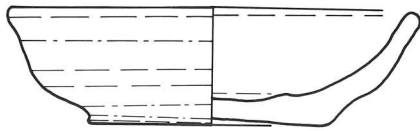
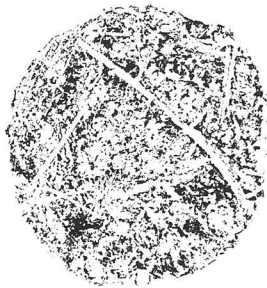
22



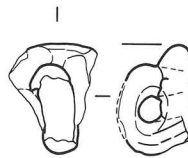
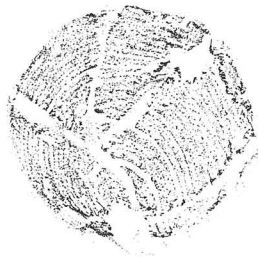
23



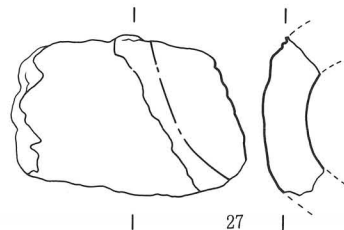
24



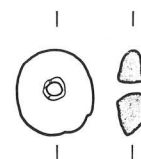
25



26



27



28

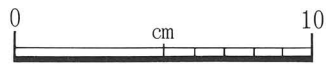
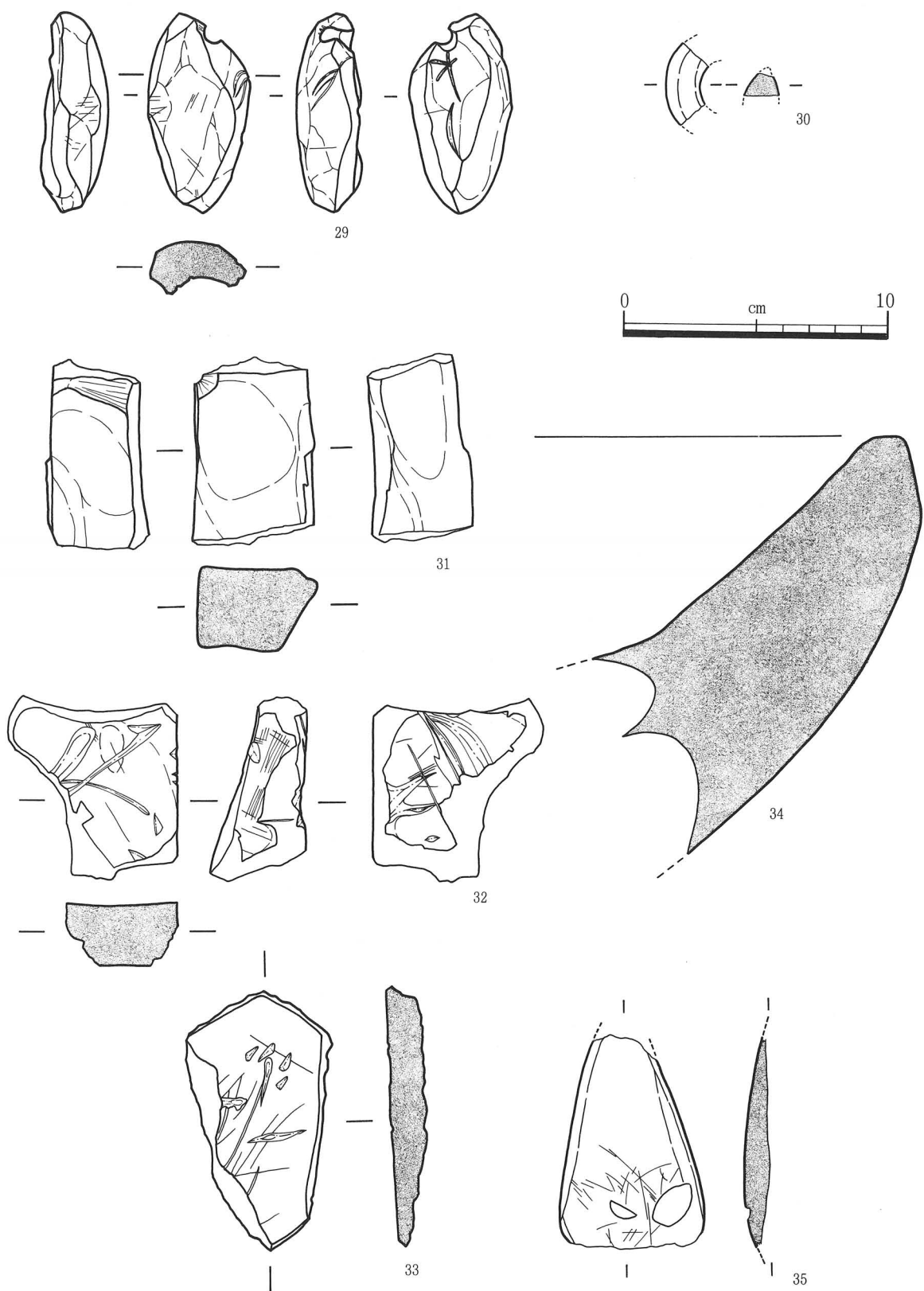


图 II-10 出土石製品実測図



石製品（図Ⅱ-10） 鋳形状の石製品（29）はSX10とSI03の境界部分から出土しており、時代判別が難しい。シルトの軟質な石を加工して、一部に湯口様の切り込みを作っている。同様の石質で、リング状の形態を呈していたと思われる破片（30）がある。これまでの浪岡城跡の発掘調査においてもこれらと同様の遺物が出土している。砥石（31）はSE01からの出土で、中世の遺物と思われる。（32、33）は表採及び2層からの出土砥石であるため、時代は不明である。石鉢（34）は口縁部の破片のみであり、全体の法量等は推定できない。表土除去時には縄文時代の磨製石斧（35）も出土した。

第5章 ま と め

今回の発掘調査では、当初想定していた中世城館としての浪岡城跡だけではなく、城館期以前、平安期集落としての浪岡城遺跡が広がることが判明した。中世に所以する遺構としては、井戸跡（SE01）及び竪穴建物跡（SX10、ST01）が考慮されるが、掘立柱建物跡は調査面積の狭小さから確認できなかった。一方、平安期の住居については、重複が著しいことと遺構の一部のみの調査となったことから、全容をつかみきれなかった。城館期以前の遺構については、これまでの浪岡城跡調査において、溝や土坑を主とする平安時代の遺構（遺物）を検出してきている。しかし、今回の調査では、13㎡程度のトレンチからカマドを持った住居跡を3棟検出するなど、平安時代の遺構が内館・北館よりも密に存在していることが考慮される結果となった。出土遺物からは、須恵器の口縁を模倣した小型甕や、底部径が小さく腰の張りの少ない坏（内黒土師器）が出土しているSI02が9世紀代の遺構で、SI01とSI03が10世紀代の遺構と思われる。SI01と03の時間的差はあまり顕著ではないが、須恵器の中～大甕が出土しているSI01よりも、皿型に近い口縁部の開いた土師器坏の出土するSI03が新しいと思われる。

次に、B・C区を通して新館東側の堀跡（史跡指定地境界線）をみると、二重堀状の形態を呈していることが現地形で確認できた。この遺構は昭和初期まで、西側（B区）は沢的な用途として、東側（C区）の堀状の部分は道路として用いていたものである。今回の調査で両者を調査することとなったが、両者共に現在まで調査した浪岡城跡の堀跡とは明らかに異質である。B区は覆土が80cm程度と極めて浅く、浪岡城跡における中世の遺構面として認識している、黒色土も有機質の腐食土層も検出できない。また、C区は埋め戻しによると思われる地山土混じりの土層が厚く堆積している。典型的な浪岡城跡の堀跡であれば、浪岡川と鷲谷堰を結ぶ形で傾斜の緩い堀底を持つ二重堀を呈すると思われるが、当該箇所については、斜面の傾斜を生かした沢状の堀となっている。他の主要部と異なる形態を呈する堀として見なすか否かは更なる調査が必要であるが、現状のような堀として存在したのであれば、内館・北館を巡る二重堀と異なり、形式としての堀、区画としての溝に近い意味合いも考慮すべきかも知れない。

発掘調査抄録

ふりがな	しせきなみおかじょうあとしんだてちくはくつちようさほうこくしょ							
書名	史跡浪岡城跡（新館地区）発掘調査報告書							
副書名								
巻次	X III							
シリーズ名	浪岡城跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第13集							
執筆者名	木村浩一							
編集機関	浪岡町教育委員会							
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 TEL 0172-62-1111							
発行年月日	西暦 2003年 3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浪岡城跡	浪岡町大字五本松 字松本	29	29020	40° 43′ 10″	140° 36′ 37″	約70m ²	6月25日 ～ 9月11日	農地改変
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			特記事項
浪岡城跡	中世城館	中世 平安	竪穴建物跡（平安）4棟 井戸跡（中世）1基 柱穴		土師器・須恵器、中世陶磁器、鉄製品、銭貨、その他 計 テンバコ約5箱			

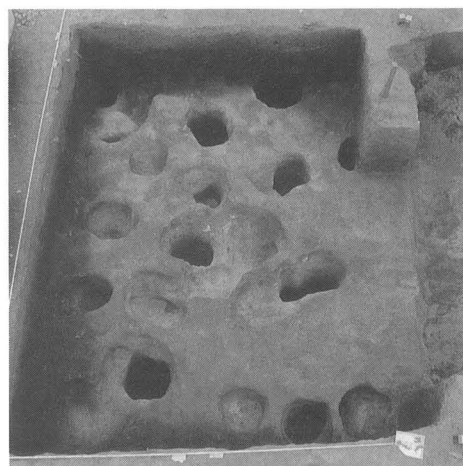
写真Ⅱ-1



浪岡城跡新館地区
A区調査前状況
(西から)



SE01, SX04完掘状況 (南から)



A区南東部柱穴群
(北から)



A区銭貨出土状況 (柱穴からの出土)



A区銅製皿出土状況

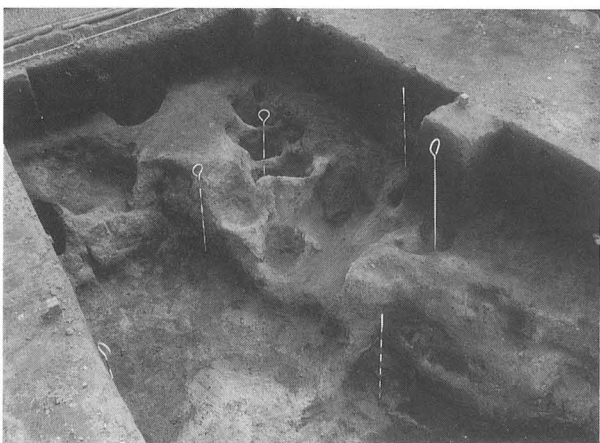
写真Ⅱ-2



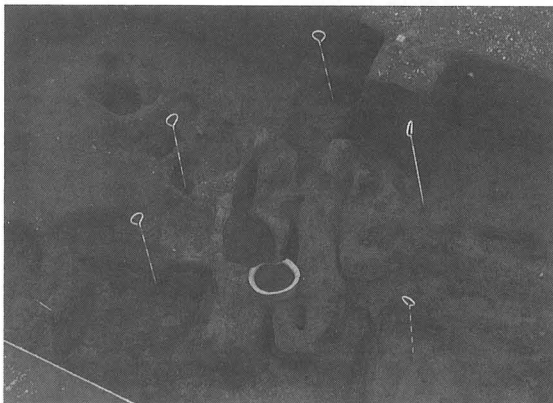
SI01完掘状況（西から）
SIF01（カマド）ソデ残し状況（北から）



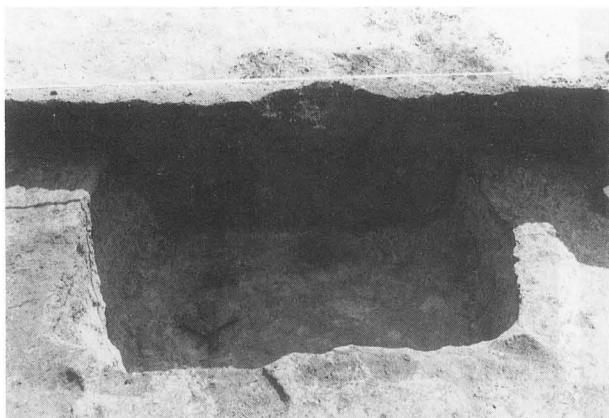
SI02完掘状況（北から）
SIF02（カマド）ソデ残し状況（北から）



SI03完掘状況（北西から）
SIF03（カマド）ソデ残し状況（北西から）



写真Ⅱ-3



左上 ; ST01、鎌・鉞出土状態
(北から)

上 ; 同、鎌・鉞出土状態

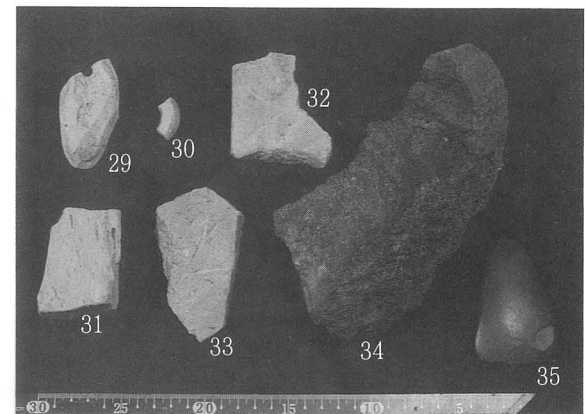
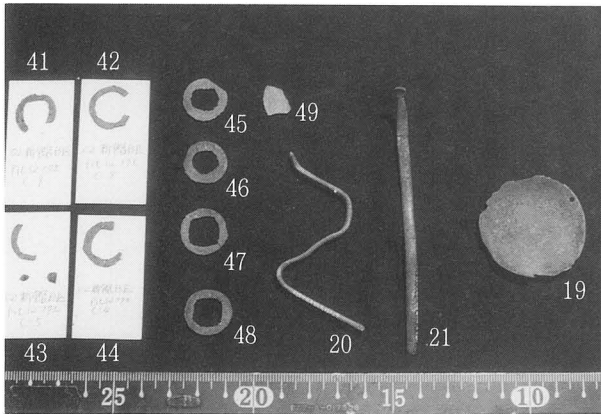
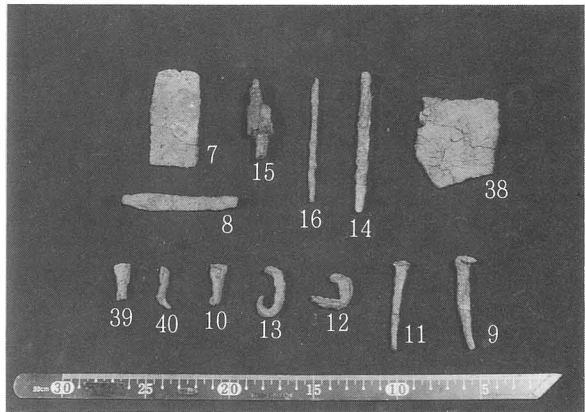
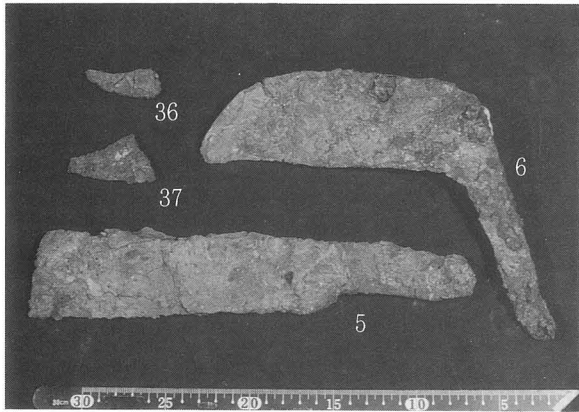
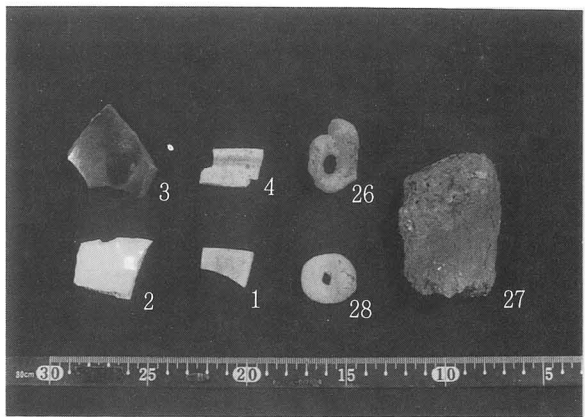
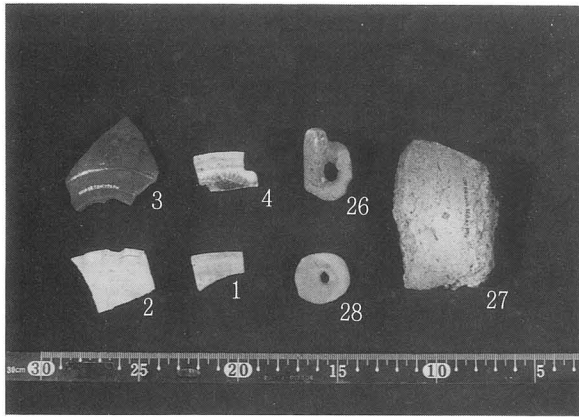
左 ; ST01完掘状況(北から)



C区調査状態(西から)

B区作業風景(西から)

写真Ⅱ-4 浪岡城跡新館地区出土遺物



浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第9集

中屋敷遺跡発掘調査報告書

第1章 調査に至る経緯

平成14年4月23日付け事務連絡で、町農政課長から生涯学習課長宛て「埋蔵文化財等の地域指定確認について」という照会文書が入る。内容は、平成14年度において、ふるさと農道緊急整備事業（起債）で吉内地区の農道改良舗装工事を実施するというもので、総延長840mであり、7月から工事に入りたい由の文書であった。これ以前すでに事務担当からの照会をうけて現地踏査をしていたところであり、4月24日付けで下記の回答文書を示した。

事務連絡

平成14年4月24日

農政課長 殿

生涯学習課長（印省略）

埋蔵文化財の地域指定の確認について（回答）

平成14年4月23日付け事務連絡にて照会のあった「平成14年度ふるさと農道整備事業（吉内地区）農道改良舗装工事」に関して、下記により回答します。

記

1 埋蔵文化財の有無に関して

当該工事対象地の中に、周知の埋蔵文化財包蔵地である中屋敷遺跡（遺跡番号29040）と登録されている埋蔵文化財包蔵地が存在する（図1：省略）。この包蔵地は、縄文時代晩期及び平安時代の遺跡と登録され、表採遺物も存在する。また、周辺には吉内遺跡・吉内館遺跡などの平安時代の遺跡が広がる。

本遺跡に関しては、4月11日に当課職員によって、工事箇所とともに表採資料等の確認を行ったところ、別添工事図面（省略）の内、赤色箇所（No.1・No.2の2箇所、約705㎡）が発掘対象区域と想定された。

よって、「土木工事等に係る埋蔵文化財包蔵地の取扱基準」（平成12年3月31日青森県教育委員会教育長決裁）に基づき発掘調査を実施すべきと考えられる。

2 今後の手続

1) 埋蔵文化財の発掘調査に関する届出事務等について

文化財保護法第57条の3に基づき、別紙土木工事等のための発掘に関する通知書を提出する

2) 埋蔵文化財の発掘調査に関する実施要請と調査費用の見積依頼

農政課より教育委員会へ早い時期に必要である

3) 調査の実施は2)の協議成立後となる

3 参 考 意 見

当教育委員会生涯学習課所管の平成14年度発掘調査計画は、国補助事業として4月から9月までの実施を予定しており、当該年度に実施するとなると10月以降となり工期等との調整が必要と考えられ、調査期間としては大変きつい状況である。

また、発掘調査費用は通常1㎡あたり10,000円前後であるが、当該遺跡は遺構確認面までの深さが浅いと想定されることから7,000～8,000円前後と予想される。

以上の回答文書を受けて、町当局は単独で発掘調査を実施することに決定し、6月補正予算に発掘調査費を計上した。6月24日の議会議決を経て、6月27日に下記の発掘調査要項を策定し、工藤を主担とする具体的な調査体制に入った。

平成14年度中屋敷遺跡発掘調査要項

1 調査の目的と経緯

周知の埋蔵文化財包蔵地である中屋敷遺跡について、「平成14年度ふるさと農道整備事業（吉内地区）農道改良舗装工事」に対応するため、緊急の発掘調査を行い、記録保存を行う。

平成14年4月に町農政課より照会のあった上記工事箇所を当委員会職員が現地踏査したところ中屋敷遺跡の辺縁部ではあるものの、表採資料もみられることから、工事対象となる箇所の内遺構・遺物の可能性が有る箇所を中心に発掘調査をすることとなった。なお、教育委員会及び財政当局との協議を経て急きょ実施する調査であったことから、予算的には6月補正予算を経て実施する。

2 調査地及び所有者

調査地地番等 南津軽郡浪岡町大字吉内字山下地内 他

所 有 者 浪岡町

3 調 査 面 積

工事対象面積5,635㎡のうち約12.4%にあたる約700㎡を対象とする（実質は324㎡）。

4 調査期間等予定

準備作業 平成14年6月25日から平成14年7月1日

調査作業 平成14年7月2日から平成14年9月30日

整理作業 平成14年10月1日から平成15年1月31日（報告書作成作業：実質2月25日まで）

5 調 査 体 制

浪岡町教育委員会 生涯学習課（文化班）

教 育 長 成田清一

生涯学習課長 常田典昭

生涯学習課長補佐 鎌田 廣

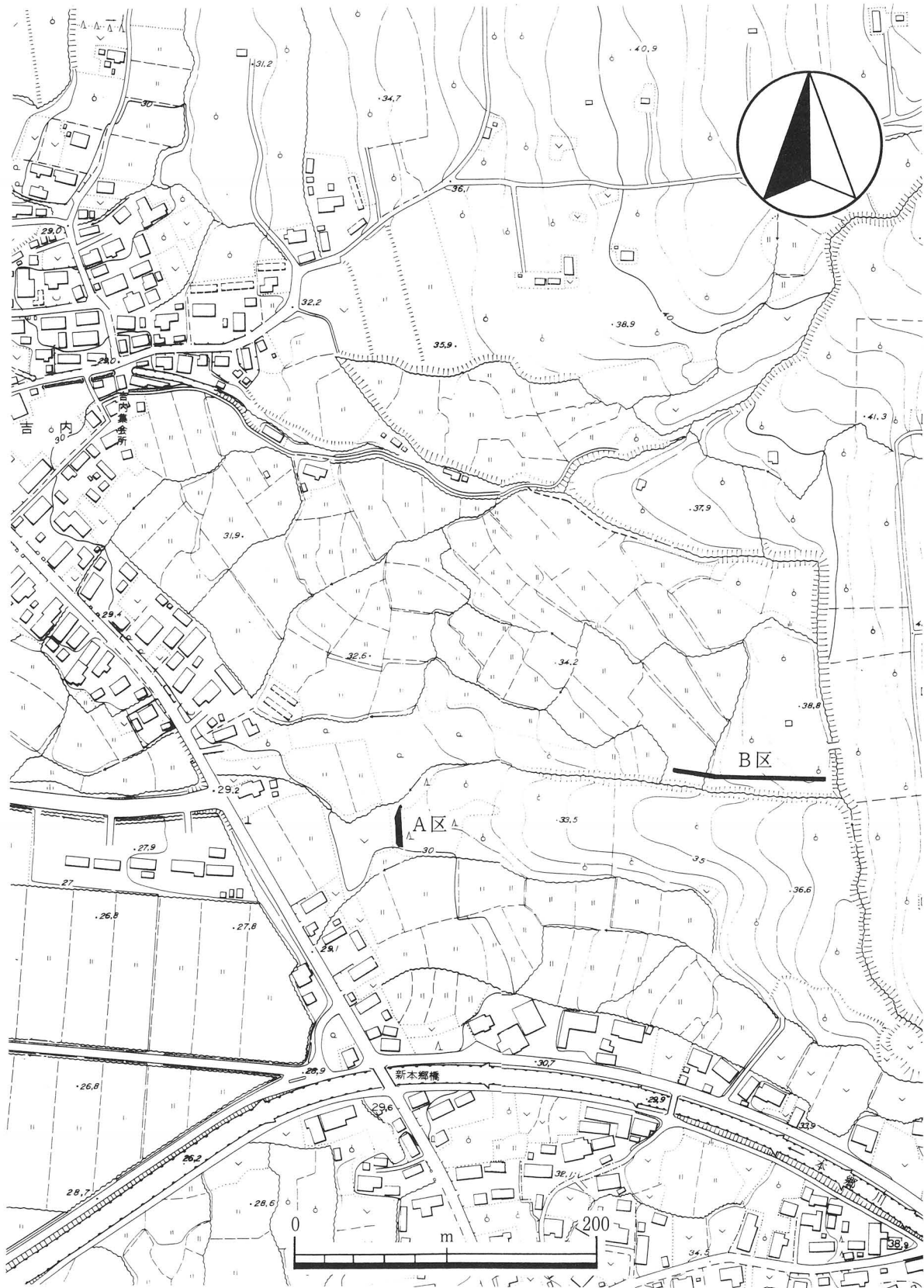
文化班長 工藤清泰（主担）

文化班主任主査
調査補助員

木村浩一
高橋昌也

文化班主査
整理補助員

小田桐勝昭
竹ヶ原亜希



図Ⅲ-1 発掘区の位置と地形

調査作業員	須藤千代・平井百合・清水美奈子・須藤トミエ・対馬とも子
整理作業員	藤本範子・吉川瑠枝・斎藤エリカ・成田真佐子・田村広江
整理協力員	蔦川貴祥・向出博之・竹内友香・市川健夫・小向良・竹原仁志・横井猛志・佐藤亜紀・萩坂華恵（弘前大学人文学部考古学研究室 院生・学生）

6 調査協力機関

南津軽郡浪岡町浪岡字稲村101-1

浪岡町 農政課

7 調査方法

工事箇所のうち遺構・遺物の確認できる箇所において、工事幅で調査区を設定し、表土を除去した後に精査する。

遺構については確認後、遣り方実測及び写真撮影等を行い記録の保存に努める。

8 調査報告書の作成

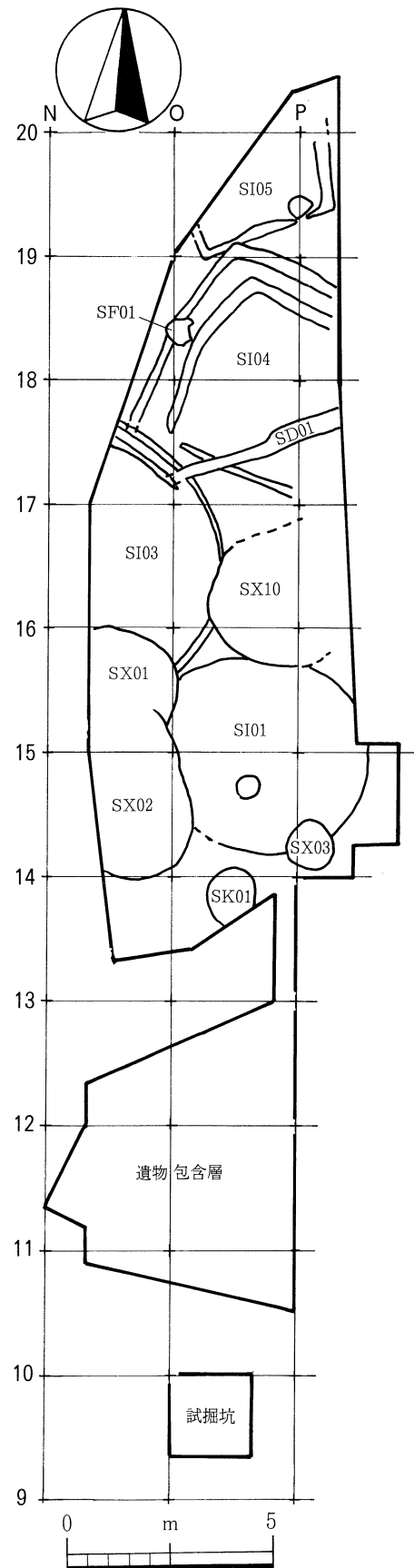
調査報告書は「浪岡町文化財紀要」の中に掲載し、成果を公表する。

第2章 調査経過

- 6月27日 A区の草刈り払い、伐採作業。
- 6月28日 A区グリッド設定（図1）及び原点レベルの設定（32.50m）。グリッドの南北線はN-1.5°-Eである。
- 7月2日 倒木等の除去をした後、O-18・19区から表土除去作業開始。午後雨。
- 7月3日 O-13~19表土除去。O-14区第1層（表土と考えたが、後にSI01覆土に比定）から無紋の無頸壺出土。
- 7月4日 O-17区より昭和時代の遺物が出土する溝（SD01）検出。O-15区第1層（後にSI01覆土に比定）から完形の注口土器出土。大形のため、地山直上（SI01床面）に接しており、周囲から炭化物を多量に検出。
- 7月5日 O-14区から台付土器・磨り石、O-15区からフレーク出土。O-14・15区の炭化物摘出（後にSI01焼失木材となる）。住居跡の痕跡あるも確認難しい。
- 7月9日 N-13~19の表土除去作業。遺構検出（SI01~05、SX01・02）。SI01床面より注口土器出土。
- 7月10日 N・O-11・12区の表土除去作業。
- 7月12日 N・O-10・11・12区の表土除去作業。N-12区より縄文時代後期の土器片が集中して出土。各遺構の掘り下げ作業。

- 7月17日 SX01・02精査。
- 7月18日 SI01検出の炭化物精査、住居の倒壊木材の可能性大。同遺構床面から注口土器出土。SI02は住居ではなく、鉄製品が出土したため平安時代以降の可能性大（後にSX10に変更）。
- 7月19日 N・O-10・11・12区のうち、N-12区から加曾利B式の突起付き口縁を持つ深鉢等が出土。O-12区第I層より壺形土器出土。I層までは土師器も混在する。
- 7月23日 SI01検出の炭化物は放射状に検出される。SI04掘り下げ開始。
- 7月24日 P-14~20ラインの層序セクション実測。SI03覆土から十腰内I式の土器片出土。SI05床面より土師器出土。
- 7月25日 N・O-10・11・12区は遺物包含層であることが確定したため、層位ごとに遺物の取り上げを進める。北側から南側に傾斜を有する遺物包含層である。弘前大学・関根助教授指導のため来訪。
- 7月26日 N・O-10・11・12区の掘り下げ。石鏃・石匙・深鉢形土器・壺形土器出土。猛暑。
- 7月29日 SI01の炭化物固定化及び東側プランを拡張。弘前高校学問ゼミの考古学実習を行う。
- 7月30日 N・O-10・11・12区の掘り下げによって酸化鉄を含む層確認。P-10~12ラインの層序精査。調査区南側の水田を試掘。客土の下50cmには青灰色凝灰質浮石層が存在し、泥炭の形成はみられない。
- 8月1日 青森大学・村越教授指導来訪。
- 8月2日 SX02黒色土下層より、注口土器片、石匙、無頸壺出土。SX01・02完掘。N・O-10・11・12区の掘り下げによって黄褐色砂質土の地山層が薄く入る層（第Ⅲ層）を確認、層位的に遺物の新旧を確認できそうである。
- 8月5日 N・O-12区掘り下げ。深鉢出土。
- 8月6日 N・O-12区掘り下げ。黄褐色砂質土の下に黒色土（第Ⅳ層）を確認。第Ⅲ層と遺物の相違がある。県文化財保護課・神康夫、弘前大学・関根達人助教授来訪。
- 8月8日 SI01床面精査、南側に溝を有するスロープ状の出入り口検出。SI05床面精査、土師器甕・坏等出土。
- 8月19日 SI01床面精査、出入り口部に土坑が重複。SI03完掘写真撮影。
- 8月20日 SI01の炭化物範囲ほぼ検出。SI04の中にある焼土範囲SF01からの埴状土製品出土。
- 8月21日 A区全体の写真撮影。遺構の平面実測開始。
- 8月22日 N・O-10・11・12区の掘り下げ、注口土器等出土。
- 8月23日 N・O-10・11・12区の道路部分を拡張して掘り下げる。
- 8月26日 B区のグリッド設定（図Ⅲ-9）。グリッドの東西線はN-183°-Eである。ベンチマーク（BM3：37.60m・BM4：36.00m）設定。
- 8月27日 B区の掘り下げ開始。トレンチ方式で実施。

- 8月28日 F-9・11・13区の表土除去。
- 8月29日 F-9・11・13区の表土除去。
- 8月30日 F-25区の表土除去。
- 9月3日 F-23・25・29区の表土除去。
- 9月4日 F-33～39区の表土除去。
- 9月10日 E-31～41ラインの層序実測作業。F-23区拡張。
- 9月11日 F-19～23区の遺構精査作業。
- 9月12日 SD04・05の掘り下げ。SD04より縄文時代晩期の土器破片が大量に出土。
- 9月13日 SX05より須恵器破片が出土。
- 9月19日 SD04・SX05の掘り下げ。
- 9月24日 SD04完掘。層序実測。
- 9月25日 F-19～23区の遺構精査によって焼土範囲確定。
- 9月26日 各グリッドの遺構精査と写真撮影。
- 9月30日 遺構実測を完了し現場を終了する。
- 10月1日 報告書作成のための整理作業に入る。注記作業～10月16日。写真整理作業～10月22日。図面整理作業～10月31日。
- 11月1日～平成15年2月25日 報告書作成作業。



図Ⅲ-2 A区グリッド配置と遺構概要

第3章 検出遺構と主な出土遺物

中屋敷遺跡の調査は、西側のA区と東側のB区の二箇所が対象となった。A区は南北に細長いグリッドを設定し、道路や畑への道を避けながら長さ34m、最大幅7.5mで調査を実施し、その調査面積は約144m²である。B区は東西の長さ120mの部分を3mグリッドで設定し、遺構の検出状態をみながら最大幅3mで発掘した。調査面積は約180m²である。

1節 A区の調査

A区は、沖積平野から一段高くなった微高地に存在し、東から西側へ緩い傾斜面の突端部に位置する。調査区の標高は北側で32.5mから南側水田面で30.5mとなっている。本発掘区の基本層序は図Ⅲ-3に示した通りである。竪穴建物跡検出の部分と水田方向に傾斜している遺物包含層の部分では基本層序に違いが存在し、前者はI層以下が遺構の覆土となっており、後者はI層からV層までの自然堆積層に区分できた。

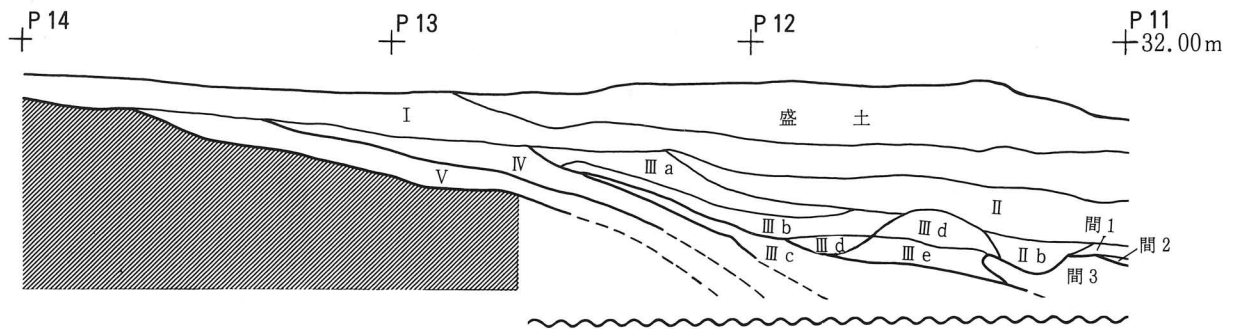
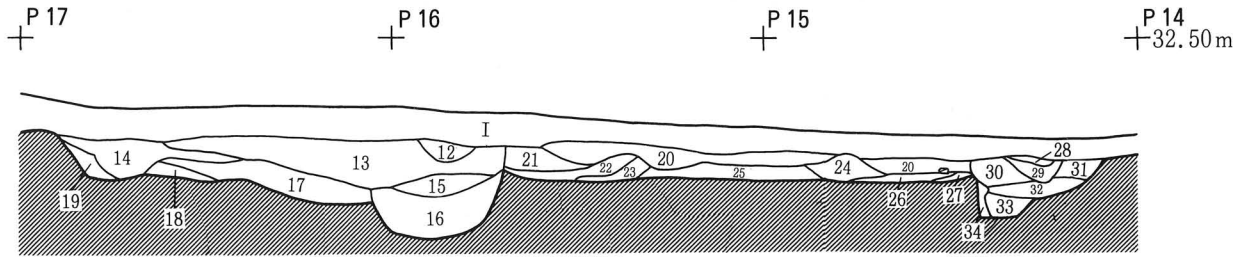
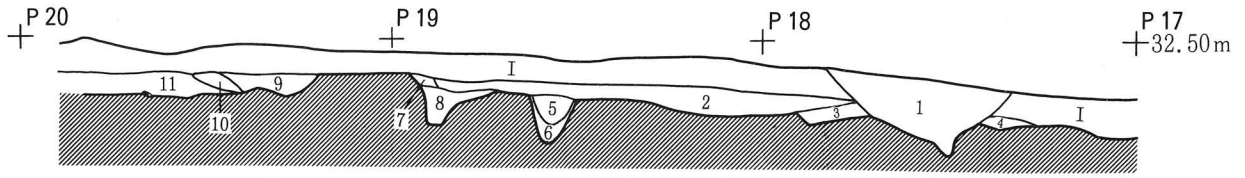
竪穴建物跡などは微高地状の部分で検出され、水田面の落ち込みに縄文土器や土師器等の遺物包含層が認められた。以下、縄文時代の遺構、平安時代の遺構、近代の遺構の順に記述する。

A 縄文時代の遺構

SI01（図Ⅲ-4、表Ⅲ-11、写真Ⅲ-1-2～4、Ⅲ-2-1・2） O・P・Q-14・15・16区検出。南北455cm、東西約500cmの円形を呈する竪穴建物跡で、覆土から床面にかけて多量の炭化物を包含する焼失建物跡である。出入口と想定されるスロープは南壁に位置し、対応する柱穴であるP7～P12の軸はS-11.5°-Eの方向を向く。主柱穴はP1・P2・P3・P4の四本で北側に広がる台形の形に配置されている。主柱穴のほか床面に浅い柱穴が認められるものの、壁に沿って浅い柱穴を部分的に確認できた。梁などに懸けられた建物の側柱であろう。西側ではSX01・SX02（新）と、北側ではSX10（新）と、さらに南東ではSX03（新）とした遺構と重複している。主柱穴P1の北側には直径約50cm、深さ10cmの円形を呈する掘り込みが認められ、覆土（E-F）の状況から地床炉と考えられる。

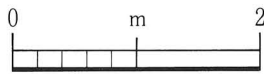
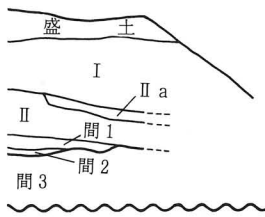
覆土は、Pラインの基本層序で示した21層～34層までと南北層序（A-B）の1層～5層、東西層序（C-D）の6層～11層までが対応する。遺構の確認面を掘りすぎていることから層序が人為堆積なのか自然堆積なのか明確ではないものの、東西セクションの東側の状況をみると建物跡中央部に自然の流れ込みが認められることから、自然堆積の可能性が高い。床面直上には建物中央部に集中して炭化材が重なり合った状態で検出されたが、主柱穴に対応する炭化材は確認できなかった。しかしながら、北側の壁柱穴では、柱穴に対応する炭化材が2本確認できた。

出土遺物は、床面出土のものとしてほぼ完形の注口土器3点、深鉢片、玉髓や玉髓質珪質頁



P 11
+
P 10
+32.00m

図 III - 3 A区基本層序実測図



岩を主体とする石材 8 点、磨り石 2 点、台石 1 点、覆土から出土したのとして無頸壺 1 点、台付土器 1 点、深鉢片、筒形土器片、磨り石 1 点などがある。特に、注口土器の出土は特徴的で、東側から北側にかけて一定間隔を有して出土した。なおアスファルト補修のある注口部と土器が接合している。

包含層との遺物対応関係をみると、床面出土の深鉢土器と同一個体と想定される同土器がⅢ b 層で出土していることから、Ⅲ c 層形成以後の建物と推定される。その年代は、注口土器に文様帯とともに貼瘤が認められることから縄文時代後期後半の時期を想定できる。

SI03 (図Ⅲ-5、表Ⅲ-12、写真Ⅲ-1-2・3、Ⅲ-3-1) N・O-15・16区検出。西側は道路のため調査できなかったことと、新しい遺構と重複しているため規模は明確でないが、壁溝の状況からすると 6～7 m の楕円形を呈する竪穴建物跡と推定できる。遺構確認面から 25 cm の浅い掘り方を有し、深さ 5 cm 前後の壁溝が周回する。壁溝は北側で二重となることから建物の立て替えも想定できる。建物に伴う支柱穴は、規模や深さから P 1 と P 7 の二個と考えられるが、他の浅い柱穴 (P 2～P 6) も側柱の可能性もある。P 8 は建物埋没後の掘り込みの可能性が大である。

北側では SI04 と、東側では SX10 と、南側では SX01 とそれぞれ重複しており、本遺構が最も古い。また、南東側で隣接して検出された SI01 とは壁溝と間が約 5 cm しか離れていないため、新旧関係を有していると想定された。しかしながら土層堆積状況からは把握できず、さらに床面出土の土器片も深鉢の破片しかなく、SI01 とほぼ同じ時期の破片であったことから、新旧関係を明確にすることはできなかった。

出土遺物には、床面のものとしては縄文時代の深鉢形土器の胴部片だけであり、覆土と P 8 覆土からは同深鉢形土器と壺形土器片、珪質頁岩製のフレイクが出土している。

床面及び覆土中の出土遺物はすべて縄文時代後期前半から後半のものであり、建物跡は縄文時代後期後半の年代が想定される。

SK01 (図Ⅲ-6、表Ⅲ-5、写真Ⅲ-3-3) O-13・14区検出の土坑で南側は通路のため一部掘り残しがある。南北約 140 cm、東西 120 cm、深さ 37 cm の不整円形を呈するフラスコ状土坑である。出土遺物はなかったもののフラスコ状を呈することから縄文時代の遺構と考えた。

SX03 (図Ⅲ-6、表Ⅲ-2) O・P-14区検出の土坑。SI01 と重複しており、本遺構が新しい。南北 130 cm、東西 120 cm、深さ 32 cm で擂鉢状の形態である。重複する SI01 の出入り口部分における柱穴より浅く構築されているため、覆土は A 区基本層序の 28 層～32 層が対応する。覆土からは縄文時代後期の深鉢胴部片が出土した。

遺物包含層 (図Ⅲ-3・8、表Ⅲ-1、写真Ⅲ-4-1・4)

基本層序のところでも述べたように、盛土をのぞいて自然堆積層は I～V 層に分けることができた。このうち I 層と II 層は土師器・須恵器と縄文土器が混在し、基本的に平安時代以降の

自然堆積層であった。Ⅲ層とⅣ層は縄文土器や縄文時代の石器しか出土しない遺物包含層である。Ⅲ層はa～dまで分層でき、炭化物や竪穴建物跡などを掘り上げた地山の褐色砂質土が混在する層であった。Ⅳ層は黒色土で分層はできなかったが、本遺物包含層のメルクマールとなる層で遺物は上面からの出土が多い。Ⅴ層は遺物が包含されない層で、地山からの漸移層である。

包含層からの主な出土遺物は図Ⅲ－8に示した。

Ⅲ層の出土遺物には、深鉢形土器、台付土器、小型の深鉢形土器、注口土器、有頸壺形土器、無頸壺形土器、香炉形土器、石鏃、石匙、フレークなどがある。Ⅳ層の出土遺物には、深鉢形土器、注口土器、壺形土器、小型の注口土器などがあり、石器は石匙が1点出土している。

B 平安時代の遺構

SI04・SF01（図Ⅲ－7、表Ⅲ－6、写真Ⅲ－3－2） N・O・P－16・17・18区検出の建物遺構。竪穴建物跡と想定されるが覆土が薄く、建物に付属すると考えられる周溝から規模を推定するしかない。周溝は一辺430cmの小型の部分と一辺600cmの一回り大型の部分が確認されていることから、建物の建て替えや部屋内の間仕切り等が想定される。小型の周溝内からは床面と考えられるしまりの強い部分が検出され（スクリントーン部分）、さらに、西側で検出されたSF01には焼け土と埴状土製品が置かれ、土師器坏が一点出土している。このSF01をカマドとするには袖の立ち上がりなどを確認できないため不十分であるが、外側の周溝の上端に位置することから、大形の建物と同時期かあるいは新しい遺構となる。建物の柱穴配置はP5・（P8）・P12が支柱穴として対応すると考えられるが、東側の部分が不明なため確実なことはいえない。

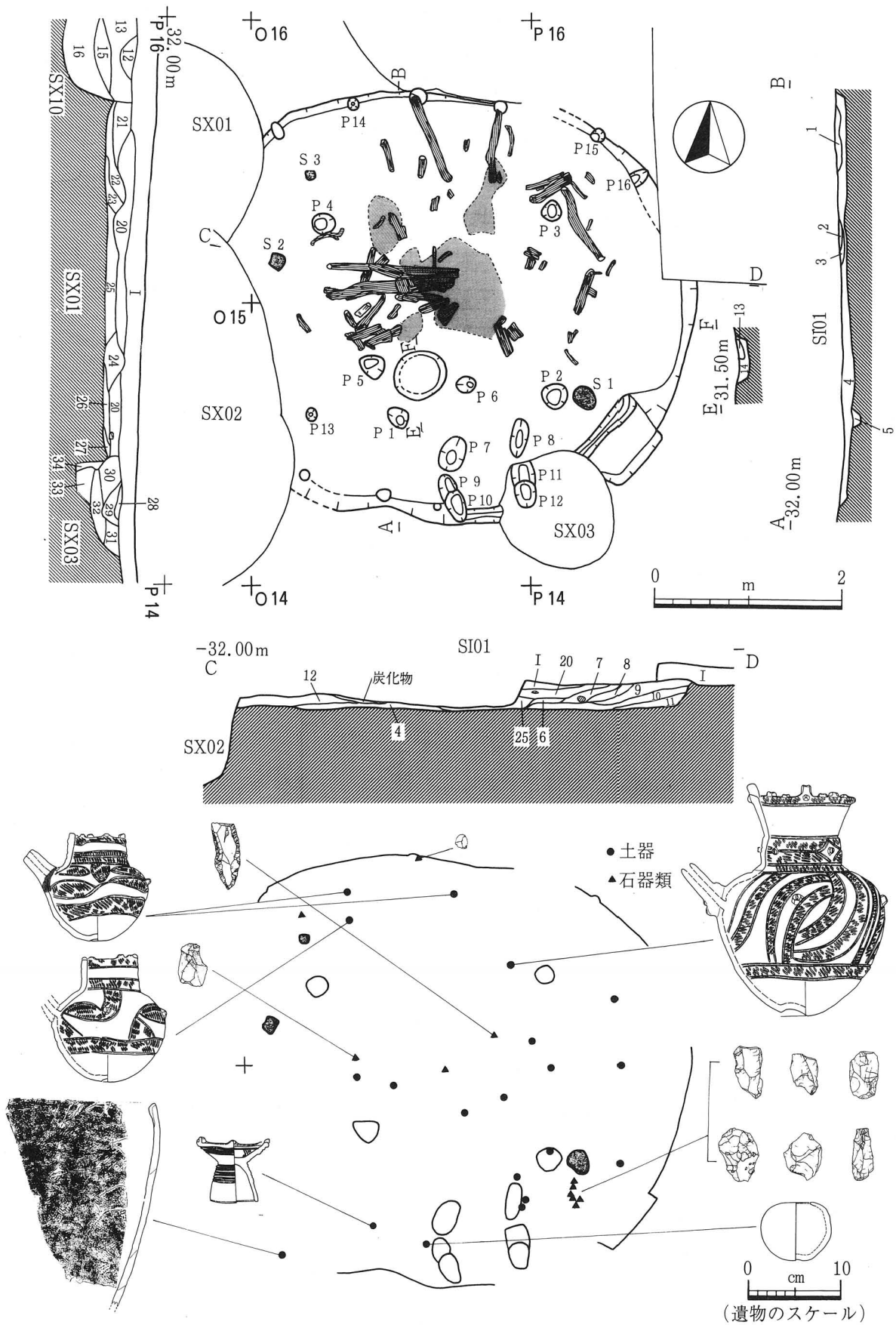
重複している遺構としては、SD01（新：近代）、SI05（新旧不明：平安時代）、SI03（旧：縄文時代）がある。出土遺物には、床面と覆土から土錘が一点つつある。

本遺構の年代は、土錘の出土状況やSF01の埴状土製品・土師器坏から9世紀後半～10世紀と想定される。

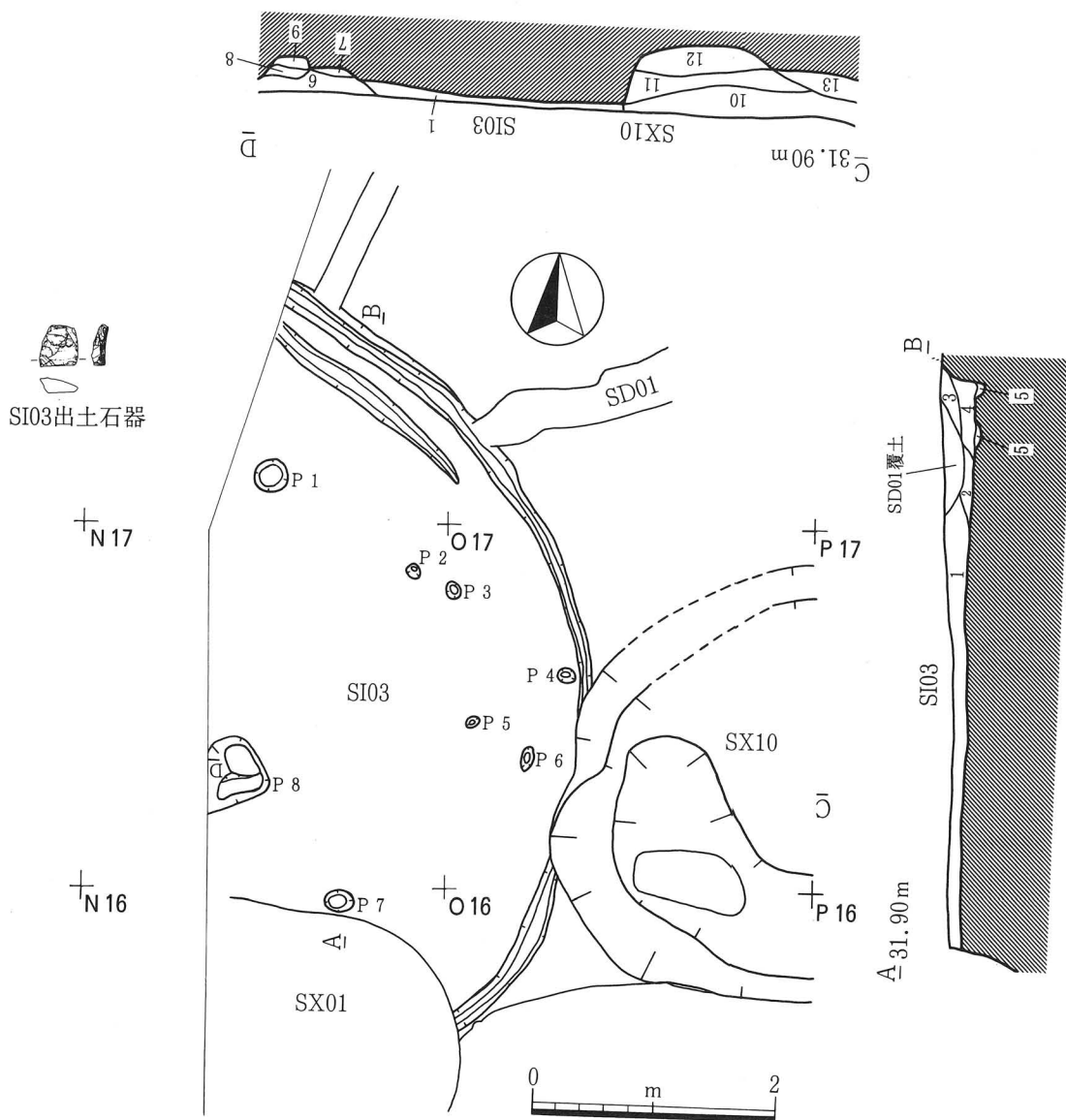
SI05（図Ⅲ－7、表Ⅲ－6） O・P－19区検出の竪穴建物跡である。覆土が薄いことと北側が未調査のため全体形は不明であるが、周溝の存在から一辺350cmの方形を呈する建物と想定される。南東隅には焼土ブロックがあり、その周辺は固くしまった床面（スクリントーン部分）となっている。この焼土ブロックの中から土師器小型甕と内黒の土師器坏が出土している。遺構の重複はSI04（新旧不明）だけであり、遺構の年代は9世紀後半～10世紀と想定される。

C 近代以降の遺構

SX01・SX02 P－14・15区から検出された不定形の土坑で、西側部分は道路のため未調査であり規模などは不明である。SX01はSX02を切る状態で北側を深めに掘りこんだ遺構で、1層



図III-4 SI01実測図・遺物出土状況

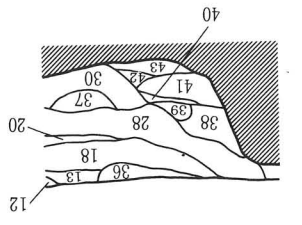


図Ⅲ-5 SI03・SX10実測図

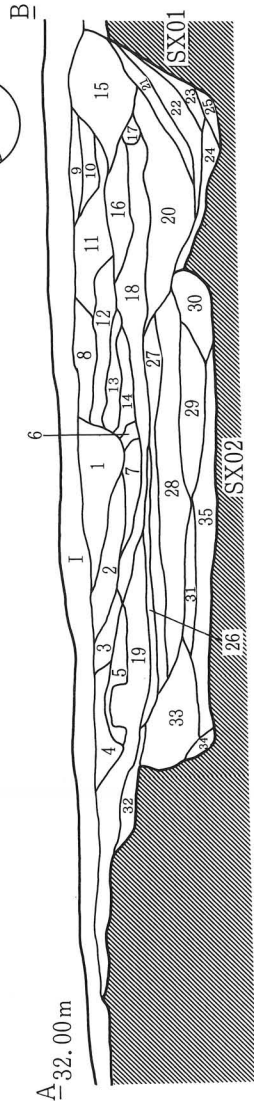
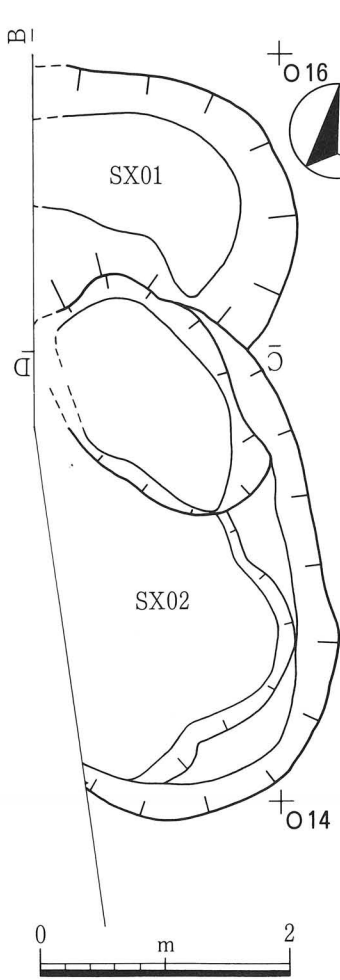
から26層までが覆土と想定される。覆土は、地山層である黄褐色砂質土が互層状態に堆積し、人為的に埋め戻されたことがわかる。出土遺物には近代の陶磁器のほか土師器・縄文土器破片が混在していた。

SX02はSX01に上半部を削平されているため全体の状況はわからないが、覆土は27層から43層までである。下層に堆積する黒色土から縄文土器や石器が出土しており、遺構の埋没時点で遺物が流れ込んだ印象を受ける。SX01・SX02ともにSI01(旧)・SI03(旧)と重複しいずれよりも新しい遺構である。遺構の年代は昭和初期と推定され、性格は不明である。

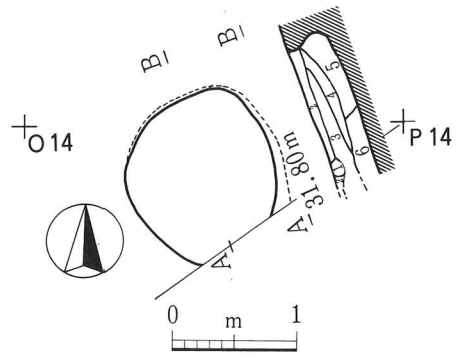
SD01 O・P-17区検出の溝である。地籍境界線上に東西に走る溝で、上端の最大幅150cm、深さ55cmである。本発掘地域は、昭和初期に地域の隔離病棟が存在した場所であり、その施設



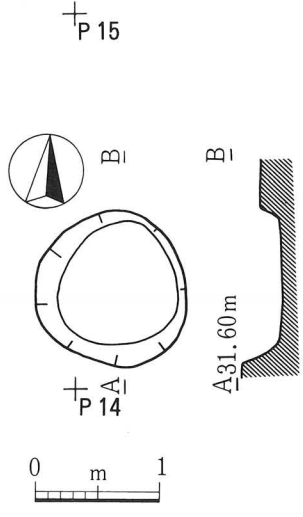
C 32.00m



A 32.00m



SK01実測図



SX03実測図



SX02出土遺物



図III-6 SX01・SX02・SX03・SK01実測図

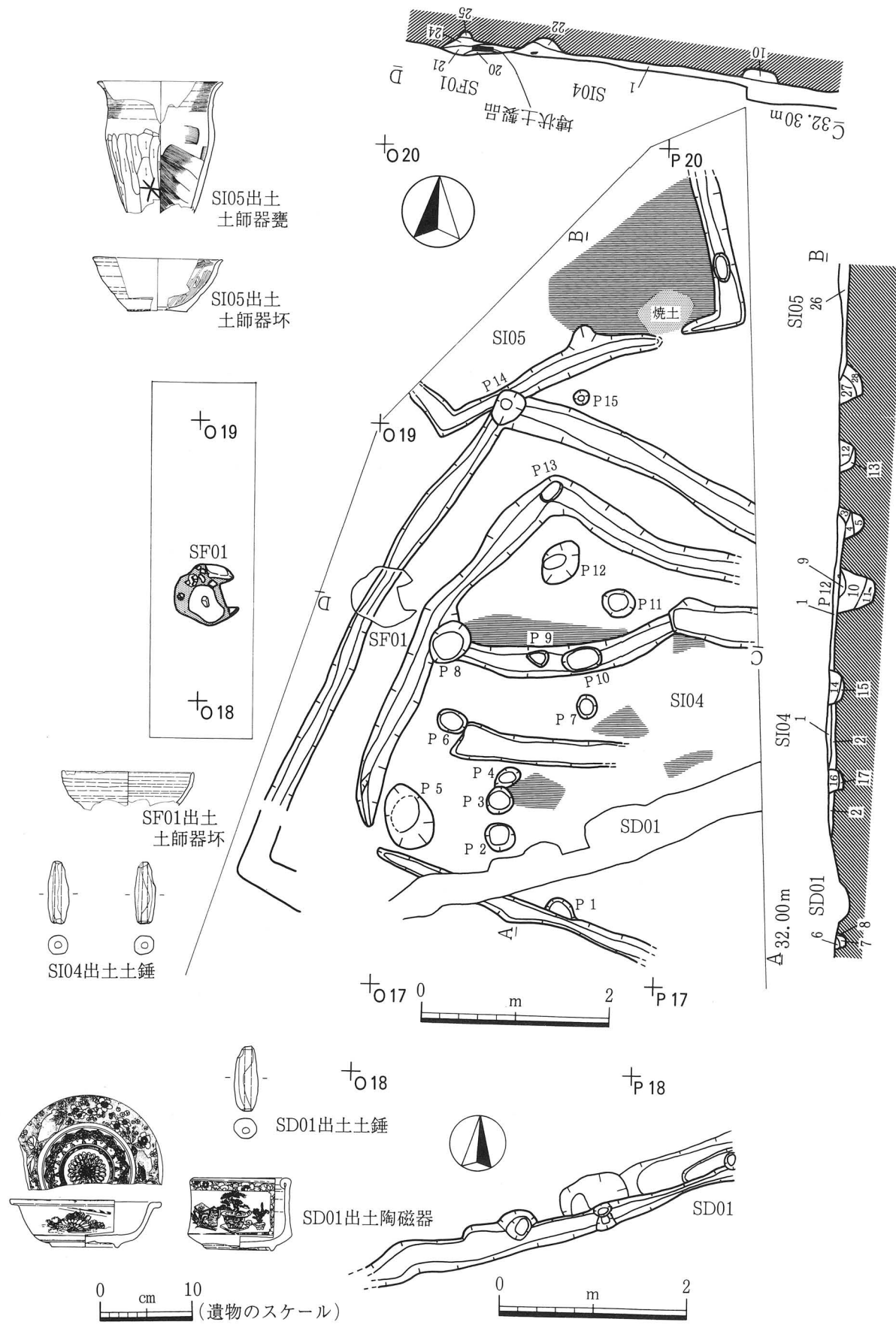
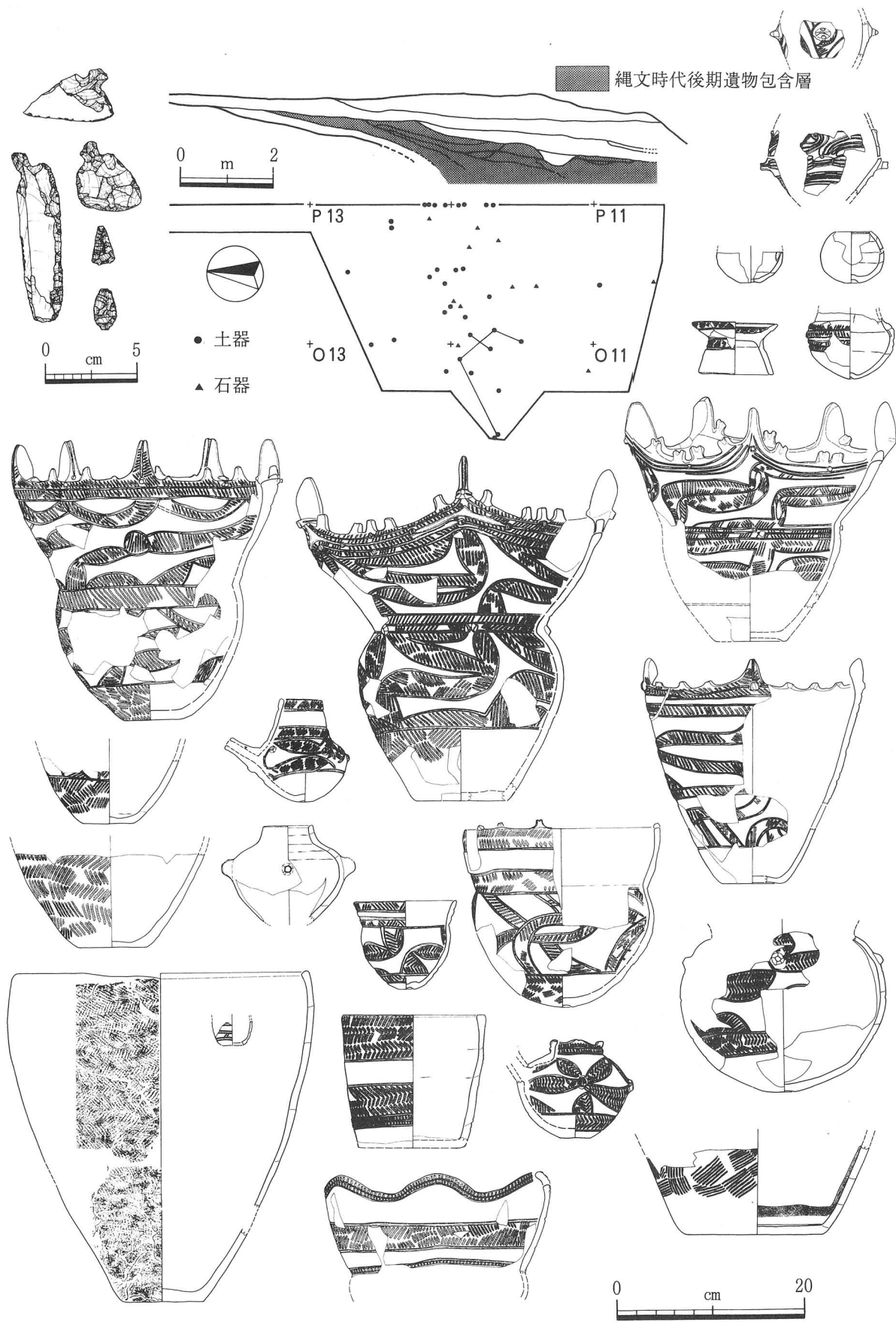


図 III - 7 SI04・SI05・SD01・SF01実測図



図Ⅲ-8 遺物包含層と出土遺物

表Ⅲ-11 SI01柱穴表 (図Ⅲ-4 対応)

柱穴No.	規模 (cm)	深さ (cm)
P 1	24.5×18.0	24.4
P 2	27.0×25.0	30.7
P 3	20.0×20.0	52.6
P 4	25.0×22.0	26.5
P 5	28.0×23.0	12.7
P 6	18.0×17.0	30.8
P 7	40.0×26.5	15.5
P 8	41.0×18.0	17.7
P 9	20.0×19.0	35.2
P 10	33.0×20.0	40.5
P 11	20.0×25.0	27.7
P 12	30.0×23.0	39.9
P 13	10.0×12.0	9.6
P 14	10.0×12.0	3.7
P 15	13.0×15.0	3.6

表Ⅲ-13 SI04柱穴表 (図Ⅲ-7 対応)

柱穴No.	規模 (cm)	深さ (cm)
P 1	35.0×20.0	11.8
P 2	30.0×30.0	29.6
P 3	30.0×26.0	7.6
P 4	32.0×18.0	5.3
P 5	70.0×52.0	22.2
P 6	30.0×23.0	10.2
P 7	25.0×22.0	6.9
P 8	50.0×39.0	17.5
P 9	15.0×24.0	18.1
P 10	43.0×23.0	17.3
P 11	34.0×30.0	11.7
P 12	42.0×40.0	57.8
P 13	26.0×14.0	37.1
P 14	30.0×40.0	31.6

表Ⅲ-12 SI03柱穴表 (図Ⅲ-5 対応)

柱穴No.	規模 (cm)	深さ (cm)
P 1	26.0×27.0	47.0
P 2	12.0×11.0	8.6
P 3	13.0×14.0	—
P 4	14.0×11.0	20.8
P 5	10.0×9.0	6.6
P 6	20.0×10.0	14.8
P 7	25.0×19.0	59.7
P 8	57.0×50.0	18.7

に伴うと想定される陶磁器やガラス瓶が大量に廃棄されていた。本遺構はSI04 (旧：平安時代) やSI03 (旧：縄文時代) と重複しているが、SI03の床面まではくい込んでいない。

表Ⅲ-1 A区遺物包含層基本層序注記表 (図Ⅲ-3 P11区～P13区まで対応)

盛土 暗褐色土 (10YR3/3)。ゴミを多量に含む。

I層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に1%含む。2～5cm大の小礫を1%含む。しまりややあり。

II層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小～小粒状に2%含む。赤褐色酸化鉄 (5YR4/6) を小～中塊状に2%含む。しまりなし。

II a層 黒色土 (10YR2/1)。II層とほぼ同質だが、硬化面である。しまり非常にあり。

II b層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小粒状に2%含む。酸化鉄を小塊状に1%含む。しまりなし。基本的に平安時代の包含層であるが、縄文時代の遺物も混在する。

III a層 明黄褐色砂質土 (10YR6/6) に、黒褐色土 (10YR3/1) を40%斑点状に含む。炭化物を小粒状に2%含む。しまりあり。縄文時代後期の包含層。

III b層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に3%含む。しまりややあり。縄文時代後期の包含層。

- Ⅲc層 明黄褐色砂質土 (10YR6/6)。Ⅲa層とほぼ同質だが、酸化鉄を極少量含む。縄文時代後期の包含層。
- Ⅲd層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～中粒状に3%含む。しまりややあり。縄文時代後期の包含層。
- Ⅲe層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～中粒状に30%含む。しまりあり。
- Ⅲd層・Ⅲe層は天地返しを受けた層序。縄文時代後期の包含層。
- 間層1 酸化鉄層①、黒褐色土 (10YR3/1) に、赤褐色酸化鉄 (5YR4/6) を中～大塊状に15%含む。しまりなし。
- 間層2 火山灰層 にぶい黄橙色土 (10YR6/3)。しまりややあり。
- 間層3 酸化鉄層② 黒褐色土 (10YR3/1) に、赤褐色酸化鉄 (5YR4/6) を中～大塊状に20%含む。しまりなし。
- Ⅳ層 黒色土 (10YR1.7/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%含む。しまりあり。縄文時代後期の包含層。
- Ⅴ層 漸移層。黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小粒状に3%含む。しまりあり。

表Ⅲ-2 A区基本層序注記表 (図Ⅲ-3・4 P14区～P20区まで対応)

- Ⅰ層 耕作土。黒褐色土 (10YR3/1) に大粒状の小礫を2%、焼土粒・炭化物を2%含む。しまり全くなし。SD01を境に南側は若干しまりあり (北側は耕作土、南側は腐食土)。
- 1層 SD01覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～中粒状に5%、炭化物を小～中粒状に2%含む。しまりなし。
- 2層 SI04覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒状に2%、小～中粒状の小礫を2%含む。しまりあり。
- 3層 SI04覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～大粒状に10%、にぶい黄橙色土 (10YR7/2) を小～中粒状に2%含む。しまりなし。
- 4層 SI04覆土。黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～大粒状に10%、炭化物を小粒状に1%含む。しまりなし。
- 5層 SD03覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～中粒状に3%、炭化物、小礫を小粒状に2%含む。しまりあり。
- 6層 SD03覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～中粒状に40%、小礫を小粒状に5%含む。しまりあり。
- 7層 SD02覆土。黒色土 (10YR2/1) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小粒状に30%含む。しまりあり。
- 8層 SD02覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小～小粒状に10%含む。下層には明黄褐色砂質土 (10YR5/6) を極小～小粒状に30%含む。しまりあり。
- 9層 SI05覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%、焼土、炭化物を極小粒状に1%含む。しまり非常にあり。
- 10層 SI05覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小粒状に20%、焼土を小～中塊状に2%含む。しまりあり。
- 11層 SI05覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～中粒状に2%、小礫を小粒状に1%含む。しまりあり。
- 12層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小粒状に10%含む。しまりなし。
- 13層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%含む。しまりなし。
- 14層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状、且つ層上部にレンズ状に5%含む。しまりあり。
- 15層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小～小粒状に10%、小～大粒状の小礫を2%含む。しまりなし。
- 16層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小粒状に2%含む。しまりなし。
- 17層 SX10覆土。明黄褐色砂質土 (10YR7/6) に、黒褐色土 (10YR3/1) を互層状に40%含む。しまりあり。
- 18層 SX10覆土。黒色土 (10YR3/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に10%、暗褐色土 (10YR3/3) を厚さ0.5～1.0cmの板状に10%含む。しまりあり。
- 19層 SX10覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に20%、黄褐色土 (10YR5/8) を極小～極大状に2%含む。しまりあり。
- 20層 SI01覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に5%斑点状に含む。
- 21層 SI01覆土。黒色土 (10YR2/1) に明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に30%含む。しまりあり。
- 22層 SI01覆土。黒色土 (10YR2/1) に炭化物を極小～中塊状に10%、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に5%含む。しまりあり。
- 23層 SI01覆土。黒色土 (10YR2/1) に炭化物を極小～小塊状に5%、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小～小粒状に2%含む。しまりあり。

- 24層 SI01覆土。黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に20%（板状及び塊状に）含む。炭化物を2%含む。しまりあり。
- 25層 SI01覆土。黒色土（10YR2/1）に炭化物を極小～大塊状（の材状）に20%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に5%含む。しまりあり。
- 26層 SI01覆土。黒色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に10%、炭化物を直径0.2～0.5 cmの小粒状に1%含む。しまりあり。
- 27層 SI01覆土。明黄褐色砂質土（10YR6/8）に黒褐色土（10YR2/3）を10%含む。しまりあり。
- 28層 SX03覆土。黒色土（10YR2/1）に褐色土（10YR4/4）を厚い板状に40%含む。小礫を2%含む。しまりあり。
- 29層 SX03覆土。黒色土（10YR2/1）に褐色砂質土（10YR4/4）を極小粒状に1%含む。しまりあり。
- 30層 SX03覆土。黒色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に3%含む。炭化物粒を小塊状に1%含む。しまりあり。
- 31層 SX03覆土。黒色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小粒状に10%（直径3.0 cmの塊状）に含む。しまりあり。
- 32層 SX03覆土。黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に5%、炭化物を小～中塊状に1%含む。しまりあり。
- 33層 SI01覆土。黒色土（10YR2/2）に明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に10%含む。しまりあり。
- 34層 SI01覆土。明黄褐色砂質土（10YR6/8）。

表Ⅲ-3 SI01層序注記表（図Ⅲ-4 対応）

- 1層 黒褐色土（10YR3/2）層中に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）粒・明黄褐色砂質土（10YR7/6）を微量含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。
- 2層 黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を微量含む。炭化物を微量含む。粘性・しまりなし。湿性ややあり。
- 3層 暗褐色砂質土（10YR3/3）と黒褐色砂質土（10YR2/3）の混層。粘性なし。湿性・しまりややあり。
- 4層 黒色土（10YR1.7/1）に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を微量含む。炭化物層。粘性・湿性・しまりややあり。
- 5層 黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を微量含む。粘性・湿性・しまりややあり。
- 6層 明黄褐色砂質土（10YR6/8）に、黒色土（10YR2/1）を小粒状に20%含む。黄褐色砂質土（10YR4/3）粒を中粒状に2%含む。しまりややあり。粘性・湿性なし。
- 7層 黒褐色土（5YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に1%含む。粘性・湿性・しまりややあり。
- 8層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に30%、暗赤褐色焼土（2.5YR3/2）を小粒状に5%含む。粘性・湿性・しまりややあり。
- 9層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に7%、黄褐色砂質土（10YR4/3）粒を中粒状に1%含む。上部になるに従い、明黄褐色砂質土の混入が減少し、最上部ではほぼ均質な黒褐色土層となる。
- 10層 黒褐色土（10YR2/2）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に10%含む。炭化物を小～中粒状に2%含む。粘性・湿性弱。しまり強。
- 11層 4層と極めて似通った土質のため、同一層の可能性がある。黒色土（10YR1.7/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に1%含む。炭化物層。粘性・湿性ややあり。しまり強。
- 12層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を小粒状に5%、黄褐色砂質土（10YR4/3）を小～中粒状に2%、炭化物を細かい材状に2%含む。粘性・湿性ややあり。しまり強。
- 13層 褐色土（7.5YR4/6）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に40%含む。
- 14層 暗褐色土（7.5YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～小粒状に10%含む。炭化物（直径0.5 cm）を3%含む。
- 20層 黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に5%斑点状に含む。
- 21層 黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に30%含む。しまりあり。
- 22層 黒色土（10YR2/1）に炭化物を極小～中塊状に10%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に5%含む。しまりあり。
- 23層 黒色土（10YR2/1）に炭化物を極小～小塊状に5%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小～小粒状に2%含む。しまりあり。
- 24層 黒色土（10YR2/1）に明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に20%（板状及び塊状に）含む。炭化物を2%含む。しまりあり。
- 25層 黒色土（10YR2/1）に炭化物を極小～大塊状（の材状）に20%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を極小粒状に5%含む。しまりあり。
- 26層 黒色土（10YR2/2）に黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小粒状に10%、炭化物を直径0.2～0.5 cmの小粒

状に1%含む。しまりあり。

27層 明黄褐色砂質土(10YR6/8)に黒褐色土(10YR2/3)を10%含む。しまりあり。

33層 黒色土(10YR2/2)に明黄褐色砂質土(10YR6/8)を極小～小粒状に10%含む。しまりあり。

34層 明黄褐色砂質土(10YR6/8)。

表Ⅲ-4 SI03・SX10層序注記表(図Ⅲ-5 対応)

1層 黒褐色土(10YR2/2)に、明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小粒状に2%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。

2層 黒色土(10YR2/1)に、明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～中粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまり非常にあり。

3層 黒色土(10YR1.7/1)に、明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小粒状に2%含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。

4層 黒褐色土(10YR2/2)に、明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～小粒状に2%含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。

5層 明黄褐色砂質土(10YR7/6)に、黒色土(10YR1.7/1)を10%含む。しまりなし。

6層 黒色土(10YR2/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。黄褐色砂質土(10YR4/3)ブロック(直径1.0～2.5cm)を若干含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。

7層 黒褐色土(10YR2/2)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。粘性・湿性ややあり。しまりなし。

8層 黒褐色土(10YR2/3)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。黄褐色砂質土(10YR4/3)ブロック(直径1.0cm)を若干、炭化物を微量含む。粘性なし。湿性・しまりあり。

9層 暗褐色土(10YR3/4)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒・炭化物を微量含む。粘性なし。湿性あり。しまりややあり。

10層 黒色土(10YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR6/6)を極小粒状に2%含む。しまりなし。

11層 黒色土(10YR1.7/1)に、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を少量含む。粘性・湿性ややあり。しまりなし。

12層 黒色土(10YR2/2)に、明黄褐色砂質土(10YR6/8)を少量、黄褐色砂質土(10YR5/6)を中粒～粗大粒状に微量含む。粘性・湿性ややあり。しまりなし。

13層 明黄褐色砂質土(10YR7/6)に、黒褐色土(10YR3/1)を互層状に40%含む。しまりあり。

表Ⅲ-5 SK01覆土層序注記表(図Ⅲ-5 対応)

1層 黒褐色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を小～中粒状に30%含む。

2層 黒褐色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～小粒状に3%含む。

3層 黒褐色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～小粒状に1%含む。

4層 黒褐色土(10YR3/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小粒状に10%含む。

5層 黒色土(10YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～小粒状に5%含む。

6層 黒色土(10YR2/1)に明黄褐色砂質土(10YR7/6)を極小～小粒状に2%含む。

表Ⅲ-6 SI04・SF01・SI05覆土層序注記表(図Ⅲ-6 対応)

SI04覆土

1層 黒色土(10YR1.7/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。

2層 黒褐色土(10YR2/3)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を少量、黄褐色砂質土(10YR4/3)を微量含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。

3層 暗褐色砂質土(10YR3/3)と褐色土(10YR4/6)の混層。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。

4層 黒褐色土(10YR2/2)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。

5層 黒褐色土(10YR2/3)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を極微量含む。粘性なし。湿性あり。しまりややあり。

6層 黒色土(10YR2/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。粘性・しまりなし。湿性ややあり。

7層 黒色土(10YR1.7/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量含む。粘性ややあり。湿性あり。しまりなし。

8層 暗褐色砂質土(10YR3/4)。粘性・しまりなし。湿性あり。

9層 黒色土(10YR2/1)に、黄褐色砂質土(10YR4/3)粒を微量、黄褐色砂質土(10YR4/3)を極微量含む。粘性・しまりなし。湿性ややあり。

10層 黒褐色土(10YR2/3)に、直径3.0～5.0cmの黒色土(10YR2/1)をブロック状に微量含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。

- 11層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3) を微量含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりなし。
- 12層 黒褐色土 (10YR2/2) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。
- 13層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。
- 14層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を少量含む。粘性・湿性ややあり。しまりなし。
- 15層 黒褐色土 (10YR2/2) に、直径3.0cmの黄褐色砂質土 (10YR5/6) を微量含む。粘性・湿性・しまりややあり。
- 16層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。粘性・しまりややあり。湿性あり。
- 17層 黒褐色土 (10YR2/3) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。粘性ややあり。湿性あり。しまりなし。
- (18・19・23層は欠番)
- 22層 暗褐色土 (10YR3/3) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を小粒状に40%含む。褐色砂質土 (7.5YR4/4) を小塊状に20%含む。粘性・湿性弱。しまりややあり。溝覆土。
- SF01覆土**
- 20層 暗赤褐色粘性土 (5YR3/2) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) を5%小粒状に含む。粘性やや強。しまりややあり。
- 21層 にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) に、黒色砂質土 (5YR1.7/1) を中粒状に5%含む。明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を層下部に薄い板状に5%含む。粘性・湿性弱、しまり強。
- 24層 明黄褐色砂質土 (10YR6/8) に、にぶい赤褐色焼土 (5YR4/4) を極小粒状に10%含む。しまりなし。
- 25層 周溝覆土。暗褐色土 (10YR3/3) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小粒状に5%含む。しまりなし。
- SI05覆土**
- 26層 黒色土 (10YR2/1) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。粘性なし。湿性あり。しまりややあり。
- 27層 黒色土 (10YR1.7/1) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。粘性・湿性ややあり。しまりなし。
- 28層 黒色土 (10YR2/1) に、黄褐色砂質土 (10YR4/3) 粒を微量含む。褐色砂質土 (10YR4/4) が層下部でまだらに混入する。粘性・湿性・しまりややあり。

表Ⅲ-7 SX01・SX02東西・南北層序注記表(図Ⅲ-6 対応)

- I層 黒褐色土 (10YR2/3) に草根を多量に含む。乾燥がはげしい。後から盛られたものと考えられる。
- 1層 黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小～大粒状に10%含む。明赤褐色土 (5YR5/8) を小～中粒状に5%含む。少粒状の礫を20%含む。しまりあり。粘性・湿性なし。
- 2層 黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を極小～中粒状に10%含む。明黄褐色土 (10YR7/6) を小粒～大粒状に3%含む。小粒状の礫を5%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 3層 黒褐色土 (10YR3/2) に、黒褐色土 (10YR2/3) を30%含む。明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を小粒～大粒状に30%、明黄褐色土 (10YR7/6) を小粒～中粒状に5%含む。粘性・湿性あり。しまりあり。
- 4層 黒褐色土 (10YR3/2) に、明黄褐色土 (10YR7/6) を極小～小粒状に2%、粘性・湿性なし。しまりあり。
- 5層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色土 (10YR6/6) を極小～大粒状に10%、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を中粒状に5%含む。粘性・湿性あり。しまりあり。
- 6層 黒褐色土 (10YR2/3) に、黄褐色土 (10YR5/8) を極小～中粒状に25%含む。粘性・湿性・しまりなし。
- 7層 黒色土 (10YR2/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を、0.5～2.0cmの厚さで板状に含む。明黄褐色土 (10YR6/6) を中塊状に3%含む。湿性・粘性・しまりなし。
- 8層 黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/6) を極小～小粒状に30%含む。明赤褐色土 (5YR5/8) を中粒～極大粒状に10%含む。粘性・湿性・しまりなし。
- 9層 黒褐色土 (10YR3/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR6/8) を、極小～小粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。
- 10層 明黄褐色土 (10YR6/6) に、黒褐色土 (10YR3/1) を30%含む。粘性・湿性なし。しまりなし。
- 11層 黒褐色土 (10YR2/2) に、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒状に40%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 12層 黒褐色土 (10YR3/1) に、明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を極小粒状に30%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。
- 13層 黒褐色土 (10YR2/3) に、明赤褐色土 (5YR5/8) を2.0～5.0cmの厚さで板状に20%含む。明黄褐色砂

- 質土（10YR6/6）を小粒～中粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 14層 黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～大粒状に20%、明赤褐色土（5YR5/8）を中粒状に3%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 15層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/8）を極小～大粒状に20%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。
- 16層 明黄褐色土（10YR6/6）に、黒褐色土（10YR3/1）を極小粒状に15%、明黄褐色砂質土（10YR7/6）を中～大粒状に20%、明赤褐色土（5YR5/8）を中粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 17層 黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～小粒状に40%、明赤褐色土（5YR5/8）を小粒状に5%含む。粘性・湿性あり。しまりややあり。
- 18層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～中塊状に50%、明赤褐色土（5YR5/8）を中粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。
- 19層 黒褐色土（10YR3/2）に、黒色土（10YR2/1）を斑状に20%含む。明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～極大状に30%含む。凸状部分はほぼ明黄褐色砂質土である。粘性・湿性あり。しまりなし。
- 20層 暗褐色砂質土（10YR3/3）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～大粒状に20%、明赤褐色土（5YR5/8）を小粒状に15%、黒色土（10YR2/1）を斑状に15%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。
- 21層 黒色土（10YR2/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に2%含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりなし。
- 22層 黒褐色土（10YR3/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に15%含む。粘性・湿性あり。しまりなし。
- 23層 黒色土（10YR1.7/1）。褐色砂質土（10YR4/4）を極小～中粒状に30%含む。粘性あり。湿性なし。しまりややあり。
- 24層 灰黄褐色砂質土（10YR4/2）に、黒色土（10YR1.7/1）を厚さ0.5～1.0cmの板状に含む。粘性なし。湿性あり。しまりややあり。
- 25層 褐色砂質土（10YR4/4）。黒色土（10YR1.7/1）を40%含む。粘性・しまりなし。湿性あり。
- 26層 黒色土（10YR1.7/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～小粒状に10%含む。硬化面か？粘性なし。湿性ややあり。しまり非常にあり。
- 27層 黒色土（10YR2/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～中粒状に5%含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。
- 28層 黒色土（10YR1.7/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小粒状に2%含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりややあり。
- 29層 黒色土（10YR1.7/1）。粘性・湿性・しまりややあり。
- 30層 黒色土（10YR1.7/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～小粒状に20%、極大塊状に10%含む。粘性・しまりなし。湿性あり。
- 31層 褐色砂質土（10YR4/6）に、黒色土（10YR1.7/1）を薄い板状に20%含む。
- 32層 黒色土（10YR1.7/1）に、明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小～小粒状に2%含む。粘性なし。湿性ややあり。しまりあり。
- 33層 黒色土（10YR1.7/1）に、黄褐色砂質土（10YR5/6）を極小～小粒状に2%、中塊状に1%含む。
- 34層 黄褐色砂質土（10YR5/6）に、黒色土（10YR2/1）を15%含む。粘性・しまりなし。湿性ややあり。
- 35層 黒色土（10YR2/1）に、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～小粒状に15%含む。粘性なし。湿性あり。しまりややあり。
- 36層 橙色砂質土（7.5YR6/8）。粘性・湿性・しまりなし。黒褐色土（10YR3/1）を10%含む。
- 37層 黒色土（10YR1.7/1）。粘性・湿性・しまりややあり。
- 38層 黒色土（10YR1.7/1）。明黄褐色土（10YR6/6）を3%含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。
- 39層 褐色土（10YR4/4）。黒色土（10YR1.7/1）を10%含む。粘性・湿性・しまりややあり。粘土質である。
- 40層 黒褐色土（10YR2/2）。黄褐色砂質土（10YR5/8）を極小～小粒状に15%含む。粘性なし。湿性・しまりややあり。
- 41層 明黄褐色土（10YR6/6）と黒褐色土（10YR3/2）の混層。粘性・しまりなし。湿性ややあり。
- 42層 黒褐色土（10YR2/2）。明黄褐色土（10YR6/6）を極小粒状に5%含む。粘性・しまりややあり。湿性あり。
- 43層 黒色土（10YR1.7/1）。明黄褐色砂質土（10YR6/6）を極小粒状に15%含む。粘性・しまりなし。湿性あり。

表Ⅲ-8 B区Eライン基本層序注記表（E7からE29まで 図Ⅲ-10・11 対応）

- I層 黒褐色土（10YR3/2）に黄褐色土（10YR5/8）を極小粒状に1%含む。草根を多量に含む。粘性なし。湿性なし。しまりややあり。表土。
- II層 黒褐色土（10YR3/2）に褐色酸化鉄（7.5YR4/6）を極小粒状に20%斑点状に含む。にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を極小粒状に5%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。水田層。
- III層 黒褐色土（10YR3/2）。基本的にII層と同質であるが、褐色酸化鉄（7.5YR4/6）をより多く（30%）

含む。また層下部は、極薄い褐色酸化鉄（7.5YR4/6）層になっている部分もみられる。それ以外の部分でも、層下位にいくに従って褐色酸化鉄（7.5YR4/6）の含有量が多くなる。水田層。

Ⅳ層 黒褐色土（10YR3/1）に、褐色酸化鉄（7.5YR4/6）を極小～小粒状に30%含み、層上位での割合が多い。E36～E39では、厚さ5cm程度の板状に堆積する部分もみられる。にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を極小～小粒状に10%含む。粘性あり、湿性なし。しまりあり。水田層。

Ⅴ層 黒色土（10YR2/1）に褐色酸化鉄（7.5YR4/6）を極小粒状に2%、褐色砂質土（10YR4/6）を極小～小粒状に5%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。畑層。

Ⅵ層 黒色土（10YR1.7/1）に褐色酸化鉄（7.5YR4/6）を極小粒～中粒状に10%含む。層中位に砂質土と粘土層がレンズ状に堆積する部分がある。砂質土層の中にも褐色酸化鉄（7.5YR4/6）が含まれる。粘性・湿性ともに非常にあり。しまりなし。

Ⅶ層 にぶい黄褐色土（10YR5/4）。地山層。

第2節 B 区 の 調 査

B区は、A区より250m西側に位置し、標高38mから36mまで東側から西側に緩い傾斜を有する台地上に存在する。周辺は林檎園と休耕田となっており、西側に岩木山を臨むことができる。南側には水路となっている沢があり、その北側に幅3mのグリッドを約100mにわたって設定し、遺構の存在を確認しながらトレンチ状の調査を実施した。その結果、溝跡6条、土坑6基、焼土遺構3基を確認した。現代の攪乱土坑を除けば、時期は平安時代のものと推定されるが、遺物が出土しない遺構は時期不詳として扱った。

基本層序は東側と西側で相違し、E29区までの東側は、Ⅰ層（耕作土）、Ⅱ層（遺構確認面、部分的にしか残っていない）、Ⅲ層（遺構確認面：平安時代）、Ⅳ層（地山）である（図Ⅲ-10）。西側は水田の面があるため、Ⅰ層（表土）、Ⅱ層～Ⅳ層（水田の客土）、Ⅴ層～Ⅵ層（腐植土）、Ⅶ層（地山）の層序となっている（図Ⅲ-11）。遺構の覆土はそれぞれ遺構ごとに説明する。

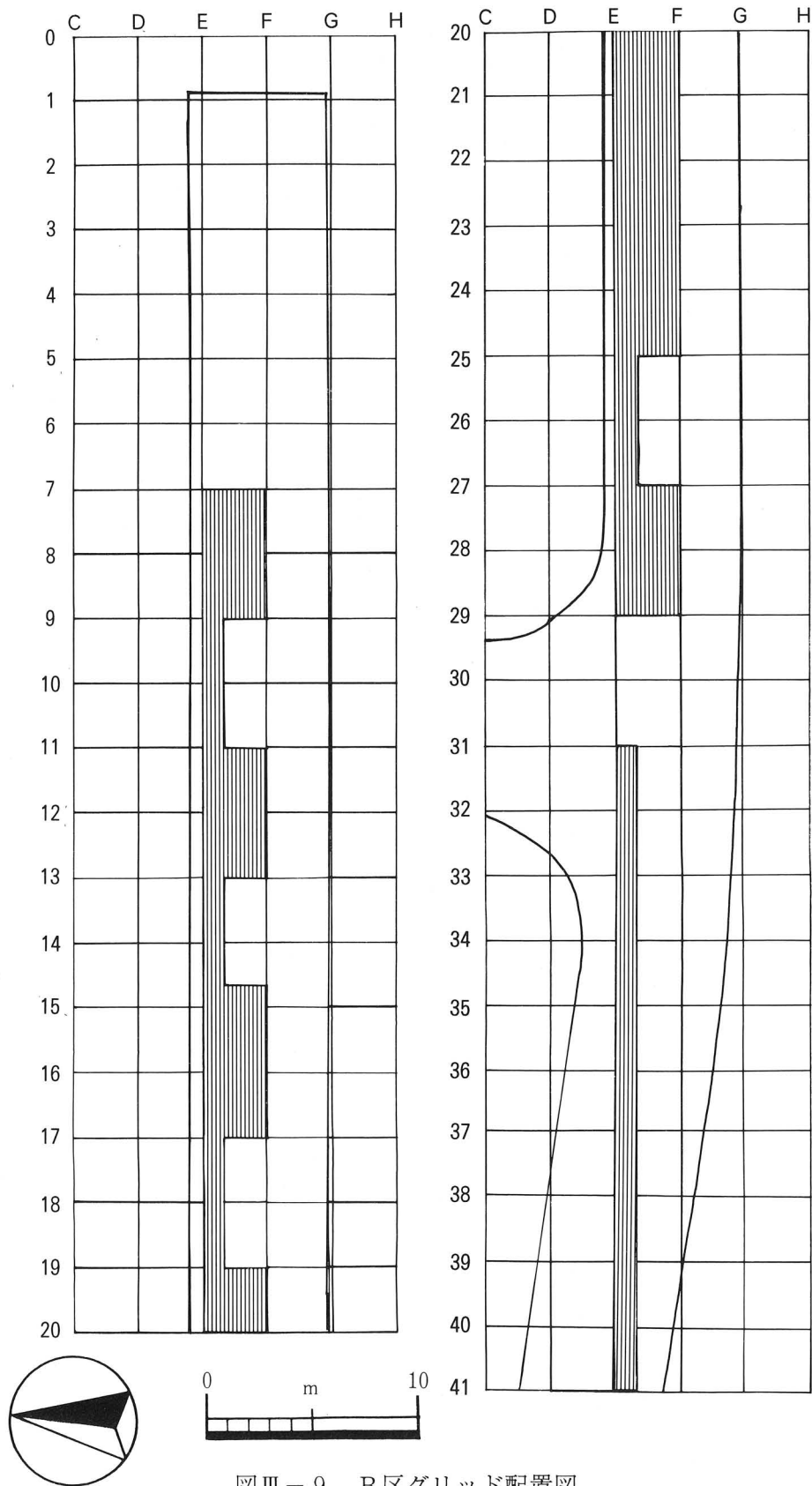
SD04（図Ⅲ-10・12、表Ⅲ-10、写真Ⅲ-5-3・5） F-15・16区検出。上端幅230cm、深さ70cmで北から南に傾斜している。覆土は10層～16層で14層中に縄文時代後期・晩期の細かな土器片や石器剥片が多量に入っていた。土器片のほとんどは表面が摩滅した状態となっているが、文様のわかるものは大洞BC式のものが多い。砂礫の堆積状態などからこの溝は水路として利用されたらしく、土器片などはそれに混じって流れてきたものだろうか。出土したミニチュア土器を図示（図Ⅲ-18-1、写真Ⅲ-5-6）した。

SD05（図Ⅲ-10・12、表Ⅲ-10） F-9区検出。上端幅60～70cm、深さ40cmで北から南に傾斜している。覆土は1・2層で出土遺物はなかった。時期不詳である。

SD06（図Ⅲ-13、表Ⅲ-10） F-23区検出。上端幅15～20cm、深さは15cmで、覆土はⅢ層を掘り込んだⅡ層でありSF04（新）と重複している。北東から南西に傾斜する。出土遺物に土師器甕の破片があり、平安時代の溝と想定される。

SD07（図Ⅲ-10・13、表Ⅲ-10） F-22・23区検出。上端幅40～30cm、深さ15cm、Ⅲ層のみの掘り込みであり地山まで達していない。覆土は45・46層であり、北東から南西に傾斜している。出土遺物はなく時期不詳である。

SD08（図Ⅲ-10・12、表Ⅲ-10） F-12区検出。上端幅120～130cm、深さ40cmで北から南



図Ⅲ-9 B区グリッド配置図

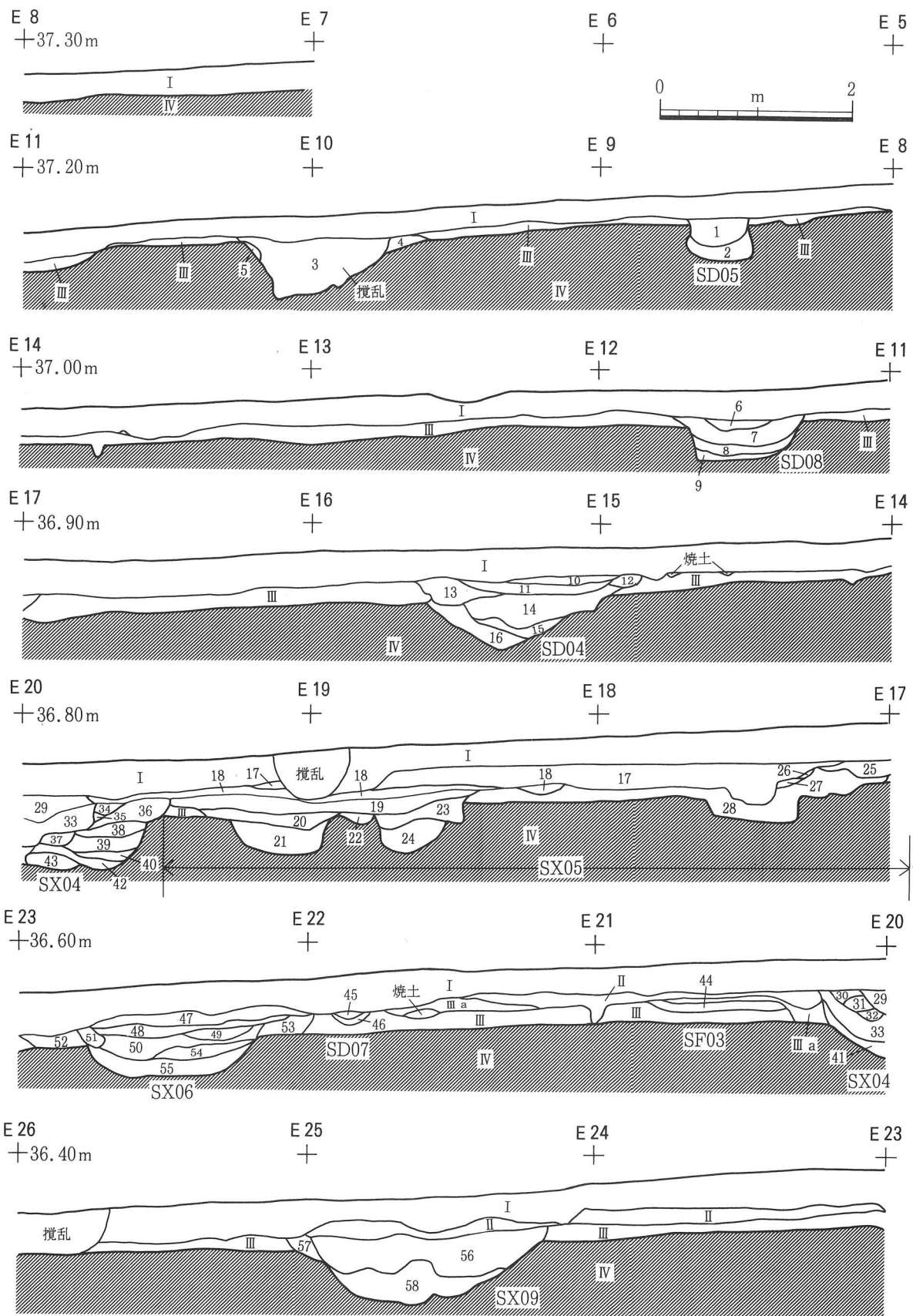
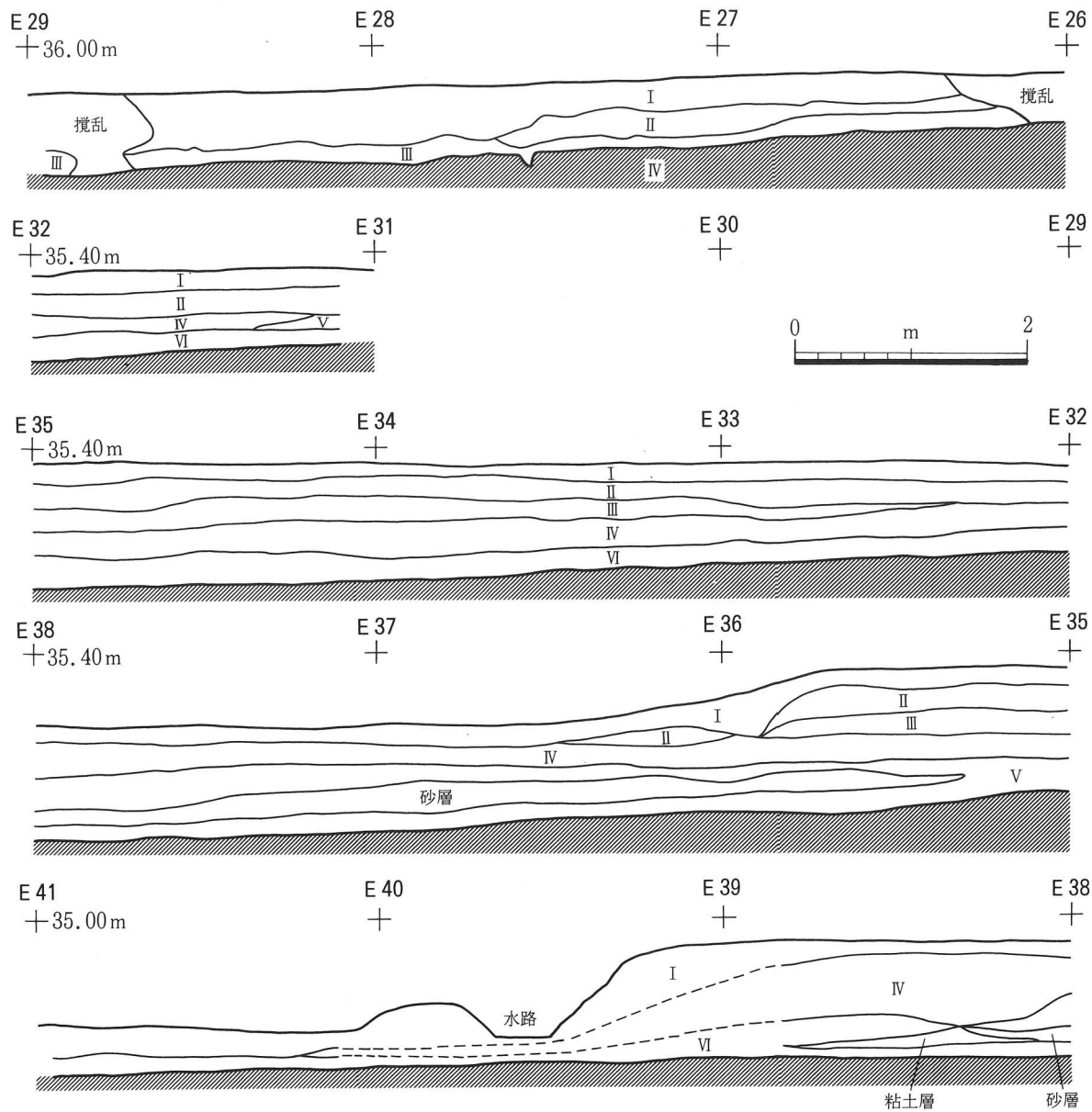


图 III-10 B区基本层序实测图 (1)



図Ⅲ-11 B区基本層序実測図(2)

に傾斜している。覆土は6～9層で、土師器甕の破片が若干出土している。平安時代の溝である。

SD10 (図Ⅲ-13、表Ⅲ-10) F-21区検出。上端幅40～30cm、深さ10cmで北から南に傾斜している。覆土はⅢ層を掘り込んだⅡ層であり、出土遺物はなく時期不詳である。

SX04 (図Ⅲ-10・13、表Ⅲ-10) F-20・21区検出。上端幅220cm、下端幅140cm、深さ75cmの規模で、不定形の土坑である。覆土は29層～43層で、人為的な埋め戻しを行っており、土師器甕・坏の小片が2点出土している。平安時代の土坑と考えられるが、性格は不明である。

SX05 (図Ⅲ-10・12、表Ⅲ-10) F-16・17・18・19区検出。幅700cmの掘り込みがある大型の遺構で、一部は溝等と重複している。しかしながら、調査箇所からは明確なプランを確認

できなかった。覆土は17層～28層で人為的に掘り下げた後、17層～19層まで埋め戻しを行っている。覆土全般から土師器甕（図Ⅲ-18-2・3）・須恵器甕（図Ⅲ-18-4・5）の出土があり、平安時代の遺構と想定される。

SX06（図Ⅲ-10・13、表Ⅲ-10、写真Ⅲ-5-4） F-22・23区検出。上端幅150～190cm、深さ65cmの溝である。北から南に傾斜している。覆土は47層～55層で、人為的に埋め戻されている。覆土から土師器の甕・坏の破片が出土しており、平安時代の溝と考えられる。SX07と重複しているが新旧関係は不明である。

SX07（図Ⅲ-13） F-21・22・23区検出。明確なプランを確認できなかったが、東西に走る溝が重複している可能性もある。覆土から土師器甕・坏、須恵器壺等の破片が出土している。平安時代の遺構である。

SX08（図Ⅲ-13） F-20区検出。不定形の掘り込みで遺物の出土はなかった。時期不詳。

SX09（図Ⅲ-10・13、表Ⅲ-10） F-25区検出。上端幅250cm、深さ70cmの掘り込みを有する土坑で北側は未調査である。覆土は56層～58層であり人為的な埋め戻しである。出土遺物はなかったが上層にⅡ層が存在することから平安時代の遺構と考えられる。

SF02（図Ⅲ-13） F-20・21区検出。SX04の南側に分布し、Ⅲ層の上面で確認した。土師器甕・坏の破片が出土している。平安時代の焼土と考えられる。

SF03（図Ⅲ-10・13、表Ⅲ-10） F-21・22区検出。覆土は44層で、Ⅲ層の上面に位置する。覆土上層から土師器甕・坏の破片が出土している。平安時代の焼土と想定される。

SF04（図Ⅲ-13） F-22区検出。Ⅲ層上面で確認され、土師器甕の破片が出土している。平安時代の焼土と考えられる。

表Ⅲ-9 B区Eライン基本層序注記表（E31からE41まで：図Ⅲ-11対応）

I層 暗褐色土（10YR3/3）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を極小～小粒状に3%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

Ⅱ層 黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を小～中塊状に5%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

Ⅱa層 黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を小～大塊状に30%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

Ⅲ層 黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を極小粒状に1%含む。一部黒褐色土（10YR3/1）を極少量含む部分がある。粘性あり。湿性ややあり。しまりなし。

Ⅳ層 にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）。地山。

表Ⅲ-10 B区の遺構や攪乱土の注記表（図Ⅲ-10対応）

SD05覆土層序

1層 黒褐色土（10YR2/2）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を極小粒状に1%含む。粘性・しまりややあり。湿性なし。

2層 黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を小～大塊状に15%含む。粘性あり。湿性ややあり。しまりなし。

B10・11区攪乱部分層序

3層 黒色土（10YR2/1）に、パミスを3%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

4層 黒褐色土（10YR3/1）に、黒褐色土（10YR3/2）を10%、パミスを1%含む。粘性・湿性・しまりあり。

5層 黒色土（10YR2/1）に、にぶい黄褐色粘土（10YR5/4）を小～中粒状に15%含む。粘性・湿性・しま

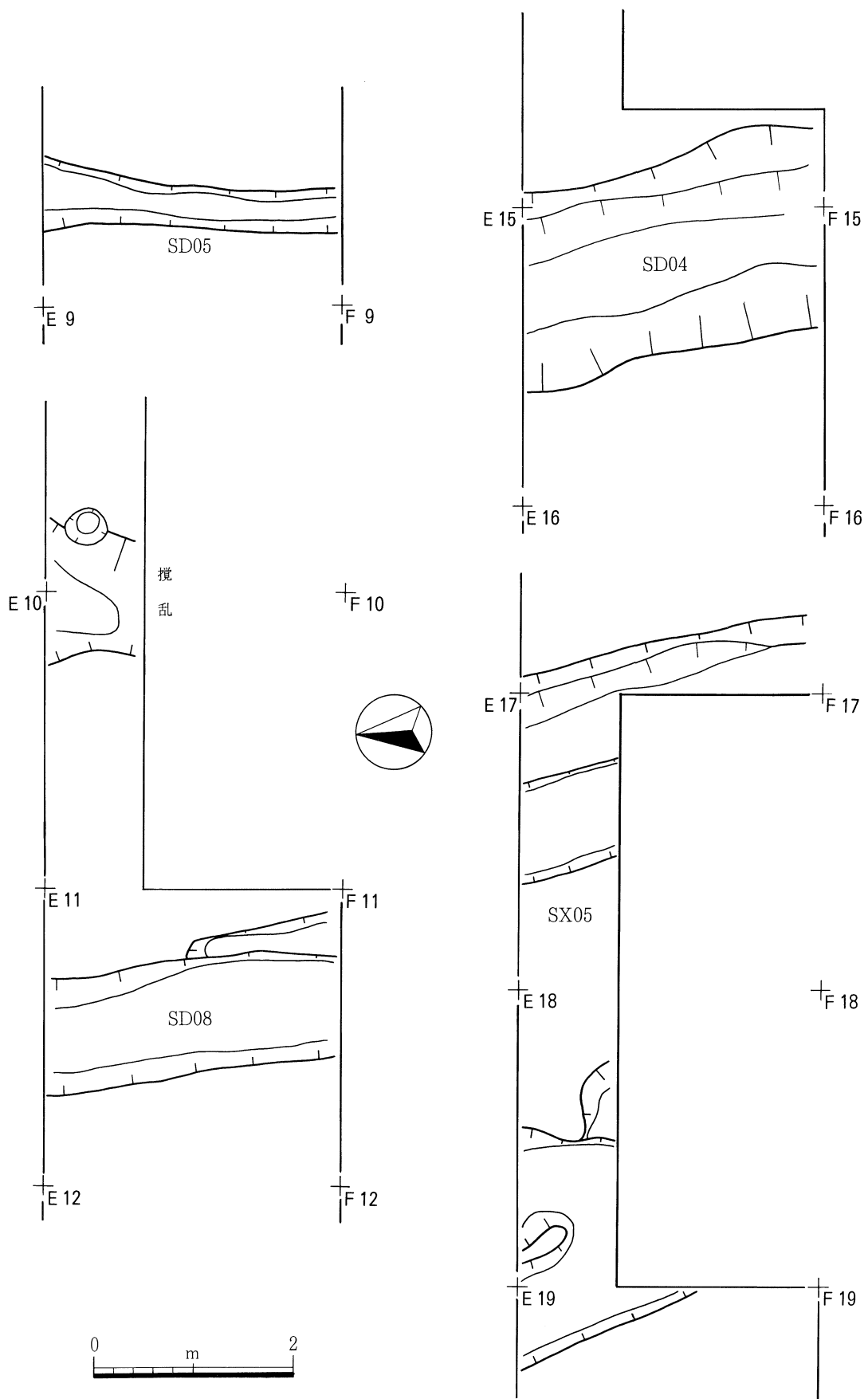


图 III-12 SD04 · SD05 · SD08 · SX05 实测图

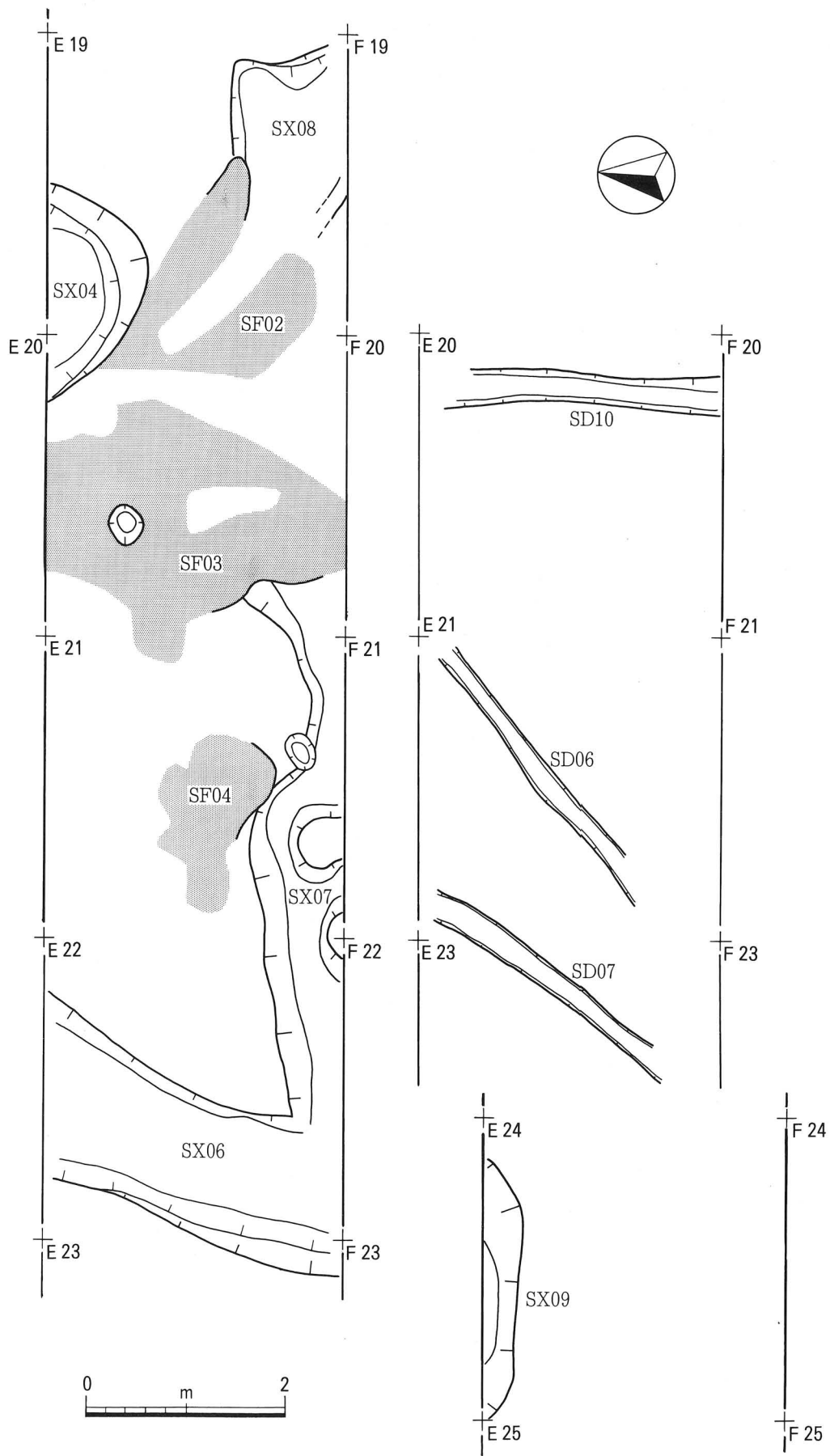


图 III-13 SD06 · SD07 · SD10 · SF02 · SF03 · SF04 · SX04 · SX06 · SX08 · SX09 实测图

りあり。

SD08 覆土層序

6層 黒褐色土 (10YR2/2) に、暗褐色砂質土 (10YR3/4) を極小粒状に10%、厚さ1～1.5cmの板状に含む。にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～中粒状に3%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

7層 黒色土 (10YR2/1) に、パミス・炭化物・焼土を極小粒状に各々1%含む。粘性あり。湿性ややあり。しまりなし。

8層 黒褐色土 (10YR3/2) に、焼土を極小～小粒状に2%、パミスを1%含む。黒色土 (10YR2/1) を厚さ1cmで5%含む。粘性あり。湿性ややあり。しまりなし。

9層 にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) に、黒褐色土 (10YR2/2) を20%含む。

SD04 覆土層序

10層 黒色土 (10YR1.7/1) に、パミスを極小粒状に1%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

11層 黒褐色土 (10YR2/3) に、暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒状に30%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

12層 黒色土 (10YR1.7/1) に、焼土を小～中塊状に3%含む。粘性・湿性・しまりあり。

13層 黒褐色土 (10YR3/2)。シルト質で非常になめらか。暗褐色砂質土 (10YR3/3) を極小粒状に20%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。

14層 シルト質の黒褐色土 (10YR3/2) と暗褐色砂質土 (10YR3/3) の互層。小礫と土器片を非常に多く含む。

15層 シルト質の黒褐色土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR6/4) を層下位に厚さ1cmの板状に含む。粘性・湿性あり。しまりなし。

16層 黒褐色土 (10YR3/2)。14層とほぼ同質だが、小礫と土器片を含む割合が少ない。

SX05 覆土層序

17層 暗褐色土 (10YR3/3) に、砂が多量に混入。酸化鉄を極小粒状に5%、パミスを極小～小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

18層 黒褐色土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を大塊状に3%、酸化鉄を極小～小粒状に2%、パミスを極小～小粒状に2%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

19層 黒褐色土 (10YR3/1) に、酸化鉄を極小～小粒状に5%、パミスを極小～小粒状に3%、焼土を極小～小粒状に2%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

20層 黒褐色土 (10YR3/2) に、パミスを極小～小粒状に3%、酸化鉄を極小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

21層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を大～極大塊状に30%含む (層下位に集中)。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

22層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～中塊状に5%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

23層 黒褐色土 (10YR2/2) に、酸化鉄・焼土を極小～小粒状に各々5%、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～極大塊状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

24層 黒褐色土 (10YR2/2) に、焼土を小～大塊状に10%、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～極大塊状に2%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

25層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)。層中位に黒褐色土 (10YR2/2) を厚さ1～2cmの板状に15%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。

26層 黒褐色砂質土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色土 (10YR4/3) を極小粒状に20%含む。粘性・湿性なし。しまりややあり。

27層 にぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3)。粘性・湿性なし。しまりあり。

28層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～大塊状に20%、酸化鉄を小～中粒状に5%含む。1層との境目に砂を含む。粘性・湿性ややあり。しまりあり。

SX04 覆土層序

29層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小粒～極大粒状に5%含む。焼土を極小粒状に1%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

30層 黒褐色土 (10YR2/3) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大粒状に10%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

31層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4)、焼土、炭化物を各々2%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

32層 黒褐色土 (10YR2/3) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4)、焼土を極小粒状に各々2%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

33層 黒褐色土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～中粒状に5%含む。黒褐色土 (10YR3/1) を2%含む。焼土を極小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

34層 黒褐色土 (10YR3/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小粒～小粒状に1%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

35層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極大塊状に40%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

36層 黒褐色土 (10YR3/2) に、暗褐色土 (10YR3/3) を中～極大塊状に5%、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

37層 黒褐色土 (10YR2/2) に、黒褐色土 (10YR3/1) を3%、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

38層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大粒状に3%、暗褐色土 (10YR3/3) を中塊状に2%、黒色土 (10YR2/1) を中塊状に2%、焼土を極小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

39層 黒褐色土 (10YR3/2) に、暗褐色土 (10YR3/3) を大塊状に3%、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に1%含む。焼土を極小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

40層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小粒状に1%含む。粘性非常にあり。湿性ややあり。しまりあり。

41層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性ややあり。

42層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を中～極大塊状に20%、粘性・湿性・しまりあり。

43層 黒色土 (10YR2/1) に、黒褐色土 (10YR3/1) を20%含む。粘性・湿性・しまりあり。

SF03覆土層序

44層 焼土層。暗褐色土 (7.5YR3/4) に、黒褐色土 (10YR3/1) を10%含む。粘性・湿性あり。しまりややあり。

SD07覆土層序

45層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小粒状に7%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

46層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～中粒状に5%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

SX06覆土層序

47層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～大塊状に2%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

48層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に2%、炭化物を極小粒状に1%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

49層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大塊状に15%含む。炭化物を小～中粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

50層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大塊状に10%含む。炭化物を小粒状に1%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

51層 黒褐色土 (10YR2/2) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に2%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

52層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大塊状に3%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

53層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～極大塊状に5%含む。粘性ややあり。湿性なし。しまりあり。

54層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～大塊状に20%含む。粘性・しまりあり。湿性なし。

55層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を小～極大塊状に20%含む。粘性・湿性なし。しまりあり。

SX09覆土層序

56層 黒色土 (10YR2/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～小粒状に3%、酸化鉄を極小～小粒状に1%含む。粘性・湿性あり。しまりややあり。

57層 黒褐色土 (10YR3/1) に、パミスを極小粒状に2%含む。粘性・湿性・しまりあり。

58層 黒褐色土 (10YR3/1) に、にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) を極小～中粒状に10%含む。粘性・湿性・しまりあり。

第4章 出土遺物

第1節 縄文土器

縄文土器の器形としては、深鉢形、壺形（有頸・無頸）、筒形、香炉形、台付皿形、注口形、ミニチュアなどがある。出土状況や特徴は表Ⅲ-18にまとめたので、それぞれの器形ごとに概略を述べる。

1 深鉢形土器

深鉢形の器形を呈する土器は、その形態から大きく二つに分類できる。A類は胴部にくびれを有するタイプであり、B類は胴部にくびれをもたず口縁から底部まで直線的な状況を示すタイプである。

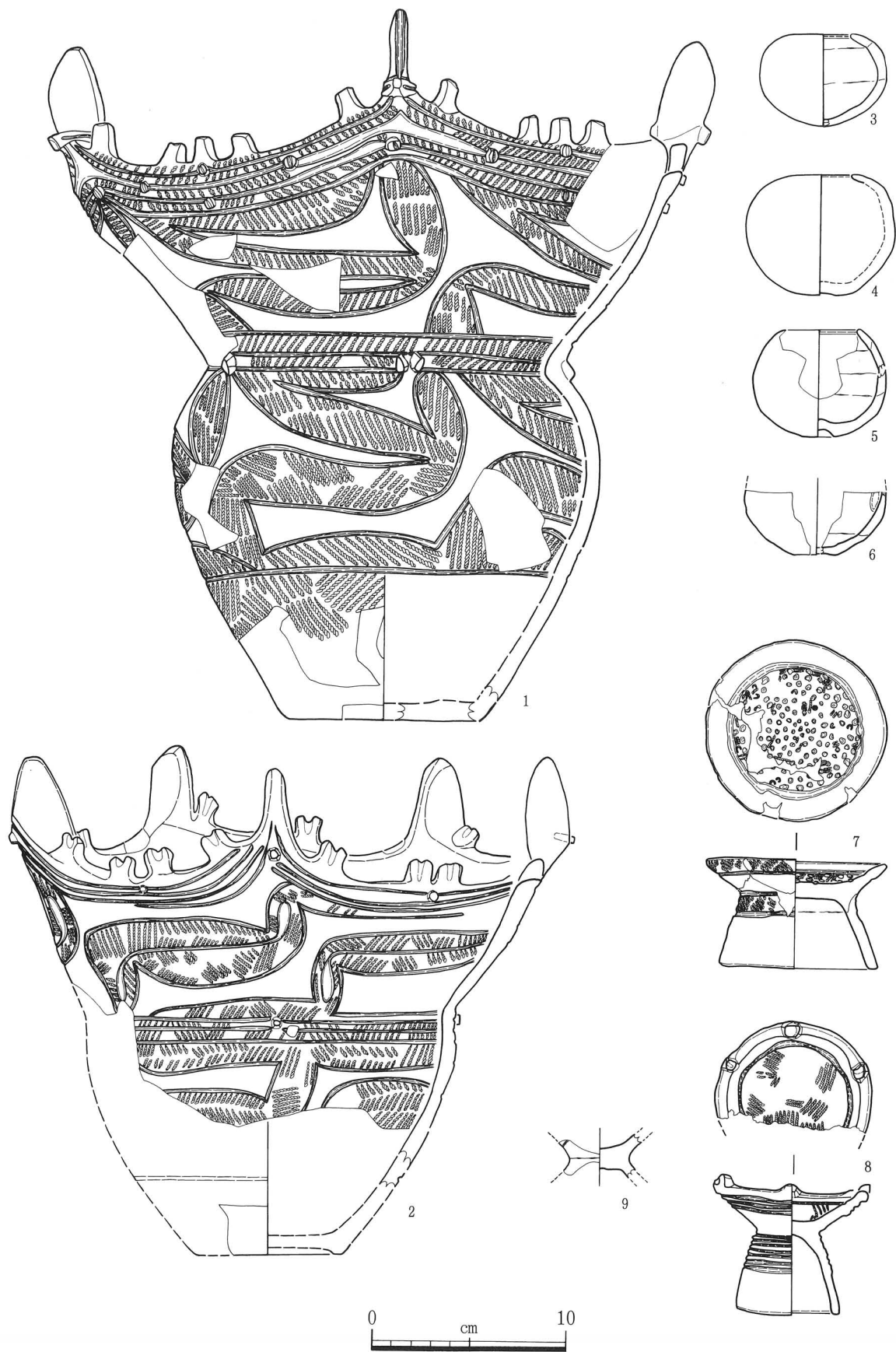
A類には、口縁が大波状を呈するタイプ（AⅠ類）と口縁が平坦なタイプ（AⅡ類）に区分でき、AⅠ類には、口縁波状の突端部に扁平突起をつけるもの（AⅠa類）と突起が見られないタイプ（AⅠb類）に分類できる。AⅡ類は、口縁に突起を周回するタイプ（AⅡa類）と口縁が平坦なままのタイプ（AⅡb類）に分類できる。

B類は、平坦な口縁に突起を有するタイプ（BⅠ類）と突起等が認められず平坦な口縁だけのもの（BⅡ類）に分類できる。

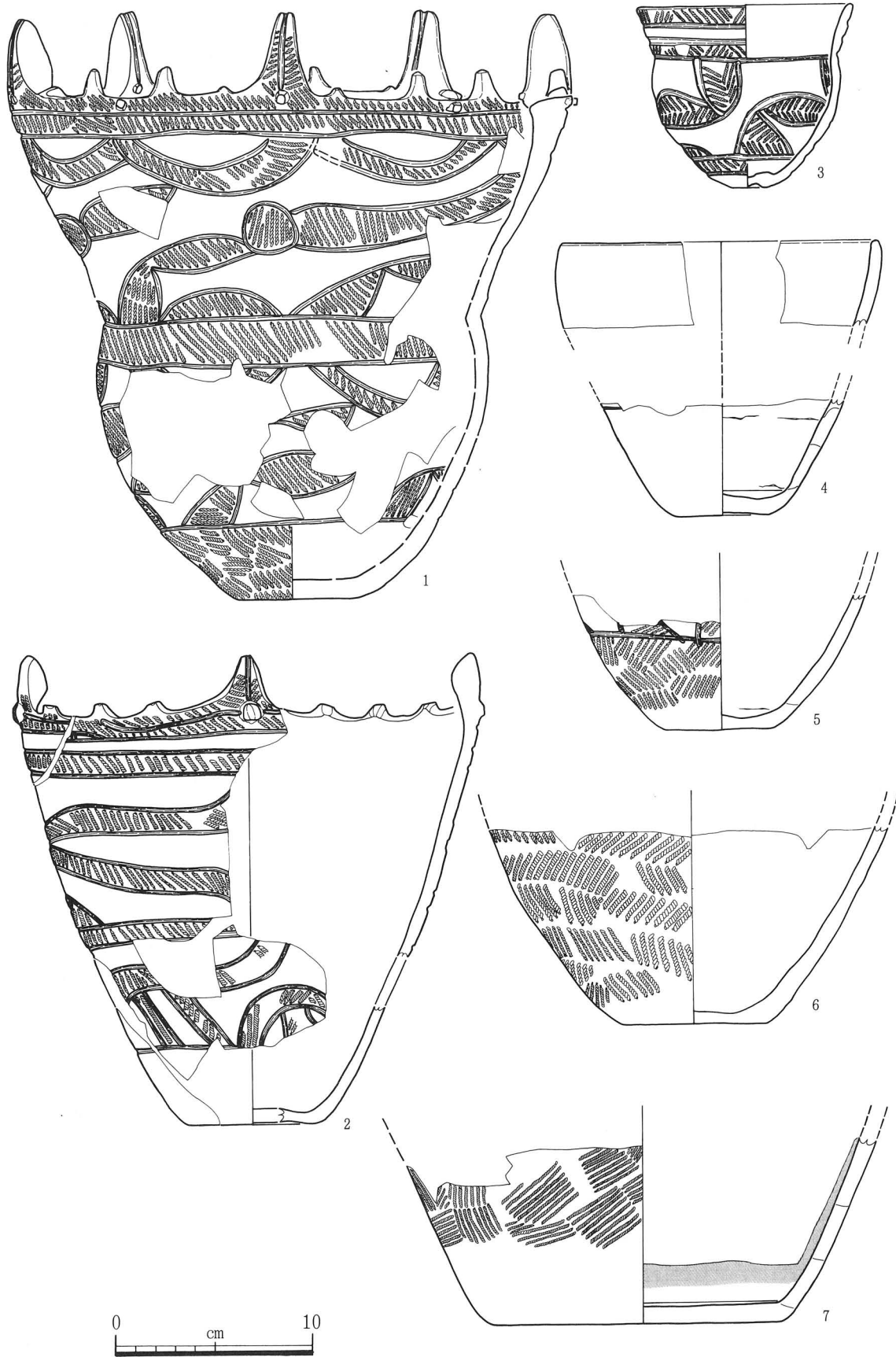
深鉢形土器AⅠa類 本類には三点の精製土器がある（図Ⅲ-14-1・2、図Ⅲ-19-43）。

最も大型の製品は図Ⅲ-14-1であり、胎土に砂等が混じらない粘土を使用し、焼成良好で外面は精緻なミガキを施した後に磨り消しを主体とした入り組み文を施している。内面はくびれ下端から口縁にかけてタール状の炭化物が付着している。口縁はやや肉厚な成形で五単位の波状を呈し、波の山部に扁平な大突起と側面に一对の小突起、波の谷部に三個の小突起を施している。口縁外面には三条の細い区画文があり、山部と谷部には上下二個の貼り瘤、その途中には一個の貼り瘤を、くびれ部にも山部に対応して二個一对の貼り瘤を有している。底部は平底である。くびれを挟んで上下に磨り消し入り組み文を施しているが、縄文原体はRL及びLRの単節縄文であり、一部は羽状の状態を示す。文様は入り組み帯状文であり、周回パターンは図Ⅲ-23-1で示している。包含層Ⅲ層上面出土。

図Ⅲ-14-2は、胎土に多量の砂と石英が混在し、部分的に器面の剥落がみえる。焼成良好であり、外面のミガキはあるものの器面は精緻な感じにはなっていない。内面は底部を除き全体にタール状の炭化物が付着している。口縁は肉厚な成形で五単位のゆるい波状を呈し、波の山部に扁平な大突起と側面に一对の二股小突起、波の谷部に二個の二股小突起を施している。口縁外面には四条の沈線があり、山部と谷部に一個ずつ貼り瘤を施しているが、剥落した部分の観察では穿孔した後に貼り瘤をしており、くびれ部にも四条の沈線を施した後、山部に対応して一個の貼り瘤を有している。底部は上げ底である。くびれの上下に磨り消し入り組み文を施しており、縄文原体はRL及びLRの単節縄文である。文様は入り組み帯状文であり、周回



图Ⅲ-14 出土土器实测图(1)



图Ⅲ-15 出土土器实测图(2)

パターンは図Ⅲ-23-2で示している。包含層Ⅲ層上面出土。

図Ⅲ-19-43は全形を知りえないが、推定口径は30cm弱と思われる。胎土には砂と石英が含まれ、外面のくびれ下半は赤褐色を呈する。内面は横ナデの痕跡が強くみられ、炭化物等の付着は認められない。口縁は波状を呈し、波の山部に扁平な大突起と側面に一对の二股小突起、波の谷部に二個の二股小突起を施している。口縁外面は沈線でなく帯状文がみられ、くびれ上半と下半に同じモチーフの磨り消し入り組み帯状文が施されている。残存部に貼り瘤は認められない。包含層Ⅲ層出土。

以上のほか、口縁部の破片資料として二点（図Ⅲ-20-1・2）あり、包含層Ⅲ層の出土品である。

深鉢形土器AⅠb類 図Ⅲ-16-2は推定口径24cmで五単位の波状を呈すると考えられ、内湾する口縁外面に二条の刻み目文、くびれ上半に沈線による磨り消し区画文、くびれにも一条の刻み目文を確認できる。胴部下半は欠落しているものの、残存部断面の屈曲から丸みを有する胴部下半と推定される。縄文原体はRL及びLRの単節縄文である。包含層第Ⅳ層から主体的に出土している。

破片資料としては、包含層Ⅰ・Ⅱ層出土の口縁肉厚で山形を呈する口縁部（図Ⅲ-18-32）とⅢ層出土のもの（図Ⅲ-20-11・12）がある。

深鉢形土器AⅡa類 図Ⅲ-15-1は、胎土に石英が含まれ、内外面ともに丁寧なミガキを施して精緻な器面となっている。内面くびれ上半に部分的にタール状の炭化物が付着している。口縁は肉厚な成形で平坦な口縁に五単位の扁平な大突起と側面に一对の小突起、中間に二個の中突起を施している。大突起は外面が沈線、内面をケズリによって二股状の形状を示し、基部内外面に穿孔後の貼り瘤を施している。貼り瘤は外面中突起の中間にも施される。口縁外面は大突起の部分も含めて帯状に縄文を施し沈線で区画されている。くびれの上部は弧状と円状を挟んで帯状を呈する磨り消し入り組み文を施しており、縄文原体はRLの単節縄文である。底は平底である。周回パターンは図Ⅲ-23-3で示している。包含層Ⅲ層出土。

図Ⅲ-16-9は小ぶりの深鉢で、胎土に砂の含有が多いためかざらざらした器面を呈する。口縁残存部に五個の二股小突起がある。外面くびれ上半は周回する沈線に区画された磨り消し帯状文、下半には磨り消し入り組み文が施される。底は凹みを有する上げ底である。包含層Ⅲ層出土。縄文原体はRL及びLRの単節縄文で、文様パターンは図Ⅲ-23-5である。

深鉢形土器AⅡb類 図Ⅲ-15-3は小型の鉢で、器面のミガキ部分は光沢を有する。外面くびれ上半は周回する磨り消し帯状文、下半は磨り消し入り組み文を施し、底は上げ底である。縄文原体はRL及びLRの単節縄文で、文様パターンは図Ⅲ-24-6である。包含層Ⅲ層出土。

深鉢形土器BⅠ類 図Ⅲ-15-2は全体の半分ほどが残存している。胎土に多量の砂と石英が含まれ、器面はミガキの部分が光沢を有する他はざらついた状況を呈する。平坦な口縁に山形突起（五単位と推定される）とその間に小二股突起を二個づつ付けていると想定される。山形

突起の外面基部にコーヒ豆状の貼り瘤がある。口唇部外面の文様は突起の部分も含めて縄文を施文し、施文の上から沈線を施す。胴部は周回する帯状区画によって二段に区分され、どちらも磨り消し入り組み文を施している。底は若干上げ底状を呈する。縄文原体はRLを主体とするが少しだけLRのものが混じる単節縄文で、文様パターンは図Ⅲ-23-4である。

深鉢形土器BⅡ類 深鉢形土器の中では最も出土量が多い。図Ⅲ-16-1を代表とする深鉢で、口縁は平坦で内側に肉厚な成形をし、内湾する。口縁から底部まで外面全体にRL及びLRの単節縄文を施すため横位の羽状を呈する。底は平底である。また、本類には外面無文のものも(図Ⅲ-15-4)存在する。さらに、縄文を施文した後に器面にミガキを施すことから、全体的に鈍い光沢を有するものが存在し、SI01床面出土のもの(図Ⅲ-18-6)と、包含層Ⅲ層出土のもの(図Ⅲ-19-41・42)は同一個体と推定される。

以上のほかに、AⅠa類かAⅡa類の底部と想定される破片(図Ⅲ-15-5・図Ⅲ-19-44)が遺物包含層Ⅰ～Ⅲ層から出土し、同じくくびれ下の胴部破片と想定されるもの(図Ⅲ-18-7)がSI01床面・覆土から出土している。BⅡ類の底部としてRL及びLRの単節縄文を横位に施すもの(図Ⅲ-15-6)とRL主体で縦位の方向を示し、内面に多量の炭化物が付着するもの(図Ⅲ-15-7)がある。

2 壺形土器

壺形土器は、有頸壺(A類)と無頸壺(B類)に二分できる。有頸壺の場合は器種の上で注口土器との区別が難しく、ここでは注口部が存在しないもののみ取り扱う。

壺形土器A類 図Ⅲ-16-4は口縁部を欠いているが、器面のミガキが強く顕われ、胴部張り出し部に四条の磨り消し帯状文を周回する。地文はRL及びLRの単節縄文である。内面の観察では、胴部張り出しに一個の穿孔をした痕跡が残り、その後粘土を充填してふさいでいることから、当初は注口土器として製作された可能性が高い。底は指突によるくぼみ底となっている。包含層Ⅰ・Ⅱ層出土。

図Ⅲ-16-3は大形の壺形土器であり頸部上半を欠いている。断片資料ながら、器面は精緻なミガキがみられ、磨り消し入り組み文を施した後、胴部上半に貼り瘤を付ける。RL及びLRの単節縄文が交互に施されることから羽状を呈する部分が多い。底は小さいながら平底である。包含層Ⅳ層出土。また、本土器と類似する器面調整・文様構成・貼り瘤の認められる破片(図Ⅲ-16-11)が含層Ⅳ層から出土している。

図Ⅲ-16-10は無文の壺形土器で底部を欠いている。口頸部は短い立ち上がりを示し、胴部張り出し部に四個の貼り瘤が想定される。包含層Ⅳ層出土。

壺形土器B類 本類はほぼ球形の形状を呈し、底は指突によるくぼみ底となっている。外面はミガキによる整形で、内面観察では輪積み痕も認められる。四点の個体があり、SI01覆土(図Ⅲ-14-4)、SX02床面(図Ⅲ-14-3)、包含層Ⅰ・Ⅱ層、(図Ⅲ-14-6)、包含層Ⅲ層(図Ⅲ-14-5)からの出土である。

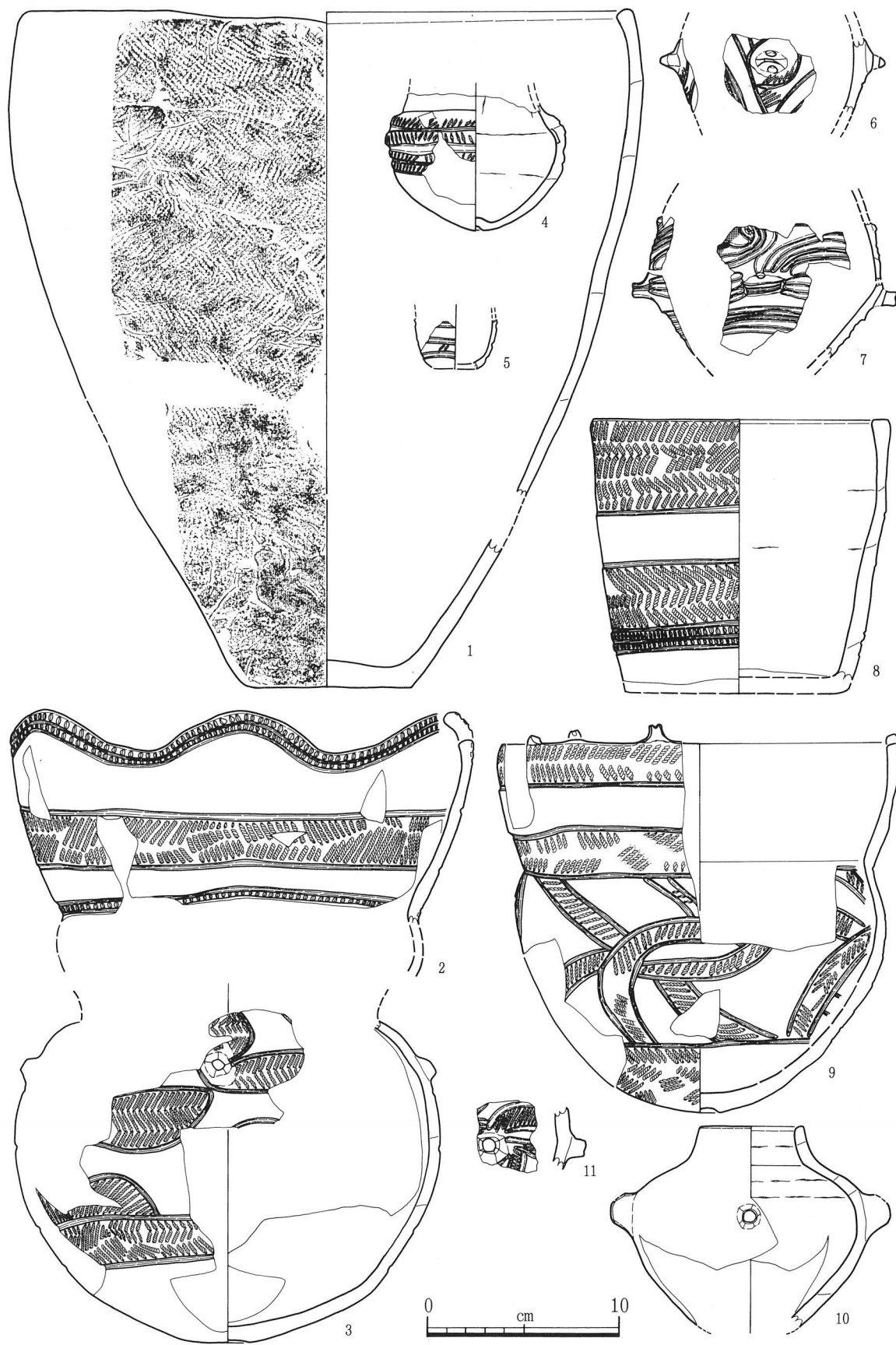


图 III-16 出土土器实测图 (3)

以上の他にA類の破片資料としては、無文で口縁部が朝顔形に開く形態（図Ⅲ-19-23・24）や、口頸部の立ち上がりが高い形態（図Ⅲ-19-20・21・22・25）があり、胴部に磨り消し入り組み文を施す例（図Ⅲ-19-18・19など）がみられる。

3 筒形土器

筒形土器は、磯崎正彦が「十腰内第Ⅳ群土器」[磯崎 1968]の指標として示した土器であるが、実測図等もなく別な器形の可能性もあり、これまで実態不明な点があった。本遺跡の調査で、底を欠いているが底部下端の折れの状態から筒形と想定される土器が検出された。図Ⅲ-16-8に示した土器である。口縁を肉厚に成形して平坦な面を作り、外面には沈線で区画された二条の磨り消し帯状文と二条の刻み目文が周回する。帯状文はR L及びL Rの単節縄文が交互に施されることから横位の羽状を呈する部分が多い。内外面ともに無文部分は横位のミガキが強く認められる。出土は包含層Ⅳ層上面であり、SI01覆土の破片例と同一個体と想定される。破片資料としては、包含層Ⅳ層出土例（図Ⅲ-20-18）と包含層Ⅲ層（図Ⅲ-19-37）が筒形の可能性を有する。

4 香炉形土器（壺形の可能性もある）

全形を知りえる資料はないが、包含層Ⅲ層の上層を中心として破片資料が存在する。図Ⅲ-16-6は、外面に沈線による区画文が施された後丁寧なミガキを施され、縦位の穿孔突起を貼り付けている。一部にR L単節の縄文がみられ、突起の部分にも確認できる。図Ⅲ-16-7は、幅の広い沈線によって三～四条の隆帯状の文様が施され、胴部張り出し部に縦位の穿孔突起が貼り付けられている。部分的にアスファルトの付着が認められ、胴部下半はすぼまる状態が想定される。

5 台付皿形土器

高台の付く土器は、比較的小型のものが多く、三点を確認した。図Ⅲ-14-7は、外面の口縁部と台部上半に沈線で区画された磨り消し縄文帯を有し、無文の部分はミガキによって調整される。上皿の内面は、一度R L単節縄文が施された後、ミガキによってそれを磨り消し、さらに中央部には径の小さい刺突、外側には径の大きい刺突文が施され、最後に沈線で区画されている。包含層Ⅰ・Ⅱ層出土。

図Ⅲ-14-8は、SI01覆土からの出土。外面の口縁部と台部上半には周回する沈線を施し、口縁上端には5個以上と想定される突起を貼り付けている。皿部の内面はL R単節縄文（ミガキのため明確ならず）を施した後ミガキによって磨り消している。器面全体に丁寧なミガキが施され、光沢を有する。図Ⅲ-14-9は、台接合部の破片で包含層Ⅱ層出土である。

6 注口土器

注口土器は、有頸の壺形土器に注口を取り付けたものであり、明確な分類基準を見出せないことから個別に説明する。

図Ⅲ-17-1は、本遺跡では最大の注口土器であり、土圧によって一部にひび割れがあるも

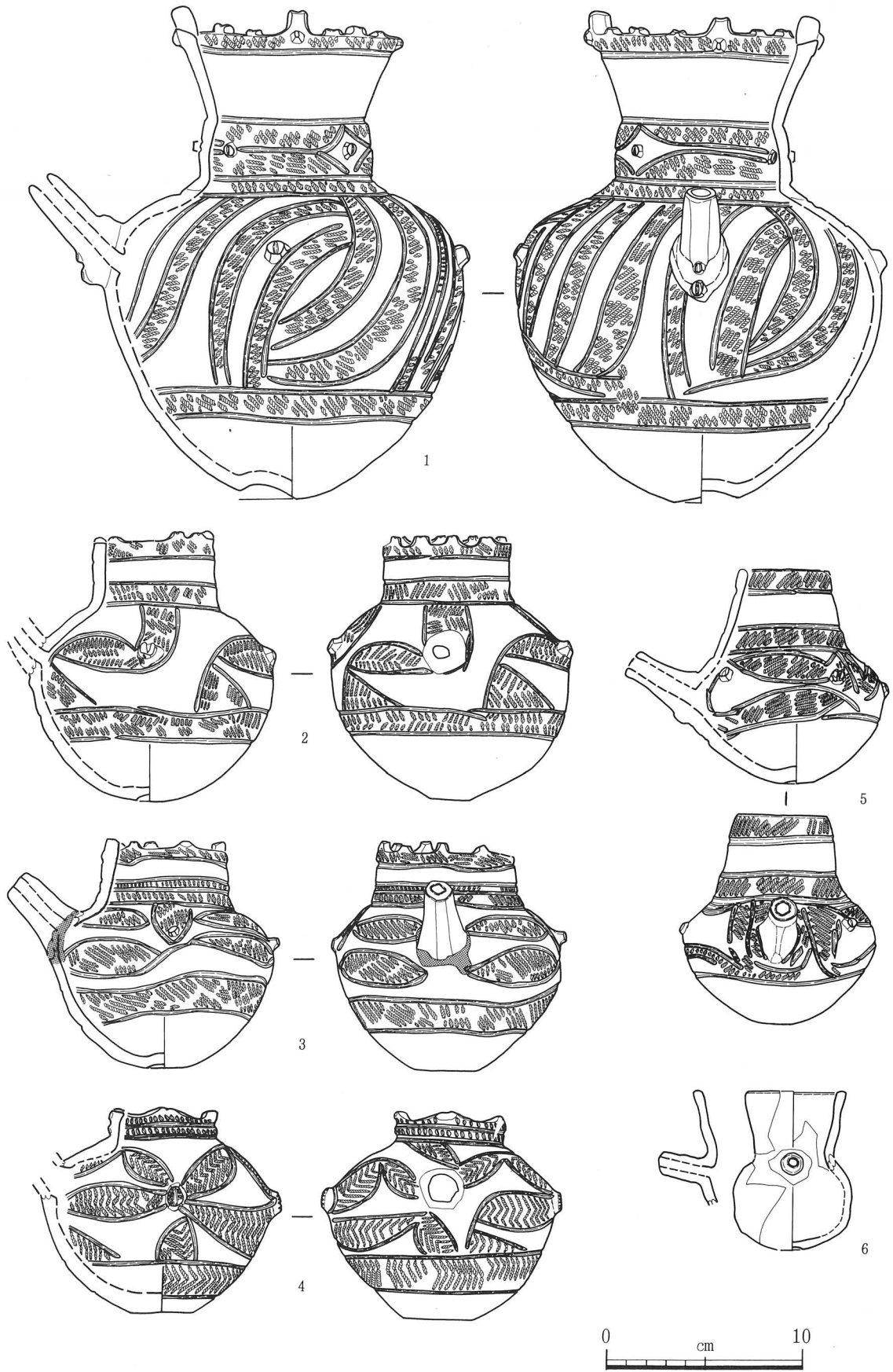


图 III-17 出土土器实测图 (4)

の、器面全体の（内外面ともに）ミガキが丁寧で精緻な製品である。口縁から頸部にかけて一段くびれを有し、上半は無文ミガキ、下半は四単位の貼り瘤に対応して弧状の磨り消し区画文を施す。口縁部はやや外側に張り出した肉厚な成形で外面は周回する磨り消し帯状文、口唇には二股大突起を四個付けてその間に二股小突起を三個配置する。大突起に対応して帯状文にも貼り瘤がみられる。胴部上半と底部上半には周回する帯状文があり、その間に縦位の弧を描く磨り消し入り組み文が配される。胴部張り出し部に注口部と対応して三個のコーヒー豆状の貼り瘤が認められる。底は指突によるくぼみ底となっている。沈線による区画文を構成するにあたり、一度沈線を施した後に再度縄文を施文する箇所、縄文の区画内までミガキがくい込む箇所もあり、最終的な文様区画まで紆余曲折のあったことがわかる。縄文原体はRL単節を多用し、文様パターンは図Ⅲ-24-5に示した。SI01床面出土。

図Ⅲ-17-2は、土圧によるひび割れがあり、注口部が欠損している。口縁から頸部に二条の周回する磨り消し帯状文、口唇に十一箇所の二股小突起がみられる。胴部上半の施文は注口部も対応して四単位の入り組み文を施し、胴部の張り出し部に三個の貼り瘤を施す。底は指突によるくぼみ底。縄文原体は撚りの細かいRL及びLRの単節縄文であり、羽状の部分も多い。SI01床面出土。

図Ⅲ-17-3は、アスファルトの接合痕を有する注口部が接合した例で、どちらもSI01床面出土である。口縁から頸部にかけては三条の磨り消し帯状文が周回し、口唇には八個の突起が貼り付けされる。胴部には木の葉状の入り組み文が施されるが、一定したパターンにはなっていない。胴部の張り出し部に注口部と対応して三個の貼り瘤が存在する。底は指突によるくぼみ底。縄文原体はRL単節であり、文様パターンは図Ⅲ-24-3である。

図Ⅲ-17-4は、口唇が四単位の波状を呈して口縁外面に二条の刻み目文を周回させている。胴部の文様は入り組み充填文であり沈線区画の後にRLとLRの縄文を交互に施し羽状を呈する部分が多い。胴部の張り出し部に注口部と対応して三個の貼り瘤がみられ、貼り瘤にも刻み目を入れている。底は小さいながらも平底である。包含層Ⅳ層出土で、Ⅲ層出土の注口部と接合の可能性がある。

図Ⅲ-17-5は、頸部から口縁にかけてすぼまる形態で、口唇に突起を有する可能性も存在するが残存部からは確認できない。口縁と頸部立ち上がりに二条の磨り消し帯状文を周回させ、胴部の入り組み文は規則性に乏しく貼り瘤もアトランダムな単位である。底は指突によるくぼみ底となっている。縄文原体はLR単節であり、文様パターンは図Ⅲ-24-4である。包含層Ⅲ層上面から出土している。

図Ⅲ-17-6は、無文の注口土器で破片資料のため復元実測している。口縁がやや広がる形態で、底は指突によるくぼみ底である。SX02床面出土。

6 その他の土器

図Ⅲ-16-5は、壺形と想定されるミニチュア土器で、沈線文とわずかに縄文原体の痕跡が

みられる。包含層Ⅰ・Ⅱ層出土。

図Ⅲ-18-10は、鉢形と推定される破片に沈線による入り組み文を施した例で、後期初頭の土器。SI03床面から出土している。

図Ⅲ-18-1は、口縁が広がる壺形のミニチュア土器で、刺突文と入り組み沈線文が認められる。B区SD04からの出土である。

7 遺物包含層と出土土器

遺物包含層から出土した土器は、復元資料及び破片資料も含めて次の傾向を有した。

Ⅰ・Ⅱ層は縄文土器及び平安時代の土師器等が混在する土層であり、一括して資料を提示すると、深鉢形はBⅡ類（図Ⅲ-18-16~29）、AⅠb類（図Ⅲ-18-32）、AⅡ類ないしBⅠ類（図Ⅲ-18-30・31、図Ⅲ-19-1~5）、鉢ないしは壺形土器では図Ⅲ-19-6~26・31・32があり、26は縄文時代晩期の赤色顔料を添付した壺形土器の可能性が高い。香炉形土器の可能性が高いものは図Ⅲ-19-27~30である。土師器甕は図Ⅲ-19-33・34である。

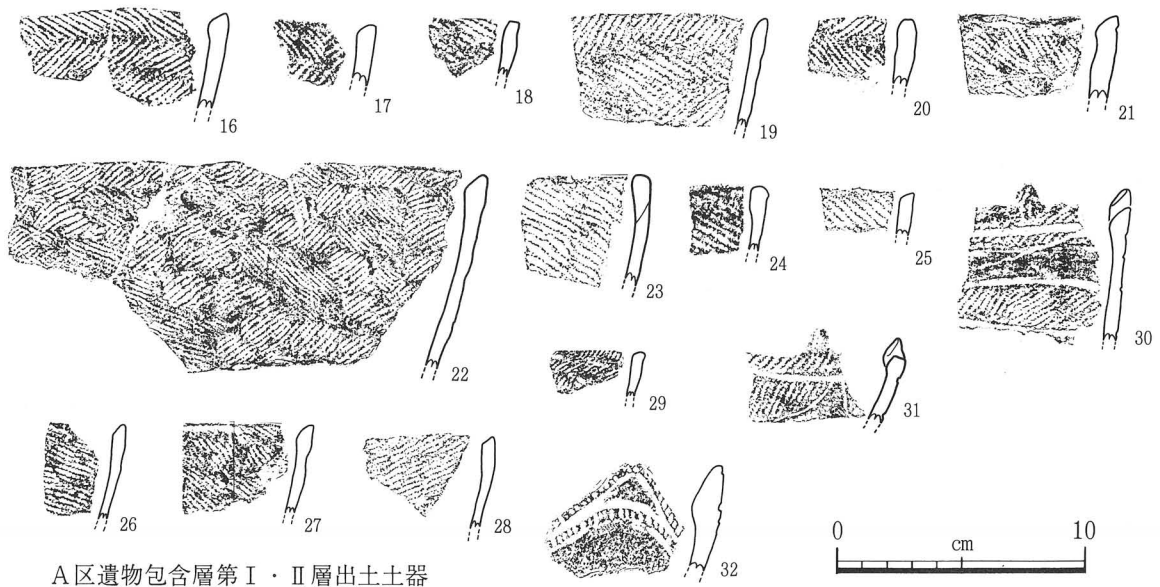
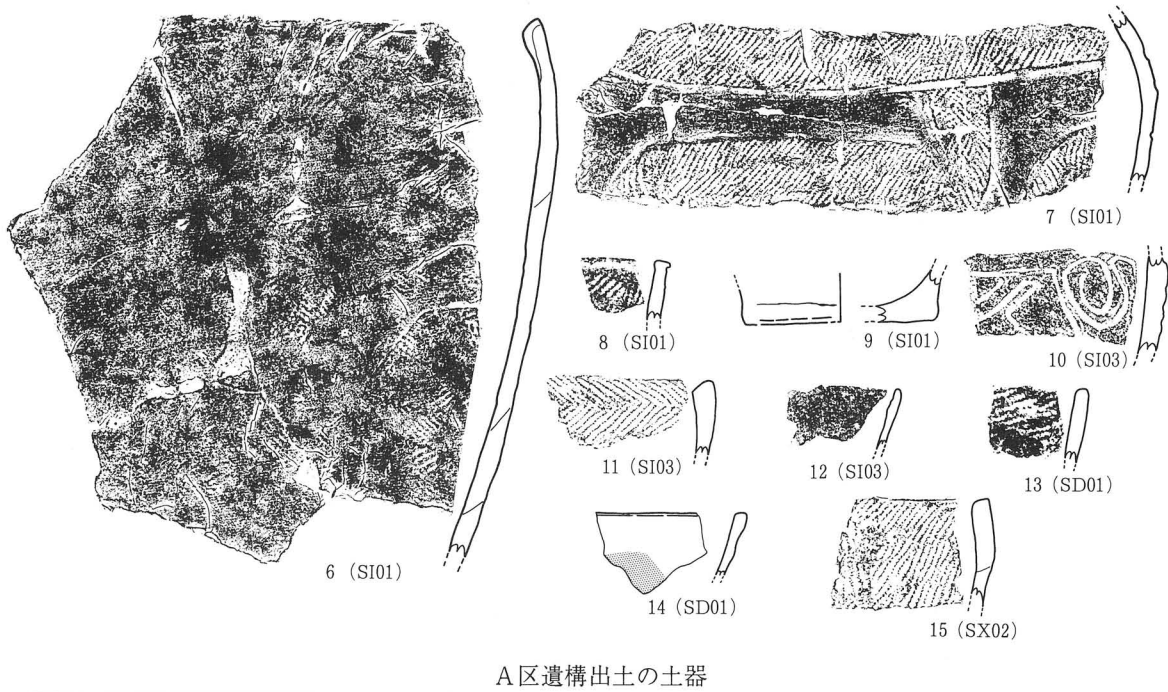
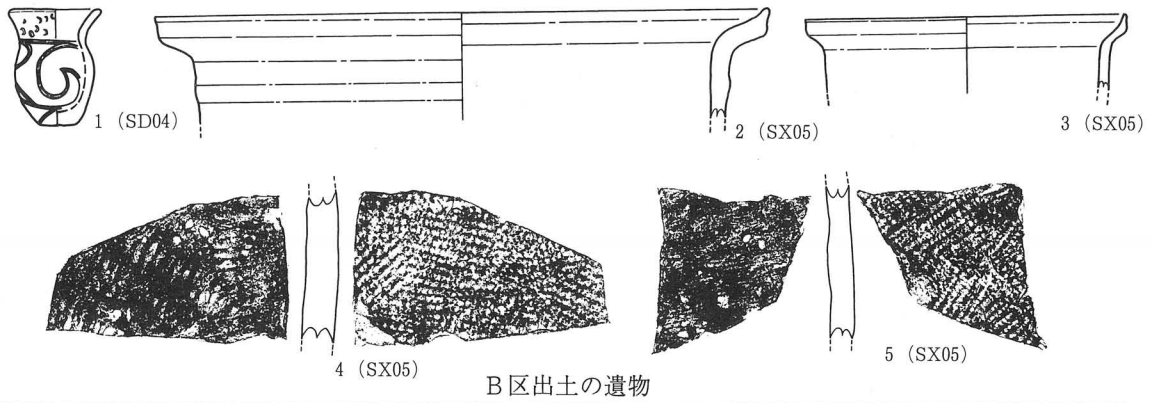
Ⅲ層上面から出土している土器は、深鉢形ではAⅠa類（図Ⅲ-14-1・2）と注口土器（図Ⅲ-17-5）がある。Ⅲ層全体では、深鉢形はBⅡ類（図Ⅲ-19-35~42）、AⅠb類（図Ⅲ-19-11・12）、AⅠa類（図Ⅲ-19-1・2）、AⅡ類（図Ⅲ-19-3~7）、鉢ないしは壺形としては（図Ⅲ-19-8~10・13）があり9は縄文時代後期前半の可能性が高い。

Ⅳ層出土の土器は、深鉢形としてBⅡ類（図Ⅲ-19-14~16）のほかA類は確認できず、BⅠ類と想定される破片がある（図Ⅲ-19-17~19）。鉢ないしは壺形のものとして図Ⅲ-19-20~25があり、直線的な区画文の見られる例（図Ⅲ-19-20）や沈線のみみられる例（図Ⅲ-19-21）がある。図Ⅲ-19-26は香炉形土器であろうか。各層位と器種の関係は以下のようになっている。

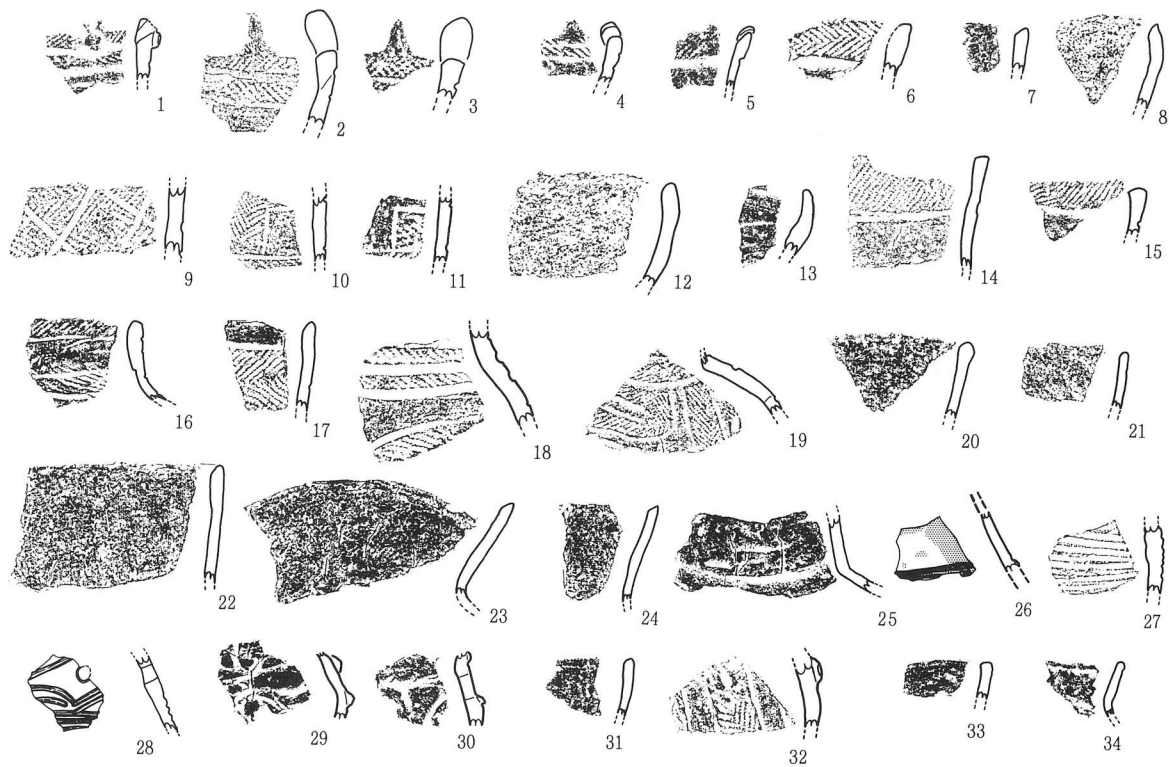
表Ⅲ-18 中屋敷遺跡遺物包含層出土土器と層の対応関係

器種（分類）	Ⅰ・Ⅱ層	Ⅲ層上面	Ⅲ層	Ⅳ層
深鉢形土器AⅠa		○	△	
深鉢形土器AⅠb	○		○	○
深鉢形土器AⅡa			○	
深鉢形土器AⅡb			○	
深鉢形土器BⅠ	○		○	○
深鉢形土器BⅡ	○	○	○	○
壺形土器A	○		○	○
壺形土器B	○		○	
筒形土器			△	○
香炉形土器		○	○	△
台付皿形土器	○			
注口土器		○	○	○

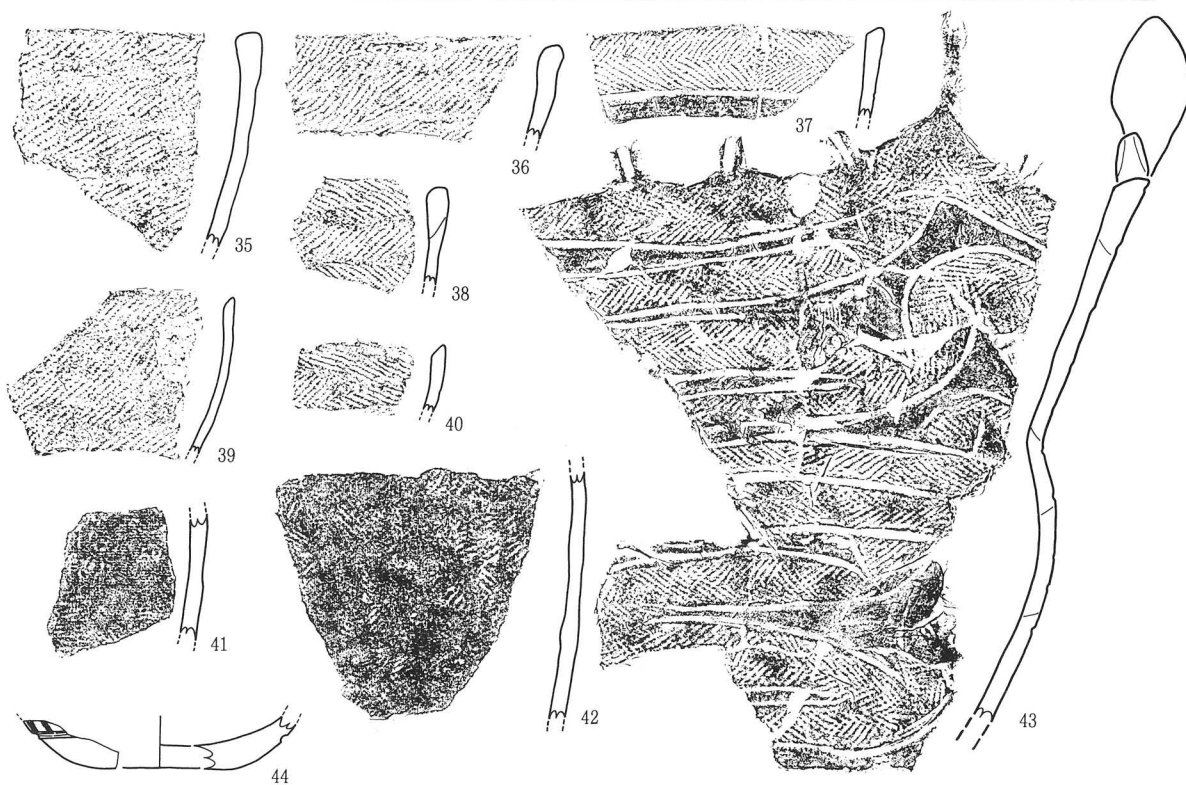
凡例
○…多い
△…少しあり



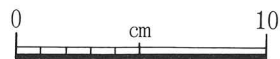
図Ⅲ-18 出土土器実測・拓影図(1)



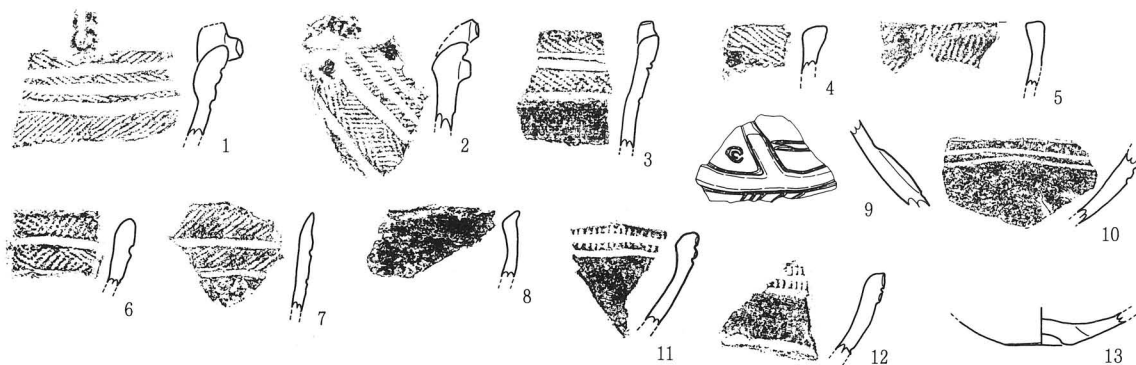
A区遺物包含層第I・II層出土土器



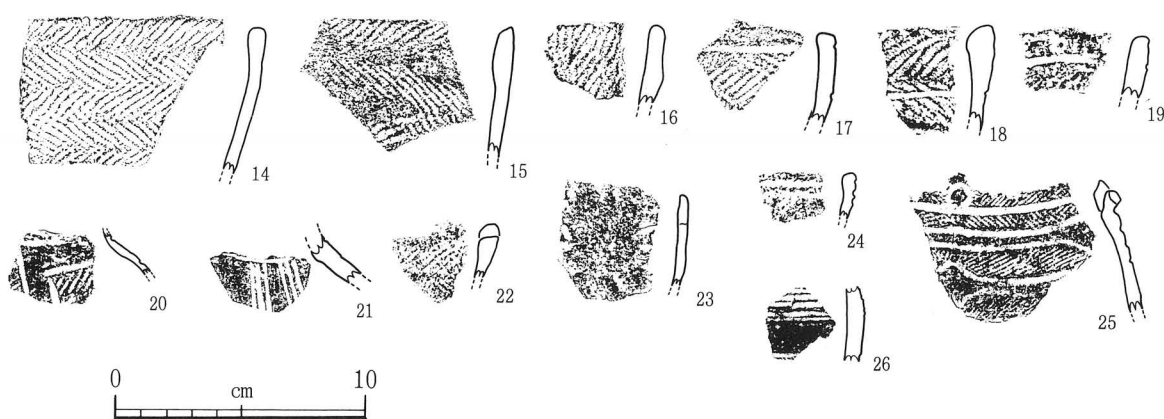
A区遺物包含層第III層出土土器



図III-19 出土土器実測・拓影図(2)



A区遺物包含層第Ⅲ層出土土器



A区遺物包含層第Ⅳ層出土土器

図Ⅲ-20 出土土器実測・拓影図(3)

第2節 縄文時代の石器

縄文時代の石器は、石匙・石鏃・サイドスクレイパー（搔器）・石核・フレーク、磨り石・擦り石・たたき石・台石に分類し、出土状況や特徴は図Ⅲ-21・22、表Ⅲ-15にまとめた。それぞれの器種ごとに概略を述べる。

1 石 匙

石匙は、剥片の一端にえぐり込むような加工を施してつまみ部を作り出し、ナイフのようにものを切る用途に使われたと考えられる石器であり、横型石匙が3点、縦型石匙が1点出土した。これらの石匙の押圧剥離はすべて片面で行われ、両面剥離の例はみられない。

図Ⅲ-21-1は珪質頁岩製の横型石匙で、包含層Ⅱ層より出土した。

図Ⅲ-21-2は自然面を残す珪質頁岩製の横型石匙で、つまみ部付近にタール状のアスファルトと想定される付着物があり、着柄の痕跡と考えられる。SX02覆土から出土した。

図Ⅲ-21-3は玉髄製の横型石匙で、包含層Ⅲ層から出土した。図Ⅲ-21-4は玉髄製の縦

型石匙で、包含層Ⅳ層から出土した。

図Ⅲ-21-8・9は石匙の未製品であると判断した。押圧剥離は片面で行われている。図Ⅲ-21-8は珪質頁岩製でSI01覆土から出土した。図Ⅲ-21-9は玉髓製で包含層Ⅲ層より出土した。

2 石 鏃

剥片の片面あるいは両面の全周に連続した調整を施した後、先端を鋭利に作り出した小型の石器である。

図Ⅲ-21-5は玉髓製、図Ⅲ-21-6は珪質頁岩製で包含層Ⅲ層から出土した。いずれも有茎鏃とみられるが、図Ⅲ-21-5は基部と先端部、図Ⅲ-21-6は先端に欠けた部分が認められ、使用の際に生じたと考えられる。

3 サイドスクレイパー（搔器）

剥片の縁辺の片面あるいは両面に細部調整を施し弧状の刃部を作出した石器。2点出土し、いずれも珪質頁岩製である。図Ⅲ-21-17はSI03確認面より、図Ⅲ-21-19はSI01床直より出土した。

4 石 核

SI01の確認面から1点（図Ⅲ-21-20）出土した。珪質頁岩製で、打面を固定せず打面転移を繰り返して剥離し、自然面を除去している。

5 フ レ ー ク

9点出土した。SI01床面からは7点出土し、玉髓質珪質頁岩製3点、珪質頁岩製3点、玉髓製1点である。図Ⅲ-21-11・15・18はいずれも玉髓質珪質頁岩製であるが、被熱の痕跡がみられる。図Ⅲ-21-12は、自然面を残す珪質頁岩製の碎片（チップ）である。

図Ⅲ-21-10はSD01確認面から出土した珪質頁岩製の横長剥片であり、図Ⅲ-21-7は玉髓製で包含層Ⅲ層から出土した。

6 磨 り 石

礫の片面あるいは全面に研磨痕が観察される礫石器を一括した。石材は安山岩製が5点と主体的であるが、SD01から出土した1点（図Ⅲ-22-4）は閃緑岩製である。

図Ⅲ-21-1・6・7は全面的に研磨痕がみられるが、部分的に敲打痕も観察されるため、多様な用途に用いられたと考えられる。図Ⅲ-21-1はSI01覆土から、図Ⅲ-21-6はSI01床面から、図Ⅲ-21-7は包含層Ⅲ層より出土した。

図Ⅲ-21-8は包含層Ⅲ層より出土した。長方形に整形され、全面に研磨痕が認められる。

図Ⅲ-22-5は隅丸長方形に整形し、全面的に研磨痕がみとめられる。片面に敲打によるくぼみがある。SI01床面から出土した。

7 擦 り 石

擦痕が多く観察される礫石器を一括した。包含層Ⅲ層から2点出土し、いずれも安山岩製で

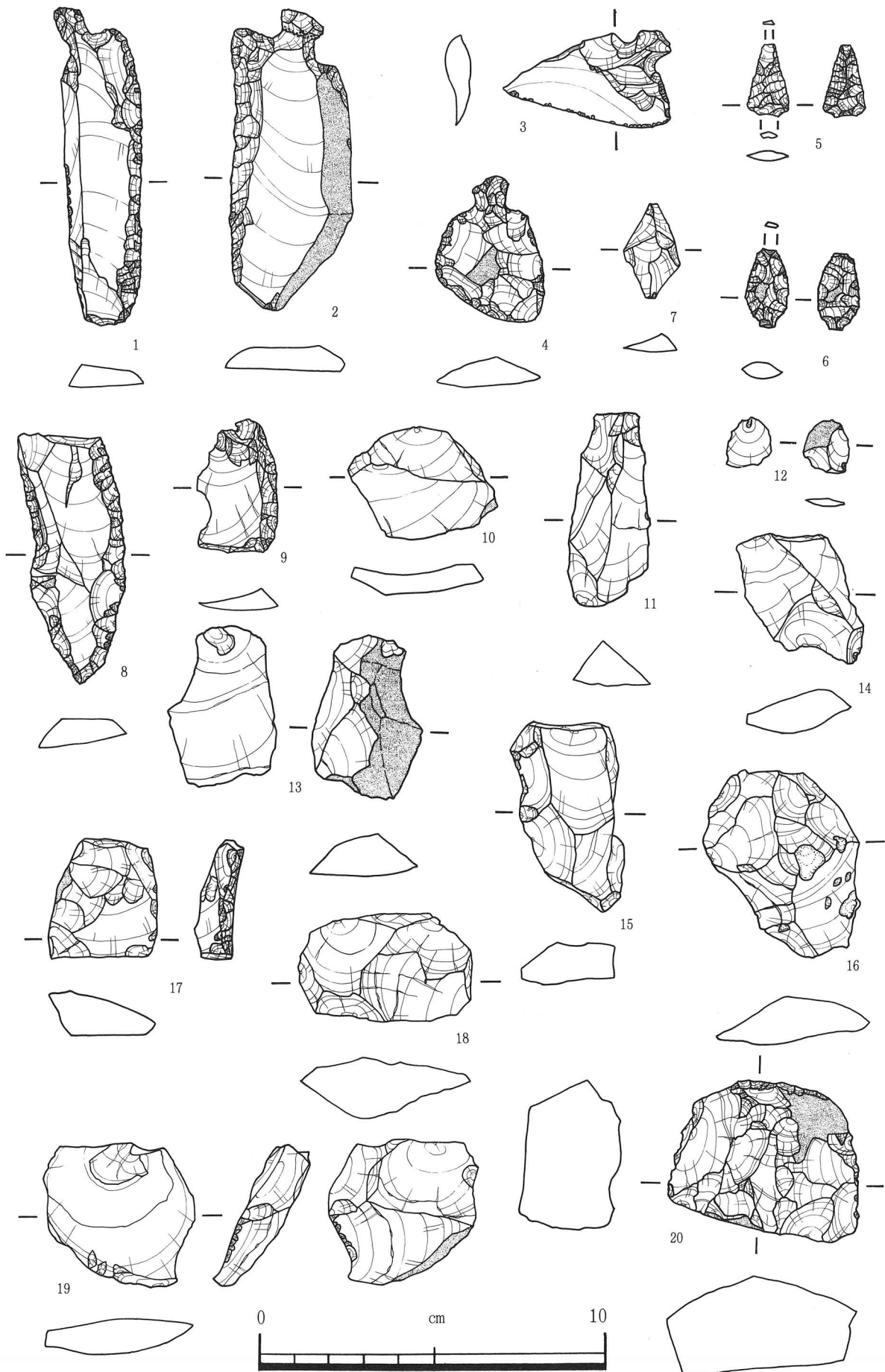


图 III-21 出土石器類実測图

ある。

図Ⅲ-22-3は敲打で粗く整形され、擦痕が面的にみられる。図Ⅲ-22-9は全体的に磨滅しているが、片面を粗く剥離し先端を丸鑿型に整形したもので、擦痕がみられる。

8 た た き 石

円盤状の礫の一端に敲打によるつぶれや擦痕がみられる。包含層Ⅱ層から1点(図Ⅲ-22-2)出土した。安山岩製である。

9 台 石

SI01の床面から1点(図Ⅲ-22-10)出土した。凝灰岩製で楕円形を呈し、長さ27.55cm、幅19.23cm、重さ約4.0kgである。両面に敲打痕がみられる。

第3節 平安時代の遺物

本遺跡から出土した平安時代の遺物には、土師器・須恵器の土器類、土錘などの土製品、砥石などの石製品、カマドに敷設する埴状土製品などがみられる。

1 土 師 器

土師器の器種としては甕と坏が出土し、主な出土遺構としてはA区がSI04とSI05、B区がSX05である。甕は全体形を知りえる資料はない。口縁部の形態をみると、頸部からの立ち上がりが高く緩い外反を示す例と口唇部が内湾気味に立ち上がる例がみられる。前者は図Ⅲ-22-12にみられ、口縁部はロクロ横ナデ調整、胴部外面は縦位のケズリで内面は斜行するヘラナデが認められる。比較的小型の甕で胴部に「*」の記号のような刻線文が施されている。同形態の小型甕の破片はSI05の床面からもう一点出土している。後者は、A区とB区に分布し、図Ⅲ-18-2・3はB区、図Ⅲ-22-13・14はA区である。口縁部は横位のロクロ調整のみであり、胴部の破片がないため全体の調整はわからないが、ロクロ甕といわれる部類であろう。

坏は2点を復元できた。図Ⅲ-22-15は糸切底、内面内黒で口縁部が横位、胴部が縦位のミガキである。図Ⅲ-22-16はSF01の上面に散在していたもので、底部欠損、内外面ロクロ調整である。胴部外面にヘラ書きの痕跡と想定されるくぼみが存在する。

2 須 恵 器

須恵器は3点出土した。A区田圃の試掘耕作土から甕口縁破片、B区SX05覆土から甕胴部破片(図Ⅲ-18-4・5)がある。

3 土 錘

3点の出土があった(図Ⅲ-22-17~19)。規模・形態と穿孔の大きさがほぼ同じことから、同一の製作者と同じ製作年代が想定される。SD01から出土したもの(17)も本来はSI04に存在したものと思われる。

4 埴 状 土 製 品 (写真Ⅲ-10-5)

SF01から出土した土製品で、粘土に藁状のスサを混入した後に焼成され、大きさが30cm×

40cm以上の平板形を呈する製品である。上面が赤褐色、下面が黄灰色を呈することから、カマドの床面や天井部に敷設するものだろうか。機能は不明である。

5 砥 石

B区SX08覆土から出土したもの（図Ⅲ-22-11）で、流紋岩製、砥面が四面あり、いずれも中央部がえぐれた状態になっている。一面には細い沈線状の使用痕がみられる。

第4節 中世以降の遺物

中世以降近代にいたる遺物が出土しており概述する。

1 陶 磁 器

図Ⅲ-22-20は15世紀代に多く見られる中国製白磁八角小杯、図Ⅲ-22-21は17世紀代の肥前染付皿と想定され、どちらもB区西側の耕作土から出土している。

A区SD01から出土した陶磁器には、盆栽を配した区画文のある型紙染付香炉（図Ⅲ-22-22）、菊・梅・石榴文（図Ⅲ-22-23）を配した平口縁の型紙染付皿など、多量の陶磁器やガラス瓶などが出土している。

2 土 製 品

土製品としては、泥めんこ（図Ⅲ-22-24）があり、「あ」という文字がレリーフされている。

3 銭貨（表Ⅲ-17）

銭貨はA区から寛永通寶1枚、大正九年銘の一銭が二枚あり、耕作土からの出土である。

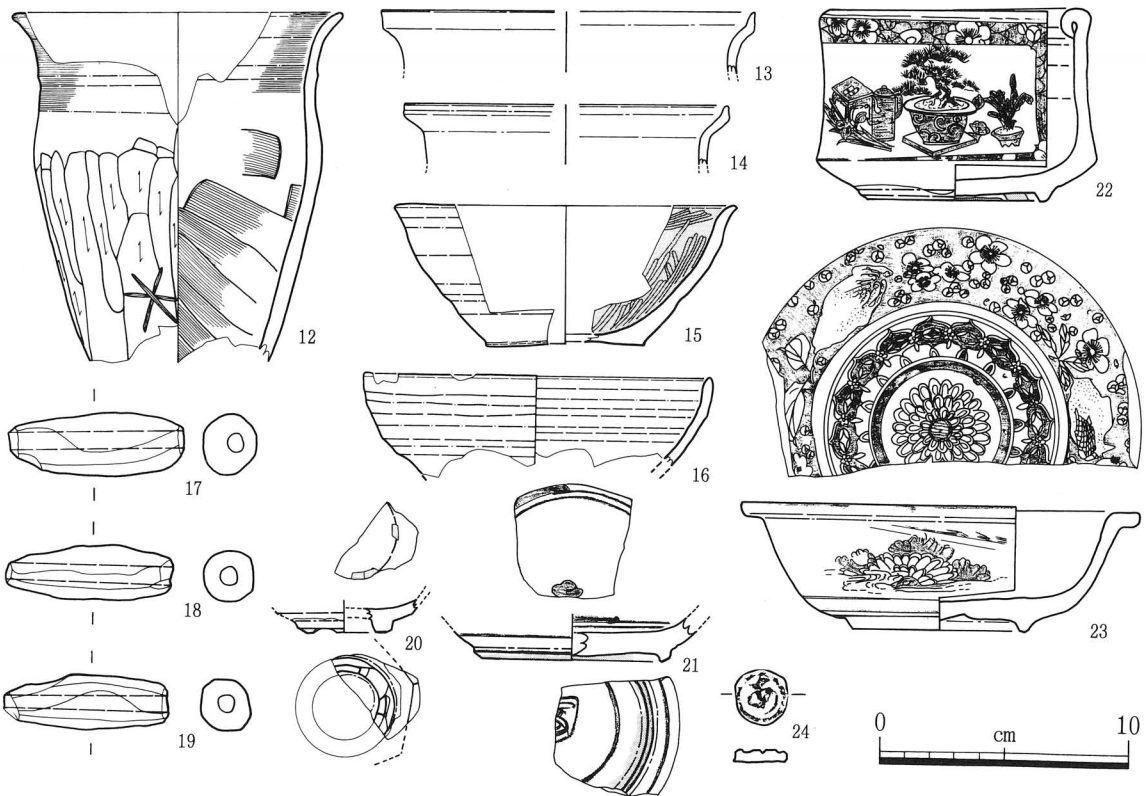
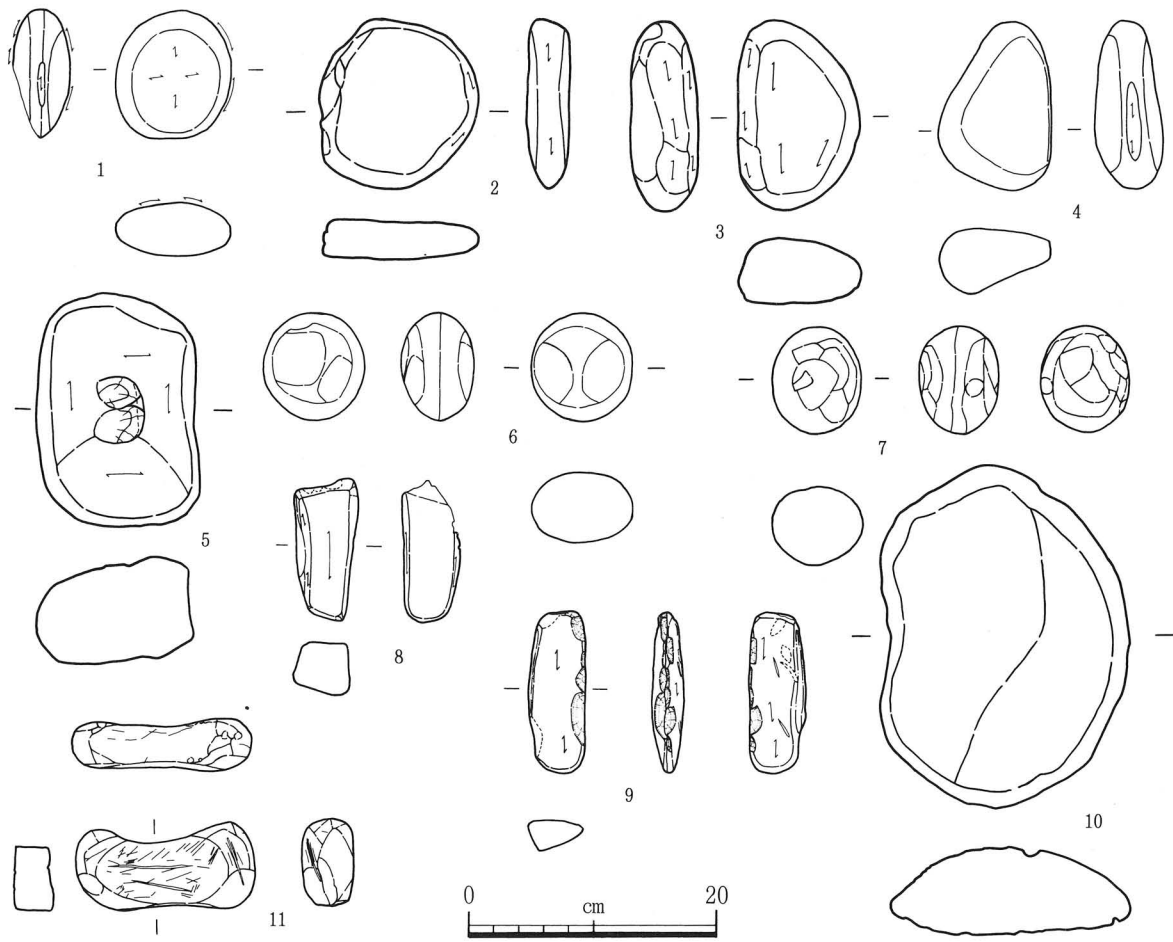


图 III-22 出土石器·石製品·土器·土製品·陶磁器実測図

表Ⅲ-14 中屋敷遺跡A区出土土器・土製品・陶磁器観察表(仮)

図No	写真No	土器No	種別	名称	残存状況	出土区	遺構名	計測値(cm)				その他	特徴	分類番号									
								口径	胴径	底径	高さ												
図Ⅲ14-1	写真6-1	18	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N11	包含層 I・II層	32.4	22.0	(10.0)	36.7	大波状口縁。口唇部に扁平大突起・小突起。口縁部に沈線による区画文・穿孔後貼り瘤。胴部にミガキ・磨り消し入り組み文。平底。大波状口縁。口唇部に扁平突起・二股小突起。胴部に磨り消し入り組み文(帯状)・穿孔後貼り瘤・ミガキ。上げ底	精製土器・深鉢A Ia類 内面に炭化物										
		20	包含層 I・II層	口縁部～胴部下半	N11	包含層 I・II層																	
		22a		口縁部～胴部下半	O11									包含層 III層									
		23		口縁部～胴部下半	N11														包含層 III層				
		24		胴部下半	N11																		
26	口縁部～胴部下半	O11	包含層 III層																				
図Ⅲ14-2	写真6-2	71							縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部下半底	O10・11	包含層 III層	28.5	18.8	(4.2)	24.7	大波状口縁。口唇部に扁平大突起・二股小突起。口縁部に沈線による区画文・磨り消し入り組み文・磨り消し入り組み文(帯状)・穿孔後貼り瘤・ミガキ。上げ底	精製土器・深鉢A Ia類 内外面に炭化物				
図Ⅲ14-3	写真8-9	30	縄文土器	無頸壺	口縁部～底部	N14	SX02 床直					ナデ	壺B類										
図Ⅲ14-4	写真8-8	1	縄文土器	無頸壺	口縁部～底部	O14	SI01 覆土	3	7.6	1.4	6.3			壺B類									
図Ⅲ14-5	写真8-11	27	縄文土器	無頸壺	胴部上半～底部	O11	包含層 III層	3.9	6.8	1.8	5.4			壺B類									
図Ⅲ14-6	写真8-10	10	縄文土器	無頸壺	胴部下半～底部	O12	包含層 I・II層		7.2	2.0	(3.3)			壺B類									
図Ⅲ14-7	写真8-6	15	縄文土器	台付土器	口縁部～台部	O12	包含層 I・II層	9.0	5.8	5.7	8.0	台部径		壺B類									
図Ⅲ14-8	写真8-7	4	縄文土器	台付土器	口縁部～台部	O14	覆土	7.8	3.0	6.7	5.1	台部径											
図Ⅲ14-9		106	縄文土器	台付土器	胴部下半～台部	N, O10・11・12	包含層 II層		3.1	(2.4)													
図Ⅲ15-1	写真6-3	39	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部上半	N11	包含層 III層下黒色土	27.0	19.6	6.2	29.8		口唇部に扁平大突起・小突起・中突起。口縁部に穿孔後貼り瘤・沈線。胴上部に貼り瘤・磨り消し入り組み文・ミガキ。平底	精製土器 ターナル状付着物									
		40	包含層 III層下黒色土	口縁部～胴部上半	N11	包含層 III層下黒色土																	
		88		口縁部～胴部上半											包含層 IV層								
図Ⅲ15-2	写真6-6	87d	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部下半底		包含層 IV層	22.6	22.3	6.6	24.0		口唇部に山形突起・二股小突起・貼り瘤。口縁部外面に沈線・沈線。胴部に帯状区画文・磨り消し入り組み文・ミガキ。若干上げ底状	深鉢B I類 精製土器									
図Ⅲ15-3	写真8-4	22b	縄文土器	鉢形土器	完形	O11	包含層 III層	11.0	9.6	1.8	9.4				深鉢A II b類								
図Ⅲ15-4		21	縄文土器	深鉢形土器	口縁部・胴部・底部	O11	包含層 I・II層	16	16.4	4.9			内面に炭化物	深鉢B II類									
図Ⅲ15-5		17a	縄文土器	深鉢形土器	胴部下半～底部	N11	包含層 I・II層			5.4			斜行縄文・沈線による区画文	深鉢A類									
図Ⅲ15-6		16	縄文土器	深鉢形土器	胴部・胴部下半～底部	O12	包含層 I・II層			7.2			羽状縄文	深鉢B II類									

() は復元値である

図III 15-7	41	縄文土器	深鉢形土器	胴部下半～底部	O12	包含層	IV層	14.7	斜行縄文・ナデ	内面に炭化物。焼け痕	深鉢B II類
	79			胴部下半～底部	O12	包含層	IV層		斜行縄文	内面に炭化物	
図III 16-1	写真 6-4	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～底部	O12	包含層	Ⅲ層下黒色土	32.0	羽状縄文。平底	粗製土器	深鉢B II類
図III 16-2	写真 8-2	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部上半	O12	包含層	IV層	(22.0)	波状口縁。口縁外面に刻み目文。胴部上半に沈線による磨り消し区画文・刻み目文・ミガキ	内面に炭化物 精製土器	深鉢A I b類
図III 16-3	写真 8-14	縄文土器	壺形土器	胴部下半～底部	O12	包含層	IV層	(22.0)	胴部上半にミガキ。磨り消し入り組み文・貼り瘤。平底		壺A類
図III 16-4	写真 8-12	縄文土器	壺形土器	胴部上半～底部	O12	包含層	I・II層	10.2	胴部外面に磨り消し帯状文・ミガキ。内面に穿孔。後粘土充填による補修痕跡。くぼみ底		壺A類
図III 16-5		縄文土器	ミニチュア	胴部	N, O, P10・11・12	包含層	I・II層		斜行縄文・沈線文		
図III 16-6		縄文土器	香炉形土器	胴部	N, O10・11・12	包含層	Ⅲ層		外面に沈線文・ミガキ・釣手部貼り付け・縄文		
図III 16-7	74	縄文土器	香炉形土器	胴部	O12	包含層	Ⅲ層ベル		沈線による隆帯状文・釣手部貼り付け・ミガキ	外面にアース ファルト	
	118		不明	胴部	Pラインセクション	包含層	不明		沈線による隆帯状文・ミガキ		
	161		香炉形土器?	胴部	N, O10・11・12	包含層	不明		沈線による隆帯状文・ミガキ		
図III 16-8	写真 8-5	縄文土器	筒形土器	口縁部～胴部	N, O12 P14	包含層 SI01 覆土	IV層上	15.3	胴部外面に沈線による区画文・磨り消し帯状文(羽状縄文)・刻み目文・ミガキ		
図III 16-9	写真 8-3	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～底部		包含層	IV層	20.7	口唇部に二股小突起。胴部外面に沈線による区画文・磨り消し帯状文・磨り消し入り組み文。凹みを有する上げ底	精製土器	深鉢A II a類
図III 16-10	写真 8-13	縄文土器	壺形土器	口縁部～胴部下半	N, O11・12・13	包含層	IV層	5.5	貼り瘤・ミガキ		壺A類
図III 16-11	113	縄文土器	壺形土器	胴部	N, O道路わき トレンチ	包含層	IV層		押圧のある貼り瘤。磨り消し入り組み文・ミガキ		壺A類
図III 17-1	写真 7-1	縄文土器	注口土器	完形	O15	SI01	床直	11.3	口唇部に二股大突起。二股小突起。口縁～胴部上半にミガキ・磨り消し帯状文。胴部に貼り瘤・磨り消し区画文・磨り消し入り組み文・磨り消し入り組み文。くぼみ底	注口部欠損	
図III 17-2	写真 7-2	縄文土器	注口土器	口縁部～底部	O15	SI01	床直	6.6	口唇部に二股大突起。口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文。貼り瘤。くぼみ底		
図III 17-3	写真 7-3	縄文土器	注口土器	口縁部～底部	O15	SI01	床直	6.6	口唇部に突起。口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文・貼り瘤。くぼみ底	注口部欠損	
	46	縄文土器	注口土器	注口部	O15	SI01	床直		口唇部に二股小突起。口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文・貼り瘤。くぼみ底	注口部欠損	
図III 17-4	写真 7-4	縄文土器	注口土器	口縁部～底部	N11	包含層	IV層	5.6	口唇部に突起。口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文・貼り瘤。くぼみ底	注口部欠損	
図III 17-5	写真 7-5	縄文土器	注口土器	口縁部～底部	O11	包含層	Ⅲ層	(4.6)	口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文。貼り瘤。くぼみ底	注口部欠損	
図III 17-6	写真 8-15	縄文土器	小型注口土器	口縁部～底部	N14	SX02	黒色土下	5.2	口縁～胴部に磨り消し帯状文。胴部に入り組み文・貼り瘤。くぼみ底	注口部欠損	
図III 18-6	写真 8-1	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部上半	O14	SI01	床直	5.9	羽状縄文を全体的に磨り消し		深鉢B II類

図Ⅲ18-7	61a	縄文土器	深鉢形土器	胴部	P14	S101	床直・覆土									磨り消し縄文・ミガキ		深鉢A類
	68		深鉢形土器	胴部	P15	S101	床直・覆土									磨り消し縄文・ミガキ		
図Ⅲ18-8	60	縄文土器	鉢形土器	口縁部	P15	S101	覆土									斜行縄文	粗製土器	
図Ⅲ18-9	59	縄文土器	深鉢形土器	底部	P14	S101	覆土									ナデ		
図Ⅲ18-10	33	縄文土器	深鉢形土器	胴部	O16	S103	床直									沈線による入り組み文・ナデ	十腰内I群	
図Ⅲ18-11	43a	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N16	S103 P1r.2	覆土									羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-12	45	縄文土器	壺形土器	口縁部	N16	S103	覆土									ミガキ		壺A類
図Ⅲ18-13	212	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O17	SD01	覆土									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-14	103	縄文土器	壺形土器	口縁部		SD01	覆土									ミガキ	外面に赤色顔料	壺A類
図Ⅲ18-15	169	縄文土器	深鉢形土器	口縁部		SX02	覆土									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-16	173	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12		I・II層									羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-17	186	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O14		I・II層									斜行縄文		深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-18	195	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12		I・II層									斜行縄文		
図Ⅲ18-19	165	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O15		I・II層									羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-20	179	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O14		I・II層									羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-21	168	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O15		I・II層									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-22	9a	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N12		I・II層									斜行縄文・ナデ	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-23	20b	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N11		I・II層									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-24	199	縄文土器	深鉢形土器	口縁部			I・II層									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-25	200	縄文土器	深鉢形土器	口縁部			I・II層									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-26	187	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12		I・II層									斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-27	170	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O18・19		I・II層									斜行縄文		深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-28	182	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12		I・II層									斜行縄文		深鉢BⅡ類
図Ⅲ18-29	197	縄文土器	鉢形土器?	口縁部	N11		I・II層									斜行縄文		
図Ⅲ18-30	158	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O12		I・II層									口唇部に突起。口縁部に沈線文・磨り消し縄文		
図Ⅲ18-31	17b	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N11		I・II層									口唇部に突起。口縁部に沈線文・磨り消し縄文	精製土器	
図Ⅲ18-32	137	縄文土器	深鉢形土器	口縁部			I・II層									刻み目文・ミガキ	精製土器	深鉢AⅠb類
図Ⅲ19-1	129	縄文土器	深鉢形土器	口縁部			I・II層									口唇部に突起。口縁部に斜行縄文・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-2	128	縄文土器	深鉢形土器	口縁部			I・II層									口唇部に突起・斜行縄文・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-3	150	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O, P10・11・12		I・II層									口唇部に突起・斜行縄文・ナデ		
図Ⅲ19-4	151	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O18・19		I・II層									口唇部に突起・斜行縄文・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-5	153	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O14		I・II層									口唇部に突起・斜行縄文・沈線文・ナデ		
図Ⅲ19-6	178	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12		I・II層									羽状縄文・磨り消し		

図Ⅲ19-7	201	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ナデ		
図Ⅲ19-8	190	縄文土器	鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ナデ		
図Ⅲ19-9	141	縄文土器	深鉢形土器	胴部	N, O, P10・11・12	包含層 I・II層					羽状縄文・沈線による格子文・ミガキ		
図Ⅲ19-10	140	縄文土器	深鉢形土器	胴部	O18・19	包含層 I・II層					羽状縄文・沈線による区画文・ミガキ		
図Ⅲ19-11	149	縄文土器	深鉢形土器	胴部	O14	包含層 I・II層					斜行縄文・沈線による区画文・ナデ		
図Ⅲ19-12	180	縄文土器	鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ナデ		
図Ⅲ19-13	189	縄文土器	鉢形土器	口縁部	O11	包含層 I・II層					ナデ		
図Ⅲ19-14	143	縄文土器	壺形土器	口頸部	O18・19	包含層 I・II層					沈線文・磨り消し縄文		壺A類
図Ⅲ19-15	121	縄文土器	壺形土器	口縁部		包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		P25と接合
図Ⅲ19-16	144	縄文土器	壺形土器	口頸部		包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-17	177	縄文土器	壺形土器	口縁部	O18・19	包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-18	148	縄文土器	壺形土器	胴部	O15	包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-19	109	縄文土器	壺形土器	胴部	P20	包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-20	136	縄文土器	壺形土器	口頸部	N, O12	包含層 I・II層					磨り消し帯状文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-21	194	縄文土器	壺形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 II層					ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-22	135	縄文土器	壺形土器	口頸部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-23	133	縄文土器	壺形土器	口頸部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-24	192	縄文土器	壺形土器	口頸部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ナデ		壺A類
図Ⅲ19-25	134	縄文土器	壺形土器	口頸部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-26	102	縄文土器	壺形土器	頸部	O17	包含層 I・II層					沈線文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-27	154	縄文土器	深鉢形土器	胴部		包含層 I・II層					沈線文・ミガキ		壺A類
図Ⅲ19-28	145	縄文土器	香炉形土器?	胴部	N, O, P10・11・12	包含層 I・II層					穿孔・沈線文・ナデ		
図Ⅲ19-29	108 115	縄文土器	香炉形土器? 不明	胴部 胴部	O12	包含層 I・II層					貼り瘤・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-30	114	縄文土器	香炉形土器?	胴部	O11	包含層 I・II層					貼り瘤・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-31	196	縄文土器	鉢形土器	口縁部	O18・19	包含層 I・II層					貼り瘤・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-32	207	縄文土器	不明	胴部		包含層 I・II層					穿孔・貼り瘤・ミガキ		粗製土器
図Ⅲ19-33	202	土師器	鉢形土器	口縁部	O11	包含層 I・II層					縦刻みのある貼り瘤・沈線文・磨り消し縄文。内面にミガキ		
図Ⅲ19-34	205	土師器	甕	口縁部	N, O10・11・12	包含層 I・II層					ナデ		
				口縁部		包含層 I・II層					ロクロナデ		

図Ⅲ19-35	163	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	拡張区西側	Ⅲ層	斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-36	166	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	Ⅰ・Ⅱ層	斜行縄文		深鉢BⅡ類
	167			口縁部	プラインセクション	Ⅲ層	斜行縄文	粗製土器	
図Ⅲ19-37	138	縄文土器	筒形土器?	口縁部	拡張区西側	Ⅲ・Ⅳ層	羽状縄文・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ19-38	172	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	プラインセクション	Ⅲ層	羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-39	164	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O10・11・12	Ⅲ層	斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-40	181	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	拡張区西側	Ⅲ・Ⅳ層	斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-41	78	縄文土器	深鉢形土器	胴部	O11	Ⅲ層	羽状縄文を全体的に磨り消し		深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-42	125	縄文土器	深鉢形土器	胴部		Ⅲ層	羽状縄文を全体的に磨り消し	炭化物	深鉢BⅡ類
図Ⅲ19-43	9 b	縄文土器	深鉢形土器	口縁部～胴部上半	N12	Ⅲ層	大波状口縁。口唇部に扁平状突起・二股小突起。口縁部に帯状文。胴部に磨り消し入り組み帯状文・ナデ	精製土器	深鉢AⅠa類
図Ⅲ19-44	130	縄文土器	深鉢形土器	底部		Ⅲ層	縄文・沈線文		深鉢A類
図Ⅲ20-1	155	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	拡張区西側	Ⅲ・Ⅳ層	縄文・貼り瘤・沈線文	炭化物 精製土器	
図Ⅲ20-2	156	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	拡張区西側	Ⅲ・Ⅳ層	貼り瘤・縄文・沈線文	精製土器	
図Ⅲ20-3	26 b	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	O11	Ⅲ層	口唇部に突起。口縁部に斜行縄文・沈線文・ミガキ	精製土器	
図Ⅲ20-4	185	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	プラインセクション	Ⅲ層	斜行縄文		
図Ⅲ20-5	184	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	プラインセクション	Ⅲ層	斜行縄文		
図Ⅲ20-6	176	縄文土器	壺形土器	口縁部	N, O12・13	Ⅲ層	斜行縄文・沈線文		壺A類
図Ⅲ20-7	171	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N11・12	Ⅲ層	斜行縄文・沈線文・ミガキ		
図Ⅲ20-8	193	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	Ⅲ層	ナデ		
図Ⅲ20-9	104	縄文土器	不明	胴部	N, O12・13	Ⅲ層	沈線文・粘土紐貼り付けによる浮線文・鋭描き文・ミガキ		深鉢AⅠb類
図Ⅲ20-10	139	縄文土器	壺形土器	胴部	拡張区西側	Ⅲ・Ⅳ層	沈線文		深鉢AⅠb類
図Ⅲ20-11	209	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O12	Ⅲ層	刻み目文・沈線文・ミガキ		深鉢AⅠb類
図Ⅲ20-12	208	縄文土器	深鉢形土器	胴部		Ⅲ層	刻み目文・ミガキ		深鉢AⅠb類
図Ⅲ20-13	131	縄文土器	壺形土器	底部	O12	Ⅲ層	ナデ。くぼみ底		
図Ⅲ20-14	107	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N11・12	Ⅳ層	羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ20-15	87 b	縄文土器	深鉢形土器	口縁部		Ⅳ層	羽状縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ20-16	183	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	Ⅳ層	斜行縄文	粗製土器	深鉢BⅡ類
図Ⅲ20-17	87 c	縄文土器	深鉢形土器	口縁部		Ⅳ層	斜行縄文・沈線文		
図Ⅲ20-18	174	縄文土器	筒形土器?	口縁部	N, O10・11・12	Ⅳ層	斜行縄文・沈線文・ナデ		

図Ⅲ20-19	188	縄文土器	鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 IV層					斜行縄文・沈線文	
図Ⅲ20-20	142	縄文土器	壺形土器	胴部	N, O, P10・11・12	包含層 IV層					沈線文・磨り消し縄文	
図Ⅲ20-21	120	縄文土器	壺形土器	胴部	拡張区	包含層 IV層					3条を単位とする沈線文	
図Ⅲ20-22	152	縄文土器	深鉢形土器	口縁部		包含層 IV層					口唇部に突起。口縁部に斜行縄文・ナデ	炭化物
図Ⅲ20-23	191	縄文土器	壺形土器	口縁部		包含層 IV層					ナデ	
図Ⅲ20-24	198	縄文土器	深鉢形土器	口縁部	N, O10・11・12	包含層 IV層					沈線文	壺A類
図Ⅲ20-25	110	縄文土器	壺形土器	口縁部	N11・12	包含層 IV層					口唇部に貼り瘤。口縁部に磨り消し縄文・貼り瘤・ミガキ	壺A類
図Ⅲ20-26	117	縄文土器	不明	胴部	N, O12・13	包含層 IV層					沈線文・ミガキ	
図Ⅲ22-12	11	土師器	甕	口縁部～胴部下半	O19	S105 床直	13.4	11.6	14		口縁部外面にロクロナデ調整、胴部外面にケズリ・内面ヘラナデ	
	12			胴部下半～底部	O19	S105 床直					外面にヘラケズリ。内面にヘラナデ	
	50			口縁部～胴部下半	P19	S105 床直					口縁部外面にロクロナデ。胴部外面にケズリ。胴部下半に「*」状の刻線文。内面にヘラナデ	
図Ⅲ22-13	204	土師器	甕	口頸部	N, O, P10・11・12	包含層 I・II層					ロクロナデ	須恵器うつし?
図Ⅲ22-14	203	土師器	甕	口頸部	O18	SD03 覆土					ロクロナデ	外面に炭化物。須恵器うつし?
図Ⅲ22-15	14	土師器	坏	口縁部～底部	O19	S105 床直	13.8		6.4	5.6	内面黒色処理。底部糸切り	
図Ⅲ22-16	83	土師器	坏	口縁部～胴部下半	N18	SF01 覆土	14.2			(4.0)	ロクロナデ・外面にヘラ書き痕?	
図Ⅲ22-17	100	土製品	土鉢	完形	P17	SD01 覆土	2.1	2.4		7	シボリ・ナデ	
図Ⅲ22-18	52	土製品	土鉢	完形	P17	S104 覆土	2	2		6.8	シボリ・ナデ	
図Ⅲ22-19	47	土製品	土鉢	完形	O18	S104 床直 Pt土	2	2		6.5	シボリ・ナデ	
図Ⅲ22-22	211	陶磁器	筒型香炉	口縁部～底部		SD01 覆土	11.0	11.3	7.4	7.5～7.7	脚なし。型紙絵付け(菊・梅・石榴文)	砂目積真
図Ⅲ22-23	210	陶磁器	中皿	口縁部～底部		SD01 覆土	16.0		7.0	4.8～5.0	平縁。見込み裏無釉	
図Ⅲ22-24	101	土製品	泥めんこ	完形	O17	包含層 I・II層	2.1			0.5	「あ」の字の浮き彫り	
	84	土製品	埴状土製品	破片	N18	SF01 覆土	34.0×31.0			3.0～4.5		小石混入・胎土に霰状のヌヤが混入した痕跡

表Ⅲ-15 中屋敷遺跡石器・石製品等計測表

図 No.	写真 No.	遺物No.	名称	地区名	出土区	遺構名	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
図Ⅲ21-1	写真9-6	S10	石匙	A区	O11	包含層	Ⅲ層	9.17	2.29	0.85	22.46	珪質頁岩	
図Ⅲ21-2	写真9-5	S15	石匙	A区	N14	SX02	黒色土下	8.71	3.58	0.9	26.89	珪質頁岩	基部に付着物
図Ⅲ21-3	写真9-3	S22	石匙	A区	O11	包含層	Ⅲ層	5.0	2.91	0.7	6.57	玉髓	
図Ⅲ21-4	写真9-4	S24	石匙	A区	O12	包含層	Ⅳ層	4.1	2.89	0.86	9.35	玉髓	
図Ⅲ21-5	写真9-1	S7	石鎌	A区	N11	包含層	Ⅲ層	2.04	1.22	0.32	0.71	玉髓	
図Ⅲ21-6	写真9-2	S8	石鎌	A区	O11	包含層	Ⅲ層	2.2	1.21	0.43	1.35	珪質頁岩	
図Ⅲ21-7	写真9-13	S9	フレーク	A区	O11	包含層	Ⅲ層	2.72	1.56	0.54	1.57	玉髓	
図Ⅲ21-8	写真9-14	S1	石匙未製品	A区	O15	S101	覆土	7.26	2.69	0.96	22.67	珪質頁岩	
図Ⅲ21-9	写真9-11	S11	石匙未製品	A区	O11	包含層	Ⅲ層	3.79	2.42	0.45	4.96	玉髓	
図Ⅲ21-10	写真9-15	S3	フレーク	A区	O17	SD01	確認面	4.4	3.42	0.98	10.59	珪質頁岩	
図Ⅲ21-11	写真9-10	S19	フレーク	A区	P14	S101	床直	5.55	2.0	1.46	19.02	玉髓	被熱痕跡
図Ⅲ21-12		S26	フレーク	A区	O15	S101	床直	1.39	1.34	0.2	0.4	珪質頁岩	
図Ⅲ21-13	写真9-19	S29	フレーク	A区	O15	S101	床直	4.7	3.28	1.33	16.2	珪質頁岩	
図Ⅲ21-14	写真9-9	S21	フレーク	A区	P14	S101	床直	4.79	2.96	1.42	15.27	玉髓質珪質頁岩	
図Ⅲ21-15	写真9-7	S20	フレーク	A区	P14	S101	床直	5.42	2.85	1.22	28.73	玉髓質珪質頁岩	被熱痕跡
図Ⅲ21-16	写真9-16	S17	フレーク	A区	P14	S101	床直	6.02	3.84	1.29	32.84	珪質頁岩	
図Ⅲ21-17	写真9-18	S4	サイドスクレイパー	A区	N16	S103	確認面	3.52	3.28	1.15	17.28	珪質頁岩	
図Ⅲ21-18	写真9-8	S16	フレーク	A区	P14	S101	床直	4.98	3.06	1.73	30.37	玉髓質珪質頁岩	被熱痕跡
図Ⅲ21-19	写真9-17	S18	サイドスクレイパー	A区	P14	S101	床直	5.73	4.25	1.25	25.42	珪質頁岩	
図Ⅲ21-20	写真9-20	S5	石核	A区	O14	S101	確認面	5.49	4.31	2.81	93.02	珪質頁岩	
図Ⅲ22-1	写真9-23	S25	磨り石	A区	O15	S101	床直	10.62	9.33	4.29	547.64	安山岩	
図Ⅲ22-2	写真9-26	S31	たたき石	A区	O10・11・12	包含層	Ⅱ層	13.35	12.3	3.34	968.28	安山岩	
図Ⅲ22-3	写真9-25	S23	磨り石	A区	O11	包含層	Ⅲ層	15.16	9.67	5.38	968.57	安山岩	
図Ⅲ22-4	写真9-24	S6	磨り石	A区	N17	SD01?	I層	13.23	9.35	5.32	886.55	閃緑岩	
図Ⅲ22-5	写真9-29	S27	磨り石	A区	O15	S101	床直	18.7	12.71	7.91	2900.0	安山岩	
図Ⅲ22-6	写真9-22	S2	磨り石	A区	O14	S101	覆土	8.54	8.2	5.72	590.28	安山岩	
図Ⅲ22-7	写真9-21	S12	磨り石	A区	O11	包含層	Ⅲ層	8.42	7.16	6.28	558.15	安山岩	
図Ⅲ22-8	写真9-28	S14	磨り石	A区	O10	包含層	Ⅲ層	11.38	4.95	4.14	319.35	安山岩	
図Ⅲ22-9	写真9-27	S13	磨り石	A区	N11	包含層	Ⅲ層	12.85	4.43	2.52	184.02	安山岩	
図Ⅲ22-10		S28	台石	A区	O15	S101	床直	27.55	19.23	6.65	4000.0	凝灰岩	
図Ⅲ22-11	写真9-30	S30	砥石	B区	F22	SX08	覆土	14.38	6.8	3.89	536.06	流紋岩	
	写真9-12	S33	石鎌	A区	O11・12	包含層	Ⅲ層	3.71	1.85	1.8	4.91	玉髓	
		S32	原石	A区	O14		I層	8.13	6.16	5.06	367.61	チャート	

表Ⅲ-16 中屋敷遺跡B区出土遺物観察表

図No	写真No	土器No	種別	名称	残存状況	出土区	遺構名	層序	計測値 (cm)				文様	特徴		
									口径	胴径	底径	高さ			その他	
図Ⅲ18-1	写真5-6	311	縄文土器	ミニチュア	完形		SD04	覆土		3.7	3.2	1.3	4.7		口頸部に円形刺突。 胴部に沈線による渦巻き文・区画文	
図Ⅲ18-2		313	土師器	甕	口縁部～頸部	F 19	SX05	覆土下層		24.3					ロクロナデ	須恵器模倣か
図Ⅲ18-3		315	土師器	甕	口頸部		SX05	覆土下層(西側溝)		13					ロクロナデ	須恵器模倣か
図Ⅲ18-4		305	須恵器	甕	胴部	F 19	SX05	壁際覆土							内外面格子状の叩き目	
図Ⅲ18-5		304	須恵器	甕	胴部	F 19	SX05	床直							内面ナデ・当て具痕。外面叩き目	
図Ⅲ22-20	写真10-8	302	白磁	八角小杯	胴部下半～高台	F 35		I層				3.7			切り高台。高台畳付けにも施釉	15世紀
図Ⅲ22-21	写真10-9	301	肥前染付	皿	胴部下半～高台	F 35		I層				7.2			見込みに2条回線、高台1条回線、胴部下半に1条回線、高台に砂目襷袋。 底に1条回線・角福の銘	17世紀

表Ⅲ-17 中屋敷遺跡銭・硬貨計測表

No	名称	地区名	出土区	層位	外径 (cm)	外縁幅 (cm)	外縁厚 (cm)	孔幅 (cm)	内郭幅 (cm)	内郭厚 (cm)	重さ (g)	備考
C 1	寛永通寶	A区	N11	I層	2.43	0.2	0.13	0.48	1.86	0.06	2.04	
C 2	一銭	A区		I・II層	2.3					0.12	3.51	「大正九年」銘
C 3	一銭	A区	N14	I層	2.29					0.12	3.65	「大正九年」銘

5章 ま と め

中屋敷遺跡の調査は、調査範囲が狭いながら、縄文時代後期を主体とする建物跡・土坑と包含層が確認され、平安時代の建物跡・土坑・溝・焼土、そして中世、近世、近代の遺物も出土した。以下、調査によって気がついた点を箇条書きにしてまとめとしたい。

1 縄文時代の建物について

縄文時代の竪穴建物跡は2軒検出され、一軒は焼失した建物であった。そのSI01では炭化材から支柱穴対応の柱は確認できなかったが、建物の周囲を巡る壁柱穴に対応する炭化材が2本確認でき、建物の側柱が残った状態で建物が焼失されたと考えられる。また、入り口は南側に作られ、溝などによって位置関係が理解できる。竪穴建物跡の形態としても、八戸市風張（1）遺跡でみられるように縄文時代後期後半に特徴的な形態である。

遺物の出土状態に関しても、ほぼ完形の注口土器が3点と深鉢形土器の破片が床面から、覆土からは無頸壺・台付皿形土器が出土した。さらに、台石や磨り石が床面から出土し、台石の脇から石器の未製品と想定される打製石器が8点まとまって出土している。この打製石器は珪質頁岩・玉髓・玉髓質珪質頁岩という同質の石材であり、梵珠山周辺に多い石材である。もう一軒のSI03に関しては道路等に妨げられ部分的調査であったことから全容は理解できなかった。

2 縄文時代の出土土器について

本遺跡から出土している土器は、当地では十腰内Ⅲ群及び十腰内Ⅳ群の土器と理解され、同じ時期の土器を出土する遺跡としては、金木町・神明町遺跡、南郷村・馬場瀬（1）遺跡、八戸市・風張（1）遺跡などがある。

当遺跡においては、包含層の層位状態から土器の新旧関係を三期に区分できる。新しい方からⅢ層上面（Ⅱ層下面との接合関係もある）、Ⅲ層、Ⅳ層であり、それぞれの出土状況は前述の通りである。

Ⅲ層上面では、口縁が5単位の大波状を呈し扁平突起を有するくびれのある深鉢形土器（深鉢形A I a類）が特徴的にみられ、この形態は破片資料も含めてⅢ層内にはあまりみられず、一型式を想定できそうである。しかしながら、共伴する土器は注口土器しか確認できないため、器形構成の点で難が残る。

Ⅲ層出土の土器は、注口土器の完形品を出土したSI01の床面出土土器と対応し、Ⅲ層の間にみられた黄褐色砂質土は竪穴建物跡を掘り込んだときの廃土の可能性を有している。器形としては深鉢形土器、壺形土器（無頸壺もある）、香炉形土器、注口土器などのほか、筒形土器もみられる。

Ⅳ層出土の土器は、数が少ないものの深鉢形土器ではA I b類を主体とし、筒形土器と注口土器のほか若干の香炉形土器がある。

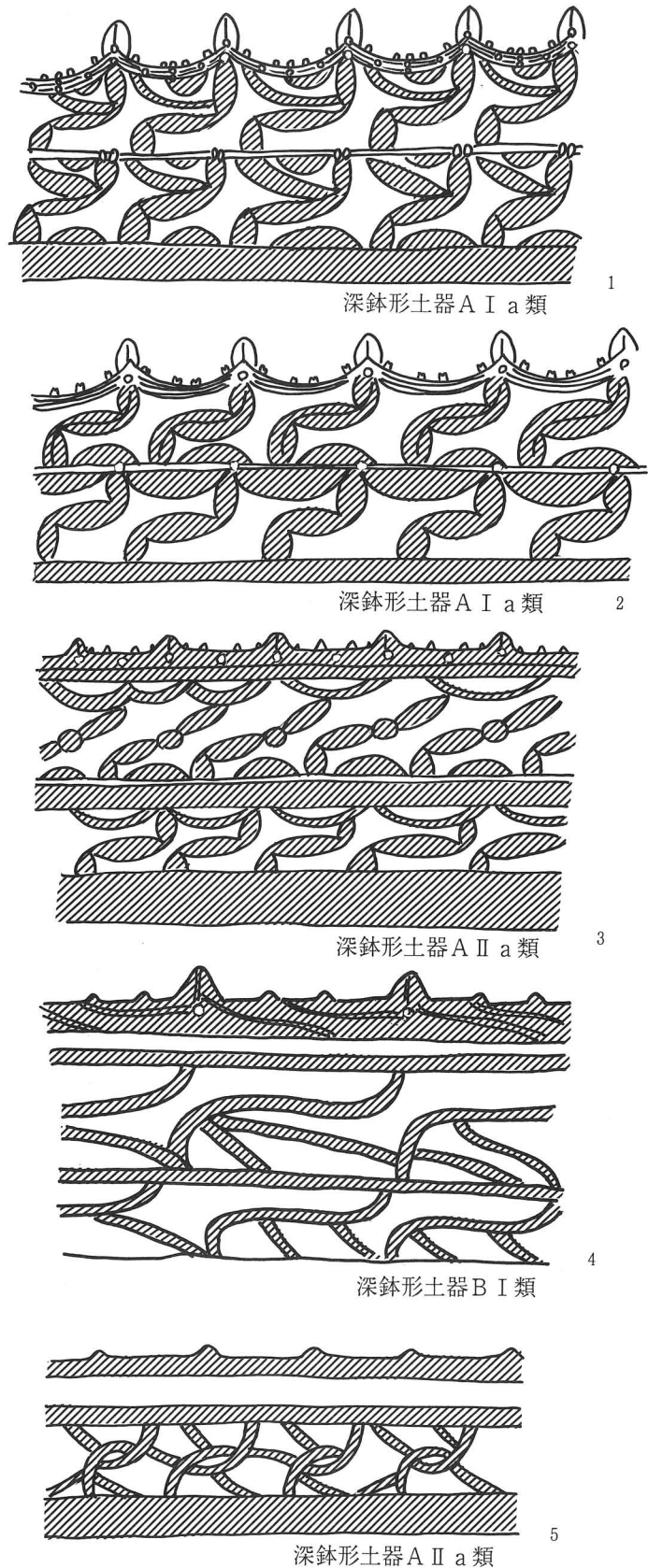
文様の地紋である縄文原体はⅣ層の場合、R LとL Rの双方を施文して羽状の状態を呈する

ものが多く、さらに刻み目文が発達するのに対し、Ⅲ層とⅢ層上面では羽状の状態が崩れどちらか一方の原体を主体として施し、刻み目文はほとんどみられなくなる。

以上の特徴を従来の型式と対応すると、Ⅳ層は十腰内Ⅲ群に近い一群、Ⅲ層は十腰内Ⅳ群であり、Ⅲ層上面は十腰内Ⅳ群と同Ⅴ群の間に位置するものと想定される。深鉢形土器AⅠa類に関しては、東北南半における「西ノ浜式」に対応できることから、関根達人が示した東北北部における西ノ浜式併行の新段階に相当する土器と位置付けることができる [関根1993]。

3 土器の文様

深鉢形土器のA類とBⅠ類は、器面の文様帯を二段に区分する傾向が強い。AⅠa類はくびれの部分を挟んで文様帯構成が上下二段に配され、くびれに貼瘤を有する。文様自体は、上下同じような構成の磨り消し入り組み文を有するが、波状の谷部に対応して木の葉を半分した区画文を多用する(図Ⅲ-23-1・2)。AⅡa類(図Ⅲ-23-3)と比較すると、紐状に弧を描くループ状の文様を簡略化している印象を受ける。このような紐状のループ文様は、BⅠ類(図Ⅲ-23-4)や小型のくびれをもつ土器であるAⅡa類(図Ⅲ-23-



図Ⅲ-23 土器の文様パターン(1)

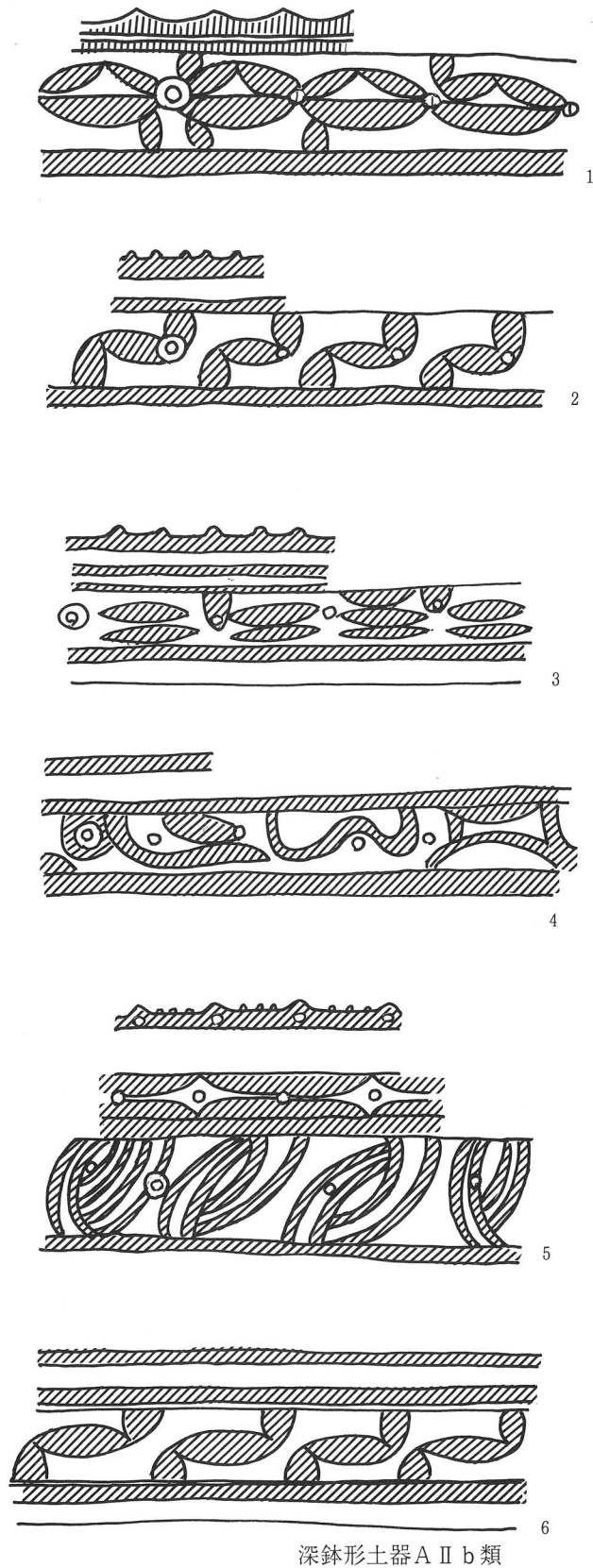
5)でもみられ、貼り瘤の少ない包含層Ⅲ層の特徴であるといつてよい。ただ、小型深鉢形であるAⅡb類(図Ⅲ-24-6)には定型的な入り組み文のみが施されている。

注口土器は口縁帯と胴部文様帯の二箇所に分けられる。包含層Ⅳ層出土の土器は口縁文様帯に刻み目文、胴部文様帯に入り組み文と木の葉状の区画文(図Ⅲ-24-1)、Ⅲ層と対応するSI01出土の注口土器は、口縁文様帯に帯状文(図Ⅲ-24-2・3)胴部文様帯に入り組み文(図Ⅲ-24-2)、上下二段のレンズ状区画文(図Ⅲ-24-3)、大形の注口土器は口縁文様帯に木の葉を半分にした区画文、胴部文様帯は紐状の入り組みループ文(図Ⅲ-24-5)がみられる。Ⅲ層上面出土の注口土器は口縁文様帯に帯縄文、胴部文様帯は規範性のない入り組み文でループ状に近い状況がある(図Ⅲ-24-4)。

以上のように深鉢形土器と注口土器の文様構成の中では、Ⅳ層に刻み目文を有する以外、明確な対応関係はみられず、今後さらに検討する余地が残っていると考えられる。

4 縄文時代以外の出土資料

平安時代の建物跡は2軒検出されたが、いずれも部分的な調査のため全容を理解できなかった。し



深鉢形土器AⅡb類

図Ⅲ-24 土器の文様パターン(2)

かしながら、出土した土師器甕・坏がロクロ成形で、調整技法にナデやケズリ技法を多用し、刻線文もみられること、さらに須恵器の出土が少ないことを考慮すると9世紀中頃の年代を想定できる。A区とB区ともに同じ年代を有することは、この時期に本遺跡周辺に集落の形成が進展したとみることができる。

また、B区からは15世紀の中国製白磁小杯や近世の肥前染付も出土していることから、中世段階から近世にかけて何らかの遺跡形成があったとみられる。A区では近代（昭和初期と想定される）の廃棄遺物も出土しており、継続的に遺跡形成がなされていた。

参 考 文 献

- | | | |
|------------|------|---|
| 今井富士雄・磯崎正彦 | 1968 | 「十腰内遺跡」『岩木山—岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』岩木山刊行会 |
| 葛西 励 | 1979 | 『青森市蛭沢遺跡発掘調査報告書』青森市蛭沢遺跡発掘調査団 |
| 安孫子昭二 | 1981 | 「瘤付土器」『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 |
| 青森県教育委員会 | 1982 | 『馬場瀬(1)(2)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第70集 |
| 青森県教育委員会 | 1985 | 『尻高(2)・(3)・(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集 |
| 大鰐町教育委員会 | 1986 | 『上牡丹森遺跡発掘調査報告書』大鰐町文化財調査報告書第1集 |
| 岡田康博 | 1986 | 「十腰内第Ⅲ群・第Ⅳ群・第Ⅴ群土器の再検討」『弘前大学考古学研究』第3号 弘前大学考古学研究会 |
| 青森県教育委員会 | 1987 | 『大湊近川遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第104集 |
| 青森県教育委員会 | 1989 | 『鶴ヶ鼻遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第122集 |
| 八戸市教育委員会 | 1991 | 『風張(1)遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集 |
| 八戸市教育委員会 | 1991 | 『風張(1)遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集 |
| 関根達人 | 1992 | 「西ノ浜式」とその周辺『歴史』第81輯 東北史学会 |
| 川内町教育委員会 | 1996 | 『鞍越遺跡発掘調査報告書 平成7年度』 |
| 川内町教育委員会 | 1997 | 『川内町埋蔵文化財発掘調査報告書 1996 熊ヶ平(1)遺跡 熊ヶ平(2)遺跡 鞍越遺跡』 |
| 黒石市教育委員会 | 1997 | 『白兀(1)遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告第14集 |
| 青森大学考古学研究所 | 1998 | 「青森県内における縄文時代の住居跡集成(1)」『研究紀要』No.1 |
| 黒石市教育委員会 | 2000 | 『築館遺跡・石倉下遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告第16集 |

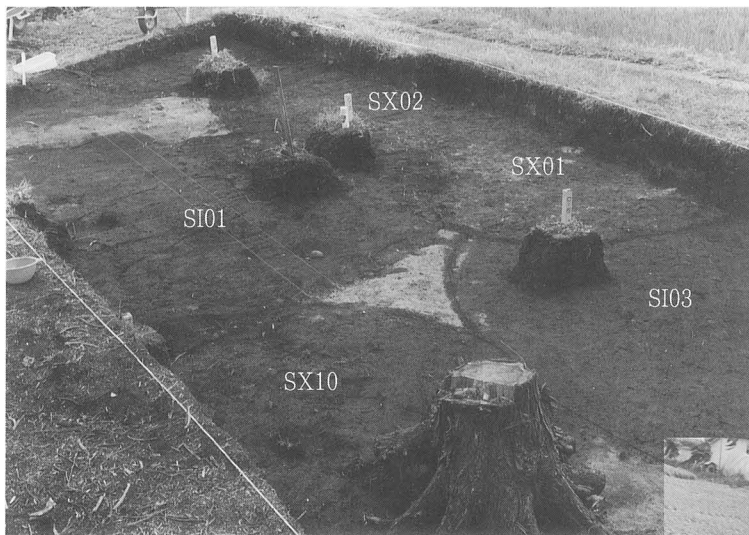
発掘調査抄録

ふりがな	へいせい14ねんど なかやしきいせきはつくつちようさほうこくしよ								
書名	平成14年度 中屋敷遺跡発掘調査報告書								
副書名	浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書								
巻次	第9集								
シリーズ名	浪岡町文化財紀要								
シリーズ番号	Ⅲ								
執筆者名	工藤清泰・竹ヶ原亜希								
編集機関	浪岡町教育委員会								
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 TEL0172-62-1111								
発行年月日	西暦 2003年 3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
			市町村	遺跡番号					
中屋敷遺跡	青森県南津軽郡浪岡町大字吉内字山下地内		229	29040	40度 41分 47秒	140度 36分 57秒	324m ²	20020627 ～ 20020930	農道整備事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
中屋敷遺跡	集落跡 遺物包含層	縄文時代 平安時代 近代	縄文時代建物跡2 軒・縄文時代土坑2 基・縄文時代遺物包含層 平安時代建物跡2軒		縄文土器・石器 土師器・須恵器 土製品・銭貨 陶磁器		縄文時代後期後半の 焼失建物から注口土 器をはじめとする一 括遺物が出土し、遺 物包含層と対応する ことが判明した。		

写真Ⅲ-1 (A区)



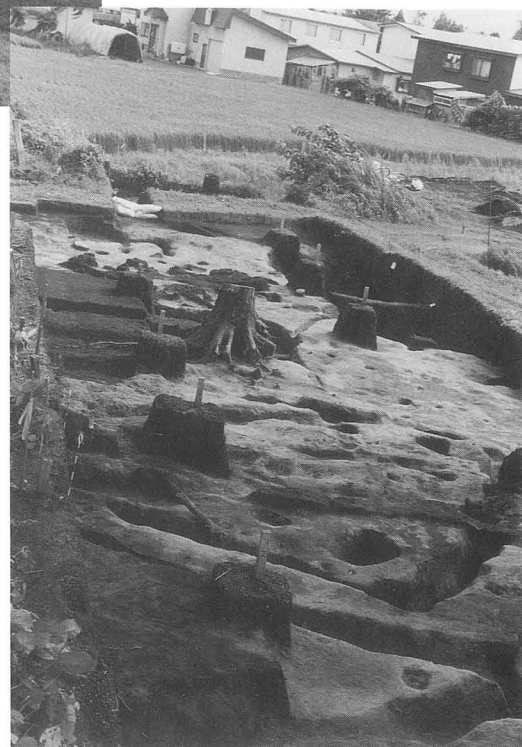
1. 遺跡の遠景 (西側から)



2. 遺構検出状況

3. (左下) SI01・SI03の掘り下げ状況

4. (右下) A区の状態



写真Ⅲ-2 (A区)



1. SI01炭化材検出状況
(北側から)



2. SI01炭化材検出状況
(西側から)



3. SI01の出土土器

写真Ⅲ-3 (A区)



1. SI03完掘状況



2. SI04完掘状況



3. SK01完掘状況

写真Ⅲ-4 (A区)



1. 遺物包含層の層序



2. 深鉢 (P71) 出土状態



3. 注口土器 (P25) 出土状態



4. 遺物包含層の掘り下げ状況 (酸化鉄層検出時)



1. B区の調査状況 (東側から)



2. B区の調査状況 (西側から)



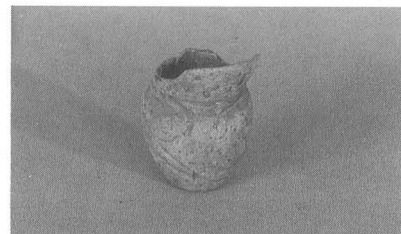
3. SD04遺物出土状況 (北側から)



4. SX06完掘状況 (南側から)



5. SD04完掘状況 (北側から)



6. SD04出土のミニチュア土器 (P311)

写真Ⅲ-6 A区出土遺物(1)



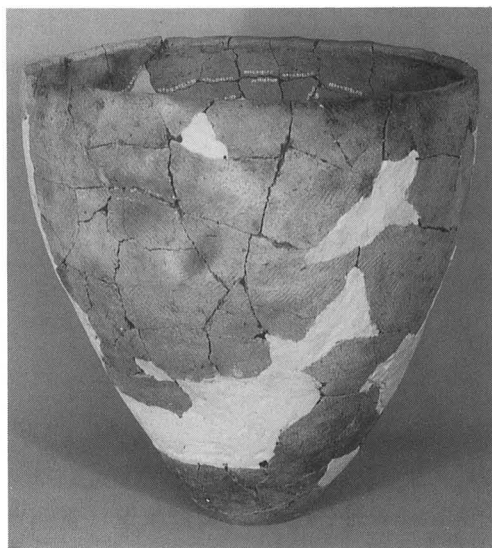
1. 深鉢形土器 (P18)



2. 深鉢形土器 (P71)



3. 深鉢形土器 (P39)



4. 深鉢形土器 (P37)

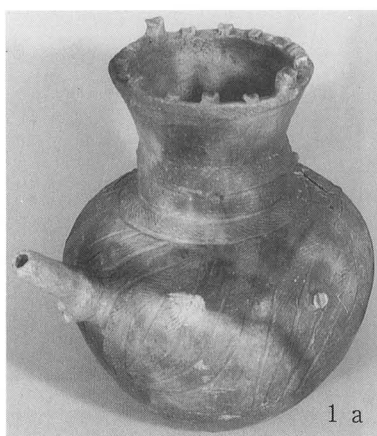


5. 深鉢形土器 (P9)



6. 深鉢形土器 (P87)

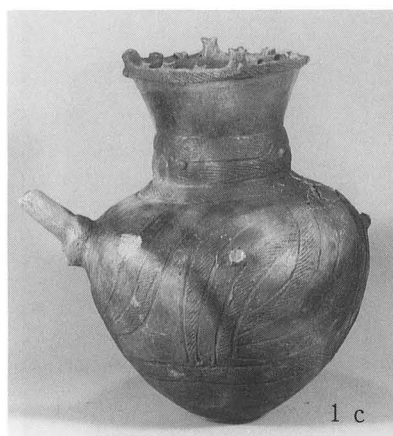
写真Ⅲ—7 A区出土遺物(2)



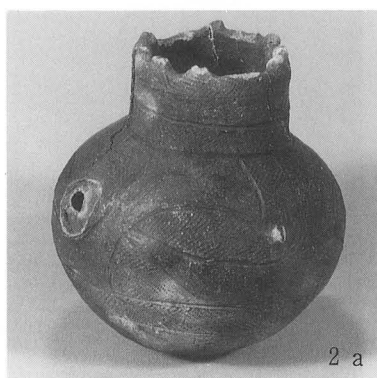
1 a



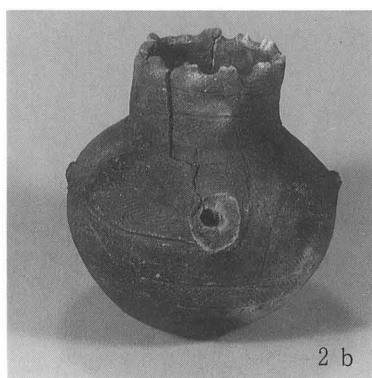
1 b



1 c



2 a



2 b

- 1. 注口土器 (P 3)
- 2. 注口土器 (P 6)
- 3. 注口土器
(P 8 · P 46)



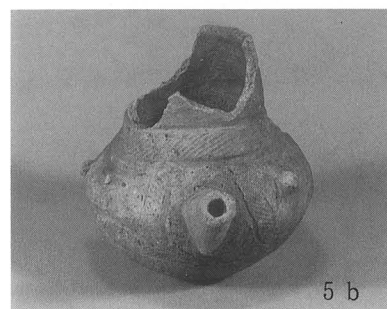
5 a



3 a



3 b



5 b



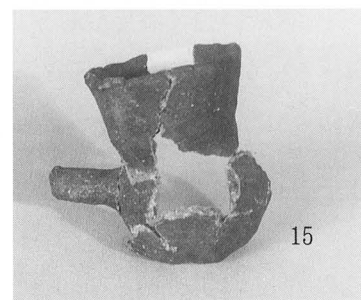
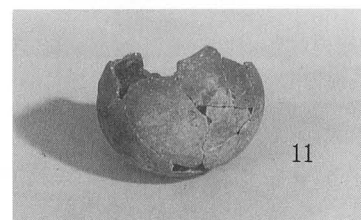
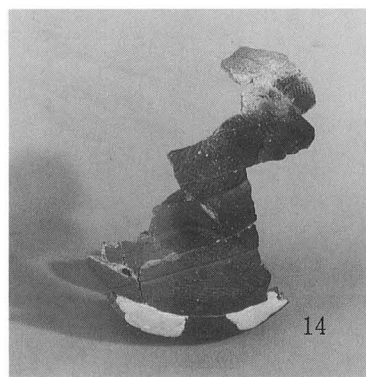
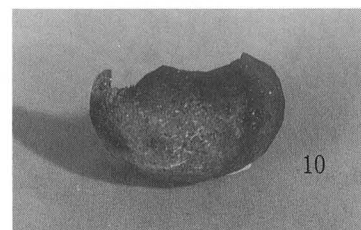
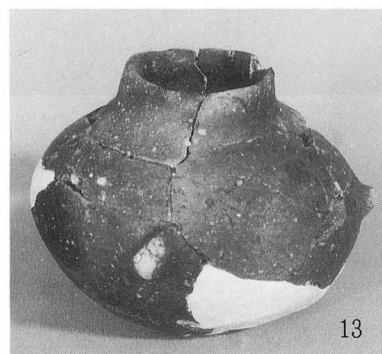
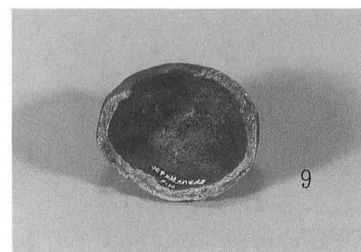
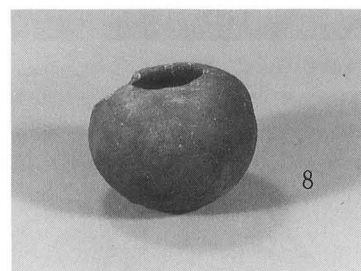
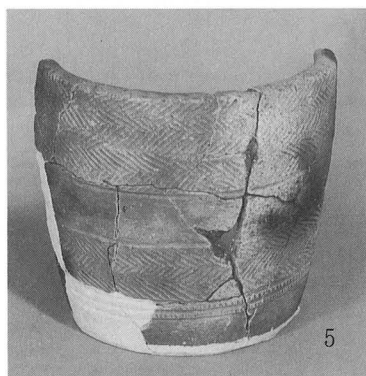
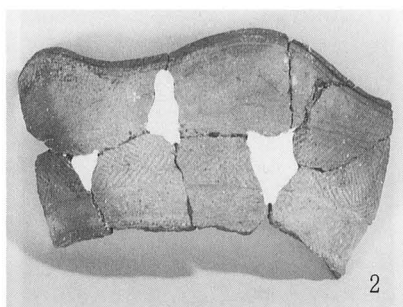
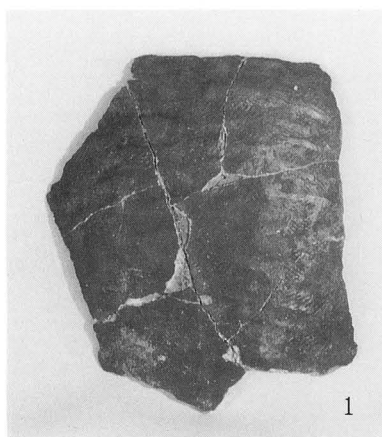
4 a



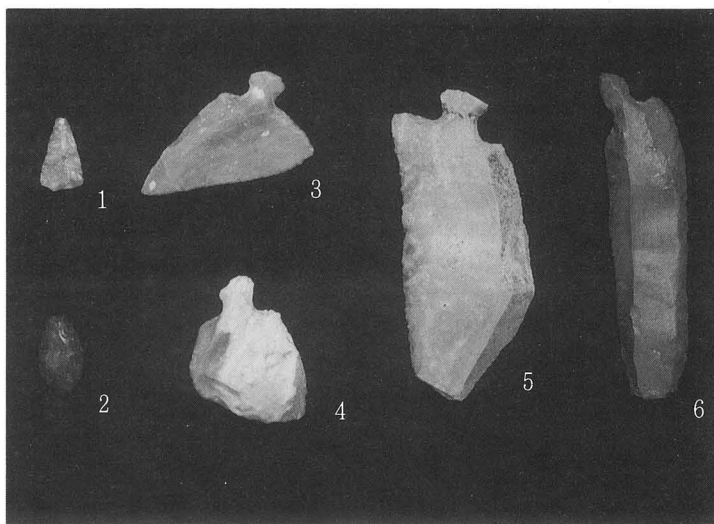
4 b

- 4. 注口土器 (P 70)
- 5. 注口土器 (P 25)

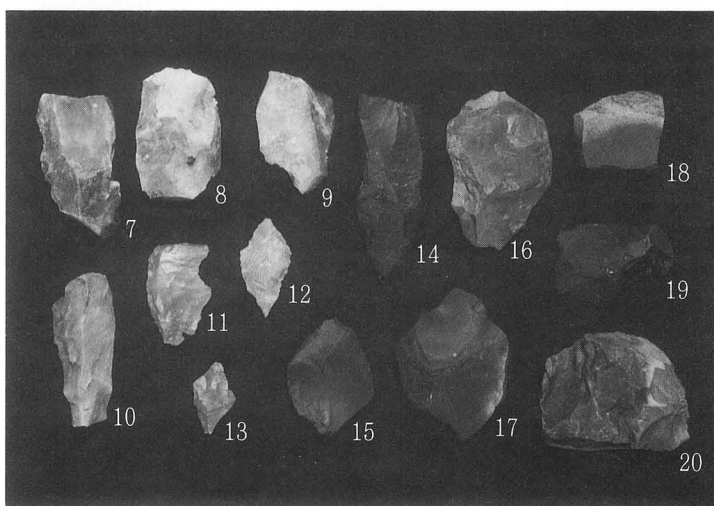
写真Ⅲ—8 A区出土遺物(3)



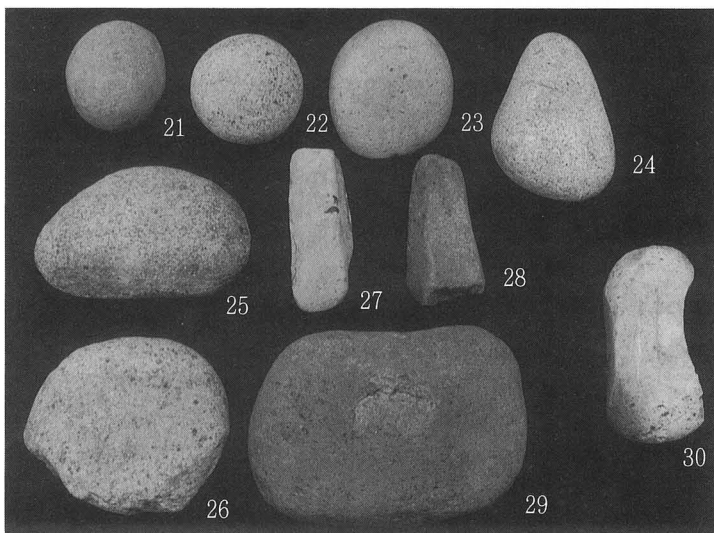
写真Ⅲ-9 A・B区出土遺物(1)



1. A区出土の石器

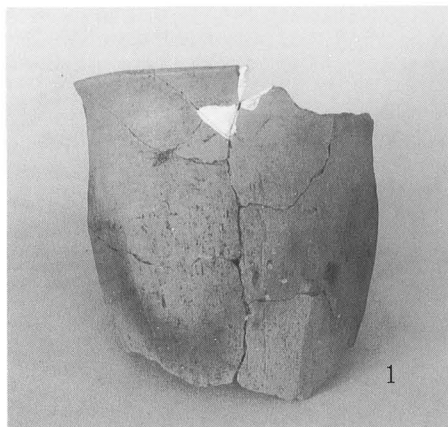


2. A区出土の剥片

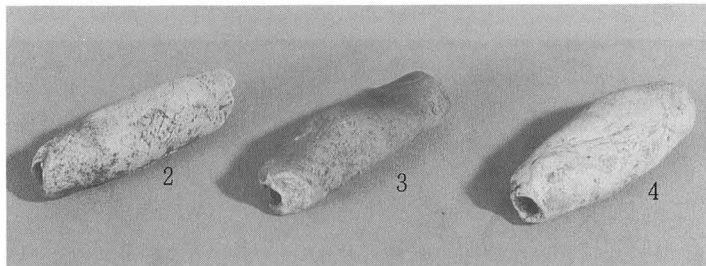


3. A区出土の石器と
B区出土石製品

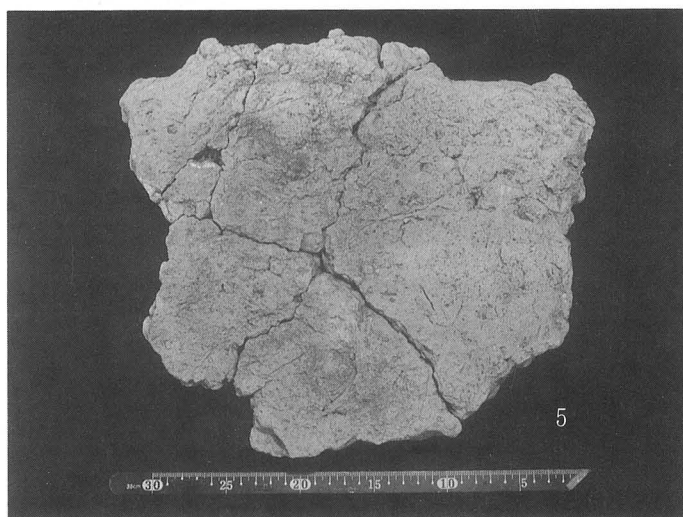
写真Ⅲ-10 A・B区出土遺物(2)



SI05出土の土師器甕



SI04・SD01出土の土錘



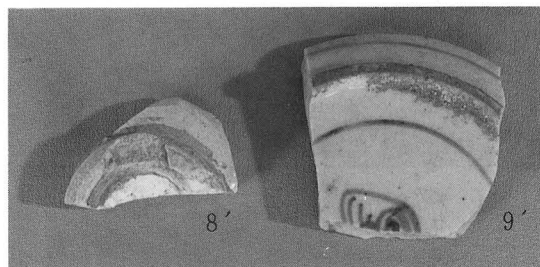
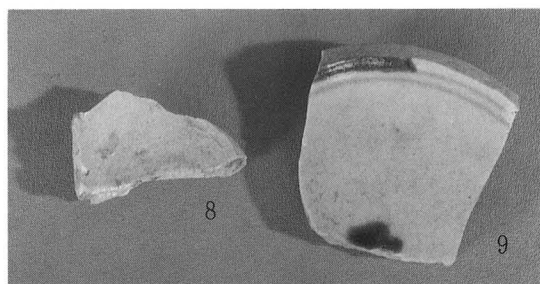
SF01出土の
埴状土製品



SD01出土の陶磁器

- 6. 香炉
- 7. 皿

B区出土の陶磁器
8. 白磁(15世紀)
9. 肥前染付(17世紀)



平成14年度

野尻 (4) 遺跡関係報告

第1章 平成14年度野尻（4）遺跡発掘調査概報

1 調査概要

遺跡の名称	野尻（4）遺跡（青森県遺跡番号 29063）
種別	集落跡
調査期間	2002年5月13日～11月8日
所在地	青森県南津軽郡浪岡町大字高屋敷字野尻地内
調査機関	浪岡町大釈迦工業団地調査会（会長 三浦貞栄治）
調査担当	浪岡町大釈迦工業団地調査会 主任調査員 高杉博章 調査員 高橋 均・村上章久 副調査員 長内孝幸・工藤 司 主任補助員 成田昭美・葛西真理子・竹内絵美子・赤平香織・永洞佐哉子 調査補助員 対馬英子・高谷美香子・東根寛茂・小山文子・加藤裕也 整理作業員 一戸しのぶ・兼平淳子・高橋陽子・奈良岡桂子・成田みどり・ 長谷川法子 事務作業員 高橋史絵・平野睦美 事務員 天内喜代里・木村亜希 作業員 54名
調査面積	約10,000m ²
調査原因	工業団地造成
検出遺構	縄文時代：Tピット1、土坑1 平安時代：建物跡63（建替えによる重複を含む）、竪穴状遺構3、 土坑254、井戸跡3、耕作跡3、焼土跡12、ピット245、 溝跡53、不明溝跡3、埋設土器1
出土遺物	縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品、土製品、骨製品
遺跡の時期	縄文時代、平安時代
遺物の保管	浪岡町大釈迦調査会整理室（旧浪岡町役場第2庁舎）

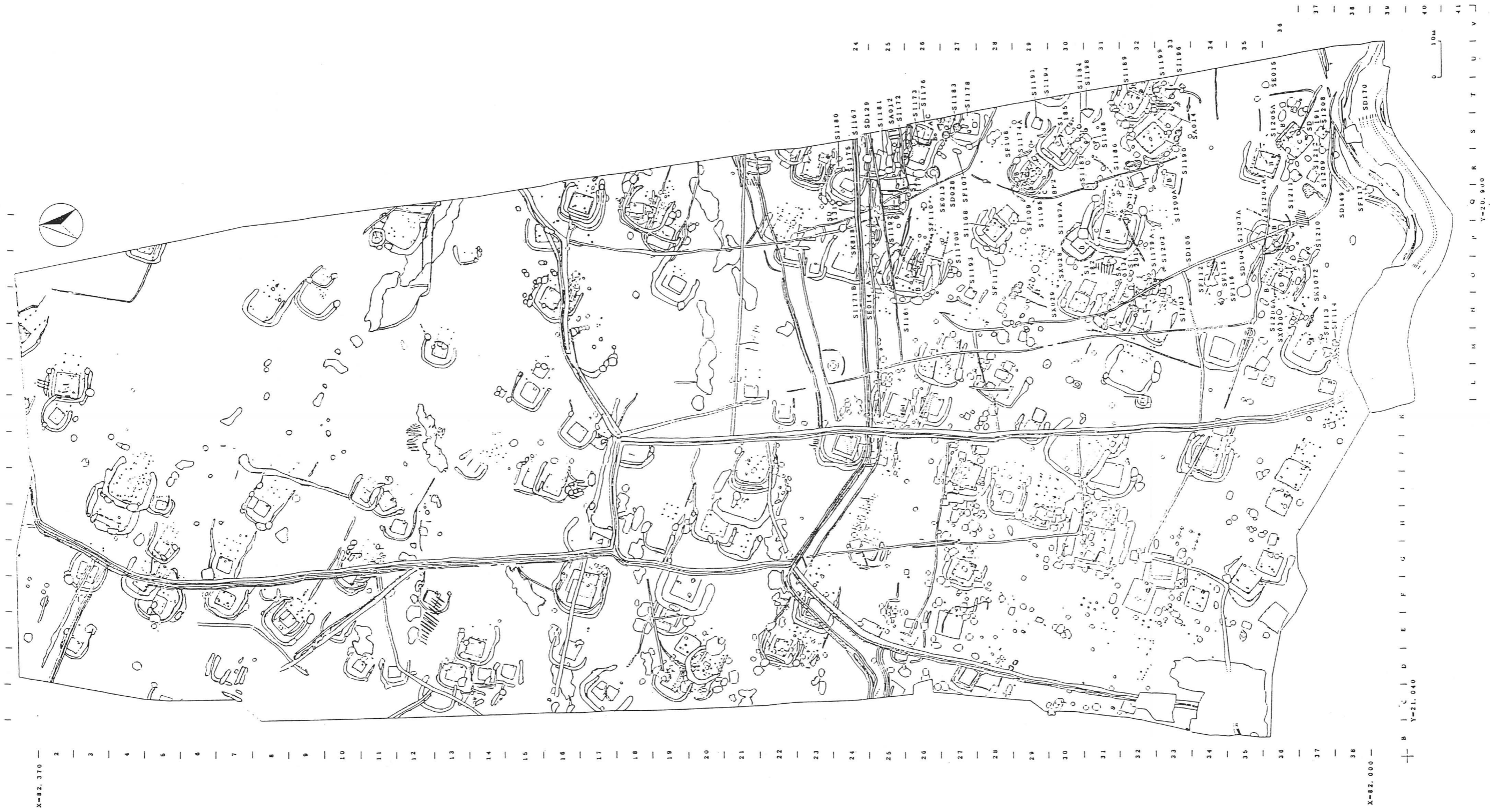
2 遺跡の概要と調査経過

本遺跡は平成12・13年度から調査が継続され、調査総面積は約59,000m²である。遺跡は前田野目台地、標高約51～43mの低位面に所在し、地形は東方の大釈迦川へ向かって傾斜している。この南北に伸びる低位段丘上には、9世紀中葉以降の遺跡が多数存在する。

調査区内の基本層序は、昨年度及び一昨年度のものに準ずる [高杉 2001、2002]。遺物包

図IV-1 野尻(4)遺跡遺構配置図

注：遺構番号表記のないものは、平成11・12年度調査遺構



含層は耕作等による削平が著しく、Ⅲ層上面が遺構確認面となっている。Ⅱa層に堆積する白頭山火山灰は、遺構の窪みなどで部分的に検出されている。また、遺跡では埋没沢と考えられる黒色土の筋が幾条か確認されている。

今年度の調査区域は、グリッドの東西軸L～V区、南北軸24～41区の範囲である。発掘調査は、L～U-34区で南北に2分割し、北側を5月13日～9月6日、南側を9月9日～11月8日の期間で調査を実施した。尚、各区域調査終了時に航空写真撮影をおこなっている。

3 検出遺構の概略

1) 建 物 跡

建物跡は、三カ年の調査で、D～E-29～35、K～M-4～11、18～21、L～N-22～24、O～U-34・35、N～Q-38・39グリッドの区域を除いて全域で検出された。建物跡の希薄な区域には、焼土、土坑が分布する。今年度の調査区域では、O～U-34・35、N～Q-38・39の範囲が建物跡の空白域であり、土坑、溝が数基点在する。建物跡は基本的に堅緻な淡黄色土上に構築されているが、沢筋に堆積する黒色土上面においても検出されている（SI-168、写真Ⅳ-1-1）。また、外周溝、掘立柱建物跡を伴うものが一般的である。大半が南東-北西、東-西に主軸方向をとる（SI-179等、写真Ⅳ-1-2）。この他、南に竈をもつもの（SI-186）や、北東-南西に主軸をとるもの（SI-201、203）も存在する。建物跡の構造に関して、昨年度の調査から掘り込みのない建物の存在が指摘されている〔高杉 2002〕。今年度の調査でも同様の構造をもつと考えられる建物跡が調査されている。SI-168は沢筋に構築されている。建物からは竈、柱穴、壁溝が検出され、外周溝、掘立柱建物が伴う（写真Ⅳ-1-1）。竈は燃焼部のみが残存し、火床が黒色土にのっているような状態で検出された。壁溝の深さは約18～40cmで、明確な掘り込みを持つSI-136（壁溝深さ約22～54cm、2001年度調査）と比較しても大差はなかった。したがって、床面まで削平されたとは考えにくい。竈の残存状態から判断しても、この建物は平地に壁溝をめぐらせて構築された可能性が高い。

建物に設置された竈は、①袖部、燃焼部等が残存（SI-184・186・189・193・202・204・211等、写真Ⅳ-1-3）、②燃焼部の火床のみが残存（SI-168・169・173・197・200・209等、写真Ⅳ-1-4）、③竈が残存していない（SI-172・175・177・180・198等）、状態で検出されている。①は、掘り込みの深い、或いは掘り込みの明確な建物跡で顕著である。②に関しては、その残存状況から、竈の廃棄に際しての儀礼的行為の存在が指摘されている〔高杉 2002〕。また、火床が建物跡の確認面で露出していることが多く、確認面で既に床面であるか、明確な掘り込みを持たないと考えられる建物に特徴的である。③は、建物が削平され外周溝のみが残存する場合、或いは建物の大部分が削平され、壁溝・柱穴のみが残存する場合である。掘り込みのある建物と平地に壁溝を回らせたと考えられる建物の間に時間的な差があると仮定するならば、竈を廃棄する際、意図的に火床のみを残す行為、或いは火床以外のものを取りはらう行

為が後者の時期においてなされていたと推測される。この問題については今後の整理で、重複関係、出土遺物等からも検討していかなければならない。

本遺跡では外周溝を伴う建物跡が一般的である。この他、外周溝を持たない建物が存在し、外周溝を伴う建物跡より時期的に古いものであると考察されている [高杉 2002]。今年度の調査においても外周溝を伴わない建物跡 (SI-172・182・184・187・188・192・199・202・203・208・211・212) が検出されている。以下、重複関係を記述する。外周溝を伴う建物跡と伴わない建物跡に重複関係が認められるものは、SI-172・180、SI-184・185、SI-185・187、SI-196・199、SI-201・202、SI-144・203、SI-204・211の7例が存在する。このうち外周溝が伴わないものが古い重複を示すのは、SI-185・187、SI-196・199、SI-201・202、SI-144・203、SI-204・211の5例である。この結果、外周溝を伴わない建物跡が外周溝を伴う建物跡の前後で構築されていたといえる。但し、過去二年間で同様の重複関係が5例あり、うち4例が外周溝を伴わない建物跡が古いこと、今年度の調査では半数以上を数えることから、この形態の建物は、外周溝を伴う建物跡以前に主体的であったと考えられる。外周土坑を伴う建物跡 (SI-205、写真Ⅳ-1-5) は、昨年度の遺物等の整理結果から、年代幅のあることがわかっている。また、これらの建物跡は、調査区域の南側に分布域をもっており [高杉 2002]、今年度もそれにあてはまる分布を示している。

外周溝は、形態・構造から分類され、その機能が論じられている [新岡・木村 1996、木村 2000]。今年度の調査においても、外周溝は幾つかの形態に分類できる。①土坑を伴わず或いは土坑と重複せずに全周するもの (SI-185)、②土坑を伴わず或いは土坑と重複せずに二分ないしそれ以上分割されるもの (SI-176・177・186・191・193・198等)、③土坑を伴い或いは土坑と重複して全周するもの (SI-167・168・170・173・174・175・178・179・181・189・197等)、④土坑を伴い或いは土坑と重複して二分ないしそれ以上に分割されるもの (SI-170・190・197・200・204・206・207等)。外周溝に土坑が伴う或いは重複する場合、その位置について以下の傾向がある。①外周溝先端 (SI-170・175・179・189・204等)、②外周溝のコーナ一部分 (SI-168・171・173・179等)。③これ以外のもの (SI-189・190等)。外周溝については、木村高 [木村 2000] が、建物への浸水防止、排水施設、融雪地等の機能的側面について詳細な検討をおこなっている。上記した遺構は今年度調査されたものに限定されている。今後は過去の調査分を含め、形態分類等の細分化、地形等との関連から、その機能について整理されていくと考えられる。

2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は、昨年度からの継続分を除き1基調査されている。SX-31は長方形を呈し、北東で外側に若干膨らむ。北西-南東に軸をとり、土坑と重複する。その機能については、倉庫等の施設と考察されている [高杉 2002]。SX-31もSI-134・206が近接しており、同様の性格を持っていたと考えられる。

3) 土 坑

調査区域のほぼ全域で検出されている。建物跡と重複、又はその周辺に構築されることが多い。平面形は過去二年間の調査結果と同じ傾向を示し、円形・楕円形・長方形等多様である。また、長軸方向、規模も様々である。建物跡と重複する場合（主に外周溝）、その構築時期が同時期であったと考えられるものが存在する（SK-819・845・848・897・961・997等）。SK-1017・1018・1021・1027は、SI-205の外周土坑と考えられる。外周溝、外周土坑が、建物への浸水防止、排水施設、融雪地としての機能を持つ可能性があるならば、これらの土坑も同様の役割を果たしていた可能性がある。土坑の多くは出土遺物が少量であるか、殆ど遺物が伴わないため、その性格が特定できていない。こういった状況のなかで、遺物が集中して出土するものや、特徴的な遺物が出土する土坑も存在する。SK-881は長方形を呈し、覆土に火山灰が堆積している。上層～底面にかけて須恵器が多量に出土した(写真Ⅳ-2-6)。また、墨書土器が出土している。覆土の堆積状況、遺物出土状況から墓であると推測される。この他には、サメの骨製品を伴うSK-1029、鉄製の鋤先を出土したSK-1034等がある。縄文時代の所産と考えられるSK-898は、SI-128の掘り方で検出した。縄文後期の遺物が伴っている。

4) 井 戸 跡

井戸跡は3基検出された。三年間の調査で合計15基となる。普通、水は、沢や河川を利用したと考えられている。昨年度の報告にもあるように、遺跡東側に大釈迦川が流れ、水利条件は良好であった。こういった環境で井戸は15基掘られている。これは、飲料水など水利の目的に応じて使い分けられていたのか、その他の理由があったのか不明である。本遺跡における井戸のありかたについては、集落構造という観点からも、今後検討されていくものと考えられる。

5) 耕 作 跡

耕作跡は3基検出された。SA-12・14は、3条の畝間が残存し南北方向へ、SA-13は、7条の畝間が残存し東西方向にそれぞれ軸をとっている。

6) 焼 土 跡

焼土は主に沢筋で検出されている(写真Ⅳ-2-7)。平面形は不整形のものが大部分である。建物跡が沢筋にも構築されているため、これと重複する場合がある。SF-111はSI-168と重複し、SF-113はSI-134と重複し、これらは建物跡より古い。焼土跡は遺物が殆ど出土していないため性格が不明なものが多い。

7) ピ ッ ト

ピットは単独で検出される場合もあるが（P-432・434等）、多くは6～11程度まとまって分布する。このなかには、土坑の周囲をめぐり、これに付属すると考えられるものもある（P-340・341・343・344・345・346・347・348・349・392・394）。その他のものは、一応のまとまりをみせるものの、規則的な配列が確認できず、その性格は不明である。

8) 溝 跡

溝は単独で検出される場合もあるが(SD-151・153・158・173・187等)、2条単位で並行するものもある(SD-149・183、176・185等)。SD-170は調査区南端で検出された沢の中央に位置し、東西方向に伸びる(写真Ⅳ-2-8)。沢地形を利用したものと推測される。沢地形は東、南、西側部分が調査区外へ続く。SD-170もこれに沿って掘り込まれているため、東・西側が調査区外に伸びている。調査部分の規模は全長約69m、幅約8m、深さ約3mである。溝の下層からは、土師器、須恵器の他、箸、漆塗りの椀、曲物底、木槽、加工板材などの木製品が多量に出土している(写真Ⅳ-2-9)。この他、沢地形に沿ったSD-51・149・176・183・185・193は、沢への排水施設の機能を持っていたと考えられる。

9) 不 明 溝 跡

3条検出された。弧状を呈し外周溝に類似するが検出状態、深さ等で異なるため区別している。

10) 埋 設 土 器

沢筋で検出された。土師器甕が横位に埋設され、口縁は北西を向いている。規模は、92×64cm、深さ12.4cmで掘り込みは浅い。甕内の土壌分析など理化学的根拠はないが、検出状況等から墓の可能性が推測される。

5 ま と め

本遺跡は平成12年度～14年度の3カ年で約59,000m²が調査された。この結果、9世紀～10世紀の集落の存在を平面的なひろがりのなかで捉えることができた。全遺構の内訳は以下のとおりである。縄文時代の土坑1、Tピット3、平安時代の建物跡259軒(建替えによる重複を含む)、掘立柱建物跡3棟、竪穴状遺構31基、土坑1,071基、井戸跡15基、耕作跡14基、焼土跡118基、ピット563基、円形周溝2基、埋設土器2基、溝跡193条、不明溝跡3条である。

参 考 文 献

大湯卓二・神康夫・平山明寿 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡発掘調査報告書』(青森県埋蔵文化財調査報告書 第186集)

新岡 巖・木村 高 1996 『野尻(4)遺跡発掘調査報告書』(青森県埋蔵文化財調査報告書 186集)

木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『考古学ジャーナル』462

高杉博章 2001 「野尻(4)遺跡調査概報」『平成12年度 浪岡町文化財紀要Ⅰ』

高杉博章 2002 「野尻(4)遺跡発掘調査概報」『平成13年度 浪岡町文化財紀要Ⅱ』

発掘調査抄録

ふりがな	へいせい14ねんど のじり(4) いせきはくつちようさがいほう								
書名	平成14年度 野尻(4) 遺跡発掘調査概報								
副書名									
巻次									
シリーズ名	浪岡町文化財紀要								
シリーズ番号	Ⅲ								
執筆者名	村上章久								
編集機関	浪岡町大釈迦工業団地調査会・浪岡町教育委員会								
所在地	038-1311 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字稲村101-1 TEL 0172-62-1111								
発行年月日	西暦 2003年 3月31日								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査面積	調査期間	調査原因
			市町村	遺跡番号					
野尻(4)遺跡	青森県南津軽郡高屋敷字野尻1番地・他		229	29063	40度 44分 26秒	140度 35分 09秒	10,000m ²	20020513 ~ 20021108	工業団地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項	
野尻(4)遺跡	集落跡	平安時代 縄文時代	建物跡63軒 竪穴状遺構3基 土坑255基 井戸跡3基 耕作跡3基 焼土跡12基 ピット245基 溝跡53条 不明溝跡3条 埋設土器1基 Tピット1基			土師器・須恵器 鉄製品・土製品 骨製品・木製品 縄文土器・石器		調査区南端で沢を掘り込んだ溝が確認され、集落南側の範囲が明らかになっている。	



1 SI-168全景（北西から）



2 SI-179全景（北西から）



3 SI-202竈（北西から）



4 SI-168竈（北西から）

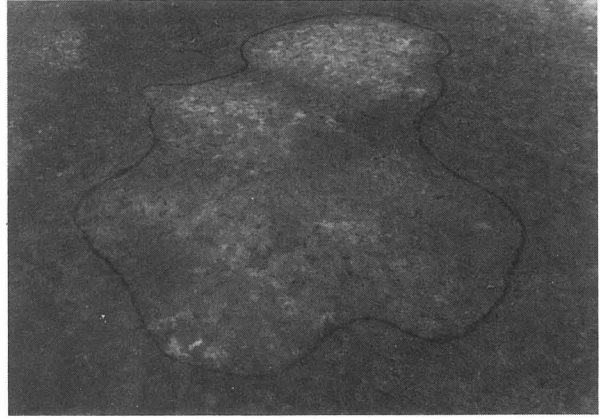


5 SI-205全景（北西から）

写真Ⅳ－1 発掘調査の状況（1）



6 SK-881遺物出土状況（北西から）



7 SF-108確認状況（北西から）



8 沢地形（西から）



9 SD-170木製品出土状況（北から）

写真Ⅳ-2 発掘調査の状況（2）

第2章 野尻（4）遺跡出土焼失家屋第117号建物跡について

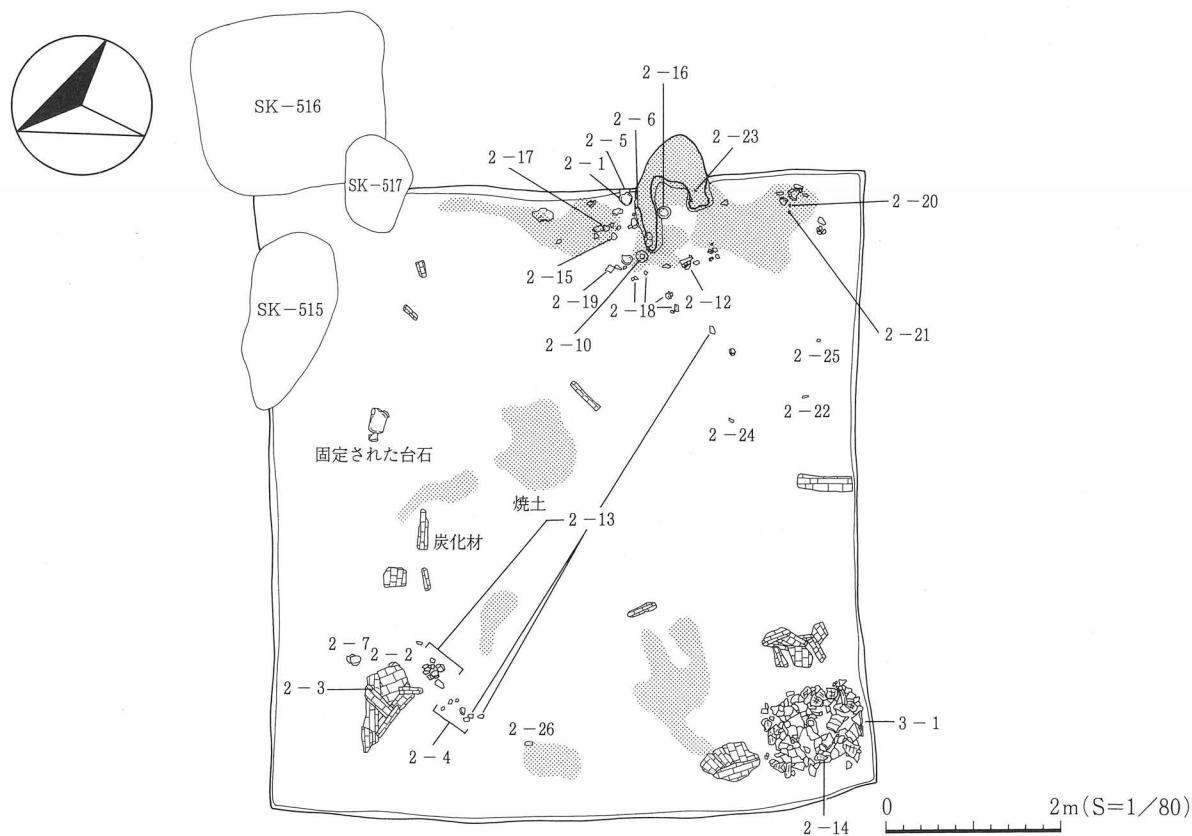
1 はじめに

平成12年度から3ヶ年にわたり発掘調査された野尻（4）遺跡から、200軒以上の建物跡が検出された。そのうち4軒は火災が原因で廃絶した、いわゆる焼失家屋である。

本稿で取り上げる第117号建物跡もそのひとつだが、一般的な焼失家屋と比べて炭化材や遺物、及びそれらの出土状態等に差異が認められた。よって、ここに紹介するとともに若干の考察を加えたい。なお、本建物跡には外周溝（SID-117）が付随するが、紙幅の制限上、図示・詳しい言及等は竪穴部（SI-117）に限ることをお許し願いたい。

2 SI-117の概要

本建物跡は、調査区の中央から70m程南のI～J-26～28区、標高48.50～49.00mに位置する。重複する多数の土坑とともに検出された（図IV-2）。図示していないが、竈の付されている南東方向に開口する外周溝（SID-117）を付属する。堆積土は暗褐色土を主体とし、焼土・炭化物を多量に含む。検出面で10世紀前半と推定される火山灰を確認したことから（註1）、本建物跡は火山灰降下以前の所産であることがいえる。規模はやや大型で、一辺約7mの方形を呈し、壁高は最大20cmを測る。主軸方位はN-108.5°-Eを示す。床面はやや起伏があり、壁は内湾気味に立ち上がる。壁溝は構築されておらず、南西隅からは住居内土坑1基と柱穴2



図IV-2 SI-117 焼土・炭化材・遺物出土状況（数字は図一遺物番号）

基が検出された。竈は東壁の中央からやや南に構築されており、自然礫を袖部芯材とし、土師器甕を支脚に使用している。床面中央部と東及び西壁には焼土が目立ち、北及び南壁付近からは炭化材が散在していた。また、床面ないし床面直上からは多量の遺物が散乱した状態で出土した。その中でも竈が構築されている東壁南側に特に集中している。

3 遺物と出土状態から

本竪穴からは、土師器・須恵器を中心にたくさんの遺物が出土した（図Ⅳ-3・4、表1）。土師器は皿・坏・甕が出土し、皿は6個体出土した（図Ⅳ-3-1～6）。同-6を除き床面ないし床面直上からの出土である。全てロクロ成形で、回転糸切りが施されている。同-1・4・5は回転糸切り後、回転糸切りした底部を貼り合わせてある。同-1には体上～中央部に墨書が施されているが全体は把握できない。調査区内の他の遺構からも土師器皿は出土しているが、ほとんどは土坑や外周溝へ廃棄したものであり、本竪穴のように一軒の竪穴に伴う数個体の出土は認められない。一連の遺跡として捉えられる野尻（4）遺跡（青森県教育委員会1996）においても同様である。遺跡内における皿の出土量の稀少性を合わせ考えると、本竪穴は集落内でも特別な人の居住、或いは非日常的な場所としての使用が考えられる。

須恵器は坏・大甕・鉢・壺・小型壺が出土した。大甕（図Ⅳ-4-1）は、楕円形を呈する掘り方（長軸53cm×短軸49cm×深さ14cm）に据えられており、竪穴の南西隅から強い力で一気に押し潰されたような状態で一括出土した。胴中央部を約1/6欠損し、口縁～頸部を若干欠くほかは完存する。一括出土でありながらも胴部中央の一部が欠損していることや、甕を固定して日常生活での使用を考慮すると掘り方はあまりにも軟弱なこと（註2）、出土位置には後世の攪乱を受けた痕跡は無いことから、意図的に胴部を穿孔した後、掘り凹めた穴に須恵器大甕を据えたものと捉えることができる。

上記の他に、体部に文字のようなヘラ書きが施された土師器坏（図Ⅳ-3-7）や須恵器坏（同-11）、頸部に縦位のヘラ書きが施された須恵器小型壺（同-17）や須恵器鉢（同-18）、土器の他は刀子（同-20～22）や、V字状の刻みを持つ砥石（同-24・25）、図示しなかったが掘り方に固定された台石も出土している（図Ⅳ-2参照）。出土遺物全体をみると、遺存状態の悪さが目立つ（表Ⅳ-1参照）。不慮の火災などに遭遇した場合は生活が中断した状況を留めていることが多い、つまり使用可能な遺物が多いが、本竪穴はこれに該当しない。

土器や製品類の出土量とは反対に、焼失家屋でありながら炭化材の出土量が少ないことも特徴として挙げられる。何らかの原因で火災に遭遇した場合、壁材や屋根材が崩れ落ちた状態で出土するケースが多い。遺跡によって炭化材の遺存状況が異なることや、火災後に廃材の片付けが行われた場合も有り得るが〔桐生 1990〕、本竪穴においては建築材がそれほど残っていない状態で焼けたものと考えたほうが自然な印象を受ける。

遺物や炭化材とその出土状態等から考察してきたが、本竪穴が焼失した原因として、不慮

の火災と捉えるのはきわめて不自然であり、それは建築材や家財道具を整理した後に火を放つといった意識的な行為によるものと考えられる。そして、安置されたかのような須恵器大甕や土師器皿から考えられる本堅穴の特殊性を踏まえると、一連の行動は本堅穴廃絶時における儀礼行為に起因するものと捉えることができないだろうか。

4 結びにかえて

以上、本堅穴廃絶時の一連の行為と、それが祭祀的意味合いを持つ可能性を指摘した。遺跡は放棄行動によって遺跡となり、放棄行動がとられた経緯や理由は当時の集落・社会システムを反映しているだろうから、より高次の文化的側面の解明への手がかりになる〔西秋 1995〕という点でも、当時の状況が色濃く窺える焼失家屋は我々に多くの情報を提供しているといえる。紙幅の制限上詳細に及ぶことはできなかったが、今後は他の遺構にみられる小型特殊土器（ミニチュア）や土玉の出土、火床だけが取り残されたカマドの在り方、馬の刻線文土器〔高杉 2002〕や平安時代の住居址に伴う翡翠大珠〔長内 2002〕など、様々な要素から集落における祭祀行為の可能性を検討していきたい。

常日頃からの御指導と本稿執筆の機会を与えて頂いた大釈迦工業団地調査会の高杉博章氏、浪岡町教育委員会の工藤清泰氏に末筆ではありますが深く感謝申し上げます。

註1 検出された火山灰の分析は行っていないが、他の遺構からは白頭山ー苫小牧火山灰（B-Tm）と十和田起源の火山灰が検出されている（根本・大友・藤田・一戸 2001）。

註2 同様の掘り方を持つ宮城県築館町伊治城SI104堅穴住居跡出土の須恵器大甕のように、床面上に盛土を施し固定を強化にしている例もある（多賀城調査研究所 1980）。本堅穴からはそのような痕跡は確認できなかったが、大甕破片の下位から土師器甕（図IV-3-14）が大甕を支えるような状態で出土した。

引用・参考文献

根本直樹・大友文彦・藤田一世・一戸松郷 2001 「野尻（4）遺跡より産出したテフラについて」（調査会委託分析報告）

青森県教育委員会 1996 「野尻（4）遺跡」『青森県埋蔵文化財調査報告書』第186集

多賀城調査研究所 1980 「伊治城跡Ⅲ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第5冊

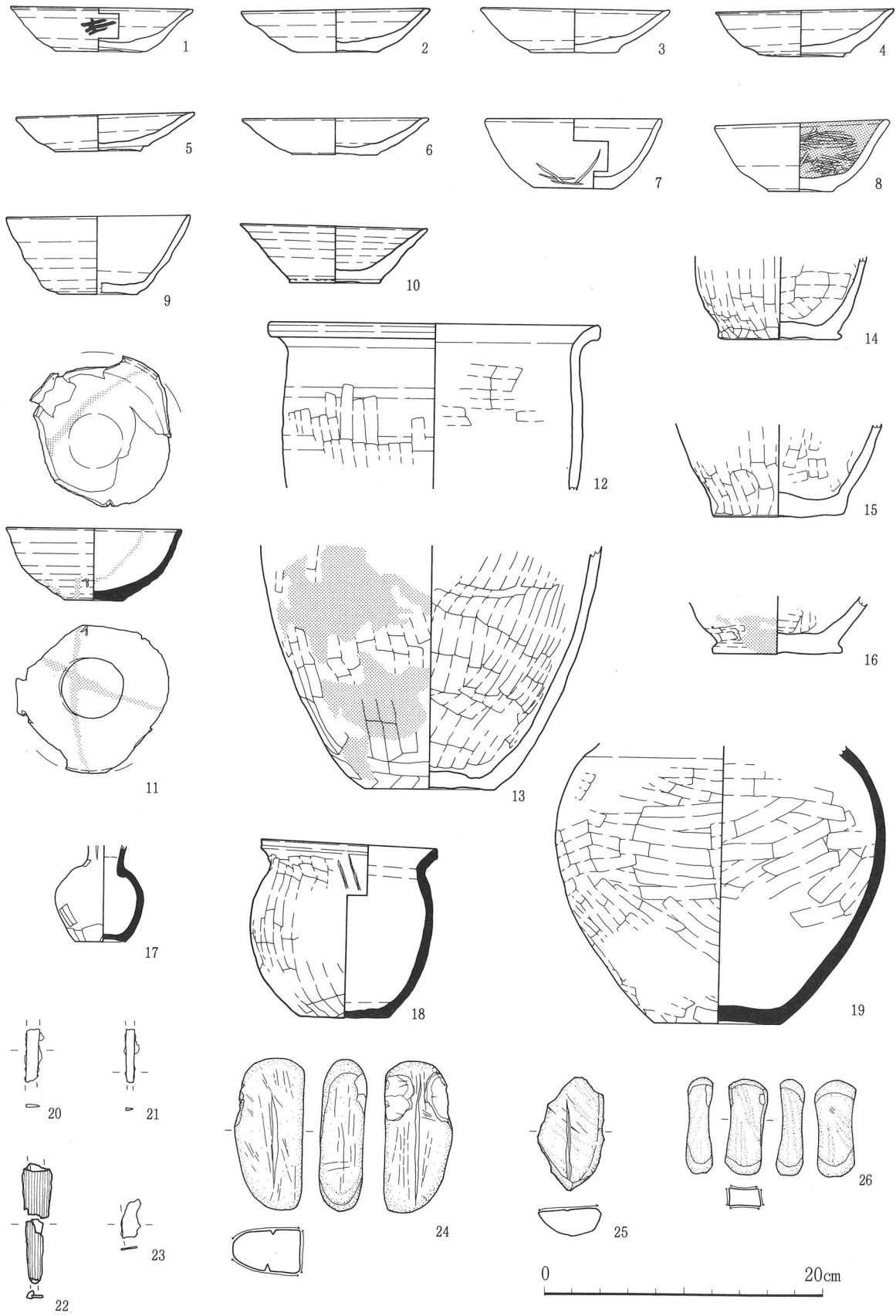
桐生直彦 1990 「火災住居からみた家財道具の在り方」『東国史論』第5号

西秋良宏 1995 「放棄行動に関する最近の考古学的研究」『東海大学地内遺跡調査団報告』5

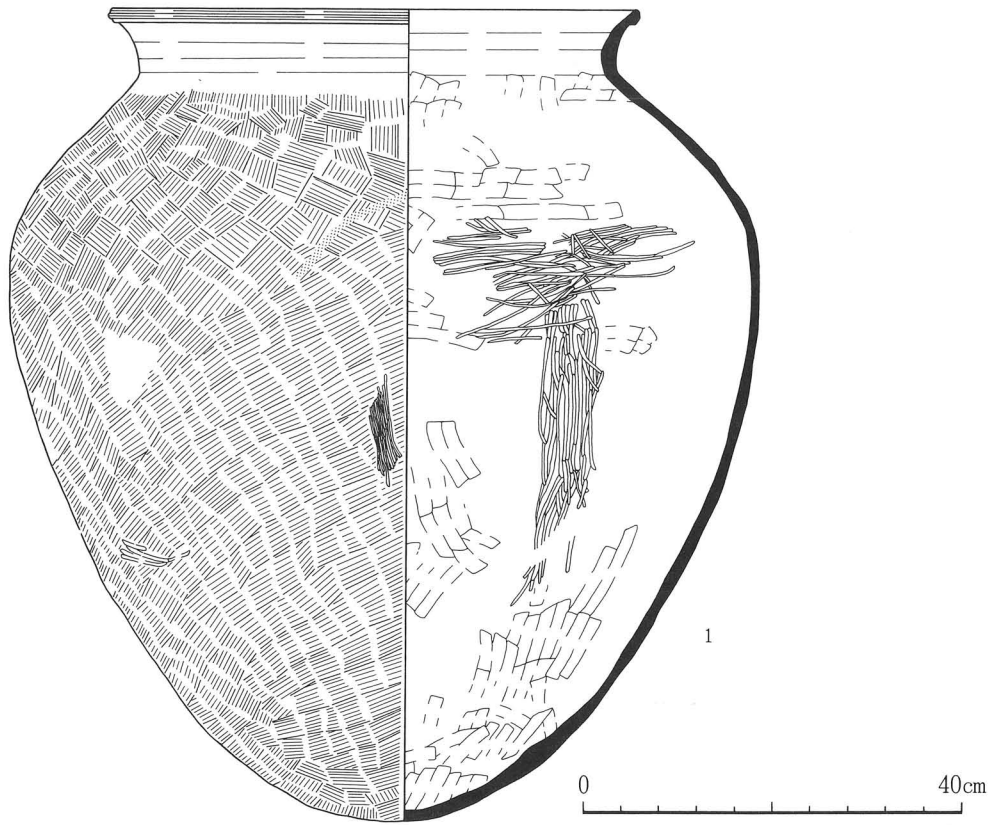
高杉博章 2002 「野尻（4）遺跡調査概報」『平成13年度 浪岡町文化財紀要』Ⅱ

長内孝幸 2002 「野尻（4）遺跡出土のヒスイ大珠について」『平成13年度 浪岡町文化財紀要』Ⅱ

羽柴直人 1994 「住居内で須恵器大甕を置く位置」『青森県考古学』第8号



图IV-3 SI-117 出土遺物(1)



图IV-4 SI-117 出土遺物(2)

表IV-1 SI-117 出土遺物観察表

図版番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	成形	外面調整	内面調整	胎土	焼成	備考
IV-3-1	土師器 皿	床面直上	13.2~13.7	3.3	6.4	口縁~体上部 4/5強 体中央~底部 ほぼ完存	ロクロ	底面 回転糸切り後、 回転糸切りした底部貼り合わせ	-	礫 石英	やや不良	外面 墨書
IV-3-2	土師器 皿	床面	13.7	3.2	5.6	口縁部 2/3 体上~中央部 4/5 体下~底部 完存	ロクロ	底面 回転糸切り	-	礫 石英	やや不良	被熱
IV-3-3	土師器 皿	床面	13.8	3.3	6.4	ほぼ完形	ロクロ	底面 回転糸切り	-	礫 石英	不良	器面磨耗 被熱
IV-3-4	土師器 皿	床面直上	13.1	6.2	3.6	口縁~体中央部 2/3 体下部~底部 完存	ロクロ	底面 回転糸切り後、 回転糸切りした底部貼り合わせ	-	礫 石英	良	器面磨耗 被熱
IV-3-5	土師器 皿	床面直上	13.1	2.8	6.2	口縁~体上部 2/3強 体中央~下部 完存 底部 ほぼ完存	ロクロ	底面 回転糸切り後、 回転糸切りした底部貼り合わせ	-	礫 石英	やや不良	-
IV-3-6	土師器 皿	左軸	(13.5)	3.3	6.2	口縁~体中央部 1/12 体下~底部 完存	ロクロ	底面 回転糸切り	-	礫 石英	良	-
IV-3-7	土師器 坏	床面	13	5.2	5.7	ほぼ完形	ロクロ	底面 回転糸切り後、ハラケズリ	-	礫	良	外面 ヘラ書き
IV-3-8	土師器 坏	床面	(12.5)	5.3	4.6	口縁~体上部 1/8 体中央~下部 1/2 底部 完存	ロクロ	体下部部 ヘラミガキ 底面 回転糸切り後、ハラミガキ	体上~底部 タテ・ヨコ・ナナメハラミガキ	礫 石英	良	内面黒色処理 器面磨耗・ハクリ
IV-3-9	土師器 坏	掘り方	(13.4)	5.9	(5.8)	口縁~底部 1/3	ロクロ	底面 回転糸切り	-	礫 細砂 石英	良	器面磨耗
IV-3-10	土師器 坏	床面	13.2~13.6	4.7	6.4	完形	ロクロ	底面 回転糸切り後、 回転糸切りした底部貼り合わせ	-	礫	良	内外面 スス付着 被熱
IV-3-11	須恵器 坏	床面	(12.8)	5.3	4.2	口縁~体中央部 1/12 体下~底部 完存	ロクロ	底面 回転糸切り	-	細砂	良	外面 ヘラ書き 内外面 水タスキ痕 ハクリ
IV-3-12	土師器 甕	床面直上	(24.2)	(12.1)	-	口縁~胴上半部 1/4弱	ロクロ	胴上半部 タテハラナデ	胴上半部 ヨコハラナデ	礫 石英	良	器面磨耗
IV-3-13	土師器 甕	床面	-	(17.8)	9.4	胴中央部 1/4 胴下~底部 3/4強	巻き上げ	胴中央部 タテハラケズリ後、 一部タテハラナデ 胴下部 タテハラケズリ 胴下部部 ヨコ・ナナメハラケズリ 底面 ハラケズリ後、ハラナデ	胴中央~底部 タテ・ナナメハラナデ	礫 粗砂 石英	良	外面 スス・粘土付着 内面 スス付着
IV-3-14	土師器 甕	床面	-	(6.1)	8.0~9.0	胴下部 1/3 底部 ほぼ完存	巻き上げ	胴下部 タテハラナデ 胴下部部 タテ・ナナメハラケズリ 底面中央部 ハラナデ	胴下部部 ヨコ・ナナメハラナデ	礫 石英	良	底面 砂底 被熱
IV-3-15	土師器 甕	床面直上	-	(6.8)	9.6	胴下部 1/4弱 底部 1/2強	巻き上げ	胴下部~下部部 タテハラナデ 胴下部部 タテハラケズリ 底面周縁部 ハラケズリ後、ハラナデ	胴下部部 タテ・ナナメハラナデ	礫 石英	良	底面 砂底
IV-3-16	土師器 甕	2層	-	(4.7)	9.5	胴下部部~底部 完存	巻き上げ	胴下部部 ヨコハラナデ 底面 ハラナデ	胴下部部 タテ・ヨコハラナデ	礫 石英	良	外面 粘土付着 被熱
IV-3-17	須恵器 小型甕	床面	-	(7.1)	3.6	頸~底部 完存	ロクロ	頸~胴部 ハラナデ 胴下半部 ナナメハラケズリ 胴下部部 ヨコハラケズリ	頸~胴部 ハラナデ	礫 長石 石英 粗砂	良	還元硬質 外面 ヘラ書き
IV-3-18	須恵器 鉢	床面 床面直上	13.0	13.0	6.6	口縁部~胴部 約1/2 底部 約1/3	ロクロ	頸~胴下部 タテ・ナナメハラナデ 胴下部部 タテハラケズリ 底面 ハラケズリ	-	礫 細砂	良	外面 ヘラ書き ハクリ 被熱

IV-3-19	須恵器 壺	床面直上	—	(20.4)	9.1	胴上部 1/3 胴中央~下部 2/3弱 底部 完存	巻き上げ	胴上~中央部 ヨコ・ナナメヘラナデ 胴下部 ナナメヘラナデ 胴下端部 ヨコヘラケズリ 底面 ヘラナデ	胴上~中央部 ヨコ・ナナメヘラナデ	礫 粗砂	良 還元燧質	外底面 釉付着 内面 磨耗
IV-4-1	須恵器 大甕	床面	54.0	86.0	丸底	口縁~胴上部 ほろ完存 胴中央~下部 5/6弱 胴下端~底部 完存	口縁~頸部 ロクロ 胴部~底部 巻き上げ	頸部 タテ・ヨコヘラナデ 胴~底部 タテ・ナナメヘラナデ 胴中央部 タテ・ナナメヘラナデ 胴中央部 一部ヘラミガキ状ヘラナデ	良 還元燧質	礫 石英	外底面 火ダスキ裏	

図版番号	器 種	層 位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
IV-3-20	刀子?	床面直上	(3.9)	(0.9)	(0.25)	(3.5)	両端欠損
IV-3-21	刀子	床面直上	(3.9)	(0.7)	(0.2)	(2.5)	両端欠損
IV-3-22	刀子	床面	(7.9)	(1.1)	(0.2)	(14.5)	蓋部 木製柄残存
IV-3-23	不明鉄製品	カマド6層	(2.9)	(1.4)	(0.1)	(1.5)	—

図版番号	器 種	層 位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
IV-3-24	砥石	床面直上	11.1	5.1	3.3	210	V字状の刻み・紙面3
IV-3-25	砥石	床面	(8.3)	(4.8)	(2.5)	(80)	V字状の刻み・紙面1
IV-3-26	砥石	床面直上	7.1	3.1	2.7	40.5	紙面4

第3章 野尻（4）遺跡出土鉄製品および鉄滓について

1 はじめに

野尻（4）遺跡出土遺物の中で出土量は少ないが、集落の生活形態を知るうえで手がかりとなるであろう鉄製品と、鉄製品製造に伴う遺物である鉄滓について述べてみたいと思う。なお現時点では遺物の処理が全部終了しておらず、遺物の分析、特に鉄滓の成分分析を行えば製錬滓、鍛冶滓などの判別も出来るのではと思い、今後の課題としておきたい。

2 鉄製品

過去3年間の調査で野尻（4）遺跡から出土した鉄製品は総数186点、鉄製品は全体に錆が激しく、形態を判別できない物も多いが、斧、錫杖状鉄製品、苧引金、紡錘車、鍋、鋤、鎌、刀子、鍬、釘などを出土する。主な鉄製品を器種別に出土遺構を記載すると、

斧 総数8点。建物跡 SI28、SI126、SI140、SI147 各1点。溝 SD49、SD73、SD74 各1点。グリッド、O-23、P-31 各1点。

錫杖状鉄製品 総数8点。建物跡 SI75、SI126、SI140、SI147、SI194 各1点。

土坑 SK956、SK969 各1点。溝 SD104 1点。

苧引金 総数11点。建物跡 SI4 1点。SI75 4点。SI137 3点。SI140 2点。SK905 1点。

紡錘車 総数3点。建物跡 SI4 1点。SI155 1点。SI179 1点。

鋤 総数5点。建物跡 SI95c 1点。SI179 1点。土坑 SK192 1点。SK1034 1点。グリッド S-37、1点。

鎌 総数4点。建物跡 SI140 1点。SI204b 1点。土坑 SK386 1点。溝 SD49 1点。

刀子 総数34点。建物跡 SI160 1点。SI75 1点。SI106 1点。SI113 1点。SI117 1点。SI121 1点。SI125 1点。SI132 1点。SI140 5点。SI147 1点。SI167 1点。

SI169a 1点。SI173 3点。SI179 1点。SI189 2点。SI204 1点。SI206 1点。

土坑 SK371 1点。SK520 1点。SK526 1点。SK592 1点。SK754 1点。

SK819 1点。SK905 1点。グリッド、O-32 1点。P-31 1点。R-31 1点。

鍬 SI169a 1点。

釘 総数7点。建物跡 SI65b 1点。SI75 4点。SI136 1点。SI140 1点。

鍋 総数3点。建物跡 SI179 1点。土坑 SK884 1点。グリッド Q-32 1点。

刀子、釘は錆が激しいため判別が難しく、不明板状、不明棒状とした物の中にも多数含まれていると思われる。刀子とした物も完形品はほとんどなく、部分的に形態を残すのみである。また、年代的には新しいと思われる、刀と喰出し鏝をSI179、J-28、J-35グリッドより検出した。以上、主な鉄製品を記載してみたが、野尻（4）遺跡の中で特徴的な鉄製品としては、錫杖状鉄製品の存在があげられる。建物跡から5点、土坑から2点、溝から1点検出されてい

る。SI126、SI140、SI147からは錫杖状鉄製品に伴って鉄斧が検出され、錫杖状鉄製品と鉄斧はセットになっていたのではとの指摘もされている。本遺跡の遺物を個々にみると、

SI75 筒状金具 1、建物跡覆土検出、9世紀後半。筒状の金具のみ検出。

SI140 羊角状の本体と筒状金具 2 点、筒状金具 1 点は側面に約 4 mm の孔を持つ（図 IV - 5 - 3）。建物跡外周溝確認面検出、9世紀末。SI140は焼失家屋で、他にも刀子、鎌、苧引金、斧など多量の鉄製品を検出する。斧は建物跡覆土炭化材検出面検出。

SI147 羊角状の本体に環状の金具が付き、筒状の金具がぶら下がる形態と推定する（図 IV - 5 - 2）。建物跡覆土中層検出、9世紀末。錆が激しく形態判別が難しい。伴出の斧は建物跡壁溝検出。

SI126 羊角状の本体と筒状金具 4 点、筒状金具の破損品 3 点（図 IV - 5 - 1）。建物跡掘り方検出、9世紀末～10世紀前半。伴出の斧は建物跡外周溝確認面検出。

SI194 羊角状本体部 1 点、9世紀末。建物跡外周溝火山灰直上検出。

SK956 筒状金具 2 点と板状、棒状金具各 1 点、覆土検出。SID197切り合い土坑。

SK969 筒状金具 1 点、覆土下層検出。

SD104 本体部に環状の金具が付く。覆土検出。他の遺物と形態が違い錫杖状鉄製品と断定するには、やや不確定。

錫杖状鉄製品の出土例として、浪岡町では高屋敷館遺跡、源常平遺跡からの出土例があり、青森県内でも野尻遺跡、弥栄平（4）遺跡、上七崎遺跡、蓮田大館遺跡、李平下安原遺跡などの出土例がある。野尻（4）遺跡出土の錫杖状鉄製品を県内の他の遺跡と比較すると、年代では9世紀後半から10世紀前半とやや遡るものの、形態では羊角状の平板な本体に筒状の金具をぶら下げる同一種である。仏具である錫杖が野尻（4）遺跡の中でどのような役割を果たしていたのか、祭祀とはどのように行われていたのだろうか。古代人の生活形態、精神観を知るうえで重要な手がかりになるのではないだろうか。

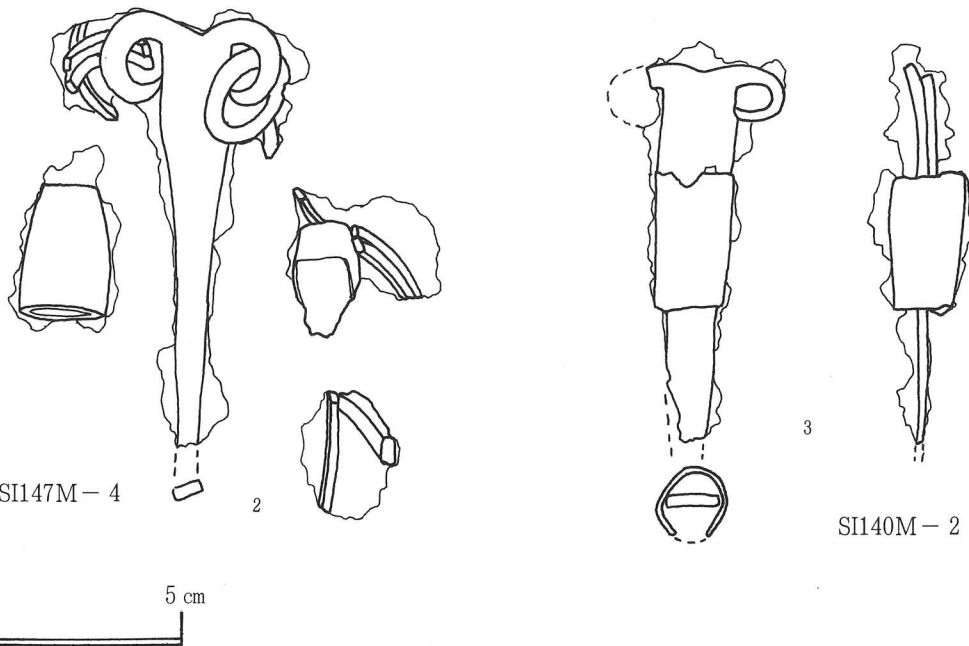
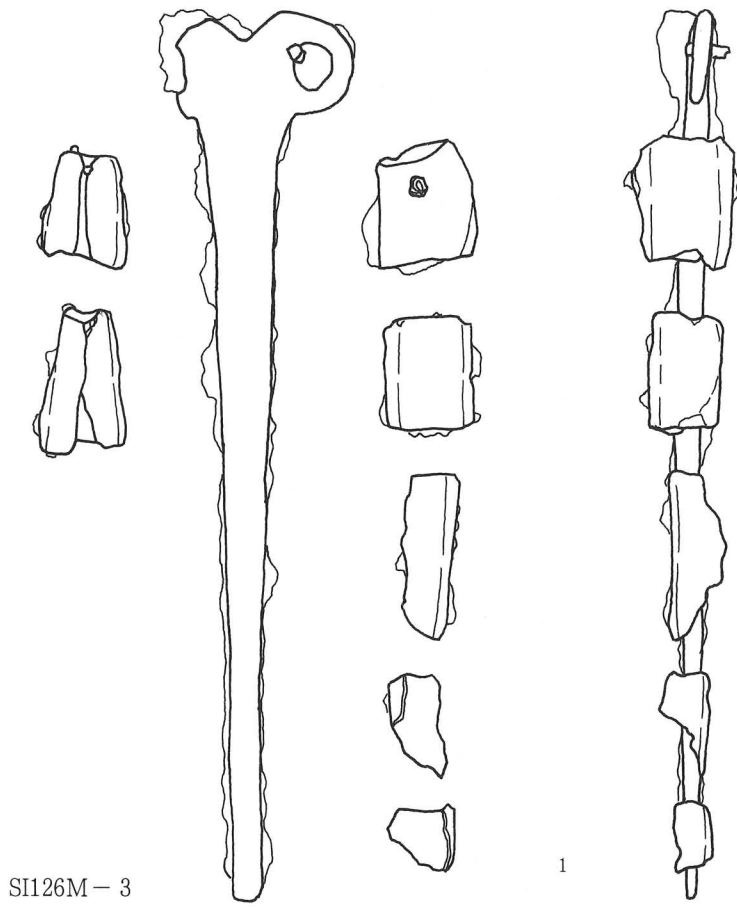
3 鉄 滓

過去 3 年間で野尻（4）遺跡から出土した鉄滓および関連品の量は、鉄滓 56.5147 kg、粒状滓 112.5 g、ガラス質の付着した屑滓、炉壁、羽口の粘土の付着するもの 2.2532 kg、その他に関連品としては鞆の羽口があり、関連遺構としては SI91b から鍛造剥片を伴って台石（金床石）が検出され、鍛冶遺構と推定する。野尻（4）遺跡の中で明確に鍛冶、製鉄関連の遺構と認定出来るのは SI91b だけである。出土した鉄滓および関連品はすべて廃棄によるものであると推定する。ただ気になる遺構として SI100 がある。検出時はカマドとしたが、調査を進めると方向も形態もカマドにはならず SIX とした焼土範囲があり、製鉄関連の遺構になるのではと推測したが、関連遺物の出土もなく明確な判断が下せないままである。廃棄鉄滓の量をグリッド別に分布図にしたものが図 IV - 6 である。

鉄滓は、大別すると製錬滓と鍛冶滓に分かれる。原鉱石および砂鉄を原料とし、原料内の酸化鉄を1200℃以上の高温で木炭の炭素により還元させ、金属鉄へと変化させる。この工程で、原料中の不純物を分離させた物が製錬滓となる。出来上がった粗製鉄は銑（ずく）、鉞（けら）などと呼ばれる。粗製鉄はまだ不純物が多く、二次精錬（鋼製錬）を行う。この工程で出来上がった鉄（錬鉄）を繰り返し鍛錬を行い農具、工具などに加工する。この二つの工程で鍛冶炉の底部に溜まった不純物が鍛冶滓となる。鍛冶滓は、炉の底部に溜まるため椀状滓と呼ばれる半球状の塊になる。これに対し、製錬作業中に炉排滓口から流れ出た鉄滓を流状滓と呼ぶ。この事から、椀状滓＝鍛冶滓、流状滓＝製錬滓と判断される事があるが、成分分析を行わないと一概に形態だけでは判別出来ない。野尻（4）遺跡内で出土した鉄滓は、製鉄遺構に伴わないため製錬滓、鍛冶滓の判別、集落内で製錬作業が行われていたのか、または他の地域から粗製鉄を運び鉄製品を製造していたのかは現時点では定かではない。しかし鉄滓の成分分析を行い製錬滓の存在を確認すれば、集落内での製錬作業の有無、原料は砂鉄か鉱石か推定できる。だが、もっとも大事な事は、集落内の製鉄（製錬）遺構の確認である。集落内で製錬作業が行われていたとすれば、多量の木炭の使用が考えられ、炭窯の有無、原料の調達場所などの問題も考えられる。集落内に鍛冶場があり、鍛錬鍛冶が行われていた事は推定出来るが、56kgもの廃棄滓が鍛冶場から鋼製錬、鍛錬によって生成されるのか疑問点が多い。このように、野尻(4)遺跡では多量の鉄滓の出土はあるものの製錬遺構の存在が確認されず、調査区外のどこかにあるのではと推測する。製鉄、製錬関連遺構の検出を今後の調査に期待する。

参 考 文 献

- 青森県教育委員会 1978 青森県埋蔵文化財調査報告書第三十九集『源常平遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会 1998 青森県埋蔵文化財調査報告書第二四三集『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』
大澤正巳 1983 「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』（たたら研究会）
工藤清泰 2000 「耳と音—耳皿と錫杖の考察」『村越潔先生古稀記念論文集』弘前大学教育学部考古学研究室OB会
佐々木稔 1993 「遺構をはなれて製錬滓と断定できるか」『たたら研究』34号（たたら研究会）



图IV-5 野尻(4)遺跡出土錫杖状鉄製品



図IV-6 野尻(4)遺跡出土鉄滓重量別分布図

第4章 野尻（4）遺跡で検出された土坑（SK1092）について

1 野尻（4）遺跡の土坑群

野尻（4）遺跡の発掘調査は、2000年～2002年にかけての3か年（18か月）におよんで実施され、約59,000㎡の範囲が全面調査された。その結果、9世紀後半から10世紀前半にかけての時期を盛期とする平安時代の集落の存在が明らかになった。

本遺跡では、最大259軒を数える重複の多い建物跡群を中心とする遺構が検出されたが、そうした遺構のなかで、1072基にのぼる多くの土坑が確認されていることは注目しておいてよいであろう。2002年度の発掘調査概報でも指摘したように〔高杉 2002〕、これらの土坑の平面形は円形・楕円形・長方形・方形など様々で、規模も一様ではなく、その用途や性格も多様であったと考えられる。例えば、馬の線刻画をもつ刻線文土器や小型特殊土器（ミニチュア）あるいは土玉などを出土した土坑は、それらの遺物の性格から祭祀的色彩が濃厚であり、鉄関連遺構に隣接して検出された土坑は、付随する廃材ピットと推定された。さらに、建物跡の外周溝の先端土坑に特徴的に認められたように、土器などに伴って焼土・粘土・炭化物など竈の構築材が投棄された廃材ピットではないかと推定される土坑も少なからず存在する。また、外周溝については、建物への浸水防止・排水のための施設、雪囲いの施設、融雪池の施設といった機能をもっていたとする見解もあり〔木村 2000〕、建物跡の外周土坑と判断された土坑群については、外周溝と同様の用途を果たした可能性も考慮しておく必要があるだろう。

このように多種多様な土坑群のなかで、1基だけ他とはきわめて特異な土坑が検出された。

2 土坑SK1029の概要と出土遺物

ここで問題にしようとしている土坑SK1029は、調査区域の南東側で検出された。本土坑の南方約15mには、野尻（4）遺跡の南限にあたると思われる大溝SD170が東西方向に蛇行してはしっている。したがって、本土坑は遺跡の南東隅に位置するとみてよいであろう。

SK1029の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は南北137～132cm、東西115～106cm、確認面からの深さ22～33cmを測る。土坑の方位は、ひとまず北を基準としてとらえるとN-7°-Wをとる。北壁は98°の角度で立ち上がり、南壁は北壁よりやや浅く、コーナーは緩い弧を描くように114°の角度で立ち上がる。掘り方の壁面および底面は、5～6cmのほぼ均一の厚さの焼けた粘土で覆われていた。覆土は6層に分層されたが、中からは壁および底面を覆っていたのと同じ焼けた粘土が破碎した状態で多量に出土した。この破碎した焼け粘土には、規格的に面取りされたと考えられるものが多数認められたので、土坑を覆う蓋であった可能性がきわめて高い。これらはかなり脆い状態で出土しており、取り上げの際には割れたものも多い（図IV-7-1）。本土坑からの出土遺物はきわめて少なく、その内訳は土師器小片15点、磁器小片3点、サメ椎骨製品2点である。したがって、これらの出土遺物から本土坑の時期を決定付け

るのは、きわめてむずかしい。ただ、本土坑からサメ椎骨製品が出土しているという事実は、土坑の特異な形態とともに注目しておいてよいであろう。

図Ⅳ-7-2-1は周縁部が磨耗しているが、径20×19mm、厚さ7～9mm、重量1.3gを計り、中央には径3mm強の孔があげられている。下層出土。

図Ⅳ-7-2-2は周縁の大部分が腐食によって欠損したものと思われ、径4mmの孔があげられた中央部表面のみが現存している。現存径9.5mm×9.0mm、現存厚3.5mm、重量<100mgを計る。底面出土。1・2ともに土坑の南西寄りの位置から出土している。

3 土坑の性格と出土遺物の用途

土坑全体を粘土で被覆するという基本構造に関しては、誤解を恐れずに比較を行うと、まず思い描くのは前・中期の古墳によくみられるとされる粘土槨である。言うまでもなく、いわゆる粘土槨は、年代的にも形態的にも本土坑とは同一視はできない古墳の埋葬施設である。本土坑では、内部に木棺のような施設が安置されたような形跡は認められなかったが、土坑全体を粘土で包み覆うという構造は、内部を保護するという役割を果たしたという点で、機能的に共通するものがあるといえるであろう。

次に出土遺物についてであるが、サメは主としてその歯の利用が多いことは、よく知られている。サメの歯の出土は北日本では特に北海道に多く、しかも本州と比較すると墓坑からの出土が多いこと、それは遺体に装身されたか、近接して副葬されたものと考えられること、時代的には全国的に縄文時代が中心であることが指摘されている〔長沼 1984〕。

青森県域を中心とした本州北辺地域については、福田友之がサメの椎骨製品を含めてサメの歯の利用状況を論じている〔福田 2000〕。それによると、青森県域のサメ出土遺跡に関しては、縄文時代が20か所で早期末葉が最も古く、弥生時代～中世の例はないが、近世の例が3か所あるとされる。さらに、サメの歯の利用は縄文中期後半と後期後葉、晩期にみられ、特に晩期に増加する傾向があること、貝塚や遺物包含層からの出土例、住居跡からの出土例については北海道とほぼ同様の廃棄方法であったこと、墓坑からの出土例は秋田県平鹿1例のみで北海道とはきわだった違いが認められると指摘した。また、サメの椎骨製品については、青森県域ではいずれも形態的に耳飾りを主体とする装身具とされ、大間町ドウマンチャ貝塚（縄文晩期）・八戸市松館貝塚（縄文晩期）・青森市大浦貝塚（縄文晩期）・青森市三内丸山遺跡（縄文前期中葉）の出土例、岩手県域では久慈市二子貝塚（縄文晩期中葉）・野田村根井貝塚（縄文後期後葉）、秋田県域では増田町平鹿遺跡（縄文晩期中葉）の諸例があげられている。また、縄文時代においては、中期以降、晩期にいたるまで北陸の糸魚川産ヒスイが、本州北辺地域や北海道に多数もたらされており、サメの歯の出土する遺跡からヒスイが出土する場合が多いことも指摘されている。

野尻（4）遺跡では、平安時代の建物跡に伴ってヒスイ大珠が出土しているが、縄文後期前

葉土器も出土していることから、平安時代の再利用と推定されている [長内 2002]。

また、浪岡町平野遺跡では、縄文時代（晩期前半）および弥生時代と推定される土坑墓が約94基検出されており、そのうち隅丸長方形（報告では方形）を呈するSK33からは、中央に孔のあるサメ椎骨が2点出土しており、不整楕円形（報告では不定形）を呈するSK37からはヒスイ玉が2点出土している [木村・工藤 2002]。報告書は、サメ椎骨については耳飾り等の目的があつて使用したか否かは不明であると慎重だが、墓と推定した土坑の性格から考えると装身具と考えて大過ないであろう。

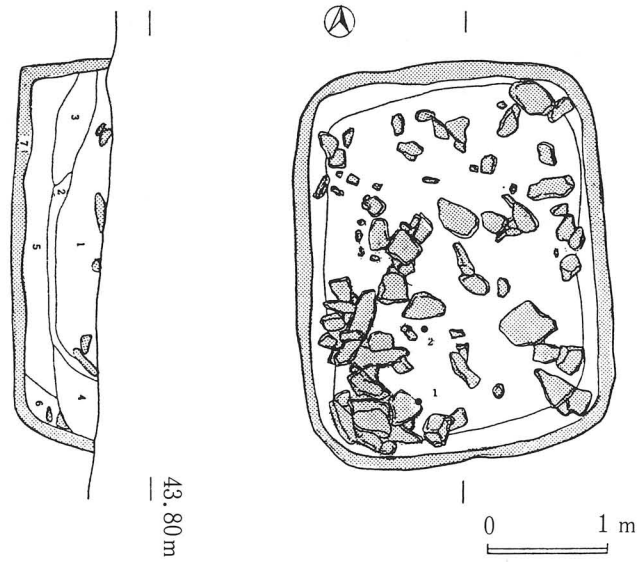
蛇足ながら、サメの歯については一般的に垂飾品と考えられているほか、頭飾り、武器 [Thilenius 1908-10:Abb.278、図Ⅳ-7-3-1・Koch 1965:Fig.126、図Ⅳ-7-3-2] ないし工具と考えられているが、ポリネシア・ツバル諸島では打傷、腫物や鬱血等の外科的治療の際のランセット（刃針）として用いられている [Koch 1961:Fig.115、図Ⅳ-7-3-3]。また、ミクロネシア・東カロリン諸島では、カピングマランギ島でサメの捕獲法が知られているものの、他の大抵の島々では食用とされないためほとんど捕獲されることはない [Fischer 1970]。ただ、ギルバート諸島などにおける剣あるいは短剣などの武器の発達は、島民間の抗争といった社会的背景によるものであり、基本的には資源の限られた、換言すれば、環境的制約を受けた太平洋の島々における独自の事情に基づいている。日本において同一の状況を想定することにはやや無理があり、実用の武器としての使用は考えがたい。よく言われるように、人々はサメの歯のもつ呪力を期待したのである。

さて、これまでみてきた遺構の在り方およびサメの利用状況から判断して、野尻（4）遺跡の土坑SK1029は本州では類例の少ないサメ椎骨製品を伴う墓坑としての性格が濃厚であると考えられる。さらに大胆な推定を行うと、サメ椎骨製品が原位置を保った状態で出土しているとするならば、土坑の南寄りで2点出土していること、それが人体の頸部より上位に付けられた耳飾り等の装身具である可能性が高いこと、その腐食の度合いから判断してさらに複数が存在していたことが想定されるならば首飾り（写真Ⅳ-3）の可能性も考えられることから、南頭位（S-7°-E）をとる墓であったとみることもできるであろう。

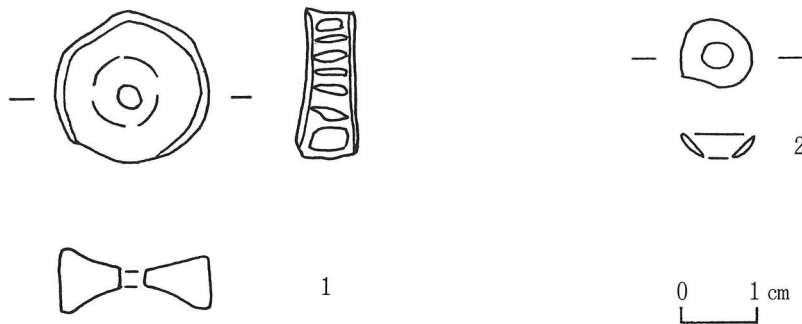
引用文献

- Fischer, John L. 1970 *The Eastern Carolines*. HRAF PRESS.
福田友之 2002 「津軽海峡とサメの歯—本州北辺地域出土のサメの歯をめぐって—」『村越潔先生古稀記念論文集』
木村 高 2000 「津軽地方における平安時代の住居跡」『考古学ジャーナル』462
木村浩一・工藤清泰 2002 「平野遺跡発掘調査報告書」『平成13年度浪岡町文化財紀要』Ⅱ
Koch, Gerd 1961 *Die materielle Kultur der Ellice-Inseln*. Museum Für Völkerkunde Berlin
1965 *Materielle Kultur der Gilbert-Inseln*.
長沼 孝 1984 「遺跡出土のサメの歯について—北海道の出土例を中心として—」『考古学雑誌』70（1）
長内孝幸 2002 「野尻（4）遺跡出土のヒスイ大珠について」『平成13年度浪岡町文化財紀要』Ⅱ
高杉博章 2002 「平成13年度 野尻（4）遺跡発掘調査概報」『平成13年度浪岡町文化財紀要』Ⅱ
Thilenius, G., ed. 1908-1910 *Ergebnisse der Südsee-Expedition*.

- 1層：黒色土(10YR2/1)
 - 2層：明黄褐色土(10YR6/6)
 - 3層：黒褐色土(10YR3/2)
 - 4層：黒褐色土(10YR3/1)
 - 5層：黒褐色土(10YR2/2)
 - 6層：黒褐色土(10YR3/1)
 - 7層：明褐色焼粘土(7.5YR5/6)
- 土層の色調は『新版標準土色帖』
[小山・竹原 1967] による。



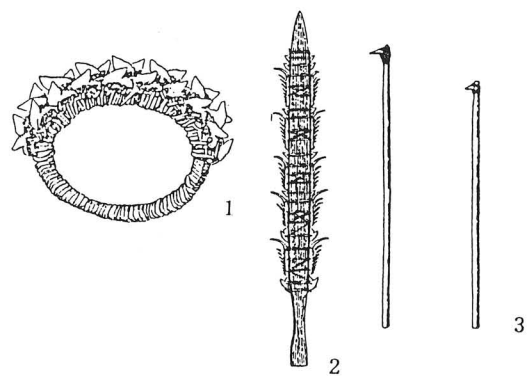
図IV-7-1 土坑SK1029



図IV-7-2 出土遺物(サメ椎骨製品)



写真IV-3 サメ椎骨を用いたネックレス
(1977年にミクロネシア・パラ
ウ諸島コロール島にて収集)



図IV-7-3 太平洋諸島のサメの歯製品
1・2 武器
3 ランセット

平成14年度

文化財目誌・他

1 平成14年浪岡町文化財日誌

- 1月22日 高屋敷館遺跡公有化補助金内示
- 2月1日 青森大学教授・村越潔先生浪岡城跡新館報告書指導
- 2月4日 法政大学教授・小口雅史先生、野尻（4）遺跡出土の馬の刻画文土器調査
- 2月5日 青森短期大学教授・葛西励先生平野遺跡報告書作成指導
- 2月6・7日 東京・文化庁平成14年度事業ヒアリング（工藤・木村）
- 2月12日 秋田県埋蔵文化財センター・小島明夏氏調査来訪
- 2月13日 青森短期大学教授・葛西励先生平野遺跡報告書作成指導
- 2月14日 [派遣・工藤清泰] 藤崎町歴史講座「古代津軽の考古学的調査成果」（藤崎町文化センター）
- 2月21日 青森短期大学教授・葛西励先生平野遺跡報告書作成指導
- 2月22日 県文化財保護課・補助金事務執行指導
- 2月26日 平成13年度紀要（各報告書）作成会議（村越潔・葛西励・高杉博章）
- 3月6日 [派遣・工藤清泰] 浪岡警察友の会講演「浪岡地区の歴史」（ジュノウ浪岡）
- 3月7日 三浦貞栄治文化財審議会会長・高屋敷地区「賽の河原」調査
- 3月15日 文化財審議会開催
- 3月22日 浪岡町大釈迦工業団地調査会運営会議開催
- 4月5～7日 [派遣・工藤清泰] 青森県史原稿調整のため
- 4月8日 [委嘱・工藤清泰] 平成14年度青森県埋蔵文化財調査員（浪岡町野尻（1）・山元（1）遺跡）
- 4月16日 羽黒平（1）遺跡試掘調査開始、[委嘱・成田清一教育長] 平成14年度青森県埋蔵文化財調査協力員
- 4月18日 市浦村教育委員会、「十三湊遺跡」史跡指定に関して調査来訪
- 4月19日 史跡浪岡城跡大清掃
- 4月25日 [委嘱・工藤清泰] 五所川原須恵器窯跡群発掘調査整備検討委員会
- 4月26日 大釈迦工業団地調査会作業員説明会、[委嘱・工藤清泰] 史跡津軽氏城跡（堀越城跡）発掘調査員、[派遣・工藤清泰] 青森市史編さん事業
- 5月4・5日 浪岡城跡見学会 [対応：工藤清泰・木村浩一]
- 5月8日 青森県平成14年度文化財保護行政担当者会議
- 5月13日 大釈迦工業団地調査会・野尻（4）遺跡調査開始
- 5月17日 [派遣・木村浩一] 縄文土器作り（南小学校）、県文化財パトロール事業説明会（小田桐勝昭）
- 5月28日 野尻（4）遺跡出土「馬の刻画文を有する土器」、「発掘された日本列島2002 新発

見速報展」の展示のため搬出。

- 6月1日 「町史別巻Ⅰ発刊記念 史料からみた浪岡展」開催（中世の館：～6月15日）
- 6月4日 浪岡町大釈迦工業団地調査会会計監査
- 6月6・7日 史跡高屋敷館遺跡伐採作業
- 6月14日 羽黒平（1）遺跡抜根立ち会い。[派遣・工藤清泰] 健康福祉課さわやか教室（町内史跡巡り）
- 6月17日 [派遣・工藤清泰] 浪岡高校総合的学習「浪岡の歴史」（浪岡高等学校）
- 6月20日 五所川原市教育委員会、「須恵器窯跡群」史跡指定に関して調査来訪
- 6月22・23日 東北中世考古学会浪岡大会準備会
- 6月25日 浪岡城跡新館地区発掘調査開始
- 6月28日 浪岡町大釈迦工業団地調査会運営会議開催
- 7月2日 中屋敷遺跡発掘調査開始
- 7月12日 浪岡城跡環境整備（草刈り等）
- 7月16日 [派遣・工藤清泰・木村浩一] 北畠長寿大学「史跡巡り」（中央公民館）
- 7月17日 歩き・み・ふれる歴史の道 東北ブロック大会 プロジェクト打ち合せ
- 7月25日 弘前大学助教授・関根達人先生、中屋敷遺跡調査指導
- 7月26日 [派遣・工藤清泰] 青森市史編さん事業
- 7月29日 弘前高等学校「学問ゼミ（考古学）」受け入れ（中屋敷遺跡）、青森県埋蔵文化財調査センター研修（木村浩一）
- 8月22日 歩き・み・ふれる歴史の道 東北ブロック大会コース下見
- 8月28日 法政大学小口雅史教授ゼミ学生史跡浪岡城跡・高屋敷館遺跡見学
- 8月29日 大阪市立大学・仁木宏教授他浪岡城跡見学
- 9月5日 三重県美杉村教育委員会（教育長 長谷川忠勝他8名）・浪岡城跡他視察研修
- 9月9日 高屋敷館遺跡公有化に関して国土交通省・浪岡町土地開発公社と協議
- 9月18日 三重県・皇学館大学岡野文彦助教授ゼミ学生中世の館視察
- 9月19日 [派遣・木村浩一] 南地方退職公務員連盟講演
- 9月22日 歩き・み・ふれる歴史の道 東北ブロック大会開催
- 10月12・13日 東北中世考古学会第8回（浪岡）研究大会開催
- 10月16日 弘前市・堀越公民館町内史跡巡り（木村浩一講師対応）
- 10月29日 [派遣・工藤清泰] 青森市史編さん事業
- 10月30日 [派遣・木村浩一] 北畠長寿大学移動学習講師
- 11月7日 旧坪田家住宅が県重宝指定の決定を受ける（青森県教育委員会より）
- 11月8日 野尻（4）遺跡発掘現場終了
- 11月13日 鹿児島県・志布志町政策推進室、浪岡城跡視察研修

- 11月14日 青森県埋蔵文化財担当者研修（小田桐勝昭）
- 11月30日 [派遣・工藤清泰] 青森県史編纂事業のため
- 12月7・8日 [派遣・工藤清泰] 北海道上ノ国町教育委員会ふるさと講座講師
- 12月14日 [派遣・工藤清泰] 青森市史編さん事業
- 12月19日 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・阿部文化財調査員 町内出土土師器・須恵器調査
- 12月21日 [派遣・工藤清泰] 青森県史編纂事業のため
- 12月28日 [派遣・工藤清泰] 新潟大学科学研究検討会

2 寄贈図書一覧

1) 平成13年度（平成13年4月～平成14年3月まで）

No.	図 書 名	寄 贈 元	県名	受領年月
1	盛岡遺跡群（平成10年度発掘調査概報）	盛岡市教育委員会	岩手県	2001年4月
2	盛岡市内遺跡群（平成11年度発掘調査概報）	盛岡市教育委員会	岩手県	2001年4月
3	盛岡城跡 石垣移動量調査報告書	盛岡市教育委員会	岩手県	2001年4月
4	太師森遺跡	平賀町教育委員会	青森県	2001年4月
5	大光寺新城遺跡（第12次）	平賀町教育委員会	青森県	2001年4月
6	屏風山西・豊原(2)遺跡	森田村教育委員会	青森県	2001年4月
7	二ツ森貝塚発掘調査報告書7	天間林村教育委員会	青森県	2001年4月
8	下田町内遺跡発掘調査報告書4	下田町教育委員会	青森県	2001年4月
9	立蛇（1）遺跡	下田町教育委員会	青森県	2001年4月
10	名古屋大学文学部論集・考古学別刷	名古屋大学文学部考古学研究室	愛知県	2001年4月
11	浅井（1）遺跡試掘調査報告書	尾上町教育委員会	青森県	2001年4月
12	富永遺跡	鶴田町教育委員会	青森県	2001年4月
13	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書（17）	鹿角市教育委員会	秋田県	2001年4月
14	大湯環状列石周辺遺跡	鹿角市教育委員会	秋田県	2001年4月
15	弘前市内遺跡発掘調査報告書5	弘前市教育委員会	青森県	2001年4月
16	堀越城跡発掘調査報告書Ⅱ	弘前市教育委員会	青森県	2001年4月
17	早稲田遺跡・福富遺跡発掘調査報告書	弘前市教育委員会	青森県	2001年4月
18	独狐七面山遺跡発掘調査報告書	弘前市教育委員会	青森県	2001年4月
19	弘前城北の郭発掘調査概報Ⅱ	弘前市教育委員会	青森県	2001年4月
20	城郭研究室年報第10号	姫路市立城郭研究室	兵庫県	2001年5月
21	鶴木横道遺跡	大刀洗町教育委員会	福岡県	2001年5月
22	岩井・大沼遺跡	市浦村教育委員会	青森県	2001年5月
23	十三湊遺跡 1999・2000年度	市浦村教育委員会	青森県	2001年5月
24	小八木志志貝戸遺跡群3	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団	群馬県	2001年5月
25	三内丸山遺跡XⅧ	青森県教育委員会	青森県	2001年5月
26	特別史跡三内丸山遺跡年報4	青森県教育委員会	青森県	2001年5月
27	八重菊（1）遺跡	森田村教育委員会	青森県	2001年5月
28	釜谷町3遺跡	戸井町教育委員会	北海道	2001年5月
29	横根・桜井積石塚古墳群調査報告書Ⅱ	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月
30	久保之沢遺跡	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月

31	米草遺跡	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月
32	甲府城下町遺跡Ⅰ	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月
33	秋山氏館跡	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月
34	武田城下町遺跡Ⅰ	甲府市教育委員会	山梨県	2001年6月
35	史跡根城跡岡前館第45地点発掘調査報告書	八戸市教育委員会	青森県	2001年6月
36	八戸市内遺跡発掘調査報告書第13集	八戸市教育委員会	青森県	2001年6月
37	酒美平遺跡Ⅱ発掘調査報告書	八戸市教育委員会	青森県	2001年6月
38	牛ヶ沢(4)遺跡Ⅱ	八戸市教育委員会	青森県	2001年6月
39	掘りdayはちのへ第4号	八戸市教育委員会	青森県	2001年6月
40	田向冷水遺跡Ⅰ	八戸遺跡調査会	青森県	2001年6月
41	三島市文化財年報第12号	三島市教育委員会	静岡県	2001年6月
42	多呂ノ前遺跡	三島市教育委員会	静岡県	2001年6月
43	史跡山中城跡	三島市教育委員会	静岡県	2001年6月
44	箱根旧街道石畳	三島市教育委員会	静岡県	2001年6月
45	盛美園保存整備事業報告書	青森県教育委員会	青森県	2001年6月
46	手形山南遺跡	秋田市教育委員会	秋田県	2001年6月
47	久保田城跡	秋田市教育委員会	秋田県	2001年6月
48	市内遺跡詳細分布調査報告書	秋田市教育委員会	秋田県	2001年6月
49	市内遺跡発掘調査報告書	青森市教育委員会	青森県	2001年6月
50	小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ	青森市教育委員会	青森県	2001年6月
51	大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ	青森市教育委員会	青森県	2001年6月
52	八戸市博物館年報第18号	八戸市博物館	青森県	2001年6月
53	博物館だより35	八戸市博物館	青森県	2001年6月
54	平成10年度水沢遺跡群範囲確認調査	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2001年6月
55	平成12年度水沢遺跡群範囲確認調査	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2001年6月
56	胆沢城跡 平成12年度発掘調査概報	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2001年6月
57	向田(24)遺跡・有戸鳥井平(4)遺跡・有戸鳥井平(5)遺跡発掘調査報告書	野辺地町教育委員会	青森県	2001年6月
58	向田(33)遺跡発掘調査報告書	野辺地町教育委員会	青森県	2001年6月
59	揚場2000遺跡	金ヶ崎町教育委員会	岩手県	2001年6月
60	むつ市文化財調査報告書第28号	むつ市教育委員会	青森県	2001年6月
61	小田原城下 筋違橋町遺跡第Ⅱ地点	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
62	高田北之前遺跡第Ⅰ地点	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
63	平成10年度遺跡範囲確認調査	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
64	千代北町遺跡第Ⅷ地点	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
65	小田原城 八幡山古郭南曲輪第Ⅰ地点	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
66	小田原城 総構	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
67	平成12年度小田原市遺跡発表会・中里遺跡講演会発表要旨	小田原市教育委員会	神奈川県	2001年7月
68	国指定史跡平林城跡整備基本計画書	神林村教育委員会	新潟県	2001年8月
69	国指定史跡平林城跡整備基本計画 概要書	神林村教育委員会	新潟県	2001年8月
70	黒坂遺跡	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2001年8月
71	矢倉遺跡Ⅲ	七戸町教育委員会	青森県	2001年8月
72	史跡七戸城跡北館Ⅹ	七戸町教育委員会	青森県	2001年8月
73	見町館跡	七戸町教育委員会	青森県	2001年8月
74	遠い記憶Ⅰ 八ヶ岳南麓 大泉村の縄文時代	大泉村教育委員会	山梨県	2001年8月
75	石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
76	沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
77	尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
78	似内遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
79	大崎遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月

80	秋浦Ⅰ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
81	秋浦Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
82	稲村Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
83	南畑遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
84	市部内遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
85	清水ヶ野遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
86	志羅山遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
87	篠館遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
88	中野台遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
89	中和田遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
90	成谷遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
91	ゴッソー遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
92	宮沢遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
93	上野遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
94	石持Ⅰ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
95	西長岡長谷田・沼田遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
96	中居依Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
97	栗林遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
98	堀切遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
99	台太郎遺跡22次発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
100	東館Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
101	長谷堂貝塚発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
102	島田Ⅱ遺跡発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
103	台太郎遺跡18次発掘調査報告書	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
104	調査略報	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
105	紀要X X	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	岩手県	2001年8月
106	脇野沢村文化財調査報告書第6集	脇野沢村教育委員会	青森県	2001年8月
107	特別史跡安土城跡発掘調査報告11 主郭中心部本丸の調査の調査	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年8月
108	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅷ 伝前田利家邸跡	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年8月
109	安土城・織田信長関連文書調査報告10 西性寺文書目録	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年8月
110	安土城・織田信長関連文書調査報告11 山本家文書目録	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年8月
111	特別史跡安土城跡石垣調査報告1	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年8月
112	滋賀県安土城郭調査研究所年報 2000年度	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2001年9月
113	稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ	青森市教育委員会	青森県	2001年9月
114	稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ	青森市教育委員会	青森県	2001年9月
115	小山市文化財保護調査年報6	小山市教育委員会	栃木県	2001年9月
116	姥ヶ沢窯跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2001年10月
117	上杉沢遺跡	浄法寺町教育委員会	岩手県	2001年10月
118	根下戸Ⅰ・Ⅱ遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年1月
119	盤若台遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年1月
120	船戸桜田遺跡2次調査	中条町教育委員会	新潟県	2002年1月
121	江馬氏城館跡Ⅴ	神岡町教育委員会	岐阜県	2002年1月
122	盛岡城跡(平成10・11・12年度本丸南西部発掘調査概報)	盛岡市教育委員会	岩手県	2002年1月
123	盛岡市内遺跡群(平成12年度発掘調査概報)	盛岡市教育委員会	岩手県	2002年1月
124	館・松ノ木遺跡 古代の遺物編	盛岡市教育委員会	岩手県	2002年1月
125	太師森遺跡	平賀町教育委員会	青森県	2002年2月

126	史跡上之國勝山館跡X X II	上ノ国町教育委員会	北海道	2002年2月
127	町内遺跡発掘調査報告書IV	上ノ国町教育委員会	北海道	2002年2月
128	小奥戸(4)遺跡	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
129	近野遺跡VI	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
130	朝日山(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
131	蟹沢(3)遺跡・黒坂遺跡II	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
132	笹ノ沢(3)遺跡II	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
133	野辺地蟹田(10)遺跡他	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
134	野尻(1)遺跡IV	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
135	安田(2)遺跡III	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
136	研究紀要第7号	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月
137	津軽唐川城跡	富山大学人文学部考古学研究室	富山県	2002年3月
138	珠洲寺家クロバタケ窯	富山大学人文学部考古学研究室	富山県	2002年3月
139	桐内A遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
140	桐内沢遺跡・日廻岱I遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
141	からむし岱遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
142	鹿来館跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
143	後山遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
144	岱II遺跡(第2次調査)	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年3月
145	弘田柵跡調査事務所年報2001 弘田柵跡第119・120次調査概要	弘田柵跡調査事務所	秋田県	2002年3月
146	奇峰学秀遺作集	田子町教育委員会	青森県	2002年3月
147	北の農耕文化の始まりー弥生時代 古墳時代 飛鳥・奈良時代	青森県埋蔵文化財調査センター	青森県	2002年3月

2) 平成14年度(平成14年4月~12月)

No.	図 書 名	寄 贈 元	県名	受領年月
1	史跡七戸城跡整備基本構想	七戸町教育委員会	青森県	2002年4月
2	MZ6号ー隠川(1)遺跡内の須恵器窯跡発掘調査報告書	五所川原市教育委員会	青森県	2002年4月
3	古代日本 文字のある風景ー金印から正倉院文書までー	国立歴史民俗博物館	千葉県	2002年4月
4	長岡遺跡	秋田市教育委員会	秋田県	2002年4月
5	秋田市 市内遺跡確認調査報告書	秋田市教育委員会	秋田県	2002年4月
6	実取(2)遺跡	市浦村教育委員会	青森県	2002年4月
7	特別史跡大湯環状列石発掘調査報告書(18)	鹿角市教育委員会	秋田県	2002年4月
8	平賀郷土史第12号	平賀町郷土史研究会	青森県	2002年4月
9	城郭研究室年報Vol.11	姫路市立城郭研究室	兵庫県	2002年4月
10	藩校明德館跡	秋田市教育委員会	秋田県	2002年4月
11	寺上遺跡・赤沼備中館跡発掘調査報告書	十和田市教育委員会	青森県	2002年4月
12	八重菊(1)遺跡II	森田村教育委員会	青森県	2002年4月
13	大平山元I遺跡ー2001年発掘調査ー	蟹田町教育委員会	青森県	2002年4月
14	平成11年度坊府市内遺跡発掘調査概報	坊府市教育委員会	山口県	2002年4月
15	井上山経塚・下山ノ口遺跡発掘調査報告書	坊府市教育委員会	山口県	2002年4月
16	史跡鉢形城跡ー平成10年度発掘調査概要報告	寄居町教育委員会	埼玉県	2002年4月
17	よみがえる大名庭園 赤穂城跡二の丸庭園錦帯池	赤穂市教育委員会	兵庫県	2002年4月
18	八戸市博物館収蔵資料目録歴史編(4)ー西町屋文書目録Iー	八戸市博物館	青森県	2002年4月
19	尾上町埋蔵文化財試掘調査報告書 原・李平・浅井(1)遺跡	尾上町教育委員会	青森県	2002年4月

20	諏訪遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年5月
21	金仏遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年5月
22	大浦遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年5月
23	大松沢Ⅰ遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年5月
24	古館堤頭Ⅱ遺跡	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年5月
25	中市館跡発掘調査報告書Ⅱ(概報)	倉石村教育委員会	青森県	2002年5月
26	沼津貝塚隣接地発掘調査報告書	石巻市教育委員会	宮城県	2002年5月
27	青森県佐井村3上家所蔵資料目録	佐井村教育委員会	青森県	2002年5月
28	下田町内遺跡発掘調査報告書5	下田町教育委員会	青森県	2002年5月
29	向山(4)遺跡	下田町教育委員会	青森県	2002年5月
30	脇本城跡	男鹿市教育委員会	秋田県	2002年5月
31	むつ市文化財調査報告書第29集	むつ市教育委員会	青森県	2002年5月
32	白沢遺跡	碓ヶ関村教育委員会	青森県	2002年5月
33	花林遺跡	車力村教育委員会	青森県	2002年5月
34	青森県階上町小坂橋(2)遺跡	階上町教育委員会	青森県	2002年5月
35	人類誌集報2001	東京都立大学人文学部考古学研究室	東京都	2002年6月
36	里本遺跡群	神林村教育委員会	新潟県	2002年6月
37	三内丸山遺跡X IX	青森県教育委員会	青森県	2002年6月
38	三内丸山遺跡X X	青森県教育委員会	青森県	2002年6月
39	特別史跡三内丸山遺跡年報5	青森県教育委員会	青森県	2002年6月
40	金ヶ崎城跡	金ヶ崎町教育委員会	岩手県	2002年6月
41	市内遺跡分布調査報告書(5)	鶴岡市教育委員会	山形県	2002年7月
42	山田遺跡発掘調査報告書(A~H区)	鶴岡市教育委員会	山形県	2002年7月
43	鶴ヶ岡城跡確認調査報告書(二の丸御角槽跡地点)	鶴岡市教育委員会	山形県	2002年7月
44	是川中居遺跡 長田沢地区	八戸遺跡調査会	青森県	2002年7月
45	八戸城跡Ⅱ	八戸遺跡調査会	青森県	2002年7月
46	八戸市内遺跡発掘調査報告書第14集	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
47	八戸市内遺跡発掘調査報告書第15集	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
48	盲堤沢(3)遺跡	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
49	丹後平古墳群	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
50	新井田古館遺跡	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
51	重地遺跡	八戸市教育委員会	青森県	2002年7月
52	平成13年度水沢遺跡群範囲確認調査	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2002年7月
53	胆沢城跡-平成13年発掘調査概報	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2002年7月
54	町屋敷遺跡	水沢市埋蔵文化財調査センター	岩手県	2002年7月
55	赤穂城跡二の丸庭園錦帯池発掘調査概要	赤穂市教育委員会	兵庫県	2002年6月
56	有年原・田中遺跡3	赤穂市教育委員会	兵庫県	2002年6月
57	神辺町内遺跡発掘調査概要 2002	神辺町教育委員会	広島県	2002年7月
58	史跡下高橋官衙遺跡周辺遺跡1	大刀洗町教育委員会	福岡県	2002年8月
59	高樋小道遺跡	大刀洗町教育委員会	福岡県	2002年8月
60	市史研究あおもり	青森市生涯学習課市史編纂室	青森県	2002年8月
61	甲府城下町遺跡Ⅱ	甲府市教育委員会	山梨県	2002年8月
62	史跡武田氏館跡Ⅷ	甲府市教育委員会	山梨県	2002年8月
63	史跡武田氏館跡Ⅸ	甲府市教育委員会	山梨県	2002年8月
64	黒平の民俗	甲府市教育委員会	山梨県	2002年8月
65	新田Ⅱ遺跡	遠野市教育委員会	岩手県	2002年8月
66	甲子遺跡	遠野市教育委員会	岩手県	2002年8月
67	稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ	青森市教育委員会	青森県	2002年8月
68	稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ	青森市教育委員会	青森県	2002年8月
69	八森遺跡 古代編・古代図録編	八幡町教育委員会	山形県	2002年9月
70	内田町遺跡	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年9月

71	塩草B窯跡	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年9月
72	川合K窯跡	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年9月
73	小長曾陶器窯跡	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年9月
74	財産法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第10輯	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年9月
75	御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群	野々市町教育委員会	石川県	2002年10月
76	下新庄アラチ遺跡	野々市町教育委員会	石川県	2002年10月
77	末松A遺跡・末松しりわん遺跡	野々市町教育委員会	石川県	2002年10月
78	本町・横川遺跡	野々市町教育委員会	石川県	2002年10月
79	富樫館跡蝮土居地区・富樫館跡鬼ヶ窪地区	野々市町教育委員会	石川県	2002年10月
80	小林遺跡I(縄文時代編)	秋田県埋蔵文化財センター	秋田県	2002年10月
81	新発田城跡発掘調査報告書Ⅲ(第11・12地点)	新発田市教育委員会	新潟県	2002年10月
82	中野(2)遺跡	三戸町教育委員会	青森県	2002年10月
83	沖中(1)遺跡	三戸町教育委員会	青森県	2002年10月
84	特別史跡安土城跡発掘調査報告12	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2002年11月
85	特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書IX	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2002年11月
86	安土城・織田信長関連文書調査報告12	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2002年11月
88	研究紀要第8号	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2002年11月
89	滋賀県安土城郭調査研究所年報 2001年度	滋賀県安土城郭調査研究所	滋賀県	2002年11月
90	むつ市文化財調査報告書第30集 芦崎の自然	むつ市教育委員会	青森県	2002年11月
91	夏井庵寺(平成13年度範囲確認調査概報)	いわき市教育委員会文化課	福島県	2002年11月
92	平成13年度市内遺跡試掘調査報告	いわき市教育委員会文化課	福島県	2002年11月
93	高樋(3)遺跡発掘調査報告書	田舎館村教育委員会	青森県	2002年12月
94	平成13年度瀬戸市埋蔵文化財センター年報	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年12月
95	平成14年度財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター企画 展図録「江戸時代の瀬戸窯」	(財)瀬戸市埋蔵文化財センター	愛知県	2002年12月

訂正のお願い

平成13年度浪岡町文化財紀要Ⅱの中で、下位の部分を訂正ください。

訂正箇所・頁数	行数	誤	訂正内容
23頁・調査抄録	18行・調査期間	20020507～20020529	20010507～20010529
65頁	2行	図15	図16
72頁・調査抄録	14行・調査期間	20020604～20020905	20010604～20010905
114頁・調査抄録	29行・調査期間	20020906～20021031	20010906～20011031
132頁・調査抄録	14行・調査期間	20020416～20021116	20010416～20011116

更新のお願い

平成13年度浪岡町文化財紀要Ⅱの中で、下位の部分を更新ください。

更新箇所・頁数	更新内容
148頁	(3)町指定文化財のうち 7 建造物 旧坪田家住宅 1 平成6年12月8日 浪岡字岡田43浪岡町が平成14年11月18日に県重宝に指定されましたので、更新願います。

平成14年度
浪岡町文化財紀要Ⅲ

発行日 平成15年3月31日
編集 浪岡町教育委員会生涯学習課文化班
発行 浪岡町教育委員会
〒038-1311
青森県南津軽郡浪岡町浪岡字稲村101-1
TEL 0172-62-3004 (直通)
FAX 0172-62-9368
印刷 高金印刷株式会社
〒038-0015
青森県青森市千刈二丁目1-31
TEL 017 (781) 2244

